

奇譚クラブ

新時代の風俗雑誌



1953.1

奇
譚
ク
ラ
ブ



1



☆ 吊り三態特選集三枚一組 ☆
オニ組新作
これは今迄に一度も発表したことのない、特別撮映の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものでから重複する

観者待望の吊り責め、猿轡、道具を用いたもの、鎖を用いたもの、等其の他緊縛の美しさの表現に意を注いだ作品を多く含めました。一度御覧下さい

◎ 只今分譲中のもの ◎
オニ組 (第四十一集より第五十集迄) 十集分
オニ組 (第五十一集より第六十集迄) 十集分
◎ 以上各集共一集分は各々五枚一組です ◎
◎ 第四集以前について御希望の向は御照会下さい ◎

印刷ではない直接印刷紙に焼付けた責めの写真あなたの貴重なコレクションの一翼へお加え下さい。本誌に発表し得なかつた数々の姿態を取揃えて居ります。
光沢面 焼付五枚一組一集分二百円 (送料共)
印刷紙 焼付五枚一組一集分二百円 (送料共)

ことはありません。
三枚一組キヤビネ版 五百円 (荷造送料共)
☒ 襲われる女 ☒ (シリーズ十二態)
これは暴漢に襲われる女の恐怖の姿態を纏と鎖をアクセサリに用いた幻想的な作品です。
十二枚 一組 五百円 (送料共)
御申込次第早速敵封の上急送致します。
○ 本欄発表以外のものはKK通信誌上にて御覧下さる様お願い致します。
愛好者の方々の熱狂的な讃美を受けて貴重なコレクションとしての役目を果たして参りました本誌独特の縛られた女の写真は、毎号引続いて変った姿態美と緊縛美の新作品を加えて参りましたが、今回更に新しい構想と斬新なアイデアにより、好事家垂涎の傑作の完成に成功致しました。愛読者サービスとして実費にて分譲したいと思っておりますので多少に拘らず是非お申込下さるようお願い致します。

◎ 申込所

大阪府堺区内菅原通四丁

曙書房代理部

振替大阪三四九五六番



拷問の仕度 バンブ、ハルスタ (Bamb. Halst.) 1608年より。



中世に於ける木欄内の法廷。後方にあるは種々の死刑法 ペトラルカ・ロステロ・スビエーダ (Petrarca Rostegol) 1539より。



倒さ吊しの斬首(16世紀)



ギロチンによる問謀の斬頭(16世紀)

奇譚クラブ 新年号 目次

口繪 吊り下げられる女

喜多 玲子・画

倒さ吊しの斬首 キロチンによる問答の斬首

(原) 愛の使徒

色劇口繪

棕 鳥(むくざり)

アブニストの記らぶ・すれいぶ

鬼山 絢策 (22)

脱落者

小森 原平 (32)

徳川閨門痴情録

的 場 通 (36)

淫 (みたらび) 火

松井 籟子
喜多 玲子・画 (39)

戦争處女の手記

藤安 節子 (42)

長崎らしやめん考

花山 剣作 (50)

お国自慢 好色民謡選

七條 美樹子 (76)

人妻告白記 妻の復讐

辻 佳月子 (80)

桃色のベールに包まれて(讀られてみて)

川端 多奈子 (86)

讀者座談會

交悦に伴う責めの衝動心理

司金 隆
辻 村 隆 (100)

マゾヒストの果て

福田 英一 (88)

糊の執著

長岡 変一郎 (112)

鼻腔禮讃

升岡 金吉 (120)

變の字問答

浮家 鷹三 (34)

妖奇童話 裸女の窓

三 富 浩 生 (126)

告白記 僕の記録

黒井 珍平 (128)

女の責場を描く時の心境

伊藤 晴雨 (146)

少年の戀

守田 雄二 (136)

世界絶英文學紹介 貞操帶奇譚

ジョルジュ・エフル・ルカトル
角田 平八 (144)

あなたのムチの下に

或る死刑囚の告白

赤に憑かれた男

上村 秀久雄 (154)

男色の花道

堤 行房 (122)

風変りな作戦

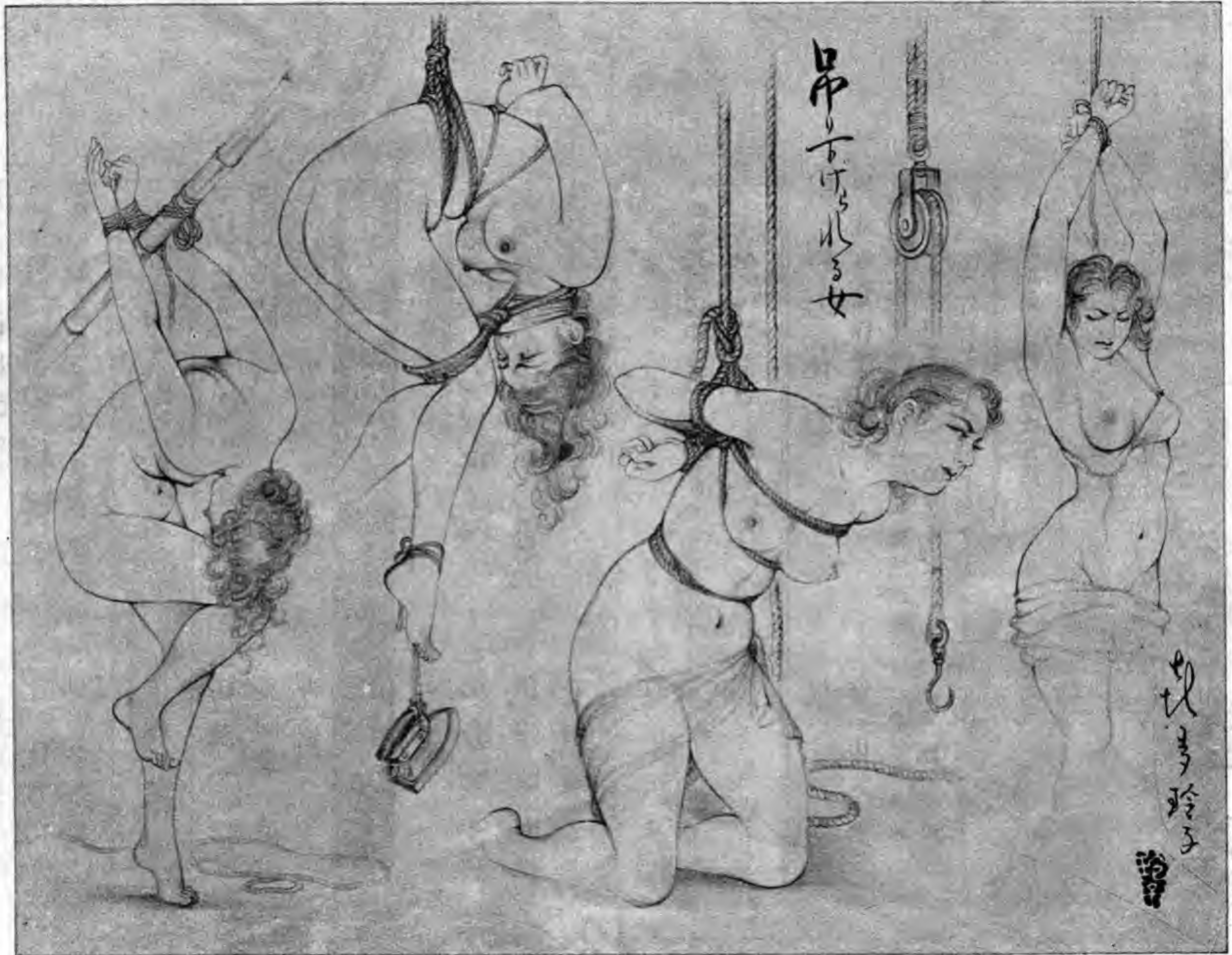
笹 田 豊 (150)

作者よりの便り 女囚私刑体験記
孤独なファンタジー
狂い咲くカンナ

小坂 多美枝 (136)
芳野 眉美
羽村 京子

口繪寫眞 縛つた女を描く

讀者通信
(41)
(49)
(96)
(75)
(121)
(141)



吊りつけられた女

女は多珍子





鳥 棕

☆ 縛った女を描く ☆

撮映・塚本鉄三











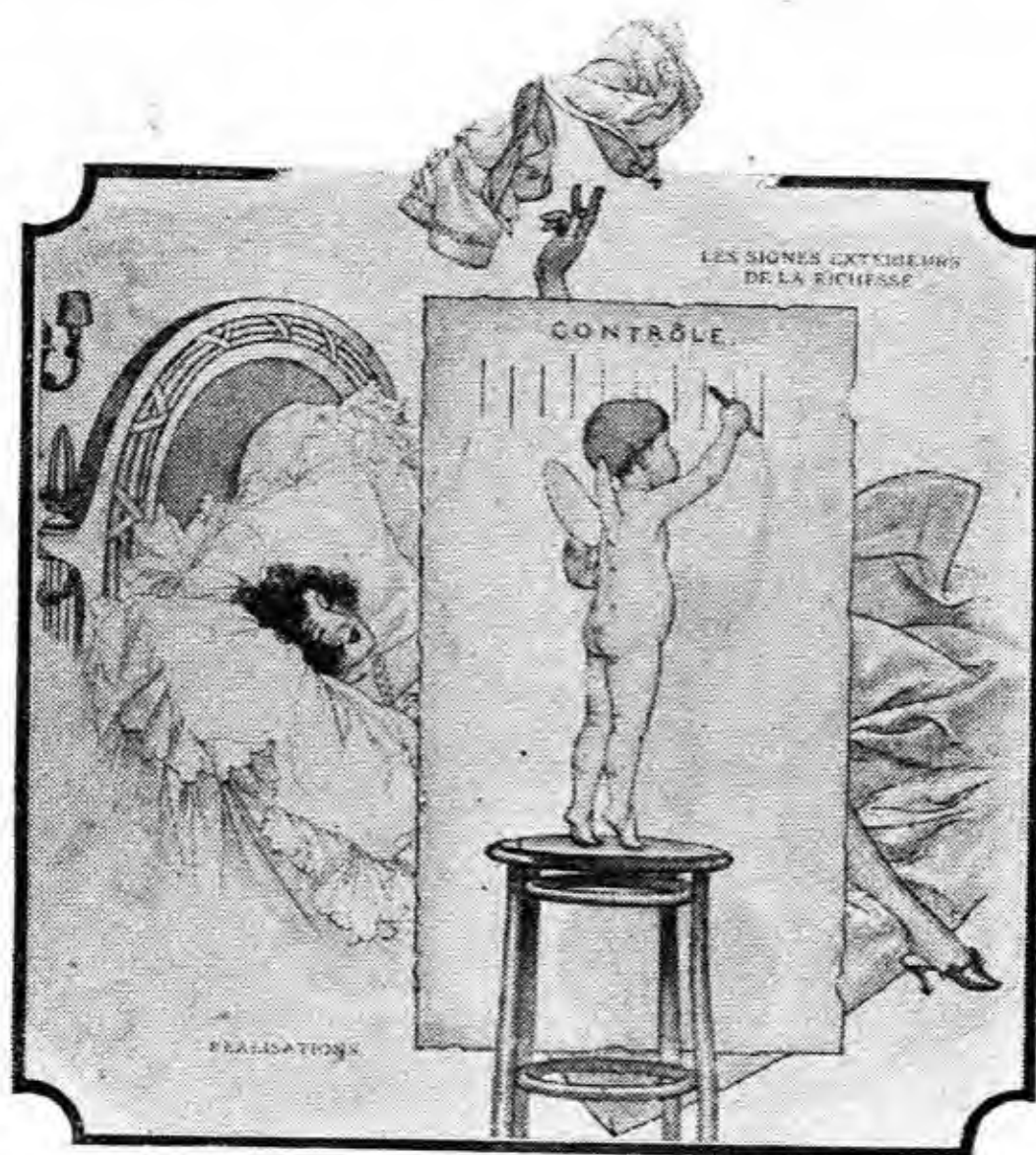






デッサン・喜多玲子

愛の使徒—



新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

新年号

(第七卷第一号 通刊第五十一号)

◎ アブニストの記 ◎

らぶ・すれいぶ

鬼山 絢 策

筆者の言葉

世に「アブニスト」の生態を描写した小説や、告白記は戦後に氾濫したが、その中で真実に触れたものは極めて少ないように感ぜられる。

自分の恥すべき行為を公表する事は多大の勇気を必要とするから、控える事になり、多くは好色売文家の妄想になるものが

多いように思う。

私には六人の「アブニスト」の性友があり、本篇の主人公は現在実在する人物であるが、今回本人の承諾を得て、真実の告白記を本人に代つて執筆して見た。

この告白記が読者諸賢にとつて「他山の石」となれば幸いである。(鬼山生)



私の父は一代で財を成した所謂立志伝中の人物とも言うべき傑物だつたのですが、其の血を分けた息子の私がどうして斯うも不甲斐ない性格に生れたものかと、つくづく情なくなる事があります。私が八歳の時に母が亡くなりまして、今の母が弟を連れて家に来ました。

母は父の二号だつたのが一号に昇格したのです。

先の母は死の直前に私を枕元に呼んで「今度来るお母さんの言う事を何でもハイ／＼ときくんですよ」と言残して逝きました。

今の母親は元柳橋の芸者だつたんですが、非常によく出来た人で父とはよく結び合つて居たようです。母の私に対する態度は全然不

干渉主義で、叱る事もなければ、教える事もしないと云った極めて冷静そのものでした。

私はその頃「お初地藏」と言う継子虐めの芝居を見て、継母と言うものはどんなに恐いものかと思ひ、内心は戦々兢兢として居たのですが、一緒に住んで見ると、存外やさしいお母さんなので、ホツとしました。私は母によく思われるには、新しい弟と仲よくする事だと思ひ三つ違いの弟に、下僕のように御機嫌をとり、己を殺して弟の我が儘を通してやりました。母は弟を溺愛して居ましたから私の行動を非常に喜んでお小遣いをくれました。そんな風でしたから弟は我が儘一ぱいなお坊ちゃんでした。私も前の母が生きて居た頃は、恰度同じように「内弁慶」で、女中達を虐めたり、母を手こずらせたりしたのですが、今弟を眺めると、小さい時は皆同じような事をするもんだなと思ひ、自分の成長を悟りました。

私は前の母親と一緒に寝て居たのが、母が悪くなつてからは、一人で寝る癖をつけられ、早く母が快くなつて、又抱いて寝てくれ、ばいゝなと思つて居た夢も消えてそれからずっと一人寝の淋しさを味うようになりましたが、前の母親が死ぬ迄は、例え床は別でも一つ部屋に寝て居たのが、今度の母は私を孤立した部屋に寝かせました。私の寝て居た部屋には母と弟と一緒に寝るのでした。私の新しい寝室は狭くはありましたが前の部屋より綺麗な部屋でした。私はそれでも淋しくて、恐くて、初めの二日三日は辛かったです。私は文句一つ言わずにその部屋に寝ました。

暫らくすると恐いと言う気持はなくなりましたが、ヒタ／＼と冷たい夜気と一緒に迫る淋しさは、私を孤独のどん底に押し込め、私は子供心に、いろ／＼な事を考えるのでした。

私は母の私に対する態度に就いて批判して見ました。

母は確かに弟の方を溺愛して、どうしても私とは、その点は大きな差別がありました。然し私に対しても精神的な愛情はなくとも、物質的には前の母親よりも、むしろ恵まれた生活に一変しました。その点には弟との差こそありましたが、苦勞は少しもありませんでした。

私は母が来た最初から「お母さん」と簡単に呼ぶ事が出来ましたが、一ヶ月経つても半年たつても「母」と言う觀念には到達し得ませんでした。「やさしいおばさん」と云つた感じでした。それを物足りなく思つた事もありましたが、生さぬ仲であつて見れば、生みの母親のように弟と同じ程度の愛情を強要するのは私の方が無理なのだと思ひ、世の中にはあの「お初」のように継母に虐め殺される子さえあるのに、今の母は叱言一つ言わぬやさしい母親です。

私はそれだけで満足すべきだと考えるようになりました。八つや九つの時にそう考える事の出来た私はかなり早熟だったのだと思ひます。

私の明るい無邪氣だった性質は母が来た時を転機として、次第に暗い引込み思案な、遠慮深い性質に変化して行きました。

私は長ずるに及んでも、その性質の変化が母の罪だとは思つて居ません。我からひねくれ、自らいらざる遠慮をした私のひがみ根性の故だと思つて居ます。

私は少年時代は頭は悪い方ではなかつたと思うのですが、家に帰つて勉強すると言う事を一切しなかつたので、学校の成績も余りよくなく、志望した府立の中学にも入学試験に落つちて、S中学と言う無試験同様で入れる学校へ通う事になりました。

この学校は不良の多いので有名な学校で、三年、四年と学校が進むに連れて、クラスメートの中には私の肝を冷すような行動を耳にし、眼にも見ました。そして私も彼等のグループへいつしか捲き込まれて居ました。

学校にはお定まりの硬派と軟派とありましたが、私はその両方につき合つて居ました。しかし私の興味は軟派の友達の思ひきつた性行為に魅惑されて、彼等との交際が多くなつて行きました。

けれども私の引込み思案で内気な性格は、いつの場合でも「傍観者」の立場に坐らせられて居ました。

「あの店にはとても綺麗な子が居るんだせ」と誘われて、その喫茶店へ着く迄には「一つ俺も恋愛して見るかな」と思つて行くのですが、入つて見ると、その女の子は誘つた友達のリベなので「あゝこれは遠慮しなくてははいけない」と直ぐ諦めてしまふのでした。

肉体関係に迄及んで居る恋人を四人も持つて居ると自慢して居るMがその恋人を一人々々紹介して、イチヤつく所を見せられても私は只傍で黙つてニヤ／＼しながら、ひたすら彼と彼女の御機嫌を取結ぶ期間のような気持でへつらつてついて行くのでした。

内心では彼の恋人がまずい女であつた場合は

「何だこんな女を恋人だなんて得々としてゐるのか」

と蔑すみ、又私の好みに合つた美貌の少女を見せつけられた時は「彼の腕は大したものだ」

と羨望と尊敬の念さえ起きました。その間に「嫉妬」と言う気持は私には全然起らないのでした。勿論その女を奪つてやろうと言うような気持は毛頭ないのでした。

私には異性の容貌に対して非常に厳格な「選り好み」があるので

す。標緻のよくない女は勿論、十人並みな女でも、又非常な美人であつても、私の好みに合わない型の女には、性的慾望が沸いて来ないのでした。それと肉体に就いて言うところでは嫌いでした。そうかと言つて、ブヨ／＼に肥つたたるんだ肉体もだめで、恰度柿に例えれば、種ばかり多くて、ガリガリした軒場の柿もだめなら、熟し過ぎて、グチャ／＼した樽柿も御免で、あの「五郎兵衛柿」のように歯と唇にあたる時、ブツンと弾力のある肉の厚味を感じるあの艶々しい肉体、少し位肥つて居てもその皮膚が若さに張りきつたものなら、私としては申し分ないのでした。

私は十六歳の時に童貞を失いました。

その失う迄がまことに手間のかゝる厄介な、情けない失い方でした。

悪友の中には、素人専門に遊ぶ者もあり、商売女を相手にして、

「通」がするのも居ました。

Yは「玉の井の撫で簪」と自分から言うだけあつて、当時「魔窟」と言われた玉の井、亀井戸、松戸には毎晩のように出かける少年でした。私もこのYに案内されて、玉の井へ初めて足を踏み入れました。戦前の玉の井は、現在の玉の井と鳩の町を併せたよりもまだ大きく、あの迷路には初めての者は大概悩まされるものですが、Yはその点地理に明るく、女から鼻紙を窓口で貰つて、

「この紙をくれるのはね、お菓子や果物をくれるより嫌がるんだよこれは縁起物だからね。玉の井でもこれが女から貰えるようになれば一人前なのさ」

と得意になるのでした。

「どんなのがいゝんだい。君の好きな所へ上ろうじやないか」

そう言われると、私は眼移りがして、どれにしようかと大いに迷いました。困る事には、私が地理に暗いために、前の女が上つたと思つても、その場所を具体的に言い現わす事が出来ず、それでもどうやら気に入つた女を見つけ出してYも隣の窓の女と遊ぶ事に決つて上りました。

客間でお茶を出されても、何だか不潔に感じて茶碗に手が出せませんでした。

そして窓々床へ女と一緒に入り電気を消してシミーズ一枚の女の………ましたが、先刻から心配して居た事が遂に実現してしまつたのです。それはどうしても私の性器が役に立たないのです。

女も幾度か袋をかぶつた軟かい品物に刺戟を与えてくれましたが如何にしても焦れば焦る程、獲物を前にして弾丸のない鉄砲を持つたみたいにする事も出来ないのです。

「どうしたの。もう時間がくるわよ」

そう言われると私は諦めに似た気持になり

「あゝ今夜はよそで二つも抜いて来たからもうだめだ。この次ゆつくり遊ぶよ。友達には内緒で遊んだんだから、今夜のこの事黙つてくれ給えね」

私は羞恥で、暗闇に顔ばかりほてらしながら、それでも体裁をつくろう事を忘れませんでした。

ベルが鳴つて茶の間へ戻つてくると、Yはもう先に来て相手の女をからかつて居ました。

「大分長かつたね。コツテリ楽しんだかい」

「ウン……」

私はテレ臭さそうにニヤ／＼しましたが、女がもしも素つ破抜き

やしないかとヒヤ／＼して居たので早々に表へとび出しました。

家へ帰つて自分の寢床に入ると慾情して来てどうしても寝られませんが、私のあの不甲斐なかつたしろものは、今では見違えるように元気で、自分で自分の手におえない位なのです。

私は十二位の時からオナニーを行つて居ましたが、その方法は色々変つた趣向でやりました。

大体指を使うと言う事があまり好ましい事でなく、俯つ向けになつて、布を蒲団へ敷いてその上に腹這いになり、全身を………る方法や、仰向けに寝て、布片を上からあてがい、その上に座布団を四枚位重ねて、蒲団を引被ぶり、座布団を………て行方方法が性に合いました。

オナニーには妄想がつきものですが、私の妄想は、いつも決つて自分の理想に描いた女が現れて、私を責め虐なむ場面を想像するのでした。

世にも美しい夢想の美女は全裸で私の顔に跨がり、私に数々の恥辱を与えました。

私は蒲団を眼の所迄被つて、その純白の覆いを女の肉体に想像して、私の鼻や唇に触れるのを私はその蒲団に接吻し、舌を出して蒲団を舐めたりしました。

私の脳裡にはだん／＼惨酷な光景が浮び上り、ズタ／＼に女に斬りさいなまれて、私が息をひき取る時が、この世に私の身代りとして、僅かな液体を送り出す瞬間でした。そしてそのまゝ天国に昇るように安らかな眠りに就くのでした。

私はあんな恥かしい思いをするのなら二度と商売女とは遊ばまいと思つて居ましたが、何日か過ぎると、不能者でも何でもない私がどうしてあの時だけ醜態を曝したのか不思議でなりませんでした。

私は性的不満はオナニーで間に合わせて居ましたから、私があつた淫楽の港へ足を運んだのは、ほんの気紛れだけのものからでした。

それにこれから理想に描いた女と恋愛し、結婚するにしても、女の肉体上の智識と経験をしておいた方がその場になつて度胸もつくし、私の場合には都合がよからうと考え、もう一度行つて試して見ようと思つて、私からYを誘い、再び玉の井の富士山型の踏み切りを潜つて別の家で遊んで見ましたが、この日もだめでした。

私は私がアブニストである事はもうその頃自覚して居ました。アブニストなるが故に正常の行為では不能になるのかと考えて見ましたが、どうもそうばかりとは考えられず、結局あの時間にせき立てられるのが、大きな障害になつて居るのではないかと思ひました。

三度目に行つた時は、家に電話をかけて友達の家泊ると言つてYと二人で出かけました。Yを誘う度に彼の遊興費迄持たなければならぬ習慣がついてしまつたのですが、さりとて一人で出かける勇氣はありませんでした。

その晩は、私の理想から稍低い水準の女を選んで泊りました。すると難なく正常の目的を達し私は三度目でやつと「筆下し」を落ませたのでした。

この事が別に珍しい事でも何でもない事なのかも知れません。世の中の気の弱い男性には、あり勝ちの事なのかも知れないのですが当時の私は、只自分がアブニストなるが故にこんなに手間がかゝつ

たのだと思つて居ました。

初めての肉体の繋がる瞬間にも私はさして快感は得られませんでしたが。

性交なんて大した事じゃない

と私は味気ない気持ちに襲われ、事後の女の卒氣ない態度や、私が眠つたと見て床から脱け出て行く姿に幻滅の悲哀を感じました。

それから、この街に興味を失ひ、足が遠のきました。Yが時々誘つても口実を設けて断りました。私にはオナニーの方が気楽で、自由で、快感の程度も怪美な妄想の世界に遊べる事も、総べてが、實在の肉交よりも優つて居ました。

その反面、少年時代の誰もが一度は経験するように、私もオナニーの害に就いて煩悶しました。

何とかしてこの悪癖を止めたいと思ひ、私は一つのリストを作りました。

それは今日オナニーを行うと明日は休んで明後日行い、それから二日休んで次の日を開放し、更に三日戒めて四日目、それから四日休んで五日目に、と言う方法でだん／＼に遠ざかろうと計画したのでした。

此の計画は十七日目位迄守られました。そして良心が許した晩には二回も三回も、四回も明け方迄楽しむのでした。

もう十幾日も禁慾しなければならぬと堪らない淋しさを覚えませんでした。

そのうちあまり禁慾するのも害があると言う説を本で読んだり、自瀆そのものは大した害はないので、それに悩んで精神的に苦しむ方が数倍の害を与えるものであるなどと言う説を見たりするに及ん

で、良心に体のいゝ申し訳をして私は又この耽美な世界に入つてしまいました。

この時代の精力の浪費が後に私に大きな不幸をもたらす事を、全然予期せぬのではなかつたのですが、自分一人の意志だけで、自由になるこの小悪魔の誘惑から脱けきる事は困難な事でした。

私の悪友達は、女をものにする方法、くどく方法、喜ばせる方法などを、現今のカストリ雑誌に出て居るような事を、もうその頃知つて居て、私に教えてくれて「早くお前も適当なアミを持てよ」と励ましてくれるのですが、私はどうしても異性に対して最も肝心の「押し」が欠けて居たので、そう言う機会を掴めませんでした。

時には向うの方から触らば落ちん風情に持ちかけて来たり、更に積極的に「妾あんたが前から好きだつたの」と愛の囁きを受けた事もありましたが、残念な事に、それ等の女性が皆、私の好みに合わない女性だつたのです。そうした時、私の仲間の様に、後先の思慮もなく肉体的関係を結んでもいいと思う女性もありましたが、さて、そうした以上は結婚と言う責任を持たなければならぬ。だが結婚する程の相手ではない。もし私が彼女と関係した後、そのプロポーズを拒否したら、彼女は嘆くだろう。彼女がいくら嘆いたつてそんな事は構わない。が彼女のバックが動いて、私の父に強硬に抗議して来たらどうなるだろう。父は私を何と言つて叱るかしら。イヤ叱るだけならいいが、男らしく責任を持てと言われたら猶困る。そんな風に考えて、一寸手が出かゝるような異性に対しても、私はそれを控えたのでした。

中には私の好む型の女性も一人二人ありました。然しこの程度の美人になると、取巻きの男友達が多くて、私は女の美しさに圧倒さ

れると同時に、その周囲の衛星のような男性群からも威圧を受けて俺のような者が彼女を愛しても向うで相手にしてくれないだろうと思つたり、もしもあの取巻きの中から因縁をつけて来る奴が出て来たらどうしよう。

と直ぐそんな風に考えて、諦めてしまふのでした。

只彼女が私に対してどの程度の好意を持つてくれて居るかを時に触れ、折に触れて他の男達に気ずかれぬようにコッソリと試して見るのでした。そして彼女が、男友達の誰にも見せる程度の御愛想を示してくれた事に依つても、満足を感じるのでした。

中学を卒業して大学に進む迄、私はどうやらスキヤンダルも起きず、恋らしい恋もせず過ぎて来ました。

M大の文科に入つて二年目に、友人の霧塚恭夫の家に遊びに行つた時、現れた妹の春美を見た時私は息の止る程の驚きに打たれました。それが私が寢床の中でいつも描いて居た夢の中の女性と全然同じ容貌の持主だつたからです。

このひとこそ――

私の一日として忘れる事の出来ない「險の恋人」なのでした。

私はその日から恋の虜となりました。

「きつと彼女の周囲にも幾多の男性がまつわつて居るだろう。然し今度は俺もそう簡単には手を引けない。イヤ戦つて見せる！彼女さえ俺に好意があるなら今迄のようなお人好しにはして居ないぞ」と私は決心したのでした。

春美と話をして居る間、私は異常な迄にどぎつい視線を彼女のバツチリとした眼、恰好よく適度な膨らみを見せた鼻、キリツと締つた唇、殆んどまん丸に近い丸顔の頤の下から僅かにくびれて見える

二重頤に堪えられぬ魅力をたゞえた線などに注いで居ました。春美も私の視線の異常さに気づいてか、私の瞳に警戒とも観察ともとれる注意を現して、私を見返しました。

私は春美と視線が合うと反らさずには居られませんでした。私はこれから此の家に毎日のように訪れるにはどんな方法がよいかと、彼女に会った瞬間から考えて居ました。

霧塚のお父さんは郵船会社の技師で、割に裕福らしく、家も洋間が多く、庭も洋風で、総べて西洋趣味がにじみ出て居ました。

春美がコーヒーセットを持つて入つて来ました。コーヒーを入れる彼女の手の美しさは、その細くしなやかな指先が動いたびに美しい線を描き出すのでした。

私の傍に春美が近ずいた時、ほのかなジャスミンの香が、それが彼女の体臭である如く、漂いました。私は少年のように身を固くして居ました。

一口飲んでそのコーヒーが純粹のモカだと私に分りました。

「此のコーヒーはうまいですね、何と言うコーヒーですか」

これが私の癖なのです。知り尽して居る事でも知らない振りをしきくのです。相手が美しい女性であつた場合には、何となくそんな風になつてしまうのです。

「モカですわ」

「ハア、モカですか。うまいですね。こんなうまいコーヒーは始めて飲みました」

すると恭夫が得々としてコーヒー談義を始めました。私は中学時代にコーヒーはさんざ飲み歩きましたから、恭夫の言う常識程度のコーヒーの知識には何の興味もなかつたのですが、それでも始めて

聞くような風をして、私の態度が春美にどんな影響を与えるかと注意して居ました。

春美が部屋を出た時、ホツとした安堵と寂寥とを同時に感じて、私は急に饒舌になりました。恭夫は理工科の学生でしたが、文学が好きなので、文学論を始めて、そこでは先刻のコーヒー論のような卑屈な態度をとらずに、たまに、恭夫が反撥して来ても、それを説き伏せてしまう程多弁になつて居ました。私がこんなに口数が多い時は、非常に愉快で昂奮した時で、滅多にない事なのでした。それは酩酊した時の状態と同じでした。私は酒は飲めませんでしたから春美の作つたコーヒーに酔つ払つたのかも知れません。

私はこれからこの家にチヨイチヨイ来る手段として恭夫から本を借りる事にしました。

私はその夜寝床の中へ入ると、直ぐ春美がにこやかな微笑を浮べて現れました。そして私に向つて蔑すむような口調で言いました。

「あなた、どうして妾なんか恋をしたの。妾は悪い女よ。恐い女なのよ。妾と交際して居るとあなたの不幸が増すばかりよ。妾を好きになつたら身の破滅よ」

「いえ僕は、例えどうなつても構わないのです。貴女のお傍にさえ居られれば、奴僕に身をおとしても、貴女からどんな虐待を受けても幸福なのです」

「よし、そんなら妾がどんなに恐いひどい女だかと言う事を知らせてやる！」

それからの彼女は「痴人の愛」のナオミになつたり「毛皮のヴィナス」のワンダになつたりして、私の脳裡をさかんに荒れ狂い、私の肉体の上で狂乱のルンバを踊り、革のしな／＼した長い鞭を

取出してまで、ビシリと床に素振りをくれて、その威力を示した後、仮借なく私の背中に打下すのでした。私の背中はみる／＼羽根蒲団のように膨れあがり、幾つもの、肉の畝の凹んだ所に血の溝が流れました。その畝へ春美が足をかけて踏みつけました。

夢の中の妖美な苦痛の快楽、現実の痛さはなく、快楽のみが現実として残る、その昂奮が頂点に達して一瞬に消え去った時、私は現実の姿の春美を観察して居ました。

——春美に果してこれだけの嗜虐性があるだろうか？勿論ないに決つて居る。然し若し少しでも、その片鱗でもあつたら春美の魅力は猶勝り、私の思慕は一層募るだろう——

三

霧塚春美は二十歳、去年女学校を卒業して、今は洋裁の学校へ通つて居ました。

二度目に本を返しに行つた時には、彼女はコバルトブルーのセーターにチョコレート色のスカートを付けて居ました。

セーターは女の肉性をクッキリと浮び上らせて、最も女の美しさを見せる衣服の一つです。その頃としては新しいデザインの、胸の所に丸い小さな窓を拵えて、その窓からチョツピリと見える素肌が男性の窺視慾をそゝり、その下の豊かな二つの丸い隆起の形は、種々の彫刻や絵画などに見られる美しい女性の象徴の、どの型に属するものであるだろうかを想像させました。

——此の美しい女性のためなら、自分は奴僕となつて一生を仕えても悔いはない。

自分に彼女の夫となるべき資格はないかも知れない、それでもよ

い。何でもよいから、私は彼女と同棲したい——と心に希いました。

春美と恭夫と私の三人でコーヒを飲むひと時を楽しく過して居た時、その雰囲気を変す闖入者が現れました。

K大の学生で大槻と言う、私にとつて第一のライバルでした。

彼は相当露骨に私を観察しました。私は彼のその視線に合うと堪えられぬ不快なものに感じ、持ち前の羞恥心が出て、眼を伏せてしまふのでした。

彼は一わたり私に注意を払つた後、大した強敵ではないと見たのか、間もなく私を無視して春美に熱情的な視線を向けて話しかけました。

その頃から私はゆつくりと彼の頭の上から爪先迄を仔細に見渡しました。彼は端正な容貌で、二枚目型の美男子でした。地味な淡い柄のネクタイに紺の背広を上手に着こなして居る点は、私の服装よりも引立つて見え、白とチョコレートのコンビネーションのダンス靴は、時々軽いリズムを踏み、その全体から受ける感じは明朗で、教養のある美貌の青年と言つた印象でした。

私の「陰」に対して彼は対蹠的な「陽」の存在でした。

外見から受けた感じでは何から何迄私はひけ目を感じました。

又彼に応待する春美の態度が私の時よりも浮き／＼として愉快そうに見えるのに私は生れて初めて激しい嫉妬を感じました。

いつもならこの辺からもう直ぐヘナ／＼と「諦め」の道へ入つてしまふのですが、その時の私は激しい闘志が燃え立つて来たのでした。私は総べての点で彼より劣り、太刀打ちが出来なくても、只一つ彼女に対する誠意だけは、誰にも負けないと思ひました。それと

もう一つ恃みとするのは父の財力と言うバックでした。

私は霧塚家を訪問する時はいつも何かしらお土産を持って行きました。主に和菓子とか洋菓子とか果物とか食べ物が多かったのですが、それを春美にと言つて差出す事は勿論私の性格として出来なかつたので、恭夫に渡すのさえ、何か私の下心を見破られそうで、私としては非常に恥かしく、それを渡す時は春美の同席して居ない時を選んでコッソリ渡すのですが、その差出し方が、我ながら不自然だつたと思い、家へ帰つてからもその照れ臭さに思い悩んだ事がありました。その癖「あれを春美が食べてくれたかしら」と秘かに心配するのでしたが、次の日行くと春美が「先日は御馳走さまでした」と言う一言のお礼の言葉を聞いて、身内がゾク／＼する程嬉しかつたのですが、その場で何と返事を返すかにはいつも当惑し、ドギマギし、後で考えても変てこな、返事をして恭夫や春美に蔭で笑われてやしないかしらと思う事が再々ありました。

私は彼女と映画と一緒に見たいと思いました。大概はもう何度か彼女を誘つて二人きりで見て来て居るのです。私はせめて恭夫が一緒でもいいから三人で見たいと思いました。

私はブレイガイドで映画館の株主へ贈る招待券を二枚買つて、最初は恭夫に「この映画、僕観ちまつただけど、君まだ観なかつたら観て来給え、と言つて二枚渡したのでした。そして次の日私は私でコッソリ入場券を買つて、彼女も今頃は恭夫と観に来てやしないかと想像し、もし見つかつたらまずいと絶えず客席の近辺に注意しながら観て居ました。私としてはそんな恋愛映画なんか観たくなかつたのですが、話を合わすために観ておく必要があると思つて退屈を辛抱しました。

そんな事を何度かくり返しました。三度目の時恭夫が、「今度は君と一緒に観ようじゃないか」と言つてくれました。私は彼からか春美からかのこの言葉を秘かに期待して居たのでした。

私は三人並んで席が取れなかつたら詰らぬと思い、わざと映画の替る最終の夜を選んで日比谷映画劇場へ電話で恭夫を誘いました。

恭夫は私がいつも三枚切符を手に入れて居るのを知つて居るので春美と二人で来る事を返事しました。こゝ迄は私の筋書き通り運びましたが、後は如何にして春美を中にはさんで腰かけるかと言う事に頭を使いましたが、案ずる事もなく、恭夫が一番先に腰かけてくれたので、自然に春美は私と坐る事が出来ました。

初めて憧れのダイナスに、衣服をとおしてでもその肉体に接触する機会が得られ、彼女の悩ましい体臭と香水と髪から匂う甘い香りに無上の光栄を感じ、ふくよかな弾力のある肉体が私の腕に快い圧力を感じた時、身分不相応なせい沢をして居る感じがしました。

私の頭の中は彼女の肉体で一ぱいになり、映画が何をやつて居るのか、次から次へと起る妄想にとらわれて、全然眼に入りませんでした。

——あゝ、何としても春美を得たい、俺はこの美しい女神のためなら命も要らない、愛の下僕にも喜んでなる、だがこの心を打明け

るには、これから先どれだけ日数がかかるだろう——
少年の恋よりたど／＼しい私の行動が、これから先も続いて、サツパリ進歩しないだろうと思うと、我ながら情けなくなつてくるのでした。

夏が来て、女性の服装が開放的になつて来た頃、春美もそれに連れて軽装になつて来ました。

この頃一段と成熟して来た彼女の肉体は、胸の膨らみなど外国の女に負けない程、大きくなり、全体に肉がついて来て、私の理想通りの姿態になつて来ました。

恭夫から突然「海へ泳ぎに行かないか」と言われた時、私は突差に春美の裸体を想像して、返事に詰りました。

「日曜は混むからイヤだつて春美が言うから月曜にしたんだけどいいだろう。君泳げる？」

「いくらかね。僕は山へ行きたいんだけどなあ」

私は春美と言う存在がない限り山の方が好きなのですが、この場合は春美の着物の蔭にかくされて居た肉体が見られる又とないチャンスなので一も二もなく海なのですが、私は大して嬉しそうな顔もせずに答えました。

「山は山で又行くとして、今度の月曜は海へ行こうよ」

私は春美の肉体は是非見たいのですが、自分の貧弱な身体を春美に見られるのが恥かしく、一寸当惑しましたが、彼女の素晴らしい肉体を思いのまゝに觀賞したい欲望はその羞恥の上を越しました。

朝の八時に発つ電車に乗るために私は四十分前に東京駅に行きわざとブラ／＼して十五分前頃、待合わせ場所のホームへ行きまして。間もなく霧塚兄妹はやつて来たので、直ぐ電車に乗ろうとすると恭夫が

「彼奴寝坊助だからなあ、おくれたら構わず乗つちまうけども少し待つて見るか」

私はまだ連れのある事を知つて、不愉快になりました。今の今迄

一言も私に知らせないのは失礼だと恭夫を怨みがましく思いました。発車のベルが鳴り出す頃大槻が汗を拭き／＼やつて来ました。聞かなくとも分つて居る相手でした。

鎌倉はウィークデーでも相当の混雑でした。

春美は暗い紺色無地の地味な海水着を着て支度部屋から出て来ました。その地味な色がかえつて彼女にピツタリとあつて、妖艶さを増して居ました。海水着からはみ出さんばかりの胸の隆起、ピツチリ食い込んだ股ぎわから、モリモリと逞ましい太腿の丸い線は、膝から下の線が長いために全体からとるとスナリとして見えましたが、腿の一局部だけには息の詰まる程のセックスアツピールを感じました。髪に捲いた赤い水玉模様の海水りボンだけが派手でしたが、彼女のエキゾチックな容貌にマッチして、美しさは一段と輝いて見え、スレ違う男達も振返つて見る程、海の銀座鎌倉の浜辺に遊ぶ他のニソフ達を断然圧して居ました。

大槻も私の想像したよりいゝ身体をして居ました。肩幅が広く、ボクサーのように筋骨隆々として胴が長い私の身体とはスタイルも比べものになりませんでした。

恭夫が私とドッコイ／＼に瘦せて足の短かい不恰好な身体だったので私はいくらか慰められました。泳ぎは四人共達者で、かなり長い間沖へ出て泳ぎました。

浜で借りたパラソルの下へ甲羅を乾しに上つた頃は、今年初めて海へ入つたので私は寒さに震え上つて居ました。

大槻と春美は宛ら恋人同志のようにふざけ合い、私と恭夫は傍観者の役目を勤めさせられました。大槻を中にして、恭夫と春美がその両脇に、パラソルの日蔭に寝転びました。

(未完)

脱 落 者

小 森 原 平



三好雪子から小山幹雄に宛てた手紙を、手に入れた私は、血管が逆流する程の憤激と、嫉妬と、更に悪魔的な歓びを感じた。それには、こう書いてあつた

小山様

私は今迄間違つていたのでしようか、新しい祖国を建設する為に。此の唯一の理想が私を今日迄引きずつて来ました。然し今は、或る脱落者が事情が、私を考えさせます。私達の主義が無上であればある程、脱落する者に対して、輕蔑と憐憫以外の何もかも、感じる必要は無いと、私は思つていました。落ちる者は落ちよ、選ばれた者だけが勝ち残る。此の私の考え方に対して、他の同志達は制裁を第一条件に決定したのです。呼び出された其の青年は、勿論打つ蹴る殴る、終いには髪の毛さえ引き撈られました。私も強いられて皮バンドで彼の背を打ちました。けれど、こんな卑劣な制裁が何の役に立つのか、私達への裏切り行為

はこんな事で解決されるもので無く、もつと深い魂の問題なのです。彼が脱落を永久に悔いるような精神的制裁こそ課せられるべきです。その上に、彼の態度は脱落とは必ずしも言えるのでしようか。委員会で決定された強制結婚を拒否したのが、彼の脱落への第一歩なのです。——思えば此の時から多少私の心も動揺していました——彼は女性の同志との恋愛を否定され、資金獲得の為に或る上流階級の令嬢との結婚を命令されました。大学の経済を卒えた彼は、表面私達と無縁に見えていたので、我謂上流階級とも近付き易かつたのです。彼の恋人は自殺し、彼は私刑に処せられました。

私は思います。同志と同志の恋愛が何故否定され、たとえ金銭が目的とは言え、忌むべきブル階級との結婚を強制されるのかと。同志達相互の結婚こそ、よりよい私達の社会への基礎では無いか、と。主義と人間性が両立する事を前提として、私は今迄活動して来たのですけれど、今は懷疑的です。それは貴方への無情の故でしようか。ええ、それも一つの大きな理由です。最も嫌悪すべきリベラリスト、即ち日和見主義

者の貴方と、接している時の方が、何故か同志達に接する時よりも、人間的な温か味を深く感じるのです。是がプチブルの麻薬だと信じて、貴方に魅かれる私、こんな事を思っていると知れたら、私除名されるかも知れません。いつそ除名されたら、……あゝ、それは考えるだけでも恐ろしい何時人知れずお渡し出来るかは判らないけれど、書かないでは居れぬ私を、貴方はお嗤いになるでしょうか。

雪子より

此の手紙は、書かれてからも久しく彼女のハンドバッグに在り、私の命令で、彼女の同僚の交換手が盗み出したのだった。

彼女や小山と同じ電話局を、昨年解雇あれた私は、雪子に恋情を覚えていた。いつも微笑をたえた眼尻や、仄かな暖かみを偲ばせる艶々しい頬が、小柄な容姿と相俟つて、私の恋情を唆るのだ。在職中は、まるで女護ヶ島のような職場で、温順な彼女は余り眼立たなかつた。女性の自覚とは誰彼無しに手近な男と交際する事だ、というような風潮の中で、彼女は何時も孤独であつた。

退職を余儀なくされて政治運動に全力を注ぎ始めた私は、女の同志としての彼女を再認

識し、その鋭い理解力に感心する以上に、美貌を意識していた。然し彼女との恋愛が許されそうもない程、私は一つのグループを統率する地位に在つたし、又私の恋情を無視して彼女は私に親しまない。近頃では小山と特に親しいとさえ聞えていた。小山こそ、私達の敵であり、デモ一つにしても、服務規定にデモ行進があるか、と、私を嘗て愚弄した男だつた。

同志の間の規律が私に本心を曝け出させない事が、一層私を苛立たせ、私を嫉妬深くさせるのだつた。彼女を手に入れるか思い切るか、何れかに決めなければ日常生活の基盤さへ揺らぎそうな予感が有つた。

私は決心して彼女の身辺をスパイし、重大な裏切りの証拠として、此の手紙を得たのである。

早速私は二、三の同志を集めて彼女の除名を相談した。彼女が小山のものになつてしまふのが心残りではあつたが、一方彼女を失う事が、主義に対して私を救う道であつた。「やきを入れてからにしろ」

一人が発言した。

「大体あの女は最初からプチブルだつたよ」も一人が吐き出すように言つた。

然し私は知つてゐる。彼等が今迄内心彼女に私と似た関心を持つていた事を、そして、そう叫ぶ彼等の瞳に、瞬間、異様な光の宿つてゐるのにさえ気付いていた。勿論それを、私は秘かに期待してゐたのだ。

地区の集会通知を雪子に宛てて認めたのは其の夜の事であつた。

雪子は稍々固い表情で出席した。その顔を見た時、是から始まる彼女への私刑に、私は期待の昂奮を禁じ得ないのであつた。

思うに任せぬ女への、執著の醜さ、嫉妬の不合理さは、充分意識してゐながら、尙も其の故に、私の昂奮は悪魔的に昂まるのだ。

旋盤工の金口、放校学生で自由労務者の山木、それに市役所雇員の元井が揃つた時、私は開会を告げた。

緊急動議として裏切者三好雪子の除名、並びに処罰が、三人の口から激越な口調で論じられた。

雪子は蒼白になりながらも、除名並びに処罰を言い渡す私に背いてみせた。秘かに恋する彼女の肉体に、是から加える暴虐の主導者としての私を自覚し、私の声は淀んだ。それが腹立たしさに、私は強いて心を落着け「では、始めよう」

と、無雑作な口調を装った。

白いブラウスが脱がされ、紺のスカートが引き摺るように剝がれた、彼女は抵抗しないその抵抗が不満で、最後の楽しみに残しておきたかつた下著をも、取り去るように私は合図した。果して彼女は、儂ない抵抗を試みる「打つて下さい此のまゝで、お願い、それだけは許して」

然し哀願は却つて拍車の役目をなした。何もかも、機械油やインクの染み付いた指先で無惨に剝ぎ取られ、彼女の裸身は曝されたのである。それは目覚ましい光景であつた。

二十三才の女体は、艶やかに脂肪の滲み出た皮膚に匂い、豊かな乳房と淡紅色の乳頭を誇示している。全身が白く張り切つて、弾けば快い手応えがあつた。

麻縄で両手首を縛り、その端を鴨居深く打込んだ五寸釘に結び付ける。吊下げては氣絶されるからである。その代り彼女の全身は股間を残して、私達の眼に曝され、鞭打たれる度に、きり／＼と振れ悶えねばならないのだ「見ろ、腋の下の毛を剃つてやがら」

金口が苦々しそうに呟いた。両腕を差し上げた姿勢のままで、彼女の腕は滑らかに手入され、柔い髪をたゞみ込んでいた。

「ふん、ブルにかぶれやがつて、序だ、引ん剣いちまえ」

山木が雪子の胸を抱いた。元井が、白いズロースに手を掛けた。苦痛と恐怖に蒼く澄んだ雪子の頬が、俄かに赭く血を浮かせ、激し



く両脚を悶えさせた。

何てさまだ、小山なんぞに惚れやがつたばかりに、と思う一方で、片思いながら私の愛する女の、屈辱に苦悶する様子は、流石に私の心を疼かせる。然しそれも一瞬で、まるで

かに肉の付いた腹部が、ゆるやかな曲線を終える辺りで、漆黒の茂みが乱れ縮れているのを正視した瞬間、ぐーんと下腹の底深く得体の知れぬ嵐が渦巻き、汗が、じり／＼と額に浮いた。口の中が奇妙に粘つてさえ来るのだ彼女が隠そうにも隠せないで悶えている部分、そこそこ、奥深く女の香りと湿いを湛えているのだ、そう思いながら、私は皮バンドを握っている右手を、無意識に振つていた。ひゆうつ、と風を切つたバンドは彼女の脇腹に喰込んで、びしッと弾みのある音を立てる。私の手に、厚い肉の弾力が伝わる。その度に、彼女は首をのけぞらせて苦しむ。赤紫色の条が、クリーム色の皮膚を香水も染め付ける。乳房が緊張し切つて、乳首まで固く凝っているようだ。

女体の曲線が微妙な陰翳の効果によつて、鮮やかな明暗を醸し出すのだ。私は、口がからからになる迄叩き続けた。といつても、十回にもならなかつただろう。金口が私の手からバンドを受取つたからである。

又バンドが風を切つた。彼女は、もうぐつたりとして動かない。氣を失つていた。

麻縄を解いて私は雪子を抱いて下した。赤い血張れが無数に出来た彼女の肌は、火のよ

うに火熱つてゐる。脂汗が流れて、じつとりと濡れた女体は仄かな香に私を酔わせそうであつた。私は彼女の湿つた太腿に自分の肌を擦り付けたい衝動を感じた。山木等が居なければ、私は彼女の肉体に、鞭打よりも愛撫を以て応えたに違ひなかつた。薄い夏のズボンを通して、抱いた彼女の尻の重みが強い刺戟を私に伝えるのであつた。

横にして水を額に吹き、脈を見た。息を吹き返したのか、臉が震えて来た。

「寝かしておいて又やろう」

私は私刑を続けさせるのだ。腹を真正面から打ち下された彼女は、びくんと身を震わせると、前を自由になつた手で隠す代りに、くると俯伏しになつてしまつた。畳に喰付くような姿勢である。今は、ふつくらと丸い尻が鞭打を待っているのであつた。びシツと量感を伴う音が耳を擦つた。尻の容積が忽ち増し、赤く染まつて行つた。

彼女の白く滑らかな肌は、打たれない部分迄次第に充血して、全身が鮮かに紅潮して行く。まるで内部から灯明りが射しているような美しい潮紅であつた。

私は其の美しさに酔う思いでいた。バンド

を無意識に振つてゐる誰の眼も、浅ましく血走り、額には、びつしりと脂汗が浮いてゐる。その醜さが私自身のものだと思つた瞬間、自己嫌悪と一種の陶酔に身震ひしたかと思うと、私の股を、粘つこい液が滑るように流れ落ちて行つた。

氣落ちしたような空虚が部屋の中を支配した時、雪子は不意に身を縊じつて顔を振り向けた。蒼白い顔の、大きく見開かれた眼の縁だけが、奇妙な赭さを湛えてゐる。まるで、先刻立たせて鞭打つた時、身悶えと共に茂みの中から覗き見られた、彼女の美の象徴に似た色合である。それは羞恥と屈辱と憤怒であつたろうか。その意味を考える暇もなく、彼女は叫んだ。

「今こそ、私は自由なのよ、もつと打つて、もつと打つて、私の罪は、たつた一つ、貴方達の仲間に一度でも入つた事なのよ。今日限りそれもお終ひ、さあ、私は何をしようと自由になるのよ、もつと打つて」

叫び続ける間も、彼女の全身は美しく火熱り、蒼ざめていた頬さえ、いつしか赭く血が射してゐた。きらきらと輝く瞳は、異常なエキスタシーの表現のようでさえあつた。

それは、自由を今こそ取り戻した生命の輝きであつたかも知れない。

もう此の女は私自身到達出来ない境地にいる。私はそう思つた。暴力によつて彼女を傷め付けても、結局勝利者は彼女の方である。彼女は、畳に裸身を蛇のように擦り付け、のたうち廻つてゐるけれども、その瞳は希望に輝き、その裸身は恍惚として燃えてゐる。

昂然と首を擡げて、彼女は叫ぶのだ。

「私は自由なのよ」

と。彼女は此の私刑を以て自由を購うのだ。勝つた者は誰か。

私達四人は誰も皮バンドに手も触れず、彼女の美しい裸身を凝視したまゝで、虚脱したような沈黙を守つて立ち尽くしてゐるのだつた。

×

×

×

彼女と同じような私刑を覚悟の上で、私が

脱落を決心するのには、それから更に二ヶ月を要したのである。

徳川閨門痴情録

的場通

一
御家の長久、御子孫繁昌という口実は、將軍や大名に一夫多妻の習慣を持続せしめた唯一の原因であつた。彼等はこの口実の下に幾多の側室を擁せしのみならず、本能的衝動に駆られると、処女の貞操を蹂躪し、或は人妻を掠奪するような横暴をも敢てした。

彼等は性的生活に於ても専制の暴君であつた。その正妻のみは家門の權威と名譽とのために、華胃或は大名等の由緒ある家より迎えても、側室に至つては所謂腹は借物主義で、素姓の知れない何処の馬の骨やら分らない怪しげな女でも、美貌であり或は遊芸に長じて居りさえすれば、否応なしに側室に召し抱えて荒淫放縱の限りをつくした。

「不義は御家の御法度」と云つて、若し臣下のもものが私通したことが発覚した場合には、

直ちに御手打ちの刑に処せられた程、嚴格を極めていたが、併し此法度は畢竟主人公の独占權を犯さないように設けられたもので、主人公自身は、人妻を姦淫しても、部屋子の貞操を破つても、公然の自由行動として、誰れ一人もそれを咎めなかつた。

また御殿女中の頭目たる年寄や上臈等は主人公の眷顧を得んがために、美しい部屋子を抱えて、それを取り持ち、部屋子達も一身の榮達を謀らんために、好色の主人公の眼にとまるよう手のつくように持ちかけた。

西鶴の「好色一代男」の中に「松の風、江戸を鳴らさず、東国詰の年、ある大名の御前死去の後、家中は若殿なきことを悲しみ、色よき女の筋目正しきを四十余人、お局の才覚にて、御機嫌を見合せ、御寝間近く恋を仕掛け奉る」とあるのは蓋し実状の一斑を穿つたものである。



二

柳営及び藩邸にては、將軍大名の執務する屋室を「表」といひ、こゝでは一切女性を置かず、何事も男性の手で取扱ふことになつてゐた。

妻妾の置いてある処を「奥」或は「大奥」と稱し、表との區別は嚴重に立てられ、その通路には、二箇所あつて、一々錠口を設け、そこから出入りをする事になつてゐた。

錠口には杉戸へ錠をかけ、朝暮には必ず役人が立ち会つて開閉する。この二ヶ所の通路

の外にお鈴口と云うのがあつて、殿様の出入りする毎に表と表とから索を引き鈴を鳴らし、て通知する。奥へ出入する男子は十五才以下六十才以上のみに限られ、男子禁制と称して可い。たゞ主人公のみが自由に出入する許りで、奥は脂粉の香の漲る女性の世界である。

此のように表と奥の境界は嚴重であつて、男女の雜居することは殆ど無い。見た処、風紀の非常に正しいようであるが、これも要するに主人公の独占権を擁護確保せんがためである。別天地たる奥には正妻の御台所の外に最高級の御年寄、上臈より最低級のお末に至るまで、一般に奥女中、御殿女中と総称せらるゝ女性が沢山に居る。御年寄(老女)は奥向きの女中全体を取締る重い役、即ち今日の言葉で云えば女官長で、表の国老(老中)と同等の地位にある程の権勢を持つてゐる。しかし、御隠居付、御子様付など、云う御年寄もあるが、それは唯だ一部分の取締をするだけで、御年寄よりも地位が低く単に御年寄といわずに、お附きの御年寄と云つた。

中臈(或は中老)はお側に奉仕する女官でお妾の意味では無いが殿様付きの中臈は側室で上様附御中臈といふ、奥方附のものはお清の御中臈と云つた。

柳営では中臈は第五番目の女中であるが、子を生んだものは三十才内外の年頃になつてお妾の役から退くと、優待の意味で、御年寄即ち上臈に昇格する。それは単に名義だけの年寄であつて、奥女中の取締をするのでは無い。

大名の多くは幕府の定めにより人質の意味で正妻を江戸に置いたから、領国には第二夫人とも云うべき権妻を置き、それを御国御前と呼んだ。その下には固より多くの侍妾がある。

江戸へ参勤交替の往来には妾を伴うて道中した大名も尠く無い。その中にも、尾張の徳川宗春、姫路の榊原政峰等の如きは世間の耳目を驚かせた程の豪蕩振りを発揮した。

桜田門外の雪と消えた井伊直弼も女なしに旅の出来ない大名の一人であつた。

三

奥向に奉公する女性はいずれも一生奉公であり、且つ殿様附の中臈以外のものは異性に接することが出来なかつた。

若し密かに異性と関係したことが発覚すると不義密通の罪を犯したものととして厳刑に処せられるのであるから、奥女中の全体を取締

る年寄の注意は特に性的方面に対して嚴重に払われた。

それでも絵島の局事件の如きものがあり、また大名の家にてはお部屋即ち側室などの姦通事件が起つて御家騒動の持ち上つた実例も稀でなかつたが、併し柳営にてはお部屋に此様なことの殆ど無かつたのは年寄等の注意の能く行き届いた結果であらう。

但し第十二代將軍家慶(慎徳院)の側室雪江(水野大炊頭の娘)が將軍の薨去後、二の丸に出入りした優男の土工と私通し、それが発覚して慎徳院の位牌を取り上げられた面目なさに断食して自殺したような事件もあつたが、併し中臈の勤役中に不義密通の噂などのあつた者は柳営に限つて殆ど絶無であつた。

將軍の侍妾の身持には特に嚴重な注意が行き届いていたのである。

柳営でも藩邸でも初めから妾として奉公するものは当時の習慣として別に室を貰うことになつてゐた。妾のことを一にお部屋と云うのは之に由来せる名称である。

処が偶々殿様の眼にとまつて臨時にお妾を拝命したものには、先ず御夜具拝領を仰せつけられる。それが繼續して君寵を受けると、おの字を賜つてお手付中臈に昇格するのであ

るが、それまでは別に定まつた部屋もなく、一般の奥女中と同様に長局の生活をする事になつてゐた。

体力と財力との許す限り、幾多の侍妾を擁して歡樂を恣にした殿様の閨門には妻妾に停年制があつて、三十才内外の年頃になると、寢所を共にしない習慣となつてゐた。

奥方は三十才を越すと、たとへ健康であつても、御裾褄（おしとね）御断りといつて、独身同様の身の上となり、その附女中より美しい一人の女を見立て、それを主人公に推薦するのが例であつて、若し、三十才を過ぎても、御しとね断りをしないと、他からいろいろな陰口をいわれたものである。

侍妾に於ても同様の停年制があつて、君寵の衰えないうちに転役する慣例となつてゐた。此の様に將軍大名の閨門には寵妾にも新陳代謝があつて、年の若い女性のみが君寵を壟断し、三十才以上の姥様になると、たとへ残んの色香の衰えなくとも、孤独のさびしさを味わねばならなかつたのである。

金殿玉樓の榮華な生活にも此の如き悲惨な一面のあつたことは、今日の人達の想像し難いことであらう。

柳營では、上様附の中臈は、將軍の薨去す

ると、位牌を賜り、また剃髪を許されて、桜田の御用屋敷に余生を送り、勤役中と同様に扶持米を受ける例になつてゐた。

しかし此様な身の上となつても猶監督は嚴重であつた。保養とても寺社の参詣位が精一杯の樂みで、芝居見物などは固より許されなかつた。

御用屋敷の出入にさ

え時間の制限があつて若し夕刻の七時の門限に遅れて帰邸するようなことがあれば直ちに手續書を取られ、此様なことが度重ると、その素行を探偵せられた程、將軍の薨去後にも本丸に居る年寄の監督の下に余生を送らねばならなかつた。

此の様に側室を始め、すべての奥女中の素

行に対する監督と注意とは嚴重を極めてゐたが、主人公たる將軍大名の性的生活は前述の様な有様で、素性の卑しい女性でもそれが自分の氣に入れば直ちに侍妾となし、また人妻でも主君の權威で之を掠奪するなど、何の憚

る処なく決行した。

徳川中興の名君と称せられた第八代將軍吉宗でさえ、関東代官伊奈半左衛門の手代某（祿高二三十俵の輕輩）の女房を強奪して侍妾とした。中井竹山は徳川將軍家の開祖家康を評して「閨門の治まらざる聖人」といつたがその子孫は、いづれも家康の好色の遺伝を受けていると見えて漁色の点に於ては決して祖先に譲らなかつた。

四

家康の好んで相手にした女性は寡婦であつて、彼が後家好きは有名な話柄として記録にも上つてゐるが、その子孫に至つては、処女をも犯し、人妻をも強



奪した。

第二代將軍秀忠の如き比較的謹直の人でさえ、素浪人の娘に手をつけて懐胎させた程でその後の歴代將軍の不身持ときては実に言語道断なものがある。

第三代家光は英明の君主のように世に伝え

られているが、実は漁色に憂き身をやつした暗君の一人であつて、それが意外にも賢君と思われているのは、輔弼の役に当つた松平信綱や酒井忠勝などの宣伝の結果だと云われている。

家光の妾阿万の方は、元は慶光院という寺院の比丘尼であつたが、その美貌に恋着した家光は、將軍の威光を以て還俗を申しつけ、また第四代將軍家綱の生母お楽の方というのは、鎌倉の古着屋の娘で、田舎育ちの卑しい素姓のもの、第五代將軍綱吉の生母で有名なお玉の方（桂昌院）は京都堀川の八百屋の娘で、しかも容貌の醜い女であつた。

然るに將軍の生母であるがために、古着屋の娘のお楽は正二位の位を贈られ、八百屋の娘のお玉は生前に従一位に叙せられた。

何処の馬の骨やら牛の骨やら判らない素姓の卑しい下賤の女でも、將軍の妾になつて、その生んだ子が將軍職につけば、一躍して何々院と称せられ、高い位にも敘せられて、大奥は無論のこと、世間にも権勢を揮い得られたのである。いかに腹は借物主義の時代であつても、心あるものは啞然たるの外は無かつたであらう。此の様に、家光は卑賤な女を妾にして、しかもその腹より第四代及び第五代

の將軍を生ませた。第五代將軍の綱吉も、父家光に劣らない漁色荒淫の將軍で、多くの侍妾や男寵のあつた中にも、特に寵愛したのはお伝の方といつて、英一蝶の浅妻船の絵に画かれた程であるが、その父というのは素姓の卑しい輕輩で、小谷権兵衛といひ、仲間頭（八十俵高）或は黒鍛（十二俵一人扶持）だとも云われている。

このお伝の方は十九才の時、鶴姫を生み、二十一才の時、徳松を生んだ。若し徳松が天死せなかつたら、第六代將軍となり、随つて仲間頭或は黒鍛という掃除人を父とせる彼女も將軍の生母として何々院と崇められ、且つ高位に叙せられたに違いない。

また綱吉は、牧野備後守の妻で既に三人の子の母たる阿具里を強奪しあまつさえその娘の安子をも強姦して母子共に犯した。その乱倫の甚しき、実に驚くの外はない。

第六代將軍の家宣は家光の孫であるがこれも祖父に譲らざる漁色漢であつた。

「三王外記」には、その内寵の美人百を以て数うとある。その中にも一身に寵を集めた右近局（家宣の薨去後、薙髪して月光院といふ）は、これまた至つて素姓の下賤な女で、世に伝えらるゝ処に依れば、勝田玄哲と云う按

摩の娘であるといひ、或は浅草唯念寺の破戒坊主の娘であるとも云われている。その娘に七代將軍家継が生まれたのであるが、五才で夭死した。父家宣の乱淫であつたため、生来體質の虚弱なりし結果かも知れない。

紀州家の庶子より出でゝ宗家を継いだ第八代將軍吉宗は、徳川中興の名君と称せられ、ことにその享保の勤儉政治は今に至るもなお史家に賞讃されて天晴れの賢主と唱えられているが、併しその性的生活に至つては頗る乱脈であつて政治の方面には極端に近い程の儉約を断行しても、女色には少しも左様な形跡は無く「清濁太平論」に記する処に依れば、大奥の女中の総数は五千人にも達し、その中にはいろ／＼な女もあつて、二の間、三の間の女中の内には相手にした女も多く、懐胎した者十人許りもあつたと云う。

吉宗は元來性的早熟の方で、既に十一二才の時、生母淨円院の腰元に通じたことがあり十六才の頃には山伏の娘を姙ませたこともあつた。演劇する天一坊事件は必ずしも空想の脚色ではない。

將軍職を襲い得たから漁色の習癖は依然として改まらず、切米二三十俵にも過ぎない極めて小祿の貧乏侍の女房に懸想し、その夫の

上官なる関東代官伊奈半左衛門に命じて無理に離縁状を夫に書かせ、強奪したことが「耳袋」の中に記るされてある。

吉宗の壮年時代の荒淫の祟りであろう、癡人に近い暗弱不具の家重が長子として生まれた。その生母の須磨の方は云う迄もなく卑賤な女であつた。

五

糜爛しきつた將軍大名の性生活の中にも特に眼立つて甚しかつたのは、第十一代將軍家斉と、幕末時代の水戸の藩主徳川斉昭の漁色である。



家斉は十五六才の青年時代より六十九才の晩年に至る迄漁色に耽り、二十一人の妾があつて、その腹に五十五人の子女を生ませた。その中発育したのは二十五人に過ぎなかつたが、それでも此の多くの子女を片ずけるがためには、諸大名に強制的に養子として当てがい或は嫁に迎えさせた。

寛政より文政の間に聳入や嫁入の行われた

数は十九度、天保三年より十一年までに五度合計二十四度に達した。家斉の大奥に於ける性生活を足利時代のことにしたのが柳亭種彦の「田舎源氏」である。

家斉の妾には素姓の卑しい女も多かつたがその中にも寵妾であつて、三人の女を生んだ

おみよの方と云うのは法華宗の破戒坊主日啓という者の私生児であつた。その腹に生れた俗姫は百万石の加賀家に嫁し、末姫は四十三万石の安芸家に嫁した。墮落坊主の娘が生んだ女でも將軍家の息女であるので大名の御台所となつた。

徳川斉昭には三十七人の子女があつた。その生母は十人で、その中、妾は九人であるが、併しこれは唯だ子を生んだ妾だけで、それ以外のものは系譜に記載されてないから、元より何人あつたか分らない。しかし、その中には紺屋の娘で水戸家に仕えていたものに手をかけて妊娠させたこともあつた。

斉昭が五十余才の老年になつても好色が甚しいので、賢臣藤田東湖の直諫を受けたことがある。「実歴史伝」に東湖の語を記して「公、平生女色に過ぐるものあり、余竊かに之を憂う。一日直諫して曰く、公の齡既に高し、若し色に過ぐるあらば、恐らくは賢体を害せん。臣願くは少しく之を節し玉わらんとを。公曰く、汝の忠告甚だ可なり、寡人必ず諫に従わん」とある。

これは嘉永六年、斉昭五十六才の時であつたが、併し賢臣東湖の直諫も効なく、その後になつても六人の子女が妾腹に生まれた。

水戸家では毎年二度づゝ偕楽園を公開して藩中の者に拝観させることになつていたが、その際には未婚の女はいづれも丸髻に結んで女房風をした。それは藩公の毒手を免れんがための予防手段であつた。

さりながら家門の繁昌を口実にして一夫多妻の放縱生活を送つた將軍大名も迷信或は其他の事情から墮胎を行ひ産児を制限したこともある。

第三代將軍家光の妾お万の方は元は比丘尼であつたので、懐胎させなかつた。「將軍外戚伝」に「慶光院、お万の方と改め、有髪の形となつて枕席に待す。然れども老中より内

証ありて懐胎を禁ずる故、御君達は無し」とにした。

第五代將軍綱吉の妾阿具里は牧野備後守の妻であつたのを強奪したのであるから、これまた秘密を守るがために子を産ませないよう

徳川光圀も「桃源遺事」に「西山公、未だ御簾中の御沙汰も無かりし頃、御側近き女中に懐胎の人ありける（中略）若し懐胎のものあらば早速水になし申すべしと、かねて堅

く仰せられ候」とある通り墮胎を実行させた徳川家斉も二人の子だけは墮胎させたとの伝説がある。江戸時代には柳營藩邸に於ても墮胎の悪風が行われたのである。

【読者通信】

貴誌愈々御発展の段およろこび

申し上げます。小生少年の頃より多少人と変つたところあり悩んで居りましたが貴誌を知り、世の中に多くの同志のあることを知り甚だ愉快に思いました。小生は本年二十四才、五尺六寸、十四貫八百の細型の健康体であります。十六才の夏よりオナニーを始めましたが、全裸体で鏡に映して行かうか、同性が真裸で責められている絵を眺めて行かないと感じが出ないのです。今日迄小生と同年輩か年少の男性とフェラチオを相互にやりたいという希望が達せられないままで悩んで居ります。プロ男娼は

求め得られることは知っています。大阪附近でノンプロ男娼と申しますか、こうした希望を持つ男性が集まる場所を一つ貴誌に発表願

いと思っています。参考図は公表出来ないのが残念です。（染田玄）

大阪附近でノンプロ男娼と申しますか、こうした希望を持つ男性

○

早速写真を有難うございました

此の道の愛好者にも、それはいろくんと十人寄れば十色であります。貴めの研究もあまりリアリズムに過ぎれば却つて顔をそむけなくなる様な嫌な感じのものになります。やはり貴めの研究はどこ迄も美しいというものでなければなりません。よしそれが性的な目的に利用されるにしても美しくあるに越したことはない筈です。虐げられた女、それは嘗ての歴史の中にあり、現代に求めれば自らその責めの方法も変つて参ります。責めの道具を使用するに就いて又

方法に於いてもそれが昔の形のもの又方法である以上、矢張りモデルも或る程度昔の形にして見ればいゝと思います。（京都、H生）
○責めの姿態の狙いが美しさにあるという貴意には全然同感です。我々は如何にして美を表現するかに苦心して来ましたし、今後も努力してゆきます。（辻村隆）

○

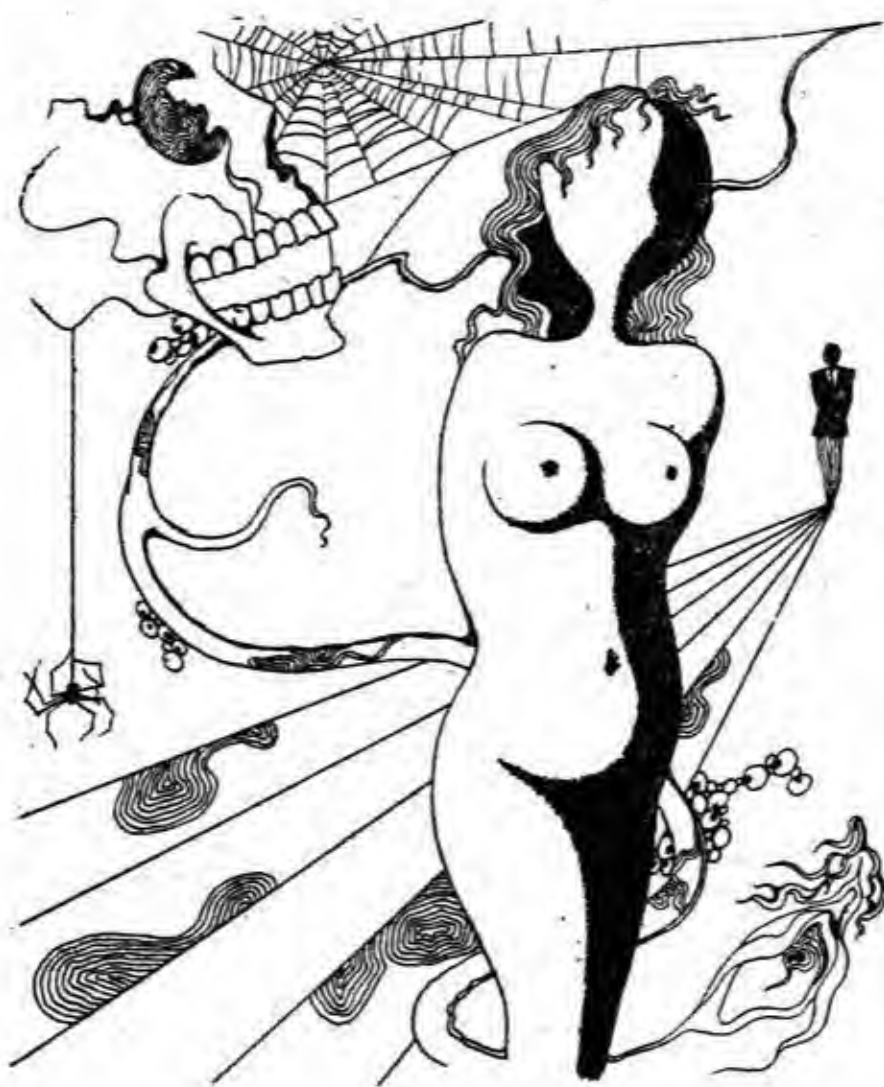
KK誌のユニークな存在は号を重ねる毎に益々光を放っています。貴誌のようにパーソナリティの判然としたものは類誌中にも全然見当りません。どうぞ末永く頑張つて下さい。

ナニーの際に使用する絵の一例をお目にかけます。（玉房芳郎）

○大阪市内に於けるノンプロの集結場所等については既に詳細調査済みです。本誌に発表した

（S Y 生）

☆戦争処女の手記☆



藤 安 節 子

私の暗い内部。私のこゝろの何ものか、泥のように暗いよどみの層。その大いなる禁忌の暗黒のよどみのなかで、私が泥深くもたえ悩んで来たものは、孤独と情欲だった。

眠られぬ夜、なやましい孤独のなかで、夜のはげしい苦悶になやまされ、転々と寝苦しいまゝ、私は幾度も壁に沿って身を起すのだった。部屋は寒く、夜のつめたい壁に頭をもたしながら、私の眼はどんなにか暗胆とした闇をたぐえて、空間を購めることだろう。

わたしのいのちの虚無

はてしない孤独

出口のない性欲

この暗い部屋。未来の希望もなく、訪ねてくる男もなくまつたくの孤独でたゞ情欲に飢えきつた私の肉体だけが実在している部屋。この雑多な人間で群めくアパートには、ずいぶんいろんな人間が住んでいるが、誰も彼も着飾って、男と踊ったり、酒を飲んだり、恋したり、一緒に寝たり、あらゆる快楽にひたり、ずい分いかかわしい生活をしているのに、この第三十九号室である私の部屋のみ、さながら修道院で、私は禁欲し、終日瞑想し、素白の紙にむかつて、ただおのれの心を凝視しているのである。

私の禁欲生活は、何も宗教的なかたい戒律から来ているのではない。ただ禁欲せざるを得ず、飢えきつた獣を、杭につないでいるまでのことだが、この長い禁欲生活のうちに、私は私のうちにある大きな神秘について、知識を得る最上唯一の方法として、私はその正

体を観察する機会も得たし、又、人間はひとりぼっちでいるとロクなことはしないものだが、それはそれとして孤独の快楽もあり、この自己の平性のなかの秘密をさぐるために、若干のそれにふさわしい犠牲をも支払つて来たのだつた。だが、禁欲生活というものが、どんなに苛酷な苦行を伴うものであるか、この不自然な生活は、往々私たち女性をヒステリックにし、それは「死」を意味する。また禁欲というものが、清潔な語感を与えながら世の淫奔な男女の性交にも増して、いかにエロチックなものであるか、封鎖されたSEXには、むしろ醗酵力のつよい欲求があり、情欲というものは、抑えなければ抑えつけるだけかえつてはげしさを増すものである。

熱い血の通っている臓腑や、ビクビクうごく腸をそなえた腹に、「生命」を与えることによつて、人は簡単によみがえることが出来るのである。口では何といつても、人間には肉感のつよい欲求があり、愛欲は生きる力の底流なのだ。

けれども私は禁欲した。三十五歳の女ざかりの今日まで、未婚で処女のまゝ、まだ男を知らず、ただ一度の接吻も、ただいちどの抱擁もなく、じつとこもつて抑圧した生活の虚偽と、感情の仮面のなかで、いま私は、私の生の深い奥底をひらいて見せようと思うのです。

二

なぜ私が今日まで結婚しなかつたかと云えば、それは戦争の余禍でもある。国勢調査の結果によると、私たちの年齢層にあつては、女が五十二万人多いことになつてゐる。この男性の絶対量不足から

孤独空間をかこつてゐるオールドミスは数多いのだが、しかし私のように絶対禁欲している女性は皆無であらう。禁欲なぞというものは、人間が石にでもならぬかぎり不可能なのである。

私は男の肉体を知らぬ上に、単に男と一緒に歩いたり、映画を観たり、お茶を飲んだりしたことすら一度もないのである。その暗い青春には、男の言葉に感動してむせび泣いたこともなかつた。

私は生れながらに耳が遠く、男と普通の話をするこゝろさえないのであつた。私に、こちらの話をわからせようとするには、繰り返して大きな声をしなければならず、男というものは短気だからそれだけでもたえがたいことなのであつた。

話はいきおい間のぬけた調子となり、私といふと、漠然とした妙な雰囲気や醗され、何かピタリとしないおかしい隙間を味うのだ。そして、話はいつても言葉の繰り返しに倦怠して打ち切られ、こんな奴に云つたつて仕方がないとだまつてしまうのである。どんなに人嫌いのしない人でも、私とは本能的に馴染めないものがあつて、友情をしめすような人など、滅多にいないのであつた。

私が孤独で、単に男ばかりではなく、女友達すらないことは、私自身の内部にも、その原因をみつめて肯定するのだつた。私と彼らとのあいだにある性格的に越え難い溝のほか、私の耳が遠いというところが、或るところの隔りとなり、相互に近ずけがたいことを私は幾度も経験している。

男が女を誘つたり、一緒に過したがつたりするのは、女とおしやべりがしたいからなのであつて、若し二人のあいだから会話を除外するとしたら、彼も私も一言も口を利かなかつたとしたら自己暗示

も相互暗示もなく極めて無意味なことであるにちがいない。

そればかりか、性交の前戯で、もつとも重要な道具は会話でありベットのふちに腰かけ、男にそよるに欲望を起させ、一步步自分の中へひき入れていくものも、実に会話なのである。

私は耳が遠いばかりでなく、無口で、無愛想で、人との交際に色気や愛嬌なぞミジンも持たないのであるから、誰もよりつかないのであつた。

その上、私は醜く、三十五歳と云えば、愛欲の未練タツプリの年ごろなのに、生活苦のため、深い皺があり、世帯やつれしているのだつた。鏡にうつった私の顔、これは失意の芸術家かそれとも、暗いさびしさにつきまとわれている中年女の顔か。鏡の前で、両手を頬に埋め膝の上に肘をつきながら、私はぼんやり自分の顔を眺めるのだつた。私の暗さ、孤独の相をおびて、これは私の暗い性欲にもとづく影なのだろうか。

私は容貌に恵まれぬ上に、肺結核で瘦せているので、いかにも貧弱である。見るから色気のない扁平な裸像で、蒼白い皮膚の上に、静脈の皮下網状線が透いて見える。肋骨のみえるうすい胸部には、へん平な乳房が僅かな膨らみをもつて隆起している。何かくたびれて、型がくずれ、まだ一度も愛撫されぬまゝ、凋んでしまった中年女の乳房である。辛苦し、疲労したわずかな女の膨らみだつた。

柔軟性に乏しく、肉付きが悪く、見るから色気のない肉体である。私が異性を惹きつける魅力がないのは、私が墮落者であることや恵まれぬ容貌のほかに、この肉感に乏しすぎる貧弱な肉体にあるのだつた。誰も私からやわらかく触れる軀と、豊満な期待にひたるこ

とは出来ないのだから。肉体的感覚に乏しく、愛欲の鍛錬をするにも、こんな貧弱なせまい場所しかない。

胸から腹、腹から下部へと眼を落していくと、下腹部のその暗い谷間は私の生理の深さを思わせる濃密な毛でおおわれ、そこだけが生きているという感じだつた。それは女の象徴で、拋物線を立て、むつちり膨らんだその線は、何故かヒクヒクうごめいて、その部分だけ、動物が住んでいるかのようなだつた。それは私の全生命がそこにあつて、その部分にだけ、豊かな、ひろい生命の躍動がかんじられるのだつた。

けれどもこの部分も、まだ一度も人に触れさせたこともなく、肉欲も遂げず、生殖することもないのだつた。骨盤臓器のなか、子宮の滑らかな壁や、海綿様の組織や、膜でおおわれているこの生命の闇の深奥に、満ちたり引いたりする潮。私たち女は、月に一個しか卵を出さない。卵は卵巣の表面に沿つて、液体によつて洗い流されフアロビー管から、漸次子宮へ移動していく。

だが、肉欲も遂げず、生殖することもない私の内側は、あらゆる過剰な組織が捨てられるのだつた。たつた一匹の精虫に出逢うために、私はこれまで、何十、何百という卵子を生み出しているかしかないのに。

三

私はこの年になるまで、無論いろんなかたちで、男を誘惑しようところみて来たのである。私のような女は、受動的に、いつまでも待つていても、誰も相手にしてくれぬからみずから能動的となり

かなり大胆な誘惑もこゝろみて来た。

自分では努めて快活をよそおい、ときには淫らな言葉で、男に話しかけてみるのだが、その結果は、調子はずれた、馬鹿げたことばかりしてしまうのだった。墮落者の私は、頓珍漢な合槌を打ったり、思いがけぬときに、「いゝお天気で」なぞと云ったりするものだが、頭がおかしいとも云われ、誰も真面目な口なぞきかぬのだ。私は男と、普通の交際をすることさえ出来ないのだった。

また或るときは、混みあつた電車のなかや劇場を利用して、不自然に自分のからだを男の身体へおさえつけていたり、男の股間へ手を触れていたりしたこともあつた。

私の思いがけぬ感覚は、私のなかに眠っている何かを眼醒まさせるのだった。

私は貧乏で、生活力に乏しく、終戦の混乱期には、しばしば夜の街に佇んだのである。いわゆるペンペンのまねごとで、ガード下に幾度も佇みながら、男の袖を引いたのであるが、私は遂に一度も、男をうまくくわえこむことが出来なかつた。

「お前さんのそのニワトリのような身体ではね」

しつこく男の腕をとらえて離さぬ私に、その男はいきなり大きな声で叫ぶと、つかまれた右手を引き離し、さつさと行きすぎていつたのだった。いくら男でもこんな女に、金を支払うのは馬鹿らしいと思うのだろう。私の瞬目な誘いかたにに応じて来た男は一人もなかつたのである。

私がこれまで男たちから受けて来たものと云えば、侮蔑以外の何ものも与えられたことはなかつた。たえず、しいたげられて来た感

じだつた。私は誰からも愛されず、脱落し、除外されている人間だつた。

まず、私が男に何か話しかければ、男の大きな声に、いちじるしく自尊心を傷つけられ、それが人なかであつたりすると、おどろいた周囲の眼が、いつせいにふりかえり、私の方へ集るのだつた。

単に友人としても、私と交際することは不可能で、まして愛のさゝやきなぞという、ニエアンスに富んだ会話を相互に享受することは不可能であつた。肉体の世界に入っていく、最も重要な問題は愛なのである。

私がかもし金を持っていたら、旺盛な生活力を持っていたら——私は性欲だけで男を得られたかも知れない。敗戦という事実によ來して男の生活能力はいちじるしく低下し、かなりの年輩の男でさえ、金に窮している事実を私はよく知っている。どの男たちも喰うことだけが精一杯で、女と遊ぶ余分の金なぞ持つてやしないのだ。

女と遊ぶとなれば、悪事をやらぬかぎり、いきおい女のふところを狙う結果となる。この頃の男と云えば、女に御馳走になることをこの上もなく有難がるのだ。實際このアパートの女たちを見て、女が男を養い、男におごり、陰萎のいくじなしの男を前にして、対等の立場から、宿望を交換する自信にみちみちている。性欲にしても女性のほうがはるかにたくましかった。

男を欲情したければ、まず金を得なければならぬことを私はよく知っている。「あたし、おごるわ」と云えば、どんな男でもついてくるだろう。私が醜く、肉体的感覚に乏しくその上、一言も口をきくことが出来ないことがわかつていても、「おごる」という一言は

こんなにも魅力があつて絶対なのだ。

しかし、私は貧乏で、病弱で、生活能力が至つて弱く、その上生来の難聴のため、学歴とてなく、思わしい就職も得られないのであつた。

たゞ難聴であるため、社交の煩しさから脱れて、読書へとむかつたころが、いつか文学へ執念深くとりついて、私をこゝまでつれて来たのであるが、もとより才能のあろう筈はなく苦節十五年、いまだにその文学ものにならないのであつた。

だが、私のような女に、どうして文学への情熱が宿つたのであるかと、人はいぶかしむことだろう。祖先の誰の血がうえつけたのかここから脱け出して、もつとちがつた世界へ行かねばならぬという性根をひそませているのだつた。

四

私はもう長いこと、人と話したことはない。この無名の孤独な生活——私はほとんど誰とも往き来せず、終日アパートの一室に閉じこもり、友だちも持たぬ私は極度に内向的となり、せまい苦しい場所へ、自分を追いつめていたのだつた。

このアパートは、ずい分喧燥なようであるが、私にとって、世の物音は斜断されどの人の声も、きゝとれぬ異国の言葉のようで、この部屋の外で行われていることは、すべてがあいまい模糊として、何一つはつきりたしかめることが出来ないのだつた。ことに隣組が撥止されてからは、配給の連絡で、女たちとも話をする機会は無となつた。誰とも話をしない私は、この部屋の外で行われている

ことは、何もわからず、それは私にとつて、存在しないも同然だつた。私は文学に精進しながらも、それだけでは生活が成り立たないの、原紙を切つたり、授産場の内職をしたりして、細々と暮らしている。その日の生活にも、こと欠くことが多く、とても男に御馳走する余裕なぞないのだつた。

誰からも相手にされぬ私は、いつか自分でも、人間嫌ひと思われ、るまでに人を遠のけ、厚い壁の中に閉じこもつて生きるようになったのである。

眠られぬ夜、暗闇のなかに横わりながら、私はひとり、孤独と直面し、自分だけの世界のなかへ沈溺していくのだつた。何ともわからぬ、私の「純潔」にふれられるのが恐しく私には孤独というものが、むしろいいゝ氣持だつた。私は裸で、ひとり「無」と対座するのだつた。

この小さな部屋は、むなししい推積で足の踏み場もなく、私は襖をはずして、押入れの上段をベツトにして寝ているのだ。その固いベツトの上から、だらりと垂れさがつた腕は、性欲を抑制するためにひそかに黄太ホルモンを打っているのだつた。

むなしく夜のなかに求める私の手は、自己冒瀆と汚辱によかれ、私はみずからの肉をまさぐりつゝ、いつか自分だけの夢のなかで、妄想をたくましくするのだつた。肉体的恋愛の空想、心酔、倒錯、乱行のかずかずを、いきいきとした燃えるような思いで閉じこめながら。

頭を抑向けにして、おもいきり脚をのばし深々と眼を閉じている私に、引き入れるように暗い、翳つたように深い、なやましげな影

をおびて、暗闇のなかに「幻想の男」が浮びあがつてくるのだった。その「幻想の男」とは、このアパートに住んでいるひとりの若い男で、私の部屋の前を通つて、階段をあがつていく彼を、私はもう一年も二年も前から見知っているのだが、私はまだ彼と一度も話したことはなく、彼のことにについて何一つ知ることはないのだった。彼の名は溝口と云い、彼の部屋が、私の部屋のちようど上にあるという以外には。

溝口が何処に勤め、どんな生活をして、そしてどんな女がいて、この上の部屋で夜どのようなようにして眠るのか。私は何も知ることが出来ないのだった。眠られぬ夜、どんなに耳を澄しても、彼の寝返りの音も、女との気配もそこで夜いとなまれる秘密の手ざわりを嗅ぎつける何事も出来ないのだった。

たゞ溝口は非常な美貌で、瘦せ型で、背が高く、くびすじのそのり跡がひととき美しい男だった。しよつちゆう黒い服を着て、それも一着きりで起きているあいだは、のべつにそればかり着ているらしく、着くずれもし、垢じみているのに、そのくせ、清潔な感じを与えるのだ。

神経質でも、おしやれでもないのに、身ぎれいな感じなのだ。それは不断的の努力とか神経の作用とかいうのではなしに、生れの問題なのだろう。私が溝口に惹かれるのは、案外そんなところにあるのかも知れない。

溝口は非常な美貌だから、このアパートの女たちの評判はよく、女たちに取り巻きされて、彼は私にはまったく無関心である。彼を誘惑するためには、私は何かの機会をつくらねばならぬのだが、彼



をいかにして肉体の世界へみちびきいれよばよいのだろう。

耳の不自由な私は、彼を一步步々、話の中へひきいれることも出来ず、醜く、肉体的感覚に乏しく、その上ひどい貧乏で、私が彼から受けるものと云えば、たぶん私がこれまで男たちから受けて来た侮蔑以外の何ものでもありはしないだろう。私はいつか彼を遠くから眺めるようになったのである。イメエヂの方が、実物よりも切実なのだ。

彼は私の幻想の男となり、私の主観で集積され、私のイメエヂで結晶され、もはや原型を認め得ないまでになつてゐる、まったくべ

つな彼となつていた。

五

夜は幻想の世界、私の幻想は夜という把握し難い環境のなかで、無限に豊かに膨脹していくのだつた。悶々として眠られぬ夜を、どれだけ反芻しながら過しているか知れやしない。

過度の禁断のなかで、私は異性の幻想になやまされつゞけて来た。この隠遁の洞窟では現実の異性の肉体に於けるよりも、異性の幻想に於ける刺激のほうが、私にははるかに痛切だつた。

あからさまに云えば、それは Onanie で、私は自分の指と、すこしばかりの器具——金さえあれば、P、X に売っているような、アメリカ製のプラスチックのや、ナイロン製のや、ビニール製の美しい人工性器が欲しいのだが。あれでやれば、どんなに気持がいいだろう。

しかし、貧乏な私は、キウリや甘藷やバナナで充分間にあわせているのだつた。私の粗末なベットには、ベニスの代用品であるこれらの野菜類や果物がころがり、私は毎夜のように、狂ほしくみづからの肉をまさぐりつつ、さまざまにあやしい幻想に浸るのだつた。私は不眠症になり、私の夢はますますはつきりしたかたちをとってくる。順序をたてて私は過去の世界から忘れていた顔や、遠くから好もしく思つた唇や、不意のめぐりあいや、夜、偶然すれちがつたおぼろな肉体をさがし求めるのだつた。そうして、一つの不可能な恋愛を、無からつくり出すのであつた。

私は溝口に愛されもせず、まして彼の腕に抱かれたこともないの

に、かれのそりあとの美しくびすじを両腕に巻き、かれの胸に頸をもたせて、かれの髪をやさしく撫で、そうして、ひそやかにかれの唇を味うのだつた。

胸と胸、腹と腹をビタリとつけて、ただ一つの暗い肉の流れのうちに、かれの身体からほとばしるものを受ける、その刹那のしびれるような快感の裡に、五体を溶かしこむのだつた。すさまじい性のどよめきのなかで、私は妖しく、叫びつづけるのだつた。

孤独な肉体の波間に、潮をうねらせ、男の肉体がのめりこむときの、あのいとわしい快感や、気の遠くなるような恍惚の世界を、全身をこみあげる暗い血で、一種放心の状態へとみちびきながら、かれと私との超越的な世界の反映をつくりあげていくのだつた。

この孤独を、この暗い愛撫は、私みずからがつくり出しているものだつた。俗世界の愛欲を抑えて、私自身が獲得したものであつた。まだ現実に異性の肉体を知らぬ私であるが、しかしこの液汁の放心は、私の胸をすーつとさせ、眼のふちを涼しくさせるような醗酵力はもつてはいないのだつた。

もしも、私たちが固く結びあわされていたら。もしも、ただ一つの肉体のなかに、結びあわされていたら。私は私の、狭くせつないびんづめのような情欲を、いつそ、ひろいつよい外界へ押し出してみたいのだつた。薄いガラス容器に、なみなみとたたえられた情欲は、せまい壘の口から、漏斗をこして、トロトロと濃い感銘で蓄積されている。或るときは強く、或るときは暗く、だが、壘がはり裂けそうに、苦しく流れこんでくるにしても、私は行きつくところまで行かず、無心に押し流されず、僅かに Onanie によつて自制する

のだった。

あさましい本能、ことに肺結核がひき起す欲望や、中年女のおさえがたい、ヒステリーの混じり合っている性欲、ああ、三十五才の処女というものが、いかに不潔なものであるか、私のはげしい性欲は時をえらばず、風間でも私は何かをはさんだり、おさえつけたりしなければじつとしていられぬぐらいなのである。

私にもし金があれば、それこそ浮き世絵や外国製の春画をはじめさまざまな怪奇な性器具類をコレクションして、抑えつけられた望み、憾み、反抗、あらゆる虚偽と虚飾から脱却して、赤裸々な官能の世界のなかに沈湎するであろうが、貧しい私にあるものは、ただ自己の幻想のみだった。

なすこともなく、ベットのの上に横わりながら、私は暗闇のなかでじつと眼を閉じるのだった。この果てない闇のなかで、いやしがたの不眠のなかで、私はいつか夢や、精神錯乱がつくり出す、性的な幻想に浸るのだった。

あの信じられぬぐらい小さい、遺伝の原質であるところのジーン

◎読者通信欄について

本誌並びにKK通信誌上に掲載しました読者通信投稿者の住所氏名等は従来切手封入の照会者に対して御返事申し上げ、又切手貼布の封筒を同封の私信は投稿者に対し各々転送の労をとっておりましたが、前号以来左記の通り規定を改めましたので御承知おき下さい

記

一、愛読者相互間の文通輪旋は特別指定のものを除き一切本誌を通じて行います。本誌は掲載不適のものはKK通信上に掲載いたします。

一、投稿者に関する御問合せ及び私の転送は当分の間郵券封入の如何に拘わらず一切中止致します。(読者通信係)

とは、どんなものだろうと私は考える。私たちはそれについて、何も知ることは出来ない。ただそういうものがあつて、或る一定の行動をとっているということ以外は。

不眠の堆積で、疲労感が滓のようによどんでいる暗闇に、私は凝集した細胞に似た円やふたつきのガラス容器にのせられた細菌や、さては眠りをつつむ水の中をうごめいている精虫を、すでにおのれ自身の循環系をもつた生命の泡を夢見るのだった。

子宮の滑らかな壁や、海綿期の組織や、膜でおおわれ、それは信じがたいほど小さく、大きさの比較から云えば、津浪とも云えるような、規則的にくる液体の流れにさからい山のようにたちはだかっている組織の部分を越えて、ちつぽけなオタマジャクシと云った恰好でうごめいている。受精したたまごは、子宮の滑らかな壁に喰い入り、そこにちいさなくぼみをかたちづくっている。……

それは私の生命のしんをたえず揺りうごかし、私の暗い欲望の対象であるとともに、私はこの自己の幻想に、生甲斐を賭けているのだった。

(終)

☆KK通信 ☆ 増頁断行、内容刷新

第三号は大好評! (第一号は品切れ)

○オオ四号堂々完成——驚異の充実ぶり

無代贈呈 (月極読者には毎月無料送呈)

異色ある短篇読物と読者の便り代理部案内と分譲目録編集部便り等満載

(見本 一部 十円、半年分概算百円)

◎愛読者の皆様のご連絡機関として発行いたしましたお仲間のグループへどうぞお入り下さい。毎月本誌発売前にお手元へお届けいたします。◎KK通信係◎



長崎らしやめん考

花 山 劍 作

寛永以来、鎖国政策を厳行した幕府も、長崎のみを唯一の開港市として、オランダ人及び支那人に限り貿易を公許したので、国内の資本はこゝに向つて集中し運搬せられた。

江戸時代の初期は歐洲に於て重金主義（メロカンチリズム）の行われた時代であり、我國はこの際、世界唯一の産金国であつたので利を射るに敏なる支那人、オランダ人は長崎に來集して、年々莫大の金銀を吸い取つた。ただ貨幣のみあつて之に代うべき工業産物の殆ど無かつた當時の我國が毎年巨額の金銀を海外に奪われたのは実に当然の帰結であつた。

新井白石の「折りたく柴の記」に依れば、慶安元年より寛永五年に至る迄六十一年間に海外に出た金は二百三十九万七千六百兩、は銀三十七万四千二百二十九貫余に達し、銅

は寛文三年より寛永四年まで四十余年間に一億一千四百四十九万八千七百片余が流出した。若しそれ以後に流出した額と私商の輸出高とを合計するならば、外人に吸い取られた金額は実に測り知るべからざるものがある。

此の様な事實は金銀を経済本位とし国富とする重金主義思想にとられた幕府当局者の到底坐視すべき處でなく、長崎貿易に制限を加うるに至らしめた。

即ち貞享二年には、唐蘭商船の貿易年額を規定し、支那は銀六千貫、オランダは金五万兩となし、更に元祿元年にはその船舶の數をも制限して唐七十隻、蘭五隻となし、正徳に至つては一大制限を加え、唐は三十隻、貿易年額は銅三百万斤銀六千貫に當る蘭は船二隻銀百五十万斤銀三千貫に當るとなし、金銀の輸出を禁じた。

但しその後、多少の變動はあつたが、幕府は緊締制限を根本主義とし、寛政二年に至つて、その數殆ど、前年の半にまで減ぜられた。此の様に貿易年額を制限せられながらも、

なお莫大の利益があるので、唐蘭の船舶は唯一の貿易場たる長崎に慕い寄つて奇利を博した。しかし、幕府は外人に貿易を公許しても市内雜居を禁じ、オランダ人は出島に、支那人にはその對岸の地に居留せしめた。

彼等は貿易に因る多大の利益のために長崎に來ても、幕府よりその行動を拘束されて、思うがまゝに振る舞うことも出來ず、異郷の山川風土に接する自由も与えられなかつた。

その不平不満と旅愁とを慰めるものとして、は、長崎の丸山及び寄合二町の娼婦が長崎奉行の公認の下に立ち替り入り替つて唐人屋敷阿蘭陀屋敷に出入することであつた。

殊に支那人の中には必ずしも貿易の利益のためばかりに長崎に來るのではなく、別に窮窶たる売笑婦に接して甘い歡樂に酔わんがために、好んで渡航するものもあつた。

「西方東漸史」に「彼等が慕い来れる所以は単に貿易に志して然るにあらず、抑々支那にありては、婦女たる者深く閨中に養われて自由を得ざるを以て、彼等と談笑すべきは唯だ結婚して而して後、我が妻たる時を待たざるべからず、加うるに大いに日本と趣を異にし公娼を禁ずるが故に富者は好んで長崎に航し若干の金錢を専ら酒色の資に供して大いに市中を繁昌せしむる所ありき」とある。

長崎には丸山町と寄合町とに遊廓があつたその公娼が支那人、オランダ人の居留地に出入したのは元々外人の願望に出でたものであるが、しかし、外人に対して何ごとにも苛酷に取扱つた幕府が独り公娼の出入を許すが如き寛大なる処置を取つたのは、主として長崎港の繁昌を謀るがための政略であつたらしい。

試みに享保十六年一月より十二月二十九日に至るまでの娼妓の売高を一瞥するがいゝ、唐人屋敷に於ける娼婦の出入人数は、二万七百三十八人、その標価金額、銀百三貫六百九十匁の多きに達し、阿蘭陀屋敷にては娼婦の人数二百七十七人、売上金高銀八貫三百十匁である。

この計数は単に寄合町だけである故、之に

丸山町の分を加えたならば、その二倍にもなる。少くとも一日五六十人、多きは二百人までも外人の居留地に出入したと伝えられている。されば長崎の遊廓にとりては、外人が最上の得意客であつて、その収入の大部分は外人より捲き上げたものである「私共家業の儀は先親より唐人阿蘭陀人商売を第一に仕る渡世にて御座候」とは妓樓の主人の広言して憚らざる処であつた。

我国が外人との貿易によつて吸い取られた莫大の金額も、その幾部分は長崎の遊廓が再び奪いかえして、長崎港を賑かにした。そこに幕府当局者の経済的政策の片鱗を見ることが出来る。

尤も他の一面には、万里の波濤を蹴り幾多の危険を冒して長崎に来た外人に対し、種々の手段を以てその貿易を制限障碍し且つその行動の自由を束縛した幕府としては、娼婦の出入を認許すると云う瑣細のことによつて彼等外人の不満を緩和し、無聊を慰めようとした政略の加味されているのも亦た明かである



公娼を外人の居留地に送り込むのは、(一)ヶ月六回一、五、十、十五、二十、二十五日)で五日毎に一回別店の妓と交替させ、それを出がわりと称した。しかし、外人の希望によりて五日以上に互つて滞留することも出来た。しかし居留地に入る毎に前以て娼婦に左記の如き誓約をさせた。

記 請 文

一、唐人阿蘭陀人方より私共呼び申され候傍内密を頼まるゝ書簡の取り次ぎ又は金銀の取次ぎ曾て仕間敷候こと。

一、唐人阿蘭陀人方より揚銭のための価の金銀は申すに及ばず

端物の類遣わし候共、持ち出し申す間敷候たとい貰い申候共、一寸の切れにても隠し置き懷中仕間敷候こと。

一、出島、唐人屋敷へ参り候節、風呂敷包、櫛箱の内へ御法度の品々を隠し置き出入仕間敷候こと。

一、唐人、蘭人へ参り候節、日本人の儀尋ね候共、一言の沙汰仕間敷、又異国の咄承り

申間敷候こと。

一、唐人蘭人に日本人方より内密の儀頼みかけ候はば隠し置かず、各方へ如何様の筋にても早刻申出づべ候こと。

かくの如く誓約した後、禿、遣手を伴うて居留地に入り、規定の日数を経て後、交代するのである。されど幕府は外人との性的関係以外の事項には、娼婦に対して厳密なる干渉を加え、国内の事情を外人に語つたり、或は外国の話の聴いたりするのは勿論、禁制品の譲り渡し、国秘の暴露を禁じ、また外人に密偵の疑いのある場合には早速届け出すべきことを命令した。

幕府の禁制品、所謂法度品なるものは、金銀（但し一定の額を規定す）金銀の細工物、金物、具、武者絵武、硫黄、塩硝、城廓に紛わしい絵、春画等の類で、一切外人に譲渡し或は売却するを厳禁し、また標価を受取る時にも現金の代りに銀札を以てせしめ、予じめ遊廓に備え置きたる嫖客の名を列記せる帳簿と共に長崎の会所に提出せしめて代金の支払を受けさせるようにした。また外人より物品を貰い受けることも禁ぜられたが、併し娼婦には甘言巧辞を弄して種々の物品を請求し、密かに懷中して帰り、廓に持ち出す者も多い

ので、居留地の門口には改所を設けて日夜番人を置き、探り番と云う者が出入のものを糺してその携帯品の有無を検査し、法度品の持ちこみ、又は外人よりの貰い品の持ち出しを防いだ。

その検査法は普通は一応胸部を叩いてみるので、物品を隠匿するものは大抵顔色を変じたということである。また娼婦に限りて疑わしい時には、その臀部を叩くこともあり、此様な方法によつて居留地出入の娼婦を検査し若し物品を隠匿したことの発覚した時には之を没収し以後出入を禁ずる規定になつていた。正徳五年の布令の中に

遊女の出入相改め候儀、大門の内にて吟味仕り、能き場所一所に集め置き遊女、禿、遣手共に念を入れて相改め申すべく候。右相改候旨の趣、第一は唐人よりの書附又は日本人の書物、第二は遊女、禿遣手ども懷中の品、或は皮籠包物の内、大小に不限、箱類すべて是等の内に金銀有無の儀、念を入れて相改め、その他、唐金銀、唐人より貰い候由にて所持候はこの訳を糺し、唐人より呉れ候段、紛れなきに於てはその遊女に取らせ可申候条有り体に申し出すべく、すべて出入幾度

なりとも相改め候次第同様たるべし云々此の如く、外人より貰い物を受くることを禁止しても、元来娼婦が好んで居留地に入り込むのは珍奇高価なる貰い物を獲得したいが為である故、種々の手段を構じて検査官の眼を胡麻化し、密かに貰い物を持ち帰つたものである。

就中、我国の貨幣は外人の最も所望するものであるから、娼婦はその依託を受けて衣服の裡に縫いこみ、それを居留地内に持ち込んで外人に与え、その代償として織物などを貰い受け、それを衣服や帯の類に仕立て、着用して出でたようなことが尠くない。

されば幾枚となく衣服を重ねて門を出たことなどは殆ど普通となつて、衣服として着用した場合には、幾枚にても探番の咎むる処とならなかつたので、居留地内に滞留する間に、外人より貰い受けた織物類を悉く衣服に仕立て、身に付け、廓内に帰つて後、再び之を解いたと云う。

併し、外人よりの貰物には固より織物に限らず、毛氈、真綿、砂糖等のような物もあつた。貰物を隠匿したことが発覚すれば、その物品を没収し且つ出入を禁止する規定であるが併しそれすら往々赦免せられて内密で事が済

み、公然の沙汰とならなかつたことも稀でなかつた。そのみならず賈い物品目を書きしるして許可さえ得れば、引渡さるゝような寛大の処置にあつた者さえある。

公娼以外の婦人は一切居留地に出入することを嚴禁されていたが、併し珍奇な賈い物の欲しさに、町家の子女が娼婦に紛れて入り込んだことも稀でなかつた。シーボルトの妻となつた楠本たきの如き

も表面は娼婦として出島に入り、シーボルトに侍したのである。同棲四年、おいねという一女児を産んだ。その血統はなお今日まで連続している。

娼婦の妊娠した場合

には左記の如き規定となつていた。(正徳五年の布令)

唐人の子を懷妊し候遊女有之候わば懷妊のうちなりとも、その子出生の節なりとも、之を申し出づべし。唐人の在留中、困(居留地のこと)に於て出生し候子は、唐人在留中、其処にて養育し候儀、父唐人の勝手次第たるべく候。父唐人帰帆以後出生し候わば差図の



上、唐人へ申し聞えべく候。且つ又父唐人の在留中、出生し候子、在留中は養育候とも、帰帆の後、その母に預り置候ては、その母養育なるべからず、然れば帰帆の後、養育のことは、在留中、父唐人と議定可仕儀勿論に候。懷妊の内、父唐人帰帆すれば出生已後の儀、議定可仕儀、これ亦同前に候、惣じて此儀苦しからざる事につき、向後有体に可申出候。

但し唐人の子を本国に連れ行き度き由願ひ候共、其段は令停止候事。右は唐人屋敷に關する布令であるが、出島の阿蘭陀屋敷に對しても矢張り同様であつた。外人の胤を宿した場合には、其筋に届け出

でしめ産兒の養育のことに就ては相手の外人と協議の上、自由に決定しても差支なきことになつていたが、併し普通の慣習としては、娼婦の妊娠した時は、一生涯の養育料として母子二人前の金額を外人に請求したものである。

されば貧家の娘で娼婦となり外人に馴染んで偶々妊娠したならば、一生涯徒手遊食して

ゆけるだけの金子を請求し得られるのであるから、外人の胤を宿することは公娼の身に取つては思ひも寄らぬ成功であつて、決して恥辱でなかつた。

幕末時代、横浜の娼婦某は、米人の嫖客を拒絶して「露をだに厭う大和の女郎花、降るアメリカに袖は濡らさじ」と詠んだ上、自殺したと云う壮烈な挿話もあるが、之に反して長崎の娼婦は、自ら好んで外人に肉を売り、且つ妊娠という万一の機件を期していたのである。加うるに、外船入港の風聞のある毎に長崎市の景氣は俄かに活動したもので、その所謂景氣なるものは、主に中流以下の社会の状況如何によつて左右せられるのであるから、是等の社会が如何に外船の出入と密接の關係を持っていたかを知り得られる。

長崎の繁昌を以て娼婦を始め日雇人等の物品の密売買に歸した人のあるのも蓋し故なきに非ずである。そして、娼婦の妊娠すれば、母子二人の一生涯の養育料を請求することが出来るのであるから、彼等の中には、外人の子と詐つて不正の金を貪ぼつたものもあり、また妓楼は、外人の遊客によつて多大の利益を獲たので、当時唯一の開港場たりし長崎市は、輕佻淫靡の空氣に包まれていたのであ



変の字問答

浮家鷹三

るが、併し娼婦と外人との間にも相思相愛の中となつて情死した者も稀にあつた。
元明元年、支那の商人と丸山の遊女との心中事件は世に珍らしい出来事と思われたと見

えて、彼等の辞世の書きつけが今なお伝わっている。

南京 蘇州人 陳 仁 舎(二十二歳)
欲語紅淚滿綿蕪。粉黛明鏡更堪憐。

千年愁夢一時尽。共為北邙山上烟。
吾妻屋 れんさん(十九歳)
降りまさる涙の雨のこがらしも
今日を限りの言の葉草に

(一)

「旦那ツねえ旦那、あッしの様なこんなしがねえ野郎が、旦那の様な御人^{じやうてい}体の、しかも一面識もねえお方に、いきなり話かけるてえのは誠にどうも御無礼さんとは存じやすが、まあ昔から袖すり合うも何とかツてえ事もありまさア。それに、こちとら酔つておりやすんでして……まア御勘弁なすツておくんなせ

えよ」

そういい乍ら、私の傍にニジリ寄ツて来て話かけたのは、先程からも大分強烈なチュウをきこしめて、私ならとツくの昔にクタククになつてしまつてゐる筈のところだが、この男余程強いとみえて、まだ呂烈も狂わぬしッかりしたところのある、歳頃なら、四十才前後とみえる汚い服装の、一見労働者風の男であつた。

ところで、私は身装こそは一寸小綺麗ではあつたが、然し別にその「旦那」とも「御人」といふとも云われる程の、身分でもなんでもなかつたのであつた。

私は、随分と永い間の病院生活に、もう、クサ／＼してしまつていて、実のところ病院に知れると一寸面倒な事に成るかも知れないのだが、この夜も夕食が終つてからは、もう検温も無く誰も来ない、いわば鬼の居ぬ間の洗濯で、明朝七時の検温迄の可成永い時間の秋の無聊を慰めんものと、病院をソツと抜け出て、私と同じ大阪人だといふ此処のお女将さんの経営しているバラツクの一杯飲屋で、おでんをつつき、舐める様にチビリ／＼とやり乍ら、時間を潰していたのであつた。

それでこの男が突然に話かけて来たのにもさしてウルサイとも思わなかつたし、それに気のせいかも知れないが、この男は身装は汚く言葉もぞんざいだが、どこか知らず世の波風に揉まれて来た苦勞人で、酔いも甘いも噛み分けた一種の物識肌の風貌がある／＼とそう思われもしたし、それと又私は近頃退屈な病院生活のつれづれに、或風俗雑誌の原稿を綴つてみたい念願に駆られつゝある折でもあつたので、ひよつとこの男から、また何かの

資料を得られぬものでない予感もした。そこで、……

「いよう、大將中々いい御氣遣ですわね。どうです。まア一杯いきましよう」

とそうすかさず話を受ける様にして、お女将に一寸眼配せすると、お女将は心得て、別のコップに満々と又チュウを注いで彼の前に差出した。

「へへへ……こいつア旦那。どうも恐れ入ります。なアにね、あつしア何もこんな事をしで頂こうてえ了見で、旦那にお話しかけた訳じやアねえんでしてサ、困りやすよ。こいつア」

彼は、そう口では一応辞退をしておきながら、しかし余程好きな道とみえて、もうそのコップのチュウを相好を崩して一口呑み、いかにも「甘露」といふ風に、左掌で己が額をポンと一つ叩いてコップを下に置くと、さて「という様に軀を起して一寸胸を張り、両手を組んで半ば立てた膝のその脛のあたりに載せて、そしておもむろに語り出すのであつた。

「太平洋戦争——、とかいうんでしたね。——あいつに敗けて戦争が終つてやれ有難やと欣んだのも束の間、それア成程空襲の心配なん

ざア無くなりやしたが、あつしのいうのアその事じやアねえんでさ。というのは、何せ終戦からこつち永い間無理矢理に閉じ込められたのも同然の、何といつたッけそうだ——自由。

その自由でえ奴がもうまるで、喉を切つた様に一遍に飛出して来やがったのはまアいゝとしても、そいつを又妙な具合に穿き違えやがった有象無象のお蔭で、こちらみてえに永年手塩にかけて育て上げた倅や娘迄、親のいう事を聴かねえのが当り前の様に言やがつて、まるで犬か猫みてえに、誰彼なしに相手構わず好きでさえありア追ッかけ廻しやがるし、嬢アの奴アまた嬢アの奴で、男女同権／＼てな舌を噛む様な事を覚えて来やがッて、こちらにだッてもう昔の様なサーピスも一向にしやがらねえ。その癖その嬢アの奴を思いッ切りふん縛ッてやツた時なんざアへへもう泣いて欣びやがッてさ、全く「態ア見やがれ」ッて奴でさ。まア何にしたッて、アチャラさんならいざ知らず、こちとら日本の国じや女は男の下／＼とこう決ッておりまさら、——ねえ旦那——。」

こうそこ迄を一気にまくし立てた彼は、一寸私の顔を覗き込む様にして、賛意を求める素振りを示し、そこで又思い出した様に急い

でさツきの残りの、チュウウの入ったヨツプを唇に持つて行くのだッた。

私は、彼が話をそこ迄喋ッている間を、相変らず悠然とブドウ酒を舐めたり、おでんをつゝいたりし乍ら、聴くともなくその辯話の急所々々を掴むことを忘れなかつたのだが、いま彼が一気に話したその言葉の中に、

「嫌アの奴を、思いッ切りふん縛ッてやツた時なんざアへへもう泣いて欣びやがッて」のその一条に、はッと思ひ当る節があつた「ははアこの男。案外変の字に」通ッじやアないのかな——」とそう思つたのであつた。

そこで私は、彼の話をより一層に引出すべく、

「ほほウ小父さん中々乙な事を知ツているじやありませんか。その縛ッたというところ、泣いて欣んだというところ……。」

と水を向けてみた。縛ッたというのは、泣いて欣んだというのは自分の女房の事を言ツているのだから、ひよツと、この親父怒るかも知れない。とも思つて警戒しながら、それで言葉つきも少し改めてみたのであつた。

と案外。

「おやッ旦那ッ。そいじやア旦那あの手を御存じなんですか。こいつア面白えーヤ」

彼はいかにも話中変のある相手に出会したといつた欣びを面に現わして、そして、ではとばかり話のあとを續けて行くのであつた。

(二)

さて。ここで私は「永い間の病院生活をしている」と言ツた私のその病状に就て、且つまた彼と出会したブラック建のおでん屋に就ていさゝか述べておこうと思う。

私の現在籍を置くその職業は、北九州のこの土地で鉱員生活を送ッており今年四十三才である。

永年住馴れた大阪を戦災で焼出され、終戦翌年の春に今のこの炭鉱に来てしまつたのであつた。

あれから丁度六年目の今年。夏の始め頃から「神経痛兼脚氣」という病名で二ヶ月程休養していたが、一向にはかばかしく快方に向かわぬばかりか、何だか妙な担当医も首を捻る様な症状を呈しつゝあつた。

私はこんなところ（其処は支部である）で愚図々々していて、いつ迄もかかツたら、毎月の保険給附金ではとても家族諸共食ッて行けそうにないと思ひ、少しも早く癒さねばと今度は現在入院しているこの本部の病院に

来て診察を乞うた結果。「痙攣性脊髄痙攣」という途方もない難しい病名で入院加療を、要する事になり、他人見には何ともない様に見えるが私自身は下腹が張ッて不快感を覚え腰や脚が重くて歩行が困難。しかも果してどの程度迄癒ッて全快と言えるかが判らない」という誠に心細い状態のまゝ夏が過ぎ秋も深まッて猶入院生活が続き退屈しきつて、そして先程からの仕儀であつたのである。

そしてまた、ブラック建のこのおでん屋へは、此処のお女将が私と同じ大阪人である事に特に親しみを感じて、もう兩三度（内緒だが）来ていて顔馴染にもなッており、このお女将が寡婦であり十才になる娘と二人限りで近郊の露路裏に間借生活を営んでいて、ブラックのこの店へは夕方から出張して来て、商売だけに使つてゐるという事等總べてを知ツていたのであつた。

話が十分横道に外れてゐたが、では先程からの男の語る話に移りましょう。

「旦那あッシアね、自分でいうのも可笑なもんだが、今でこそこんなしがねえ日雇人夫に成下ッておりやすが、これでも昔は一と花咲かせた事もありやすんで、まア学校の方も中学卒業と迄は行きませんでした。が、たしか

二年の中途位迄はやりまして、おツと妙なところ履歴書みてえになりやがった。そんなこたアどうでもいいんで……ええと——あッしアね旦那、若い時分からどういふものか綺麗な女のふん縛られた姿ッてえものに何だかこう堪らねえ魅力ッてえ奴を感じましてねえ。

いえ若い時分に実地に女をふん縛ッて見た事なんざア一度もねえんですが、まア絵ですねえ。ホラ——あの小説本の中の挿絵だとか口絵だとか、それに雑誌の中にもそんな絵があります。あッしアそういう挿絵だとか口絵だとか、それにあの頃の活動写真。

なアに無声映画の事でさア、その映画のスタイルの中で、そういう女の縛られている場面のものが見付かりますてえと、何がなんでもそいつらが欲しくて欲しくて堪らねえ……そいでそいつらを手に入れる為にヤア随分と馬鹿な錢も使いやして、蒐めた絵や写真があッたし秘密にしていた箱の中にもう一杯になる程ありやしてねえ……。いえ今は一枚もねえんでさ。みんな空襲で焼けッちまいましたよ。全く戦争ッて奴ア恨めしいもんでさ。……あッしアもうすッかり力を落しやしたが、しかし又考えてみるてえと、独り者の時分なら兎も角もり嬢アや子供を持ッてい乍らいつ

迄もそんな妙ちきりんな物に凝ッているのもあんまり感心したもんでもねえ。こいつア神様があッしの為を思ッて焼いておくんなすッたんだと、まアそれでも思ッて諦めておりやしたんですが、それがねえ旦那。旦那もこういう話にのッて来なさるからにやアその道の事ア御存じだろうと思いやすが、近頃は又「責絵」というんですッてねえあゝいう絵の事をその「責絵」で奴が盛んに世の中に現われて来やがッて、お蔭でこちとらもうすッかり止めていたアノ癖つまり変の虫でさア。そいつが又出て来やがッて、そいでどッちかと言やア昔のよりもずッとエゲツナイそんな絵や写真を、もう一度蒐め直してみてやろうとそう思ッたんでさア。ところが旦那。ここんところ奇妙なんできて、あッしやア自分で自分のその心理とかいう奴が判らねえ様になッて来やがッたんでさア。——

というなア、何せ近頃のそんなのは昔の様に小説や講談の文句に合す為に出来上ッた絵だとか写真だとかではなくッて「女体苦痛美の極致」だとか「愛と緊縛美」でな妙な理屈で、縛られた女の姿態「てえものを専門的に画や写真に撮る様になッたんだから敵わねえ。でほんと言やアいま時のものゝ方が昔の

よりウンと素晴らしい筈なんだが、それがどうもねえ、あッしやアそんな素晴らしいのを手に入れて眺めてみても、もう昔の若い頃の様なあゝいう昂奮を覚えねえ。尤も街に出て本屋を見て歩いて、こちとらに始めての場面や角度の違う「責絵」が見付かッた時にやア、矢ッ張り錢が無くッても何とかそいつを早く我物にして、悠然と眺めてみたい衝動に駆られやして、無理算段の拳句にやッとの思いで手に入れてみるんだが、さて手に入れて我物になッたとたん、もう直きに飽きがきて、
「あゝ勿体ない。こんなものを買わなくッてもよかつた」

てえ気持になるんでさア。昔なら一度手に入れたもなア絶対に離しッこは無え。寢床の中まで持ッて這入ッてそいつを眺め乍ら、楽しんだものなんだつたが、どうも判らねえや矢ッ張り歳をとッた加減で、あすこんところ衰えやがッたんでしようかねえ、旦那？——

こゝでまた彼は一息という様にコップを執り上げたが、もうそのコップは空になッていた。

私は、話が益々佳境に入ッて来るのを嬉しく思い乍ら、そこですかさず又お女将を促し



て彼のその空になったコップに新しくチュウ
ーを満たしてやり、ついでに私のブドウ酒も
もう一杯奮発する事にしたのであった。

(三)

「なんや知りまへんけど、けったいな話でん
なア」

そう言ッたお女将は、笑おうか笑うまいか
といった妙な表情をしている様に私にはみえ
たので、私は一寸困ッた気がしたのであッた
というのは、何んせ彼と私の二人の話が
いわばセックスの極致(大層な言方だが)と

もいふべき「変の字問答」になりつゝあッた
のであるから、寡婦とはいえ異性の未だ卅才
そこ〳〵のお女将には、余り聴かしたくない
話である。といッてもお女将は此処の持主で
ある。嫌なら私達が此処を出るより仕方がな
いのだし、えーいもういッその事四辺構わず
話を続けるか間誤々々して話に間を置過
ぎては、何だか妙に気が去んでしまつて糸口
がなくなる事は判り切ッている。はて、どう
したものか。

するとこの時、何と倅な事が起ッた。
私はお女将が妙な表情をしているのは、私

達の話がいやらしいので、―それで、―と思
ッていたのだが、実はそうではなかつたので
あッた。

それは、次にお女将が吾々の前に申出た言
葉に依ッて判ッた事なのである。

「あのう―お客さん放ッついてえらい申訳
おまへんけど、実はわての娘が今日は風邪引
いて熱出して、家で寝させておますねん。そ
れで、いッそ今夜は休もかしらんおもてまし
てんけど、そうしてられん事情がおまして、
まア何なら早仕舞いでもする積りで店あけま
したんでんねん。

いえ。何も、もう閉めるゆうねやあれしま
へん。どうぞ御ゆッくりしとくれやす。

そいでお頼みちゆうのんほかやおまへんね
んけど、わてこれから一寸家いんで様子覗い
てきとおますねん。子供の事でんがな。つい
てはどうせもう今夜の様な寂しい晩でッさか
い、あんた方の外にあとからお客さん来やは
れへんやろ思いますけど、もし来やはッたら
もうヤマヤとでもいうて、そこ何とかえゝよ
うに頼みます。どうでッしやろよろしゅおま
ッしやろか」

そう言ッてお女将は吾々二人の顔を見比べ
た。

それで判った。お女将が妙な表情をしていたのは、それは子供の事が気に掛つての事であつたのらしい。

私は内心「しめしめ」と思つたのであつたが、そんな事は色にも出さずに、

「あゝいゝともお女将さん。そら心配だつしやる。早へ行つて上げなさい。若しお客さんがあつたら又あつた時の様に、どないでも都合ようやツときまひよ。大丈夫委しといてゆつくり行ツといなさい。」

とそう突嗟に昔の大坂弁を思い出したまでゴツチャに使つて答えたのであつた。

「そんならどうぞお願いしときます。ほんまに済みまへん。その代りおでん良かつたらどれなと勝手に取つて食べとくれやす。——一寸いて来ます」

言い終ると、お女将はアタフタと表に飛出して行つてしまつた。

そこで後に残つたのは、勿論私と彼の二人きりであつた。

この間。可成な刻が経つた様でも、実際のところは六、七分位なものであつたらうか。

私は、シガレットの入つたケースを彼の前に押遣り乍ら、

「さアこれで、誰に遠慮もなしにあんたの話

を聴かして貰う事が出来る。ところで小父さんあんたのお内儀さん、あんたと大分歳の違ふ若い人らしいと見えますが、どうです当りませんか」

と言つてみた。

「へえ旦那ツ。どうしてそれが判りやしたんで？驚いちやツたなどうも、正に御明答。そのものズバリでさア。いえね、あんさんの仰有る通りいかにもあツしの嬢アあツしと、十五も歳が違ひますア。若けえんで、なアに後妻でさア。あツしやアこれで今丁度四十なんですて、嬢アの奴が当年とつて二十五才てえ事になりやすんで——おツと、またこんなところへ話が筋違つて来ちやアいけねえ。さツきの話の続きといきましようぜ。」

ところで旦那。——その小父さんてえ呼方ア止めておくんなせえ。どうもこちとら江戸ツ子のせいにか大將ツと威勢よくやつて貰わねえと気がのらねえ。で旦那。どうかそのお積りでやつておくんなせえ」

私は何だか撥ぐツたい気持ちに駆られた。

「いゝじやありませんか。あんただつて私の事を旦那なんて呼ぶんだから。——それじゃこうしましょう。お互いにどちらからか大將で気持よくさツくばらんに行こうじ

やありませんか、どうです。」

すると、——

「いや。そうはいけねえ。あツしは旦那大將でいゝが、旦那を旦那大將で呼ぶ訳にやアいけねえ。その訳は——旦那ツ——。一ツあツしも旦那のお身分てえものを言い当てゝ見ましようか。なアに、これでも昔は随分と道楽をややして、三文易者の真似事迄やつてみた事があるんでさア。いゝですか。当てますよ。こ、おつと——」

どうやらこのへんで、彼も大分酔が廻つてきたものらしい。

しかし、だからといつて自分の言に責任が持てなくなる程酔つていとも思えない。

たしかに相当な酒豪には違ひない。

彼は私の顔を一寸睨む様に見ていたが、

「うん——。そうだ。判りやした。言いますよと——。旦那アいま何もしていなさらねえ

そいで——、といゝですか。何もしていねえ——。で——と、……判つた。判りやした。

旦那ア何かこう小説の原稿かなんかを書いていなさるんじやアねえんですかい。どうです

い——。」

私は「あツ」と驚いた。

素より私は小説家でも何でもなし。然し、

原稿を綴つてみたいと念願している事には間違なく、現に今も、この男から何かの資料を引出すべく考えているのではなかつたのか？

何にもしていない、遊んでいると見たのは、それはもう私が病氣になつてから、四ヶ月余りも仕事をしていない為、軀全体が清潔であり特に手などは女の様に柔かく美しかつたのだから——それはもう彼でなく共言い当てたかも知れないのだが然し、小説の原稿云々に至つては、あながちまぐれ当りだとは思えぬ節があつた

私は幾分気味悪く思つた。と同時にまた、生れて始めてしかも初対面の人から、小説家の端くれらしく見られた事の嬉しさに、半ばいさゝか得意めいた気持にもなつて、思わず

「いや恐れ入つた。御明答そのものズバリ」とやつてしまつた。

彼はしかし大いに欣んだ。

「へへえ——。当りましたかい。こいつアどうも、あつしの三文易学も満更捨てたもんでもねえと見えませう。それじゃ旦那は、旦那でなくて先生じゃアねえか。こいつアいよいよ面白くなつて来やがつた。ようし、それじやこちとらも一つその積りで思ふ存分話を聴

いてお貰い申して、判らねえところをドシ／＼御教授にあずかるツてえ事にしやしよう」

私は「オヤオヤこれは大変な事になつてしまつた」と思つたが、時すでに遅く、彼は否応なしに私を小説家の先生に祭り上げて、さツきの話の続きをドシドシ進め、従つて私は時折その話の半ばで彼の質問に答えてやらなければならぬ言わば苦境の羽目に立至つて了つたのであつた。

(四)

「えーツと、話は何処までゝしたツけ。おツとそうだ。〃いくら近頃の素晴らしい責絵を見ても、昔の様に昂奮しなくなつた〃。——と旦那いや先生。こゝんところは一体どういふもんなんでしょうかねえ矢ツ張りあつしの〃アレ〃が衰えやがつたんでしうか？」

と早くも質問第一矢である。私も何とか言わなくてはならなくなつた。

然し私も是位の事に屁古垂れるようなら始めツから「奇」を好みはしない。「何の是しき」——そう思つて、私は自分の思つてゐる丈の理論を卒直に述べる事に依つて、彼への答に代え様と思つた。そこで——

「それやアね、つまりあんたの精力そのものが、若い頃よりも衰えたという事も言えぬものではないが然し、男四十と云えば男盛りと言つてまだまだ是からだ。そこで私はこう言い度い。いゝですか。あんたは先程から〃アノ手〃つまり〃変の字〃が可成判つてゐる様な話振りだが、その——素晴らしい責絵を見ても昔の若い頃の様に昂奮しなくなつた。という事は即ちあんたは意識だけの状態、肉体そのものは常態で満足してゐる。つまり真の変態性慾者ではないという事になるんです何故なればですね、あんたは若い頃に責絵を見てオナニーをやつたと言われるけれどもその時が、全然異性という者の味を知らなかつた時だとするならば、それは変態性慾ではあつても先ず仕方のない極めて輕微なものでしょう。

内儀さんを持つて、内儀さんの味を知り、〃責絵とオナニー〃の関係が断ち切れたら、これはもう変態ではなく立派に常態に立還れた訳なんです。

内儀さんを満足させる事も出来ず、又自分でも満足せずに、尙変らず責絵を見てオナニーをやらなければ性的満足が得られないとするならば、それが純然たる変態性慾であるの

です。

「内儀さんを満足させる為に精力を貯わえて置かなければならない。」「そう思う意識が自然責絵を見ても昂奮の度を薄めているか、又事実内儀さんに力を提供した為に責絵に対する昂奮度が薄れて来ているのだと思われるのが、あなたの場合じゃないですか？」

実は、あなたが話の始めツ方に、内儀さんが男女同権論を覚えた為に、あなたに対するサーピスが悪くなつた様に言われたが、私はもうその時にあなたと内儀さんの歳の差。という事に考えついていたのです。

どうして？つてそれはねえ、人間男と女の性的対象は決して地位や金銭の為に上下するものではない。という事です。

少し難しい言方だが、あなたなら判るでしょう。男対女の性的原理は、女は絶対男に屈服させられる事を以て欣びとしている筈なのです。あなたに対するサーピスの悪くなつた内儀さんも、決して男女同権論の故ではなくて、寧ろあなたの愛で物足りなさを感じている、つまりあなたより精力の強い女だという事に成りませんか。それに又あなたには「嬢アの奴を思いッ切りふん縛ッてやつたら泣いて欣びやがッて」と言われたが、そのへ

んのアヤの判るあなたにして、真逆四十近い軀に皺の出た内儀さんを、そんな風にして責めて見たところで感じが出る筈は無い。とすると是はあなたとは大分歳の違うつまりずツと若い内儀さんだと思ツた。それでさっきの様に「あなたのお内儀さんは、あなたと大分歳の違う若い人じゃないかと言ッたんです。どうです。このへんのところで話の辻褄が合いませんかねえ……」

そう云ツて私は新しくシガレットに火をつけた。

「な……程。いや恐れ入りやした。さすが小説屋の先生だけのこたアありますア、いかにも仰有る通り、あッしやア未だ真の変態性慾たア言えねえ人間でさ。唯ねえ、あッしやア嬢アの奴との時にやア決ツて、責の場面を想像し乍らでねえと、大した満足を得られねえ事だけは事実なんですア。」

そうしますと、あッしの様なアつまり「想像的サジスミス」でえ事にでもなりやすすんで……？」

いや、彼も中々さる者である。

「いかにもあなたの言う通り、それは「想像的サジスミス」と言うのでしよう。……ところで、それではそれではその「責絵」に就て

未だ外に意見があるでしょう。又何時頃からお内儀さんを実地に縛る様に成ツたのか？という様な事も間もなく此処のお女将が帰ッて来るでしょうが、それ迄に一つ出来るだけ話してみてもいいませんか。私も知ッているだけの事は答えてみる積りですから……」

そう言つて又私は、彼から猶も話のタネを引出そうと努めた。すると……

「有難てえ。待ッてましたとところだ。なアにねえ先生。これからの話を聴いて貰わなくッちやア全く尻切れとんぼの蜂の巣でさア。」

彼は「そう来なくッちやア面白くねえとばかり又も續けて喋り出した。

「旦那——ジヤアねえ先生。あッしが自分の嬢アをふん縛ッたてえのは、実のところまだホンの一回ッ切りなんです、え？これから時々やるんだろうツて冗談じやアねえや然しねえ先生。その一回きりでもふん縛ッたてえのにやアまたそれ相当の理屈がありやしてねえまア聴いてお呉んなせえ。」

あッしやア思うんですア。あッしが今どきの、昔のよりエゲツナイ責絵を見ても、そう昂奮しなくなつたてえ事アさッき先生の仰有ツた、あッしの精力が昔より衰えたツてえ事

と嬢アの奴とまともに精力を使ッてしまふからだ。という事も確かにありやすが、それともう一つの理由は、あッしの「これなら」
 と思うほんとに気に入った絵なり写真が今もッて無えといふ事にあるんです。おかしい？——と仰有るんですかい。無理もねえ事でさ
 今どきの様にあれだけ虐たらしく縛り上げたので、未だ気に入らねえといやア一体どうしたら気に入るんだ、と言いだくもなりまさア判ッてまさア、実はそれやア一体どこの加減だろうかと、あッしも随分いろいろと考えて見たんです。まア然しこんな事を言ッてお
 りやすと、何時迄経ッても一処をぐる／＼廻ッている様で一向話が進みやせんから、先を言いやすが、一体小説や雑誌に出ている挿画てえものアちツとも理屈に合いやせんねえ。
 いえ。絵そのものが下手だというんじやアねえんでさ、文章との理屈が合わねえ。というんでさ。例令ば——です。野村胡堂先生の小説の中で、そんな女の縛られる場面になりやすと、有合う扱帯や細紐で滅茶滅茶に縛り上げた。とか「犇々と荒縄で雁字搦目に縛り上げた。」という風に文章の上ではなッておりやすが、その挿絵の方はどうです。ちツとも滅茶々にやア縛られていねえ。甚

しい時にやア文章の方で「荒縄」だと言ッて
 いるのに絵の方じやア扱帯になッていたり、
 「扱帯」だと言ッていのに「荒縄」になッて
 いたりする事もありやすが、ありやア一体ど
 ういう訳でしょうかねえ。……

また角田喜久雄先生の時代小説の中じやア
 「肉も千切れる程縛り上げられて……」と言
 うのがよく出て来やすが、これなんぞにも大
 体絵の方じやアあんまり肉に喰入ッた風に描
 かれておりやせんねえ。

あッしやア絵画きじやありませんから、あ
 んまり豪相な事ア言われやせんが、女の、し
 かも若い女の肉体てえもなア柔いもんだ。捏
 きたての餅みてえな……というとなんまり大
 げさかも知れねえが、まアそんな柔いもんだ
 というんでさアそいつを縄や紐でふん縛ッた
 と成りやアもツと／＼皮肉に喰入る筈だ。そ
 いつが絵の方じやア……まあそう画けないの
 かも知りやせんが、まるでこう固い丸太ん棒
 か桶でも縛つた様に、縄や紐が軀の外廻りに
 なッていゝ事がよくあるんです。

尤も、こんな事言いやすと、「馬鹿野郎て
 めえみてえら変態野郎の氣に入る絵が画ける
 かッ」てんで、絵描きの先生方にでも見付か
 ヲたら、それこそどやし上げられるかも知れ

やせんが、まア言論は自由のこん日の事でさ
 ア。おツと、この自由は旦那い先生、はき
 違えじやねえんです。当り前の事を言ッて
 いるんですから仕方がありませんや。」

(五)

「あッしあねえ先生。小説や雑誌を読んでい
 て、その奇麗な女の縛られる場面になりやす
 と、もう何か胸がこうワクワクするんでさア
 それからその挿絵を見るんですが、それが先
 に言ッた様な具合で、文と画がツロクしてね
 えと、もう無性に落胆致しやして、時にやア
 腹を立てゝそこんところだけを引破ッちやう
 事もあるんです。一体どうしてそんな氣持
 になるんだか自分でもよく判らねえんで……
 それからねえ先生、あッしやア言い忘れて
 いやしたが、あッしの好きな責絵というの
 まア女の縛られたのばかりだという事ア判り
 切ッておりやしようが、それがこちとらにや
 アまだ／＼その上に、いろ／＼と難しい注文
 があるんです。どんな事かッて言いやすと
 ねえ、あッしやア女の縛られた絵とか写真
 だとか言ッても、それが皆後手に縛られたも
 のでなけりやア氣に入らねえんでさ。

純日本風の、つまり日本鬘を結ッた和服姿

の奇麗な女がさっき言ッた様な後手に、ほんとに縄や紐が柔かい肉体に喰入ッている様に見えるもので無きやア嫌なんでさア。

しかもその後手も、これが又ほんとに高手小手の言葉の意味を現わした、つまり腕をグツト背中の上迄捻じ上げて縛ッたのでなけりやア皆目魅力ッてえものは感じられねえ。

まだありやすよ。その縛り方。縄の掛方でさア。あッしやアねえ、女の縛られた姿態の魅力ッてえものアその豊かな乳房の上を緊くふん縛られているので無けれやアいけねえ。後手に縛るッてえ事に成ると、もう何でもかんでも高手小手と言葉を使いやすがしかしその高手小手と言うの、さっきも言ッた肘をぐツと上にあげたものでなけれやア理屈に合わねえ筈なんで……。

近頃の責絵にやア随分と物凄いのがありやすが、然し肝腎のこの高手小手でも無けれやア乳房も縛つてねえ。

両手をダラリと尻の上迄下げて縛ッてある様なア、まるで腰縄を打ツたみてえで、あッしなんぞア銭を呉れても持つてみよう気がしねえ。それでねえ先生。随分と七難しい注文を並べ立てやしたが、なアに煎じつめてみりやア別にそう難しい事じやアねえ。要は柔

い女の肉体を縛り上げてある様に実感の出たもので、後手の高手小手であッて、それから縛り縄や紐が一重や二重でなく、勘くとも四重巻位以上で、胸や乳房の上を緩まぬ様にガツチリと縛ッてある事。こういう事になるんでさア

ところが何でもない様なあッしのこの注文に当嵌るのが、近頃のそれにも一向に見当らねえんでさ。

なアに全然一枚も無えッて事もありやせんが、まア然し縄の掛け方が気に入りやア高手小手になッていねえ、その二ツが気に入ッて

も今度は日本風でなくパーマネットなんかジヤア一向に詰らねえし、ふん縛られているてえのに平気な顔をして居やがる。つまり表情ッてえものが成ッていねえ。もうどれもこれも是なら死ぬ迄持ッて居様でな気に入ッたのは未だに一枚も無えんでさア……。

もうあんまり気に入ッたのが無えんで、たッた一枚あッしが自分で構図を作ッて、絵描きさんを雇ッて画いて貰ッた事がありやすがねえ、いえそれがこいつも矢ッ張り駄目の中だッたんで……。もう往生しましたんでさア。その絵はどんな絵だ？てんですかい、え



ミ太郎

「言いやすがね、その絵は若い綺麗な女がもう一糸も纏わねえ真ッ裸で、播州皿屋敷のお菊の様に井戸の上に吊り下げられて居るところでさア。無論両手は後手に高手小手。足首から胸迄ぐる／＼巻にしてあるんですが、そいつがその矢張り氣に入らねえと言うのが、それさッき言いやした皮肉に喰入ッている感じが出ていねえんでさ。」

いえ、原画の方はあッしがチャンと一々繩の掛ツた箇所は肉を凹まして画いておいたんですが、それが出来上ツたのを見てえと、矢ッ張り又例の棒か桶を縛ツた見てえに、繩が体の外廻りになッているじやアありやせんか。……あッしやアもうガツカリしやしてねえ。どうしてあんな事に成るのかと、どうも不思議で堪らねえ。それでさッ先生。話がどうやら落に近ずきやしたが、あッしやアどうかして一度若い女の肉体を実地に縛ッて見て、そうしてあッしの注文通りのポーズが出るのか出ねえのかを、試してみようと思いついたんでして、それで一番手近かな嬢アの奴をでもふん縛ッてみようと折を覗ッていたんでさア。なアにこんな事アまともに嬢アの奴に相談したり頼んだり出来ッこはねえ。そう思いやしてねえ、それであッしア此頃その嬢アの

奴がいろ／＼あッしに口答えをしやがる。サッビスはしやがらねえ。それでまアそんな事をきッかけに、夫婦喧嘩に事寄せてとう／＼嬢アの奴を、麻縄で思い切りふん縛ッてみてやッたんでさア、えゝそりやアもう勿論高手小手の雁字搦目でさア。ところがですよ先生、そうしたら一体嬢アの奴がどんな事に成ッたと思ひなさいますい？。

実にどうも妙ちきりんな事になりやがッたもんで、いえこれが一番最初に話やしたアノ嬢アの奴が泣いて欣びやがッた。という処になるんでさア。

全くあッしやア驚きやしたよ。人間の性慾ッてものも、実に奇妙なもんですねえ。というのが、あッしに一遍ふん縛られやがッた嬢アの奴が、あれから急にサービスが良くなりやしてねえ。それやアもう昔よりもツと濃厚なんでさア。いえ決してのろけじやねえんでして、こちとら真剣に話していやすんで……え？ 倅や娘ですか、い、なアに彼奴等アもうとツくの昔に銘々いゝ相手を目付けやして、勝手にそツちの方へ片付きやしたよ。

何だかこう他人事の様に言やがるとお蔑すみかも知れやせんが、何せ先妻の子でして、今の嬢アとは義理の仲なんだし、それに例の

自由々々のはき違い時代でさア、まアあんまり子供ばかりを責められもしませんや。

おツとそんな事よりさッきの話でさ。嬢アの奴を実地にふん縛ッて見て、なアる程女の乳房ッてえものア柔い癖に弾力があッて、その乳房の上をふん縛ッて置いても、繩は直きに乳房から外れて胸の上にズレるか、乳の下へ抜けて落ちるがそうなりやアそれ丈繩目が弛むてな事がだん／＼判りやしたがしかし先生、何にしても若い女の乳房ッてものア一つのシヨリみた様なもんで、柔かい癖にコリ／＼として弾き返す力がある様で自由になりやせんねえ……全く。」

こゝ迄立て続けにまくし立てた彼は、さすがに疲れを覚えたらしく、もう残り少ないエツプのチュウウを、グツと一息に呑み乾して熱い息をフーッとして吐いた。

「成程ねえ。随分変ツた面白い、そして参考になる話を聴かして貰いました。それでは今度は私が代ッて、そのあんたの言ツた乳房の事、つまり柔い癖に弾力があッて、その為に縛ッても繩や紐が抜けてしまうという事です。ねえ。それに多少似た事で猿轡に就ての話がありますから、それを私が是からして聴かせましようか？」

私は「もう時間が無い」と思い乍らも、何か知らそう言わずには居れなかつた。

「ヘッー。有難てえ先生ッ。猿轡の話をして下さるんですかいッ。こいつアア何て有難てえ事に成りやがッたんだ。今夜ア正にあッしに執ッちやア「我が生涯の最良の夜」ッて奴でさ。是非一つお願いしまさア……。」

どうも今夜という晩は、どうしてこう巡り合せのいゝ晩なんだ。俺が一生の裡に一遍でもこの俺の氣持を聴いて貰つて語り合ひ。話

◎讀者通信◎

画帖有難うございました。楽しく拝見して居ります。八葉中一番よいと思ひましたのは、「かゞみ」です。構圖も着想も奇抜で末広な余韻を残している所、敬服の外ありません。只いただけないのは「蚊帳」です。テーマが悲惨すぎます。構圖は可、むしろ娘をさらつて来た方がドラマチックでしょう。盗賊なら妾宅へ入り、お妾さんと女中と云つた方が深味がありはしませんか。猿轡はかましたものより口を覆つたものゝ方が魅力を感じます。(東京K・N生)

御誌毎月興味深く拝見致してお

の判つて貰える人に会つてみてえと、どんなに心の内で願つていた事か知れやしねえ。今夜の様なこんな嬉しい夜は、もう一生の裡に二度とアあるめえ。先生是非一つその猿轡の話をお願い致しやす。」

そう頼まれるのを待つ迄もなく、私は猿轡に就ての自分の持つてゐる意見を、彼に向つて話そうとしたが丁度その時、自宅へ歸つて来たこの家の女将が立歸つて来た。

「えらい永い事済んまへんでした。お蔭でう

ちの娘、熱ひいて今ヤス／＼寝とります。ほんまに大きにすんまへん」

お女将が歸つて来た以上、最早私と彼の話は是迄にせねばなるまい。それに時間ももう可成り遅い、

私は彼と再会を約して、このブラック建の一杯飲屋をアトに表に出た。

空はくまなく晴れて、もう仲秋名月に近いのか月がまん円く冴えて照す中を、私は病院へ歸る道を静かに歩んで行つた。

ります。貴誌に御願ひしたい事は現代の責め場ばかり出ているようですが今度には時代物を御願ひします。特に徳川時代大奥の御殿女中の責め場等、甚だ魅力的だと思ひます。吉田御殿の千姫が腰元を緋のしごきで纏り上げ、いろいろ栲問にかける場面や振袖姿の腰元が高手小手に縛られ緋縮緬の湯文字を乱してエビ責にかけられる場面等中々悩ましいと思ひます。それから不義をした小姓を腰元達が捻じ伏せて緋のしごきで縛る場面等を描いたら素晴らしいではないですか。(神田生)

十一月号拝見、アブノーマル・

ラブライター一種の同性愛(それもちよつと世界でも類のない)文学であると思ひます。岡田様、続などどケチな事云わないで、どしどし書いて下さい、そして喜多さんの絵と共に一冊の単行本にまとめあげられたら、どんなに嬉しいだろうと思ひます。美しきお二方のために提案。これは編集子に「発狂文学者の研究」はよい参考になります。杉山様ありがとうございます。(東京A・A)

私は貴誌の愛読者の一人で女の責めに大変興味を持つてゐる者です他の雑誌にも色々な口絵が出ていますが、皆興味がなく、がつか

りして居りました処、はからずも貴誌を愛読してより、今迄の悩みは一べんにとんでしまいました。(安中次郎)

八十一月号を通じて十月号早川氏の「縛られた妻」に一番ひかれました。変質者たちに責められる妻の心理に加えて更に妻自身に語らせることによつて責めを眼前に髣髴とさせて恍惚境に入る夫の心理は構成の巧みさと適確な描写により本誌中最高の傑作と思ひます。かゝるユニークな作品の続篇を期待します。(津路美智夫)

火 淫

みだらび



松井 籟子

画・喜多 玲子

「あつ、奥様、私いたしますから……」

女中に声をかけられ、小百合夫人はひらいていた新聞のきれはしを無造作にまるめた。

出来るだけなんでもないように手の中へ丸めたが、その手がふるえているような気がした。そのまゝすつと立つて台所を出て行く、主人の後姿に

「相済みません、気がつきませんで……」

と、女中は詫びた。ものも言わない夫人が機嫌をそこねていると思つたのだ。

会社から帰えつた夫の雄作が、会社の下僚にもらつたのだと言つて、うづらの玉子を持つて帰えつて来た。紙包みのまゝ台所へ持つ

ていつて、女中に手渡そうとしたのだが、便所にでも入つていたのか、女中は呼んでも答えがなかった。主人は自分で紙包みをあけて中から小さくもう一度紙につゝんだ玉子を取り出してみた。そこまでは何の気もない動作だつた。ふと小さなうづらの玉子をくるんである雑誌のきれはらしい紙を見た瞬間夫人の顔にさつと紅をちらしたような、異様なショックがみうけられた。主人は無意識にあたりを見廻すと、手の中で紙をひろげ、目に近ずけた。近眼のくせに眼鏡をかけない夫人は、よくものを見ようと思つと、自然、目に近ずけなければならなかつた。しばらくその紙を見ていた夫人の唇からは、洩れようとしてのでしまつて吐息が、生つばを集め、息をすることさえ普通に出来ないようになった。

破られた雑誌の頁に、写真がのつていたのだ。随分不鮮明な写真だつた。それだけに小百合夫人はなお一そう目に近ずけた。それは和服姿の男が、裸体にして縛られた女を写生している写真だつた。

男は後向きで、わずかにスケッチブックに筆をはしらせている手許が見えているだけだったが、女の方は島田に結つた髪が、がつくりと片方にくずれ、二の腕をしめあげた縄の為か、肩が瘤のようにもり上つて、息するのも苦しそうに目を伏せていた。その胸にも、膝をくずして横座りにしている腿にも縄が喰い入り、足首には鎖がかけられているようだった。

小百合夫人はその縛られた女の、あらわな胸に、黒く墨で一の字を書いたような線があるのを写真のきずなのか、それとも、鞭で打たれた痕なのかと、見つめている所を「奥様……」と女中に声をかけられたのだ。

そのまゝ丸めた紙を帯の間にはさんで茶の間へ戻つた。夫人はもう一度その写真が見たかつたのだ。

夫は小間使いに手伝わせて、和服に着かえていたが

「小百合さん一服どうですか？」

と、夫人に言つた。妻をさん付けによぶのは、遠慮があるわけではなく、家風とも、境遇ともいえるものだった。

今、夫婦のいる居間は広い芝生に向いているが、その洋風の庭がいつの間にか日本風の庭のつくりに変化した奥に、しやれた茶室が建つていた。気が向くと茶をたてる主人の為に、一年中松風の音をたやさないのも家風だったし、広い応接間からサンルームまであけ放して、時折、カクテルパーティーを催すのも家風といえたい。

戦争前には女中が九人いた。今は三人に減つてゐる。それでも小百合夫人が新聞紙や古雑誌のきれはしてくるんだようなものを手にするのは稀なことだった。デパートも商店も美しい包装紙を競争するようになった今日此の頃なのだ。

小百合夫人は帯の間の紙が気になつてならない。早く夜更けて、自分ひとりの寝室で、ゆつくりひろげてみたいとたのしみに行き、そのだ。そしてどこか心のはしで、そんなはしたない行為をたのしみに行き、自分が清らかな茶室に入ると、茶室が汚れるような気もして、深く沈んでいく思いがした。

二

夫婦の寝室は別になつていた。

夫と妻は自分の欲望をオルゴールの煙草入れで伝え合うのが常だった。夜更けの窓を伝つて、オルゴールのかすかな音色がひびいてくる。ああ、夫が眠れないのだなあと思ふ。夫人は思う。しばらくすると夫人の部屋の外で

「小百合さん、君の所に煙草ありませんか？」

という夫の声がある。オルゴールの音は煙草入をあけたが、煙草がなかつたという言いわけになつたし、夫人にその気持があれば「煙草おありになつて？」

と、聞きに行くことも出来る。

召使い達の部屋は遠かつたから、時折風につてオルゴールの音がひびいても、主人のどちらかが、おそく読書でもして、煙草入れをあけたのだらうと思うだけだった。

雨の日の午後など、夫人はひとり部屋にこもつていて、本当に煙草が欲しくてあけた煙草入れから、一種哀調をおびたオルゴールの音がひびき出すと、ふと夜のいとなみに心が行き、我にもなく顔を赤らめることがあつた。今、小百合夫人は寝室の三面鏡の前で、寝る前の顔の手入れをしている。眉毛を櫛ブラシのような小さなブラ

シで百べん、さかさにこすり、又百べん撫でるようにこする。そしてオリブ油を塗つて寝ると、眉毛が美しくなるというのだ。

小百合夫人は無意識にブラシを動かしていたが、心は片手でひろげている、さつきの雑誌のきれはしに集注されていた。自分がそんな風に裸体で縛られて、体中をさか撫でにブラシでこすられたらどんなだろうと考える。夫人は両手にあつたブラシと紙片を下にのくと、鏡に向つて自分の胸をひろげて見た。電気スタンドが鏡面を明るく照らしてはいるものの、豊かな乳房の下に影が出来て、夫人の白いなめらかな肌は、夜の灯の下で妖しい香気を放つようだった。

小百合夫人はほつと深い吐息をはく。オルゴールの音がしのびやかに聞えていた。

夫の雄作は小百合夫人の裸体をさえ知らなかった。寝巻の細紐をといて、胸もとをあげるのさえ、こわごわしているような遠慮深い愛撫だった。獣のような愛し方があるということは、おそらく男の体の奥底で承知していたのではあろうが、お姫様のように育つた小百合夫人に対して、そんな態度に出たら、どんなに軽蔑されるかわからないと、雄作は思っていた。長いまつげをふるわせるようにして、小百合夫人が喜びにあえぐのさえ、彼には人形のような夫人の体がいためられる苦痛の声であるように思えてならないのだ。その小百合夫人の体の中に、いたずらつ子の小さな悪魔がいることを知つたら、どんなに驚くだろう。その小さな悪魔が体中を走り廻つてつかんでくれと叫んでいる。逃げ出さないように、荒縄でぐるぐる巻きにしめつけて、虫をつかみ殺すように、皮膚をとろきらわす振り上げて、指の間につかんだと思つたら、もうあばれないようにギョウツと爪をたてて、ひねりつぶしてもらいたい。

しかし、小百合夫人は夫の雄作には毛ほどもそうした肉体の奥の欲求をあらわにしたことはなかった。雑誌のはしにそんな写真がある以上、そんなことを書いた雑誌があるのだろうが、小百合夫人はそれを取りつけの本屋に頼むわけにはいかなかった。駅で電車を待ちながら、駅の本屋に並んでいるあくどい表紙の雑誌をバラバラとめくることさえ、小百合夫人には出来なかった。たまに歌舞伎の芝居で縛られた人が出ることがある。浅黄の囚衣に縄をかけられて、裸馬で引かれてくる「権上」の権八などを見た夜は、夫との営みの深い暗い奥で牡丹の花が露をふくんで開くような感じに自分ながらはつとすることもあつた。そうしたすべてを、ただ、はしたないと自分で自分をいまして来た小百合夫人は、今日偶然手に入つた雑誌の破いたはしくれが、麻薬のように気になつてならないのだ。鏡台のひき出しに鍵をかけて大切にしまつてみたが、そこにその写真が入っているということが、もうすでに麻薬で体がしびれるように小百合夫人の体をしびれさせて、押さえても、押さえても、小さないたずらつ子の悪魔があばれ出そうとさわいでならなくなつたのだ

三

あくる日小百合夫人は大阪へ出た。先ずデパートへ入つて、婦人服売場で自分のこのみから一番遠い型の緑色のセーターを買つた。その緑も単純な冴えた色で、夫人は「田舎の人にあげるので……」といいわけを言わなければ、それを売子に渡すのが恥しい程だったそれから履物の売場で赤いエナメルまがいの草履を買つた。それを持つて駅前有の料便所へ入つたのだ。化粧室がカーテンでしきられている。夫人は薄い合オーバーを脱ぐと、着ていた真白いスエータ

1を、緑色のと着かえた。そしてナイロンの靴下をぬいで素足に草履をはくつもりだったのだが、有料便所のレジスターにいる女達に不しんに思われそう、計画どおりにみなりを変えるわけにはいかなかった。

たゞ、靴下だけぬいで、セーターの上から来た時のようにコートをはおると、外へ出た。そのまゝ地下鉄でみなみへ出た。難波でおりにみたが、知人の誰かに会いそう、もう一度こそそと悪いことをするように

地下鉄へもぐると、動物園前まで行つた。そこから新世界へ出ればもう知つた顔には会いそうもなかった。

しかし、動物園前でおりに、外へ出てみると又困つた。薄いグリーンに白をかけた中間色の合オーバーは、そのあたりの街にそぐわなかつた。

夫人は美術館の方へ出た。そこは夫人のオーバーがおかしくない風景なのだ。ただそのオーバーをどこでぬいで、新世界にふさわしいなりに変るか問題だつた。夫人はそのまゝ動物園へ入つた。

動物園から出て来た時、小百合夫人はやつと、彼女の境遇の匂いを縞の風呂敷の中へ包みこんでいた。ただ、その白い美しい顔だけはどう変えようもなかった。人目につく美貌だつた。

さて、新世界へ出てはみたものの、小百合夫人はどこをどう行つたらいいのか、それさえわからない。又、そうして、そこを歩いてみて、小百合夫人の肉体の悪魔を満足させてくれる何かにぶつかることが出来るだろうか、それさえ夫人には見当もつかなかった。



その中ブラック建のがらんとした小屋が目に入つた。見世物小屋にしては、表からそのまま入場料も払わずに、奥深く板囲いの中へ入つて行けそうなのが不思議だつた。外に出ている写真が目に入つた時、小百合夫人は体の奥がびくつと痙攣するように動いたのを知つた。近眼の夫人の目に、その写真が何であるかわかる筈はないのに、夫人の体の中の悪魔の目には、その写真もその小屋の内容も見えたらしい。

戸板の上に横たえられた、傷だらけの裸体の女の写真がはつきり目に入つた時、小百合夫人は思わずはつと息をつめた。嬉しさに高鳴るような自分の胸を、もうはしたくないなどと制することは出来な

かつた。ごくんと一つ唾をのみこむと、小百合夫人はその板囲いの中へ入つて行つた。

縛られた女の絵、縛られた男の絵、体中に焼き鏝や焼け火箸をつけられたのか、鞭でうたれたのか、地肌よりも傷痕の方が多い女の裸体写真などが、次々にかけ並べられてあつた。高手小手に縛つた縄の間へ棒を通して、ギリギリと棒をまわされると、後手に縛られた手が折れそうになるのか、足が土を掻くようにもがく。勿論上半身は裸体にされているから、女の二つの乳房はとがつた乳首をまともに正面にむけて、赤い腰巻は足をもがく為、まといつていとは名ばかりに腿の方までまくれあがつている。その泳ぐようになげ出した足の、一本一本の指が苦痛にまがつているのを、更にさらさるようになつた竹で打ちすえられている。そんな絵もあつた。

キユウつと眉をよせ、眼尻をつりあげて、今にも「ヒーツ！」という悲鳴がその唇から洩れそうだった。

小百合夫人は立つていられないように下腹部の奥の方へ熱をもつて来たのを感じた。上半身の血が下へ下へと流れ、足の爪先きから脚を通つて、下半身の血は上へ上へ流れ、その上下の血の流れがぶつかり合つた所でデユウツと音をたててかたまるような感じで、その一点が熱く汗ばんでくるのだ。そして、血の気のなくなつた腕や脛が、チリチリと乾いてくる。その乾いた皮膚へ誰かがさわつたら熱した所がもつと熱をもつかもしれないような気がした。そしてその絵のように自分の手を後手に締め上げ、自分の体を竹で打つてくれたら、もつともつと、体の奥底の血の集りがたぎるだろう。

小百合夫人は近眼特有の濡れるような目差して、縛られた女の絵を次々と見て歩いて行つた。

四

「おい、ねえちゃん」

声をかけられ、小百合夫人は自分のことだとわかるのに少し間があつた。

コールテンの乗馬ズボンのようなズボンをはいて、トックリセーターを着た男が、金歯を光らしながら近よつて来た。

「ねえちゃん、マツチもつていないかい？」

男は煙草を口にくわえて言つた。

小百合夫人のハンドバックの中には、ロンソンのライターが入っている。しかし、それはハンドバックごと綿の風呂敷に包んでいたし、よし出ていたとしても、そのライターを器用にカチンとやるわけにもいかなかったろう。

「持つていませんわ」

小百合夫人が答えると、男は「そうかい」

と言いながら、自分のポケットからマツチをとり出して、煙草に火をつけた。しやあしやあとした動作だった。夫人がそれに対して何か言つたら、次の話題のきつかけにしようとしているらしい。小百合夫人はだまつていた。すると男はもう一度ポケットをさぐつて新生を一本引き出すと

「のまねえか」

と、夫人にさし出した。

小百合夫人は少し落付いて来た。

「有難う」

そう云つて煙草をもらうと、口にくわえた。男が火をつけてく

た。

「ねえちゃん、ああいう絵が好きかい？」

男が聞く。

小百合夫人はだまつていた。「ええ」と合点するにはまだためらいがあつた。

「こわいわ、あたし……」

夫人は答えた。縛られて、打たれることにひきしまつた肌も、大きな鋸でガリガリと手足を引かれたり、指を一本一本切られているような絵はあまりに残酷で、体中の血が一点に集注して流れるよりは、びたつと静止してしまふように思われて、恐ろしかったのだ。

「フッフ、こわいか？そうか？」

男は金歯を光らして、いやらしく笑つた。そして、ふと氣をかけたように

「どうだい？お好み焼でも食べに行かないか」と誘つた。

小百合夫人は男について、いやな油の臭いがむつと鼻をつく細い横町を通つて、お好み焼屋へ入つた。かび臭いような、甘酒を酸ばくしたような白いどろつとした飲物を、大きな湯呑茶わんで運んで来た。すすめられるまゝに一口二口ののんでいるうちに、その酸っぱい味が氣にならなくなり、むしろ、おいしいとさえ思われてきた。お腹の中がポカポカと温かくなつた。

男は髭のそりあとと、にきびの痕とまじり合つた荒れた頬をしていた。小百合夫人は夫の雄作の端正な白い頬を思うと、むしろ、その男のさらさらと荒れた皮膚を、自分のやわらかい肌にこすりつけられる時を想像する方が、被虐的にたのしかつた。

「ねえちゃん、名前何ていうんだい？」

男にきかれ、とつさに

「つる子」

と、答えたのは、目の前に白鶴の広告のポスターがかゝつていたからだつた。

「つるちゃん、いい名だね、ねえちゃん、色が白いし、なかなか別びんさんだ。つるちゃんらしいや」

男はじろじろと小百合夫人のつる子を見ていたが、急に目の奥を光らせると

「鶴というのはつかまえて鳥籠に入れられることだつてあるぜ。金網の大きな鳥籠だ。鶴は着物を着てないよ。はだかだ。真裸で籠の中にいれられて、じろじろとみんなに見られるんだ。いたずらずきの者がいたら、長い竹で網の外から突つつかもしれない。どこへ逃げたつて籠の中だ。竹であつちこつち突つつかれて、泣くぜ。ヒィヒィと泣くぜ。つるちゃんという名はそんなことをされる名だつたらどうする？」

男はからかうように聞いた。

「そうね」

小百合夫人は心地よい酔いを感じていた。

「されてもいいわ」

「本当か？」

「あんたそんなことするの好き？」

夫人は男に聞いた。

「うん」

と、男は曖昧に答えたが、急に警戒するような顔になると「いつてい、おめえ、何してるんだ？」

「何って？」

「商売よ」

「ああ、私の、さあ、当ててごらんない？」

「わかんねえから、きいてるのよ」

「私ね、大阪はよく知らないの。東京ではズベつてたの」

小百合夫人は何かで呼んだ隠語を使つてみた。ただその言葉が名詞だったのか、動詞に使えるのか、いたつて心細い記憶のあり方だった。濁酒の酔で舌がなめらかになつたらしかった。

「サツのもんじやないから安心しなさい」

これも芝居か何かで耳にはさんだ言葉だった。小百合夫人のように実地には何も知らなくても、本を読むのも、映画をみるのも、芝居をみるのも経済的に困らないと、見ている数は多く、知っている

俗語は多かったが、ただ、花電車とかキンチャクとかいう俗語になると、かにもくわからなかった。

小説の中でもそうした言葉は「警察のことをサツという」というような註釈もなかったし、勿論、百科辞典にも出ていない。

しかし男はその言葉で急にへだてをなくしたのか、警戒の色をといた。

「そうか、東京生れか、俺も長いこと東京にいたんだ。なつかしいじやねえか。どうりでこの辺にし



ちやあ、ばかにあかぬけたねえちやんだと思つたよ。そんなら今日は俺がおごろう。いいだろう。つきあつてくれよ」

「ええ」

と、小百合夫人は言つたものの、急に胸がどきどきして来た。自分が長い間、体の奥底にかくしていた欲望が、やつとみたされるかもしれないという期待と、やつぱり上流の夫人として朝夕をすごして来た習慣から、これから起るかもしれないことへの恐怖があつた

五

帰えろう、途中から何とか男をまこう。そう思いながら、それがなかなか出来なかった。人にぶつかり合う細いごみごみした横町をぬける時、小百合夫人は男とへだてられることもあつた。後へ走つ

て逃げるか、横町をさらに細い横町へそれゝば、或いは逃げ出せたかもしれない。それなのに、どこまでも小百合夫人は男について歩いて行つた。夫人の心とうらはらに、体の中が引かれていた。そしてそれがまるで、その荒い言葉ずかいの粗野な男に、自分の体のどこかへ鎖をかけられて、引つぱつていかれるような感じで、又夫人の血がたぎり出しているのだ。

「ここだよ」

男は温泉マークのついた旅館の

ような家へ、さきに立つて入つて行つた。

廊下を通つて、殺風景な病院の部屋の入口のようなドアをあけて中へ入つた瞬間

―大変なことをしてしまつた―

と、小百合夫人は、自分をとり戻した。

―何とかして逃げなければ……―

一目で見廻せるせまい部屋に、つくりつけのような低いベッドがおいてあつた。あとは丸い小さな卓と硬い椅子があるきりで、桃色のカーテンが引かれてなかつたら、施療病院の病室とかわりはない風景だつた。

「私……帰えして下さい」

小百合夫人は男に言つた。

「何だい、急におどおどして、しつかりしろい」

男がいうのに

「ごめんなさい。本当いうと私、はじめてなの、こんな所へ来たのはじめてなの。かんにんして」

小百合夫人は男に哀願しながら。その哀願していることが不思議に快よかつた。ふだんの生活ではいつも人の上に立っていた。夫にさえ下手にものを言つたことはなかつた。夫はいつも小百合夫人をいたわつてものを言つてくれていたから、世間の夫婦のような、夫の顔色をうかがうというようなことは、小百合夫人にはなかつたのだ。

「ごめんなさい、ここまで来てこんなこと言い出して、あなたに恥



をあげたろう。

しかし男は急に失望したような声になつて

「何だい、ねえちゃん、だらしがないんだなあ、もう少し鼻つ柱の強い女かと思つたのに……」

小百合夫人は何故急に男があきらめてしまつたのか見当がつかなくかつた。夫人も又失望した。

「でも、あなたは何か期待して私をここへつれて来たんでしよう？」

何故怒らないの？」

「ばかばかしくなつたのさ」

「どうして？」

「俺の探しているような女はなかなかないもんだと、いつもあきらめちやうのに慣れてるんだ」

「探してるつて、どんな女？」

小百合夫人は哀願した時の卑屈な態度がかき消すようになくなつていくのを、自分で感じながら聞いた。

「さつきあの小屋でねえちゃんを見た時、ふと、これこそ俺を満足させてくれる女だという気がしたんだよ」

「どういう風に？」

小百合夫人は息がはずんだ。

をかかして、ごめんなさい。かんにんして。ねえ、かんにんして」
夫人は男に泣くように哀願した
―よしにしろい―
と、男がどなつてくれたら、夫人はきつと体の奥でよろこびの声をあげたろう。

やつぱりこの男は夫人の長年の欲求を満足させてくれる男なのだろうか。その強そうな毛深い手で彼女の手をむんずとつかんで、いやがるのを無理に羽がいじめにして、一枚一枚、彼女の服をぬがせ真つ裸でふるえているのを後手にぐるぐる巻きに縛りつけてくれるだろうか。声をたてようとする口に、汗くさいハンケチを押しこんで、にしめのような手拭でかたく猿ぐつわをはめてくれるだろうかそして猛獣がおとなしい動物を玩具にしてなぶるように、いろんな恥しいポーズを無理やりにさせてニタニタと笑うのだろうか。

小百合夫人は今そのベッドの上に足も手も縛りつけられ、両股は広く開いて、いやでも男の目の前に、女の一番恥しい所をあからさまに見せたまま、身動きも出来ない程に縄をかけられている自分の浅間しい姿を空想して見た。男はそれを見ながらお酒をのむかもしれない。時々厭がる夫人の口を押しあけて、強い舌のしびれるようなお酒を注ぎこむかもしれない。夫人がむせて体をふるわせると、息がつかないように更にお酒を注いで、全裸の体を波打たせて苦しがるのを面白そうに見ているのではないだろうか。体を波打たせれば、縄はよけいに手や足にくいいって、どう動きようもないだろう。小百合夫人は酔ったような目で男の顔を見た。

しかし男は恥しそうに顔を伏せると、ポツンと言った。

「ねえちゃんに苛めてもらいたいと思つたんだよ」

「え？」

「俺はねえちゃんのようなきれいな女に、めっちゃめっちゃに苛めてもらいたいんだ。ねえちゃん白い素足はともきれいだ。俺はその素足で俺の顔をふみつぶしてもらいたいと思つたんだ。俺があげられるといけなから、手足は縛つてもいい。その足で蹴つとばしたり

その足の指さきで俺の耳たぶをつかんでひきあげたり、俺の髪の毛を引きちぎつてもらつたりしたら、俺はどんなに幸福だろう。俺はねえちゃんこそ、それをしてくれる女かと思つた。まあ、いいや。ねえちゃんにはとても出来そうもないね、俺はまた厭がる女を無理やり強姦するなんてことはしたくないし、出来もしないさ。ねえちゃん帰えつてもいいよ。俺はここでいつものなじみの女を呼んでもらつてもいいが、ねえちゃんを電車道まで送つてやろうか。どうせなじみの女といったつて、ねえちゃんみたいにきれいな女じゃないんだ。ブクブク太つてやがつて……俺は太つた女はきらいなんだ。お姫様のようなきれいな女に、一度でいいから苛められてみてえんだが……。ねえちゃん。さつきあの絵を面白そうに見てたろう？ そんな気起したことはないか？ え？、俺みたいな男を苛めてみてえと思つたことはないか？」

小百合夫人は頭を振つた。

「そうか。じゃあ、おめえ、苛められてえと思つたことはあるのか？」

小百合夫人はこつくりとうなづいた。これだけ自分をあからさまにしている男の前に、自分だけが自分の秘密の欲望をかくしておくことは出来なかつた。男が欲求しているそのとおりのことを、小百合夫人は男に欲求しているのだ。ただ、お互が受身になろうとするのでは、今の所どうにもしまつが悪かつた。小百合夫人は男の前にただ素直にこつくりして、みせるより外仕方なかつたのだ。

「そうか？ おめえ、いじめられてえのか。俺の友達に女をいじめたという奴があるんだが……。奴さんに教えてやつたら喜ぶだろうにな。ねえちゃん、又来なよ。あの辺歩いてりや又いつか会わあね

俺は友達がこのどいつか知らねえんだ。そんな友達があるというのもこんな土地だからかも知れないね。今度会ったら聞いとくよ、どつか、ねえちやんの方に連絡出来る場所があればいいが……」

「いいえ。私もまだ東京から来たばかりで、はつきりきまつていませんから……」

小百合夫人は男の前から早く逃げ出したかった。安堵と失望が入り交つて、激しい疲労を感じていた。

「これ、御馳走になった分だけ……怒らないで下さい」

夫人は手早く風呂敷包みをあけると、ハンドバックの中から千円

【読者通信】

KKこそ私が平常読みたいと思つていた雑誌でした、本屋の店頭でバラ／＼と頁をくつてゐる中にくつと魅力を感じ急いで帰宅し時間の経つのも忘れて読み耽りました。初めから終りまで、どれ一つとり上げて見ても実に興味あるものでした。特に読者通信の仙台のF生の通信は独身の小生にとつては実に羨ましい限りです。挿絵の素晴らしさ、身ぶるいを感じた程です。常日頃マゾヒストの自己に悩

みを感じたのですが、貴誌に依りその悩みは解消しました。愛読者の通信機関といった様なものがありましたら御面倒でもお知らせ下さい。(TM生)

○KK通信を御覧下さい(係)

○

巷間、所謂エロ雑誌なるものが溢れています、頁を開けば何の変哲もない事ばかり、表紙だけけばけばしくて内容の空虚な雑誌の如何に多い事か、然しこの結果は古本屋の店頭に歴然で、一カ月も

札を二枚引き出して、卓の上においた。

「怒らないで下さい。又……」

そういうと、茫然と、その紙幣を見ている男の顔を片頬に意識しながら、部屋の外へかけ出した。その家へ入る前に履いていた赤いエナメルまがいの革草履はどこかへしまつてくれたのか玄關に出ていなかったもので、夫人はとつさに風呂敷の中から、家を出る時にはいていたスエードのパンプスを出して、素足につっかけると、表の通りへかけ出してしまつたのだつた。

(以下次号)

経てば皆赤インクか何か塗られ十パーからげで叩き売られています。この様な雑誌にあき／＼してゐた小生は貴誌を手にして全く驚きました。小生ふとした事から責めに興味を覚え晴雨画伯のもの等を集めておりますが、雑誌としてこれ程纏つた「責め」を一貫したものを見たのは始めてです。御誌の今後の発展を大いに期待します。

(東京 H O 生)

私は貴誌を愛読し特に同性愛に

関するページをむさぼり読む青年です。「夢性の美少年」も遂に終り淋しく思います。これに変わるべき同性愛の記事をどし／＼載せて下さい。真実の告白は私達同性愛に悩む者の代弁でもあります、大きな慰めでもあります。私は家業に励む平凡な青年であります、時折愛らしい少年を恋し、美しい青年を慕い逞ましい男性美に憧れ、画心のある私は理想の男性を描いては独り思いをはせております。

(千葉 渡辺良夫)

・・・お国自慢・・・



好色民謡選



七條美樹子

民謡は何時誰が唄ったともなく、大自然を母体として生れたもので、その土地々々の人情風俗を如実に現した、赤裸々な生活の姿とも言えましょう。

従つて、中にはかなり原始的な伝説や、男女の秘事恋愛などを、率直に旋律にしたものも、かなり沢山あります。それらの性的な余韻を含んだものや、巧みな性愛描写、余らない煩惱の諸相などを詠んだものを、こゝに原歌から拾い集めて、少しく解説してみましよう。なお、不備不明の点は、よろしく諸兄弟の御教示を仰ぎたいと存じます。

一 よさこい節

土佐の高知の播磨屋橋で

坊さんかんざし買ひよつた

ヨサコイ／＼

南国情緒豊かな高知の代表的民謡、よさこい節は、嘉永年間、五台山竹林寺の僧順心が銭掛屋の娘お馬に懸想して、簪を買つてやつたのが評判になり、土地に居られなくなつて、讃岐へ駆落ちを企てたのを諷して、唄われたものですが、高知は恋、仲々露骨な恋情描写をした節もあります。

夜さ来い／＼言わんすけれど

行つてみりや真実来いじやない。

ヨサコイ／＼というのは、この一節が示すように、夜に来なさい、楽しい逢曳致しましように、という意味で、最後の来いじやないは恋ではないという意味を掛けたもの。

第七節の

見ませ見せましょ浦戸をあけて

月の名所は桂浜、ヨサコイ／＼

これが最も難解で、一見何でもないようですが、実は仲々の猥歌なんです。見ませ（御豊瀬）浦戸、桂浜はそれぞれ土地の個有名詞に引掛けた言葉で、浦戸の戸は女の部分を指し、月の名所の月は月の中の事を暗示しています。又桂浜のかつらというのは、小倉百人一首の三条右大臣の歌

名にしおう逢坂山のさねかつら

人に知られて来るよしもがな

のさねにかゝる接尾語です。だから、この唄の大体の意味を説明しますと、

「さア見て下さい見せてあげますよ、前の戸を開けて。月のものが出る前の所を。つまりもう私も子供じやなく、年頃になつて、どなたとおつき合いが出来るような身体になりましたから、夜においでなさいな」

という原意なんだそうです。

第八節の「様よ行かんせお倉の裏へ、忍び

桜の枝折りに」第三節の「妾の情人浦戸の沖で、雨にしよんぼり濡れて鰻釣る」は大体お分りですね。この鰻は女のを現し、終節の「神が池には蛇が居るそうな、太い蛇じやげな嘘じやげな」の蛇は男のを現しています。

浮名龍田の山路行けば

顔に紅葉が散りかゝる、ヨサコイ／＼

この龍田も百人一首の龍田川から来たもので、男女の密会を現し、山路は女の人のあの部分を言います。だから、山路行けばというのは、どういう事かもお分りですね。顔に紅葉がというのは、やはり百人一首の龍田川に掛けた言葉で、羞恥に紅潮するある行為の暗示描写です、仲々意味深長ですね。

(註)

嵐吹く三室の山のもみじ葉は、

龍田の川のにしきなりけり (能因法師)

二 会津磐梯山

これは福島県会津地方の盆踊り唄ですが、

第一節の

イヤー会津磐梯山宝の山よ

笹に黄金がイヤマタなりさがる

これは第一意義の他に、笹と黄金とで、男

女の情事を表現しているのだという事です。それに関する語源や伝説は、残念ながら存じておりません。山形県南米沢附近の、長井町笹野にある、坂上田村鷹建立の笹野親世首の年越しの、祭典毎年十二月十七日に境内で売られる獵奇玩具、笹野彫りに起因するのだと、教えて頂いた人もありますが……

主と私は羽織の紐よ、

固く結んでイヤマタ胸に置く

主が唄えば踊りがしまる

やぐら太鼓イヤマタ音もしまる

などと、チョツピリ面白い歌詞もあります

が、總体的に寓意は含まないようです。

三 麦 搗 唄

東北、福島県海岸地方の俗謡ですが、麦を搗く時、麦を臼の中へ入れて、上から杵で搗く光景を、男と女が夜の遊戯をする恰好に模したもので、この唄の麦を搗くという歌詞の所は、秘戯情交を現しているのだと思つて、次の唄を味つてござらんさい。

麦を搗くにも真心こめて

これも身の為ほんとに主の為

麦を搗くにも男と搗きやれ

女同志じゃほんとにやるせない

可愛いお方と麦搗く時は

杵も軽いし、臼の中廻る

麦を搗くなら七臼八臼

三臼四臼は誰も搗く

麦もつけたし寝ごろも来たし

家の親達ねろねろと。

四 オ バ コ

秋田おぼこ、新庄おぼこ、庄内おぼこ、或は仙北おぼこ、山形おぼこなどと、おぼこ節も数々ありますが、羽前羽後地方一帯に唄われる民謡で、庄内地方が本場だろうと言われている。

オバコとは、未通娘(処女)の事をいゝ、闇取引だろうが何だろうが、嫁に行つたものはオバコとは言わないし、もつと詳しく言う、と、長女を除く娘をオバコと言い、長女の事は庄内地方ではアネコとかアンネと言つて、妹娘をバツコ、又はオバコと呼びます。

おぼこ何ぼなる、この年のらすと十と七つ十七おぼこなら、

何して花コなど咲かぬとな、コリヤ

咲けば実もやなる

咲かねば日蔭の色紅葉。

ア、コバエテ／＼

この年のらすとは、今年暮らすとの方言、花コのユも愛称の方言で、大した意味はあり

ません。

秋田お婆この十二節目には、

ほんなコかずけ草

コだしコ枕コに沢なりに、コリヤ

という極端にコを引掛けた、難解な歌詞もあります。

花咲くというのは、処女でなくなるという事で、実の成るは、子供の出来る事を暗示します。コバエテは来ればよい、という意味。「娘さんいくつになつた。今年暮らすと十七七娘なら何故結婚しないの？ 男を知つたら子供も出来るし、処女のままだら、愛を知らぬ間に色褪せてしまふよ、さ、来るがい〜」

お婆こ心持ちア

池の端の蓮の葉の溜り水、コリヤ

少し触ること、

ころころ転んでソマ落ちる

ア、コバエテ〜

転ぶは貞操を許す事で、ソマは側の意です。から、「娘心は池端の蓮に溜つた水のように。一寸ふれさえすれば、すぐ貞操を投げ出して、主の側へ転るように寄り添いたがつてゐるもんだよ、さ、いらつしやい〜」

五 磯 節

磯で名所は大洗さまよ

松が見えます、ほのぼのと

松がネ、見えます、イソほのぼのと

磯節は常陸の磯浜地方で、古くから伝わっている民謡で、漁夫がその漁場通いの櫓拍子に合せて、ゆつくり唄つたものですが、明治年間西京に入つてはやり唄となり、調子も落ちて、新磯節が出来たのだそうです。

この第一節は、女の部分を上品に描写したものだと言われます。五節の

磯で曲り松湊で女松

中の洗 町男まつ（男待つ）

中のネ洗町イソ男まつ

これも名勝を取り入れて、巧みに洗町花柳界を唄つたものです。

六 小野田 甚句

相馬地方福島県の甚句が、塩釜を経て、加美郡地方に流転した唄で、小野田では歌宴の席に歌うのだそうです。

沖の鷗に潮時聞けば

わたしや立つ鳥ササ波に聞け

チヨイチヨイ、チヨイナ

この唄では第七節に
甚句いささか師匠取つて習うた

師匠に劣らぬ、ササ竹の節

というのがありますが、竹の節は尺八の事で、更に転じて男のものを象徴し、師匠取つて習うとは、主を知つて覚えたという、男女の情事を、隠語的に含んでいます。

その次の節の

甚句さなかに誰茄子投げた

茄子子のとげやらササ手にささる

この同じ文句が、秋田甚句の中にすありますが、茄子が何であり、茄子のとげとか、ささるという意味からして、仲々面白い唄ですね。秋田甚句の

十七八なら山サもやるが

山に人さす虫が居る

とよく似た内容のものです。

七 小 原 節

これは越中八尾町富山県婦負郡の盆踊りの唄ですが、今では全国的に有名です。浮いたか瓢箪軽そうに流れる。行先や知らねどあ的身になり度や、というあの唄ですが、元唄は十二章よりなり、皆面白い後囃子がついています。歌子も仲々凝つたもので、都々逸調に軽く流したり、きわどく逃げたりしている。巧みな表現がいい味を出しています。例えば

粹な蛇の目が柳をくぐる

キタサノサーアドツコイシヨ

後はつばめが、オハラ受くぐる。

粹な蛇の目は勿論年増の芸妓か新造さんの類、ツバメは情夫、若いつばめと持つて来て、又くぐるを股くぐるにかけています。

笛を枕に若草敷いて

土手に寝てみる城の月

よく玩味して下さい。仲々うまくしやれて、実に意味深長ですね。思わず微笑とため息の出るような……。

八 有 名 民 謡

次に有名な民謡の中から、ちよいと面白いものを、二三歌詞だけ紹介します。

鹿兒島小原良節——

可愛がられて寝た夜もござる

泣いて明した、夜もござる

抱いて寝もせず暇もくれず

つなぎ船かや、わしが身は

三 階 節——

可愛がられた筈が

今じや切られて割られて

桶の箍に掛けられて締められた

山 中 節——

アー薬師山から湯座屋を見れば

猪が髪結うて身を粧す(繰返し)

湯座屋は湯女の居るお茶屋、猪は山中温泉

特有の湯女の事を言います。

アー浴衣肩にかけ戸板にもたれ足でその字を、ちらし書き

串 本 節——

潮の岬に燈台あれど

恋の暗路は照らしやせぬ。

魚籠を片手に釣竿かつぎ

こいは釣れないものかしら。

関の五本松——

ア、表来たかえ裏から来たか

妾や裏から想て来た。

炭 坑 節——

一山二山三山越え

奥に咲いたる八重椿。

いくら色よく咲いたとて

主さんが通わにや唯の花

この他に沖繩ユンタ歌謡や、台湾高砂族の原始的な歌謡など、興味深いものもあります。が、もう日本領でなくなつたので、省略しておきましょう。

又、地方的なえげつない卑歌や猥歌、或は粹人閑人などの作つた替歌の類は、一切省いておきました。

ハ・ナ・ヲ・タ・カ・ク・ス・ル

問 私は鼻が低くて悩んでいます。隆鼻術というのをよく聞きますが、効果があるものでしょうか。

答 先ず特殊薬注入法があります。鼻すじだけ通じたいという人には理想的な方法です。次に象牙挿入法は今から三十年前から初め、アメリカでも使用され捨て難い方法です。合成樹脂も最近材料がよくなり使用され出しました。肉質法は少しづつ高くし度い方には良い方法です。以上は費用何れも六千円です。

更に当院独特な永久不変な弾力性物質が発明され、その自然性においては如何なる方法も追従を許しません。従来の象牙合成樹脂のもつ欠点は一掃されました。将来は当院で発表すれば、如何なる人も皆この方法で行うべき運命をもつてゐるのです。費用は八千円以上です。

大阪市北区梅田新道
交叉点東一丁電通

三山整形外科内

三山隆鼻法研究所長談

人妻告白記

妻の復讐

辻佳月子

1

「お宅は宜敷うござんすね。御主人があんなにいい方でお子様の出来は、又特別にいいし、何も言う事はございませんわねえ。」

なんて言われます度に私、

「いいえ。子供は私の血を引きまして御承知の我儘もんでござんすけど、主人だけはねえ、あの通りに堅い一方で働く以外の楽しみは一にも二にも三にも家庭々とそれはもう家庭的な人でございますのでねえ。」

といつもそんな返事をして心の中で喜こんで居りましたの。

結婚して十年、有名な製薬会社の課長の椅子についた夫は仕事に於ては、鋭利な剃刀のような切れ味をしめす一方部下にはほろりとするような人情味をしめす人で、交際華やかな職業にあり乍ら品行方正で女というものは妻一人だと思っている人——とのみ信じて、子供達にも何はさておきお父様お父様と夫のよき父ぶりを言つてきかして、私程幸福なものはない——と悦にいつていました。

「こう言う時代は昔みたいに課長でございと大きなデスクの向う側にふんぞりかえつていては駄目だよ。課長自身作業服に着更えて社員の前になつて工場の中で働かねばね。そう

しなければ部下と言うものは心からついて来るもんじやない。見ろ！ ほかの会社ではストだ何だとかや／＼騒いでいるが、俺のところはおさまりかえつてどん／＼生産をあげているじやないか？ 部下に不平をもたせるなんて要は上役の統御の仕方が悪いんだ。」なんて晩酌の盃をかたむけて気焰をあげる夫の顔を、何てまあ男らしい人と——我夫ながらほれ／＼と見上げてうなずいていた私でした。そしてね、

「今晚工員達と一緒に徹夜作業するからかえらないよ。」とか「この頃何しろヒドラヂツの生産と研究で大変だからね、うちへなん

か帰る暇ないよ」と言つて出かけて行く夫を、心から御苦勞様といつて見送る私は「主人は何しろ仕事熱心な人でござんしてねえ」とか得意らしくひとに語つていました。でも留守勝ちといつてもたまに帰宅した晩は必ず私を愛してくれますし、ベッドの中で私の体をだき乍ら「淋しかつたかい？ 俺もお前の顔見なくて淋しかつた。だが勤めだから仕方ない勘弁してお呉れ」なんて言う主人に返事のかわりに私も強く抱きかえしては新婚時代の情熱が十年の間続いているのだと信じていました。

ところがその主人が会社の美人で評判の女事務員をしよつちゆう連れ歩いている事が私の耳に入りました。それを私さり気なく申しますと主人はうなずいて

「よく気の利く女の子なので鞠もちに連れ歩いている。俺は仕事の事は家にかえると忘れるので別にお前に言ひもしなかつたが、仕事の熱心ない娘だ。お前も眼をかけてやつてくれ。俺は四十一だろ？ あれは十九だろ？ 向うはまるでお父さんか叔父さん位に見えるらしい。俺だつてあんな小便臭い小娘じや莫迦らしくて相手も出来ん。俺にとつて世界中で女はたつた一人、その一人はお前だ。は、は、

お前は俺の愛妻だよ。」なんて申します。「厭な方……そんな大きな声で仰有ると女中に聞えてよ。」つて私優しく睨んでやりましたけど。

2

信子つてその娘はいゝました。私の死んだ妹と偶然同じ名前だつたので私何となしにその娘が可愛くて、時々うちに呼んでは御馳走したり、手頃なハンドバックなど主人にこつづけたりいたしました。

「信ちゃんつて美人ですわねえ。あれじやお嫁の貰い手も多いでしょうねえ。」つて主人に申しますと

「何ね、仕事なら男そのけだがまだ子供だ、嫁入りはまだ……だよ。」

「そうですか？ お嬢さん私達で世話してあげましょうよ。」

「うん。心がけておく。」

私はその時主人の顔にちら！ と走つた奇妙な笑顔を見ましたけど別に何とも思ひませんでした。私は主人を絶対に信頼していましたが、子供達も如才ない信子になつて、会社のお姉ちゃん……といつていました。信子はいいつもニールツクスタイルブ

ツクからぬけ出したような服装をしていました。

「信ちゃんはいいつも單なる女事務員に見えるな、い恰好ね、おうちいいの？」と主人に聞くと「何だか相当にやつているらしい。あの子は給料そつくり自分の小遣いにしているし、多勢の女の子の中から選ばれて課長付きになる位だから、いつも身綺麗にと心がけているらしい。そんな小さいところにもあの子の賢さがわかるだろう？」

「本当にねえ。」私感心してうなずきました。の私主人と信子を男対女と考える事をしませんでしたから、銀座へ出ました時偶然アベツクで歩いている主人と信子を見つけても後から肩をたゝいて軽く挨拶して、又二人をおいて私だけ帰宅いたしました。

ところがその信子が主人の妾だという噂がふとした事で私の耳に入りました。私はあきれて笑い乍ら主人に言いました。すると主人は真剣におこつて

「冗談じゃない？ 若い娘にそんな噂たてたりして嫁入りのきずになつては俺が御両親にすまん。そんな事言う奴、つれて来い」とか……ですの。

「まあ……私に免じて……」と私があやまつ

た次第でした。ところがそれにもかゝらず、そう言う事が二度ならず三度四度私の耳に入りました私は主人に言いつける迄もなく一笑にふしました、次には不快げに見せました。でも私が否定して怒つて見せました時、相手の表情に私に対する憐れみの表情があり／＼と出ているのです。

「私あんな仏様みたいにいよいよ奥様がだまされていらつしやるかと思うと他人事と思えない程口惜しくて……」何て言う夫人もあります私はそれらの人々の真剣な表情から、ふつと主人と信子の間に疑惑を感じはじめました。善意に善意にと解釈していましたが色眼鏡をかけて考えれば成程とうなずかれる事ばかりです。そう思い出すと私の神経は細かく鋭どくなつて来て夫の身边をさぐりはじめました。

夫のワイシャツに残る口紅のあと。信子の用いているのと同じ香水のかおり、そして夫のぬぎすてたパンツの中にのこる夫のものではない縮毛とそして女性のうつり香。そればかりでなく夫のポケットから偶然出て来た信子の手紙に、夫と信子の深い関係が歴然とわかりました。夫はもう妻をだまし切つているとの安心感から信子との交渉のいろ／＼の証

拠を無神経にほりつばなしておくのです。

「貴方！ これは何です？」私はその手紙を夫につきつけました。夫はとぼけた顔をしてみせましたが狼狽はかくせませんでした。又うまく言いくるめようとする夫の言葉をも早聞きたくもなく私は立上るなりさつさと飛び出しました。

何処へ行く当もなく、だが足は自然と人々に教えられていた信子の家にときました。信子の家の表札には、ありありと橋本寓とするされ夫の別宅である事がわかりました。ハイカラなその家の呼鈴をおすと小女が出て来て私の顔色その他で一さいがわかつたらしくおびえて奥に入るのを私はそのまゝついてはいりました。信子が居留守をかまえるのが厭

でしたから。

信子はシユミーズ一つで化粧していましたが、私が血相かえて足音荒くはいつて行きますとさつと青ざめました、図々しく落ちつきました。そして私の罵声を聞いていました、が、やがて

「奥様のお怒り尤もでございます。私も悪い事と知つていましたけど、仲々離れられませんでした。」と悪びれる所なく頭をさげました。こう素直に出て来られると私もやゝ落ち着いたて来ました。

「あなたは二年近くうちの主人と関係していらしたけど、まだ若い貴女がどうして主人みたいな中年男に自由にされなくなつたの？ お金？ それとも主人が本当に好きなの？」



と私が聞くと信子は、今は何もかもうちあけ
 と言う態度で静かに語りはじめました。

3

主人は信子が十九だなどといつていました
 が年齢を主人と離して話しておいた方が私が
 疑惑をもたないと思つたからでした、信子は
 美人なので若く見えていましたが本当は廿四
 にもなつていたのです。貧しい家の総領娘で
 一家を背負つて働かなければいけないため結
 婚どころではありませんでしたが、女性とし
 て発育した体には性の要求激しく、人知れず
 性の目覚めを知りはじめたのでした。会社に
 入社以来機転がきくのを認められ課長室付き
 にされ、課長である私の夫がいない時はガラ
 ンとした課長室にぼんやりしていると、若
 さ故燃えるようなはげしい性の衝動にたえか
 ねて、誰も見ないのを幸い深々とした課長用
 の椅子に腰かけて夢中で独り楽しんでいて
 と、いつの間にか部屋に入つて来て、私の夫
 である課長がそれを見ていたのに気がつき、
 信子は恥かしさに、その儘動けなかつたので
 す。

夫も思いがけない有様に呆つ気にとられた
 らしいですけど、もと／＼信子に魅力を感じ

ていましたので、いきなりつか／＼と側によ
 つて行つたのです。

「私が自分の肉体を自分で刺戟を与えるのと
 ちがつた快よさを全身に感じました。」信子
 はそう告白しました。生れて初めて男性に、
 しかもそれが好意と親しみを持つた畏敬する
 課長さんの手によつてなのです。

「今晚一緒に飯を喰おう。ついておいで。」
 とささやいたのです。

「でそれで貴女は主人とその何処かのお料理
 屋とかホテルで関係を結んだの？」私は歯を
 むき出すようにして言いました。信子はうな
 ずくとその儘うなだれていました。

「貴女は主人とそんな関係でい乍ら、そして
 こんな家に住まわせて貰い乍ら、何気なく私
 の家に入入りしていたのね？」私の言葉に恨
 みがこもりました。信子は益々うなだれまし
 た。

私は恐れていた事実を眼前に見せつけられ
 て、そんな主人を一にも二にも信じ切り愛し
 ぬいていた自分のお人のよさがしみ／＼と情
 なく口惜し涙が浮び、その対象となつていた
 信子を睨みつけました。

「私、奥様が好きでした。だから私のしてい
 る事を苦しんでいましたけど、そうかと言つ

て旦那様との関係を絶つてしまふ事は淋しく
 て仕方がなかつたのです。旦那様と別れると
 今迄のような裕福な生活が出来ないと言う打
 算的な気持からずる／＼関係を結んでいたん
 ですけど——でも奥様さえ御存じなかつた
 ら、私は今迄通り奥様に愛されると思つて私
 心を鬼にして旦那様との関係をひたむきにか
 くして来たんです。でも私は奥様へ義理とし
 て、旦那様と肉体を直接ふれないようにサツ
 クをいつも使つていました……」

昔、若い青年の間にサツク童貞という言葉
 がはやりました。それは異性と関係はあつて
 も直接に接触しないと言う事です。性感は知
 っているが純潔を保つていふと言う苦しい弁
 解です。この女はサツク処女と言う心算でし
 よう私は思わず苦笑しました。

「私は旦那様の指先がすきだつたんです。」
 「指先？」私が聞きかえすと信子はとぎれ勝
 ちに必死になつて言いはじめました。

それはこうでした。

自分の指先で肉体をもてあそぶ事に馴れて
 しまふと、も早男性との普通の交渉では、恍
 惚境を得られませんでした。だから信子にと
 つては夫の性感を満足させるために身をまか
 せはしたがサツクは用いたし、性感を感じな

かつたから魅力はない。たゞ夫の指先の魅力で、夫と関係をこれ迄続けて来た。勿論奥様に悪いといつも苦しんでいたが、張り切った自己の若い肉体の情慾のやりばがなかったのだというのです。

今は嘘の何一つない、性欲にみち／＼た若い女のなやみを打ち明けられるとそれが真実味がこもっているだけ私の胸をうちました。

私自身信子の今の気持を確かに経験して来ました。結婚というわくにはめられないで性慾を発散する事が出来たら若い女性はどうなに幸せでしょう。

私は二十歳の年に父を失いました。父の死後はじめてわかつた事でした父は多額の負債があり私達の住んでいた宏大な邸宅のみか器物までその抵当になつていたのです。

父の急死、破産——これまでの華やかな社会的地位、豪奢な生活も裏をかえして見れば父のつらい工作だったのです。忽ち貧しい娘におちぶれた私は多勢の弟妹の姉として苦しい糊口しのぎに働きに出なければなりません。以来八年は私にとってこよなく辛い荊の道でした。幼なかつた弟妹はそれ／＼学校を出て、一家を荷つて働いた私の苦勞が実つたので、当時勤務先の同僚だった今の夫

の熱心な求婚に応じて結婚、それから幸福でのんびりと明るい人妻の生活を送つて今日に至つたのです。

4

願れば二十歳から二十八歳までの独身生活中私は人知れず若い／＼した体にあふれて来る性慾の処置に悩みました。お金に困つた時、一層／＼に墮ちようかと思ひました。それはお金も勿論ほしいのですが性感を得る相手がほしかったのです。性慾を忘れるために私は昼夜働けるだけ働いてふら／＼になつて寝ましたが、それでも何時も下腹部にもや／＼とするものに苦しみそれがつのると仕事にさしかえヒステリックにさえるのです。或る夜私は布団の中で禁断の木の実を自ら知つてしまつたのです。今にして思えば私は自分の処女膜をやぶり非処女になつたのです。

以来私はOranieの醍醐味を知りつくし、勤め場所では男嫌いとまで言われる程、異性には何一つ色気ずいた感情をしめしませんでした。

だから品行方正と噂されやさしくて温和しい私の物腰は誰にも好かれ、昔の人も知る大

家の令嬢が悲境におち弟妹を抱えて社会の荒波と闘うさまは雄々しく見え、又人の同情を呼んだのでしよう。真面目な求婚者が次々あらわれ上役から何度も良縁を持ちこまれましたが私は

「一番末の弟が大学を出る迄」と断りつづけました。私は人々からますます賞められその心根をいとしがられました。実は男性の肉体にはもう何の魅力もおぼえなくなつたため、そう言う風になつたのです。

私は自分の性感を益々楽しくする為に手製の色んなものをこしらえてみましたけれど危険が伴つたりするので、やつぱり技巧をこらす事を工夫しました。

だが末の弟が私の力で大学を出てしまふと、母は親孝行すると思つて結婚しろとい／＼言いはじめました。「お前を家の為に二十八才になる迄嫁がせない事が私の苦しみ」の種だ」とそれこそ病氣にでもなりそうなので、私は丁度熱心に求婚しつづけていた今の夫にOKを宣し結婚生活にはいる事にして今に至つたのです。

私は永い娘時代の過度の自瀆の害をよく知つていましたから結婚と同時にそれを止め夫との生活によつて性慾を満足さす事を考えま

5

した。私は夫の激しい愛撫に応えようと努力しましたが、どんな時にも冷静なものがあつた。独身時代の独りでの行為をなつかしんでいました。それが現在の私なんです。



やむにやまれぬ女性の性慾の激しさは私がよく知っています。

成熟し切つた豊かな体にシユミーズ一つで化粧鏡の前にうなだれている信子を見ると、私は信子を夫がどう言う風に愛し、もてあそんだかを想像すると嫉妬より激しい性慾を感じました。

私は正真正明の女性ですけど、男性的な所が多分にあります。昔スポーツできたえた体はがつちりとたくましく、学校時代の劇に白線帽をいたゞき学生服にマントの金色夜叉の貫一に扮し、やはりお宮に扮した級友と海岸の場を演じ、やんやと騒がれた事もあるのであります。

その時の私は当時天下をうならせたターキ

ーそつくりだつたそうで下級生達大熱々になつたものです。

「全くよ。あなたの貫一つて素敵ですもの。私だつて貴方に蹴られて、すがりつき乍ら本当にこんな素晴らしい男性がいたら、私宮だつたらお金なんか眼がくれて富山なんか嫁入りしないと思つたんですもの。私あなたにフラ／＼よ。」なんて相手役の宮に扮した級友にからかわれた程です。

私自身それからの学校劇には男役に扮するのを好み国定忠治になつて、胸のすくような啖呵を切つてきつとみえをはつた姿は父兄や先生方を思わすうならせた程水もしたたるほど／＼するような男振りだつたそうです。

さて余談はとも角私の心の中にある男性は急に頭をもたげて来てそのな／＼と美しい同性をだきしめたい慾望に一杯になりました。「信ちゃん。貴女は性慾を満足させるために私の夫と関係結んでいたので、主人そのものは好きでなかつた……ところ言うの？」

信子はうなずきました。

「信ちゃん。私があなたの性慾を満足させるんだつたら——それじゃいけない？」私の声はふるえて来ました。私はいきなり立上つて信子の体をしっかりと抱きしめ、青ざめた顔

を仰向かせ、はげしい接吻を続け乍ら右の手で信子の胸をまさぐり、ふつくりとより上がつた乳房をゆつくり／＼もみはじめました。するとどうでしょう。信子はそれに応じるようにしつかりと私にしがみついて来たのです

「奥さん。私を許して下さいませんか？」

「許さない。許さないから貴女私の自由にさせてやるの」

「構わない。私初めから奥さん好きなの」

「莫迦ね」

私は信子の体を其処に寝かせました。

男は女の秘密の底の底まで知る事は出来ませんが女は同性の秘密は窺う事は出来ません。私は自分の夫を奪った信子の肉体の元凶を征服する残酷な喜びでふるえていました。

それから二時間程たちました。

「奥さん。大好き！私捨てちゃ厭！捨てちゃ

厭！」信子は私にしがみついてきました。

二人とも花園の中から天馬に乗って金色の雲をわけてのぼり行くように快感の絶頂をきわめていました。

6

ドアが開きました。見返ると夫が呆然として佇んでいます。

「俺はお前達が女同志で摺み合いでもはじめないかと心配して来たんだ」と夫は言います「だが仲よくしているのもいいけどそんなに迄していると今度は嫉妬して来る。俺も仲間に入れて呉れ」夫はいきなり上着をぬいで二人の間にわりこんで来ました。

「清子、わかるかい？男の本能には一夫一婦とおしつけられた道徳が逆もわずらわしいものだ。よ。ほかの女と関係を結ぶとお前との性

生活に刺戟が出来て余計たのしいんだ。信子をこうしておいておくのを許しておくれ」

「判るわ。私貴方の性慾を満足させるお相手はするけど信ちゃんといたずらし合うのも許してね」そして

「どうを？信ちゃん！」と見返ると信子は、「私奥さんの方が楽しいんです。旦那様とだいつも奥さんにすまないとと思う心の苦しみがあられるけれど奥さんとだと女同志と思つて気が楽なの。妊娠する心配もないし……」

彼女は私の夫に冷たい一瞥をいたしました「私奥さん大好き！」信子はいきなり私にしがみついて来ました。私は心から勝利の微笑を感じて勝ち誇つた眼で夫を見下し、信子の体をだきました。夫の周章た表情を冷たく眺め乍ら――

終

一番最初に縛つてもいゝかとき　といゝますのは、私はそれ迄に度かれた時は、本当に胸がどきんと　々羞しさのために顔が真赤になつた事がありました。こんな事は初めてだったのです。それでも重たて、かツと熱くなつてくるので、ねて、訊ねられた時には、なんとす。でもそれは単純な羞恥という　はなしに、うんとうなずいてしまつたのでした。そしてそのあとで

これは大変なことになつてしまつた後悔したのですが、私、何ん　だか嫌だわ、という言葉が私の気弱のせい、か、よう言い出せなかつたのです。初めの日は無我夢中でした。自分の肌が太細でぎり／＼と縛られ　坐つていて縛られた腕の縄が転

がされた時にぐつと肌に喰い入つて、その瞬間、あつと声を出しうになる位痛たかつたのですが、じつと辛抱していると、次第に繩に縛られていることを忘れる位、痛さが拭うようになくなつて、そのかわり、全身を拘束している繩が恰かも桃色のベールのように感じられてきたのです。

若しこんな姿態の時、男に襲われたら、私はどうなるだろう。とそんな事を考えました。きつと儚ない抵抗の末、この十九の処女の肉体は暴力の下に蹂躪されるでしょう。今、自分はそんな危険な立場に立たされている。――

「おい、眠むつちや、困るじやないか――」

突然、太い男の声に私の夢は破られました。もうライトも消され私一人が縛られたまゝ、芋虫のように転がされていたのです。

それからの私はモデルになるということが、何かしら心の奥底から湧き出る楽しい囁やきがあつて

桃色のベールに包まれて

縛られてみて――

川端 多奈子

呼出しがあれば、いそぐとして出かけるようになりました。そして縛り方が緩かつたり、早く繩を解かれたりすると、物足らなく思つたりしました。でも、その頃はまだ何にも私には分りませんでした。

もつともつと強く縛つてほしいそして虐めてほしい。と思つたのはずつと後なのです。縛るだけで私の身体に指一本触れることをしない男の人達に、内心齒がゆく思つたり、若しも、そんな事をされたら、どうしよう？と考えたり、又、いや、私にはそんな魅力なんてないんだわ、と失望したりし

ました。

そんな時、逆さ吊りの申出があつたのです。内心私は一度そんなに扱われてみたい、動物の肉かなんそのように、私の身体を逆さに吊り下げられてみたい、という気持がありました。とても羞しく、そんな事は言えませんが、只黙つてうつつむいていました。

「やはり駄目かね――」

と相手の人があきらめ口調で言つた時、私は思わず「やりますわ」と答えていたのです。

私は自分の写つた写真を見るのも好きですし、雑誌を読むのも好きです。編集部の方に奨められて

こんな拙い文を綴つてしまいました。吊り下げられた時、やはり私は一番満足させられました。今迄の中で最も疲労が激しかつたのですけれど、それは不愉快な疲労ではありませんでした。いや、むしろ、もつとむごたらしく扱つて頂きたかつた位です。

私はもう一度あの桃色のベールに包まれる一瞬間を味わいたいです。私がもつと文章が上手でしたら、その時の気持をうんと書きたいのですけれど、意余つて筆の方がうまく走りませんので、今度はこれ位でお許し願つて、又次の機会に話させていたきたいと思ひます。

【編集部より】

筆者のお許しを得ましたので川端多奈子さんに対する御質問に本誌上、又はKK通信にて御答えして貰うことに致します故御遠慮なく御投稿下さい。



これは小説ではない、真実の告白である——

★マゾヒストの果★

—福田英一—

(1)

私は後ろ手に縛られていた。

両足も勿論縛られている。

冷めたい板の間に丸裸で転がされ、ぶるぶる震えていた。

「寒いのか？あなた——」

妻は冷やかに言う。

その癖、その眼差しにはギラ／＼と妖しい熱がこもっている
哀願するように私はその眼を見る。

すると、妻はすつと立ち上がった。

「あなたの気に入るものがあるわ。熱い……。びつくりするほど熱いもの。びつくりするほどネ。ウフフフ……」

妻は低く笑いながら襖を開けて茶の間の方に行つた。

あッと思つた。茶の間には長火鉢があるんだ。長火鉢には火箸がささつてゐる。その火箸を焼いて此のからだに当てようと言ふんだらう。ひどい事をする。

だが、もともと妻にこう言う遊戯を教えたのはこの私だ。身

から出たサビ……。

カチカチと言う金属の触れ合う音と、炭火を吹く妻の息の音がして来る。案のじよう、火箸を焼いているのだ。

妻は戻つて来た。襖をしめると、三畳の此の納戸は二燭光の淡い青色電球に照らされて情慾の世界に深々と沈んで行くのだ
「どうお？これ？」

ジーンと骨の芯までこたえる熱さ。

「ああッ——」

思わず声を上げる。

「黙つて」

妻の手が口を押さえる。妻の匂いが忽ち私の官能を刺戟したと、その匂いにまじつてジリ／＼と尻の皮が焼け肉のこげる臭いがして来る。

もう辛抱出来ない熱さだ。私はもがいた。

「ああッ……」

「黙つて、黙つて」

妻は私の口を固く押さえている。



妻の匂い……皮の臭い……肉の臭い。私はもたえる。

だが妻は片手でシツカと私の口を押さえたきりだ。

片手の焼火箸はベタ／＼とあちこちに場所を変える。

「ああッ……。ああッ……」

その度びに私はうめいた。

妻はそう言う私を心地よげに眺める。

「うるさいのねエ」

焼火箸を私の股の間に差し入れると、押入れを開けた。何かゴソ／＼と出している模様だ。ヒリ／＼と股の間が焦げて行く

「熱い、熱い。美代子。もう止めておくれ……」

妻の手が私の口から離れたので私は哀願した。

が、直ぐにその口は再びふさがれた。

汚れた妻のパンティ……、妻の匂いが……妻の女としての匂

いが……私の口中にムツとひろがる。

妻は帯を解く。そして懷ろに手を入れる。懷ろから乳バンド

を取り出すと、パンティを押しこんだ口の上にそれを当てて猿

ぐつわをかます。

私は息若しくなる。油汗がじつとりとひたいに浮いて出て来

た。

「どう？温まつて来たでしょう。ホホホ……」

火箸を私の股の間からぬくと、笑いながらビシビシとその火

箸で頬を打った。

火箸はもう冷えているが、そのシヨツクであごがはずれそう

だ。

「ウウツ……。ウウツ……」

打たれる毎に私は亦も呻く。呻いて息を吸うと妻の臭いが猿ぐつわから激しく伝わって来る。

痛い……が快い。快い……が痛い。私は夢中だ。

妻は尙もビシビシ撲つ。

ああ息が切れそうだ。苦しい。苦しい中にも乳の匂いが……

パンティの匂いが……五彩に色どられて立ちこめる。ムンムン

した匂い……。

然し苦しい。苦しい。息も絶え絶えだ。

匂い……匂いが立ちこめる……色どられた五つの色……何だ

ろう……官能のうめき……女の美しさ……女の強さ……女、女

……女の色だ。

「ウウツ……。ウウツ……」

呻きながら遠い所で女を感じる。妻のからだを感じる。肉と

肉の触れ合う火花……そう、火花だ……。火花は虹となつて飛

び散る。虹は後頭部に淡く光っていた。きゅつとしばられて乳

バンドの結び目に七つの色が光っている。肉と肉の火花……五

彩の女の匂い……それが一つになつて後頭部の乳バンドの結び

目に七色の虹となつてかかっていた。

そして——私は気を失っていた。

(2)

「駄目ね」

妻が言う。

「何が？」

「だって、いじめると、あなた弱くなるもの」



言われて私は眼を伏せた。眼の前で鉄瓶がチン／＼と音を立てている。

何の変哲もない茶の間、火箸も元通り灰の中にキチンと突きさされている。

あれから三日経った。まだ尻が痛い。水ぶくれになつた所や赤肌になつた所もある。ワセリンを塗つてガーゼを当て絆創膏で止めてある。

火箸を見ると胸がうずく。グビリとどの奥が鳴る。

恐怖と後悔と、それから幾分かの期待との為だ。

「もう、あんな事は止めておこう」

そう言いながら実は反対の事を考えている。

「だけど、それじゃ、余り味気ないわ」

「じゃ、此れからも、未だあんな事続けるのかい？」

亦もののどの奥がグビリと鳴る。

「しまいに死んじまうよ……」

暗然と頭を垂れた。

「だらしないわね」

もう彼女のサディズムが頭をもたげる。亦、焼かれるのか。

五彩の匂いと肉色の火花……七色の虹がクル／＼と頭の中をまわる。

「いじめるわよ……」

「や、やつぱり」

沈んだ声。——だが心の中は涙が出る程嬉しい。何と云ういやな男だろう。自分でも愛想がつかえる。それでも癒らない。徹底したマゾヒストだ。

「いじめるけれど、もう此の前見たいな事はしないの」

期待がはずれた。私は初めて顔を上げて彼女を見る。

妻は冷たい顔をしていた。冷然と私を見詰める。それから冷かに笑う。

「いらつしやい——」

ただ一言。突然立ち上がつて納戸へ消える。催眠術にかつたように私は後に従う。

「後をしめるのよ」

言われて襖をしめる。

納戸の中はホカ／＼と温かかった。小型の電気ストーヴが入っているのだ。眼顔で命じられていつものように裸になる。裸になつても少しも寒くはない。ボンヤリ立っていると、手をグイと引つばられた。女にしては強い力だ。思わずヨロリとする

「シツカリなさい」

言いながら細引が手首にかかる。馴れたものだ。勿ち後ろ手にくくり上げられた。

「寝転ぶのよ」

ドンと邪険に肩先を突かれて、よろめきながら板の間に寝転がった。続いて足もく／＼られる。

尻が思い出したようにヒリ／＼痛む。だが今夜は焼火箸の苦

しみだけはないようだ。何だろう？今夜の試練は？いやらしい

劣情の期待が鎌首をもたげる。

妻が私を見てニツと笑つた。

私は弱々しく笑い返す。

妻は帯を解く。着物を脱ぐ。長襦袢も取る。乳当ても……何



もかも取つてしまふ。

ああ全裸だ。白いからだだが青い電球に照らされて幻想的な光を出している。

妻は亦もニツと笑う。

私はもはや笑い返す事も忘れて妻の姿に見入る。

妻はその私の頭の所であぐらをかいた。私の眼の前に彼女の王冠がある。私に君臨する女王が青い光の下で神々しく姿を見せているのだ。

私は身をくねらせてにじり寄つた。

「愛しいクイーン」

私は口の中でそう呟く。忠誠を誓う接吻を与えようとした時彼女はすつと立ち上がった。

ああ——空しく……文字通り空しく情慾は手答えのない空気の中でとまどつた。

私は肩に力を入れてグイと起き上がる。そして膝で歩きながら彼女を迫つた。

その肩先を思いきり彼女の足が蹴る。

おお、女王よ。——私は勇ましいクイーンの姿をちらと見て涙ぐむ。が、直ぐに横倒しに板の間の上に倒れてしまった。

「フフン……」

彼女のせせら笑いが上の方で、手の届かない所から聞こえて来る。

女王よ、私は忠誠を誓いたい。亦も私は肩の力で起き上がる「何さ。それ——」

勿ち彼女の一撃に会うと、一たまりもなく倒されてしまった

ああ、今宵、いじめると言うのは此の事であつたのか。私は起き上がった後も起き上がった後も彼女の足の一撃で板の間に芋虫のように転がされねばならなかつた。

「キスさせておくれ……」

「フン」

今度は彼女の足が私の鼻を蹴つた。

トロ／＼と血が流れる。生温い血……生臭い匂い……何となく快い気持ちに誘われる。気が遠くなりかける……。

と、髪の毛をグイと持つて引きずり起される。

「駄目よ。シツカリしなきや。……バカ！」

ビシヤリ——頬が鳴つた。

眼が覚める思い。女王がカツと怒つて立ちはだかつている。

「クイーン、クイーン。キッスを……」

私はキッスをと言う所だけ口に出して言う。すると、亦、ビシリ——頬が鳴つて私は仰向けさまに、ひっくりかえる。

「もう、もう、動けないようにしてやる……」

押し入れを開けると大きな犬の首輪を出した。言うまでもなく、その首輪を私の首につける。皮の冷たく固い感触が奴隸的な屈辱とマゾヒズム的な快感を与える。首輪につけられた鎖の一端は傍の簞笥の坎に結びつけられた。もう此れで或る一定の距離以上は如何にからだをくねらせても行けなくなつてしまつた。

「フフフ……。よく似合うわ。フフフ……」

悪魔的な笑いだ。

彼女はゆうゆうとあぐらをかく。



もがけばもがく程、鎖はもつれ、短くなり彼女から遠のいて行く。

妻はそれから自分で自分を愛しはじめた。それを見ると私はたまらない程いら立って来た「フン。あなたなんか要らないの。あたし一人で結構よ」

クイーンは昂然と私を見下ろしている。

私は嫉妬を感じた。彼女の手のひらに……彼女の指に……。

私はもがいた。もがけるだけもがいた。けれども鎖は意地悪くもつれて、短く短くなつて行つた。私は彼女一人が楽しむのをただ、あがき眺めるのみであつた。

「クイーンよ。キッスを……」

私は後の方の言葉をしまった首からかすれた声で切れ切れに言いながら、孤独な情慾の捨て場にむせんだのであつた。

(3)

木田正一は大学の後輩である。

未だ独身だ。

ひよつとすると、未だ童貞かも知れない。

「木田君、早く貰うものを貰えよ」

と言つたら赤い顔をして

身をくねらせてもそこまでは行けない。その癖つい鼻先にいるのである。クイーンに忠誠を誓う為に私は舌の先を出るだけ長く伸ばす。届きそうで届かない。首に首輪がくい入る。痛い。もがく。いらくして来る。

「フフフ……。犬見たい……。面白いわ。ウフフ……」

ますくいらくする。何とかして少しでも近付こうと身をくねらす。すると鎖がもつれる。前より皮肉にも距離が遠くなる。もがく。亦、遠のく。

「フフフ。何をやってんのよ……」



「僕は未だ早いです」

と言った。

「早くはないよ。参考までに聞いておくが、君はどんな風な女性が好きなんだい」

と言うと、

「先輩の奥さん見たいな人がいいですなア」

言下にそう答えた。

私は瞬間ギリとした。虚心坦懐に述べた言葉であるから豪も悪意はないのであるが、いつの間にか私の知らぬ間に妻がそう言う対象になつてゐるのかと思うと何か油断のならないものを感じたのである。

帰宅して此の事を妻に言う

「何を言つてんのよ。あんな子供——。相手にならないわ」と此れ亦言下に答えた。

「じゃ、もう少し大人になつたら相手にするかい」

からかい半分に追及すると

「馬鹿も休み休み言いなさい」

非常な勢いで怒鳴られた事がある。

それが今日、突然

「木田さんと呼んでらつしやい」

と言うのだからおかしい。

疑惑と嫉妬が胸の中にわだかまる。

会社から帰りを誘つて連れて帰ると、妻はいそぐと食卓の支度だ。いつもより身だしなみもいい。

「どうしたんだい？ いやに浮きく／＼しているね」

当てこすりも感じないで

「あら、そう——。今に解るわヨ」

酒が出た。

渡してある賭費では此んな事は出来ない筈だとケチな事を考へてゐると

「木田さん、今日はあたしの奢りよ。大いに召し上がつて頂戴」

私の胸の中を察するような言い方だ。

「すみません。どうも——」

「どうぞ御遠慮なく……」

彼女はしなしなとした手つきで木田の盃に酒をつぐ。

私は二人の動作を細大洩らさず見届けねばならないと、じいつと眼をこらしていた。

「ハイ。あなたにも一杯——」

その氣をそらすように徳利をこちらに向ける。

「まあ、コワイ顔なこと——」

その声で木田も私の方を見たので、私はわざと顔の筋肉をゆるめて

「もともと此んな顔なんだよ。木田君のように優しい顔じゃないからね——」

此れも当てこすりのつもりだったけれど、やはり利目がなかった。

「ほんとうね。なんてお優しい顔なんでしょう。女形に見たい位——」

木田は照れてむやみに盃を開ける。



「さア、どうぞ。どし／＼召し上がって頂戴ね」

妻は亦やたらにすすめる。

少し酔つて来た木田は何か流行歌を口ずさみ出したようだ。

私は妻の意図をうすうす感ずいていた。

恐ろしい考えた。

此の前、犬の首輪を首にくくりつけられた日から数日して妻は本ものの犬を女学校時代の友人から借りて来た。真ッ白な可愛らしいスピツチである。言うまでもなく牡犬だ。犬の名はジョウと言った。

妻は始終その友人の家へ行くのでジョウはよく馴れていた。

然し私の事は知らないので私の顔を見ると、ウーとうなつた。

「ジョウ、ほえておやり」

と妻が言うと言をむき出して本気になつてほえる。

借りて来た晩私は亦も首に首輪をつけられ箆筒にくくりつけられた。犬は離してある。

「ジョウ、ほら、ミルクよ」

妻はからだにミルクを塗りジョウを呼ぶ。彼は喜んでミルクをなめた。

「フフフ……。くすぐつたい……」

妻は惨酷な眼をしてくくりつけられた私を眺めながら淫蕩に笑う。

「あなたもミルク欲しい？」

私は返事の代りに身をくねらせて彼女の傍に行く。

犬がウーとうなる。

「駄目よ。ジョウ」

妻は右手でジョウを裸のからだに抱きかかえた。

私は両手両足をくぐられたまま、くね／＼と近づく。

「フフフ……。もう少し、もう少し。此処までおいで。あま酒しんじよ。ミルクを上げよ……だわ」

言いながら彼女は少しづつからだをずらせる。

もう少し、もう少しだ。眼の前に彼女のからだがある。然かも届かないのだ。

「意地の悪い事をするなよ」

「フフ……。上げるわ。上げるからワンと言いなさい。ワンよワン……」

それを聞くとジョウが尻尾を振りながらワンワンと二度ばかりはえた。

「お利口ねえ。ジョウ……。ほらミルクよ。ミルクよ」

ミルクのしたたるからだを犬になめさせるのだ。私はガマンが出来なくなつて、

「ワン、ワン……」

犬の真似をする。

「ホホホ……。下手なほえ方ねエ」

彼女はなかく／＼私にミルクをなめさせようとしなない。

「ワン、ワン……」

馬鹿々々しい話したが、私は夢中になつてほえた。すると、

ジョウも負けずにほえたてる。

「ワン、ワン……」

「ワン、ワン……」

犬と人間が一人の女を前にして、ほえる競争だ。



「やつぱりジョウの方がうまいわねエ」

妻はそう言いながら亦もミルクをジョウに与える。

「ワン、ワン……」

愚かしくも私はほえたてる。

ほえ続けて声が枯れそうになった。

犬を抱きながら、やつと彼女は私に、にじり寄つて来た。タ

ラ／＼と横坐りになった彼女の膝のあたりにミルクが流れる。

私は舌をならしてそれをなめた。然し、それ以上は首輪がしまつて届かない。

私はしやにむに彼女の膝の間に首をつつこんで行こうとした

「駄目よ」

彼女は優しく言いながらも、無慈悲に髪をひつつかんでグイと床の上に押し倒した。

私がバツタリ倒れると

「オホホホ……」

彼女は小気味よげに笑った。

それからどう言う事が起つたか——。

ああ、言うもけがらわしい事だ。

犬が主人の地位に就いたのである。

妻はわざと顔を近々と寄せて来てその表情を私に見せようとした。

余りの事に顔をそむけると、亦も髪をひつつかんで私の顔をねじ向け

「御覧なさいよ。犬が喜んでゐるわ私も喜んでゐるの……」

眼を血走らせ息をはずませながらそう言う。

犬に対する嫉妬……いや嫉妬などと言う生ぬるい感情を通り越した激情の嵐が私のからだ中に渦まいた。

「チキシヨウ、チキシヨウ——」

私はわめきながら、その辺を転げまわる。鎖が亦も、もつれて短くなり身動き出来なくなる。

彼女はそう言う私に、尙もその姿態を見せびらかせて楽しもうと、丁度動物園の孔雀が羽をひろげてグルグルとからだを廻して見せるように、私の傍でグルグルとからだを廻して見せた。そして鎖が短くなつて私がだんだん彼女から遠ざかつて行くくと、それを追うように彼女の方で私に近づいて来た。

何度目かの、そのいやらしい孔雀の舞いが続けられている時犬の尻が私の目の前に来た。その向うに妻のからだがある。犬は威勢よく尻尾を上げているのでその光景は向うまで丸見えだ。二人——いや、一人と一匹は尙も近ずいて犬の両足の間に私の顔がはさまつた。

私は咄嗟に首をねじると、その犬の足にガブリと噛みついた。犬がウウーとうなる。

「どうしたの？ ジョウ——」

中断した動作に、欲情に濡れた声が少しいら立っている。

私はそれですます嫉妬をあふられて一層強く噛んだ。

ウウー……犬はうなり声を高めると、

「ジョウ……」

と言う妻の声にも耳をかさず、振り返りざま私の肩先に噛みついた。

「あッ！」



と言つて私はのけぞつてしまつた。肩先からは血がタラタラ流れる。

私の声を聞いて妻も振り返つた。

そして、私のその様子を見ると、声を立てて笑つた。笑い終ると、命令的な口調で

「ジョウ——」

と叫んだ。その声を聞くと、ジョウはもう私の存在など忘れてしまつて狂つたように彼女に奉仕するのであつた。

(4)

此の異様な孔雀の舞いは青い電球の下でその後何度も営まれた。

そして妻は近頃になつて、それにも飽きたと言う。

「もつと面白い遊びはないかしら？」

此れが恐ろしい妻の口癖だ。

妻は眼をキラキラ輝やかせながら凄まじい空想にふける。もつと私が苦しみ、もつと私がもたえる計画を考え出すのだ。

その結果、木田を招こうと考え出したのである。

木田を犬の代りに使おうと言うのだ。

私の眼前で木田と姦通し、私のもたえ苦しむのを見て楽しむと言うのだ。それに違いない。

果して——。

木田が酔つて来ると

「木田さん、お願いがあるのよ」

びつたり木田に寄り添つて、如何にも仇つぽい流し目を送る木田は私に気がねして、チラと私を見ながら少しからだを引こうとした。妻は

「いいのよ。主人に遠慮なんかなさなくても……。主人はあたしよりお酒の方がいいんですから」

その腕を捉えて、却つて自分の方に引き寄せ、

「ねエ、聞いて下さる？」

木田は亦私の方を一寸見る。

「あなた、木田さんがあなたばかり気にしてらつしやるわ。一寸あちらへ行つていて頂戴……。納戸で待つていて。……電気ストーヴをつけておくのよ」

私は妻の命令でスゴスゴと立ち上がる。

「奥さん、それではあんまり……」

木田が私に同情してそう言うのを

「いいんですよ」

「いや、ボ、ボク、困りますよ」

「木田さん、あなたもあたしの言う事をおききなさい」

妻の命令的な口調に合うと、木田もヘナヘナと立ちかけた腰を下ろした。

私は一人、納戸に消えた。

納戸には此の間からのスピッツが飼われている。動物的な臭気がムツと部屋中に立ちこめていた。

どうせ、動物的な欲望の練獄だ。私は青色電球と電気ストーヴをつけると裸になつて床にうずくまつた。隅の方でスピッツが敵意のある眼をしてにらんでいる。



私はスピッツから眼をそらすと、冷たい板の間をじつと見詰めたが、物思いに耽った。

最初、妻は私一人のものだった。それが、だんだんに自分で自分を汚し、続いて犬にその肉体を与え、今度は亦、木田のものになろうとしている。

自分で自分を汚した時も、犬にその肉体を与えた時も、結局は最後に私のものになるのだったが……今度は然し相手は人間である。今までのように果して最後の最後には私のものになるであろうか。

私は激しい嫉妬に燃えた。胸のつぶれるような嫉妬だ。そして此処まで彼女を育て上げた私のマゾヒズムの愚かしさに今更後悔した。

それにしても妻は、どんな風にして木田を口説いているであろう。もう接吻位はしたか知ら？私はやり切れない思いで頭をかきむしった。ああ然し此れがマゾヒストの快楽と言うものなのだ。

サラリと襖が開いた。

二人とも裸である。

木田はさすがに恥かしそうだ。

見知らぬ男の姿にジョウがウウとうなった。妻は後ろ手で襖をしめながら

「ジョウ。お黙まり」

妻の声にジョウは尻尾を振る

「フフ……、あたしを見て喜んでるわ。畜生でも解るのねエ」



ジョウは妻の足もとに
じやれついて行く。



「だけど、お前も今日は見物だわよ」

彼女はジョウのつけている首輪に鎖をビチリとはめた。

「さあ、お前はこちら——」

いやがる犬を引っぱって、いつも私のくくられるダンスのカーンに鎖をくくりつけた。

犬は悲しそうにクンクンと鼻を鳴らした。

「ウフフ……。順番が来なきや駄目……」

妻のその言葉で、私は木田の済んだ後ジョウも亦その饗宴にあずかれるのだと言う事を知った。その間……一人の男と一匹の牡の長い饗宴のすむまで私は待つていなければならぬ。

ああ、考えてもやるせない思ひだ。

「あなた、自分で首輪をおつけなさいよ」

ボンヤリしている私を促しながら彼女は鎖の一端を持って待っている。

自分で自分の首輪をつけ終ると、ビチリ——音がして私の首輪にも鎖がはまった。

「さあ、あなたもジョウと一緒に見物よ」

鎖の一端はジョウのくくられているカーンにつながれ、いつものように手足をくくられる。

ウウ——ジョウが敵愾心を燃やしてうなつた。

「ジョウ。おとなしくするの」

彼女の一声で亦尻尾を振ってじやれつきに行こうとする。が今度は鎖がある為に近づくけない。ジョウはクンクンと再び鼻をならした。

「木田さんも首輪をつけて貰うわ」

木田は適度に酔っ払っている。此の強烈な、官能を刺戟する遊びが面白いらしい。首をつき出すと、ニタニタ笑いながら首輪をつけて貰った。此れで見ると彼も我々が饗宴をくりひろげる間、悩ましくも歩の悪い見物の役目を負わされるらしい。そうとも知らない木田はもう恥かしさも忘れてしまつて

「ウフフ……。似合いますか……」

などと、青い色彩の奇妙な雰囲気、魔力に幻惑されて、はしやいでいるのだ。

饗宴は始まった。

犬は自分の番が来るまでクンクンと鳴き続けた。私も泣きかかった。

木田も自分が見物の役にまわつた時は泣き出しそうな顔をしていた。誠にこの世のものとも思えない、浅ましい光景である

木田は翌朝から私の家から会社に通つた。そして毎夜のように此のあさましい青い欲情の生活が続いたのであるが——。

一ヶ月後に私は妻に逃げられてしまった。

その夜、私の番が来ても妻は私の鎖を解こうともしない。私が、

「早く解いておくれ——」

と言うと

「フフ……。あなたは死ぬまでそうしているのよ」

冷たい眼の色をして妻はそう言い放った。

「ええッ」

驚く私を尻目にジョウと木田を連れて何処へともなく去つて



行つたのである。

鎖を解こうにも手足をくくられている。

「オーイ。助けてくれエ——」

私は声帯が破れるまで叫び続けたが、殊更淋しい所を選んで建てた家で、然も真夜である。誰も来てはくれなかつた。

此の儘だと、餓死してしまふ。いや、餓死どころか、もう少し経つと電気ストーヴが過熱して家と共に私は焼死しなければならぬ。

電気ストーヴ……そうだ電気ストーヴだ……私は大急ぎで身をくねらせてストーヴの傍に行つた。

今でもその時の火傷の跡が両手に残っているが、私は火傷覚悟で両手をストーヴに近づけ細引が焦げるまでストーヴから手を離さなかつたのである。

KK通信

第四号完成

大人気、申込殺到！

(一) 読者通信欄 (二) 代理部便り

(三) 連載小説 地獄絵 行田和子

(四) 編集部便り (五) 短信往来

(六) 原稿募集 (七) 作家の便り

(八) 責絵につかれた男の秘密日記

(九) 読者論壇 泥中の蓮

(十) 旧号消息 其の他趣味記事満載

◎直接購読者に毎号無料贈呈します。

見本一部十円、半年分概算百円

☆吊り下げた女☆

第二組完成す

三態写真集 三枚一組 五百円
キヤビネ版(送共)

前号に於いてキヤビネ版三態を發表しました所、好事家の皆様から大好評とその大胆奔放な企画に嵐のような讃辭を賜りましたが、今回引續いて前回の第一組の後をうけて第二組を完成致しました。第一組二組共三枚一組のキヤビネ版ですが、今迄發表しましたものは全然別個に特写したものであります。吊り下げられた女の写真の決定版としてお奨め致します。

熱かつた。熱かつたけれども此れもあの焼火箸の折檻に比べれば何でもなかつた。

妻も、木田も、ジョウの行方さえ未だに解らない。然し、私は逃げられた妻に対して何の怒りも感じてはいない。寧ろ此の最大の虐待に対して深い慾情をさえ覚えるのだ。

……他の男たちと情痴の遊戲に耽けり、既に完全に私を忘れ果ててしまった妻の事を思うと私の胸は高鳴るのだ。

そして、一人納戸の襖を開き、青い電球をつけ、妻が置いて行つた首輪や鎖やその他の責め道具をもて遊ぶのである。

此のみじめな私……此れがマゾヒストの果ての果ての姿であるのだ。底知れぬ快樂の淵に沈む姿であるのだ。妻よ！

(完)

◎鎖を纏つた女◎

豊満な白磁のような女体の肌に喰い入つたくさりの酸し出す微妙なコントラスト。鎖を纏つた女体の美しさを追究してこゝに五枚一組の写真集二組を完成しました。

第一組 (五枚一組) 二百円(送料共)
第二組 (五枚一組) 二百円(送料共)

◎第五篇、第六篇迄お求め済みの方々は御照会下されば、第七篇以後は誌上發表に先立つて御知らせ致します。価格は従前と同じ予定です。

伴なう責めの衝動心理

☆ 第一回讀者座談會 ☆



日時 昭和二十七年十月廿六日
場所 曾根崎新地料亭新井

出席者

(敬称略)

- (A) 河合 爲造 (三十八才京都)
- (B) 西沢 義一 (四十二才大阪)
- (C) 上田 奈津子 (二十五才兵庫)
- (D) 三谷 芳子 (三十六才京都)

司会者 辻村 隆

○責めの写真を組上にのせる

司「今日は折角お休みの日ですのにわざわざ御遠方のところお集り下さいまして、どうも有難う御座いました。実は予想外に、座談会出席希望の方が多く、兎も角、略歴など見せて戴きました結果、本日第一回の座談会を開催する運びとなりました。幸い御婦人の申込みがお二人ありましたので、今回は責めの交悦を伴なうものに主眼を置いて話をすゝめて行き度いと思います」

B「どうも素面では照れ臭くて、来しなにちよいと一杯やつて来ました」

司「話が話ですから、実の処、御連絡した方全部が、おいで下さるかどうか、心配しておつたのですが――。特に御婦人にね」

D「料亭の入口を這入るとき、やはりどきどきしましたよ。もしも辻村さん居られなければ、何と云つて訊ねようかと思ひましてネ」

B「初対面だし、目印の紫のインカチを胸にさした人と云うだけでしたからね」

司「まあ、それは御互いさまですよ。ビール、酒の準備もしておきましたから、飲み乍ら気楽に喋つて下さい。話がプライベートな事なので、話し難い点もあるうかと思ひま

交悦に



何です？口切りに——」
 A「いやあ、どうも——。そう改まされると困りましたね。御婦人方も居られる事ですし」
 司「まあ、そう仰有らずに、何れ此の御婦人方からも凄いのが飛び出す予定ですから」
 —一同笑声—

すが、KK通信や、本誌の読者通信欄で、夫々の半面を存じておりますので、余り堅苦しくならず、ざつくばらんに、どし／＼忌憚なくお話願いたいのです。河合さんの寄稿など相当凄いです、如

司「本誌の縛られた女の写真、それに喜多さんの絵なんか御覧になつて、あれはどうですか？」

A「他の雑誌にないものだけに、好事家にとつては、確かに強い魅力ですね。こう何と云うか、身がひき締る様な——」

司「色々御批評は戴いてるんですが」

A「責めの、本当の味の出ていないのを、時折見受けますね。云うなれば、喜多さんの絵

にしても綺麗ごとでね。勿論縛られた女という題だから、あれでもいゝわけですが、も一つ苦悶の表情といったものが欲しいですね」

B「その点、伊藤晴雨氏の写真や絵には、髪の毛に苦悶をまざ／＼と出している。勿論時代感覚のずれはありますがね」

A「大正時代から昭和の初期にかけてだから、あゝした日本髪も一般に見られたが、パーマやさんぎりの時代で、髪之苦悶は、かつらでもない限り、実際的には無理だね」

B「いえね、私は毛髪に余り関心はないんですよ。唯、あの調子を身体の他の部分へ及ぼせば、相当いゝものが出来ると思うんですよ。雪中の責めは、玲子画集にもものつていましたが、あの画集程度のものは、本誌にのせ

てもいゝんじゃないですか？」

司「構わないと思います。けれどね、スツカリ種を出してしまうと、画集が売れなくなりますんでね。(笑声) いゝのは別あつらえにしておかないと——」

B「写真の方ですがね、殆んどヌードですが、責めは何にもヌードでなくともいゝでしょう。むしろ猿轡をはめたり腰巻きが乱れたり……」

A「責めと露出趣味は確かに違いますね。これは雑誌の口絵なんかに掲載出来ないかも知れませんが、ヌードに、単に縄を巻きつけたものより、長襦袢に腰巻姿で、逆吊りにした様なものがほしいですね」

司「ヌードより、緊縛感と云うわけですね」

A「そうなんです。縄が柔かな丸紐なんかだつたりすると、ぶつこわしですね。モデル嬢には気の毒でも、荒縄が肉に喰い込む程度に縛つて欲しいですよ」

B「その点、伊藤晴雨氏は、モデルに自分の奥さんを使われたんだからいゝのも出来るわけですね、雪中の責めなんか、欲得づくじや出来つこないですよ。本誌の編集部も、責めに興味を持つ女の人から、選り出して使うと

満点なんだが、十月号のはい、ですよ。」

司「やつと褒めて戴けましたね。実を云うと縛ったヌードの構成は、殆んど私がやつたんです。問題はモデルですが、仲々いいのが見つからなくてね。縛ると云うと逃げ出されたり、先方から縛つてもい、と云う女は、骨皮筋エ門で使いものにならなかつたりで——」

A「なんだか羨やましね」

B「ウン、断然一度でい、からその構成とかを拝見したいものです」

司「ラクじやないんです。旅館の一部屋で二三時間程の間に何十枚と、色々のポーズをとるんですから——真夏なんか、しめきつてあるからフラ／＼になつたですよ。何れ、縛られたヌードの撮影苦心談を、本誌に書きませんが、いゝのはその何十枚の中から数える程ですよ。あとは余りきつ過ぎたり、修正が出来兼ねる程、股の部分が露出していたりしてネ。十月号の挟み込みの、腰のエロスなんか、一寸類例のないものでい、でしよう」

A「ありやい、です。芸術的だよ。それに巻末の後姿の写真は秀作ですね。先日送つて戴いた分譲写真にはうんといゝのがあつた」

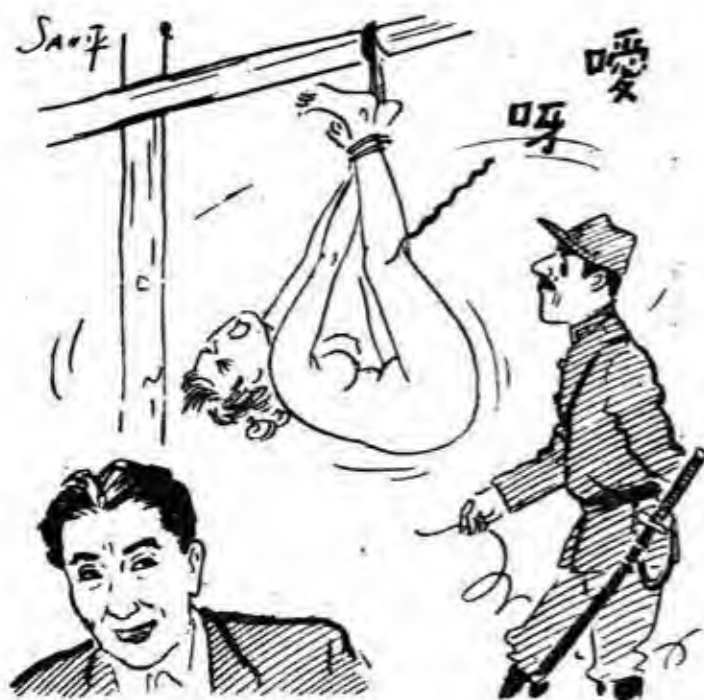
B「十一月号は最後の二頁を飾つただけで淋

しかつたですね」

A「あの分譲写真ですが、股の辺り削除なしの、修正を加えてないものは駄目なんですか？——」

司「さあ、そうなると唯じや済まんですね。あれで精一杯、ぎり／＼の限界なんです——」

A「それじやね。これは本誌へお願いとして、今迄のあゝした巻頭のバラ／＼写真でなく、一枚に大きく、出来れば折込みの、切り抜いて額へでもはめられる位のものを欲しいですね」



B「本誌の写真を広告に使つた見世物がありますよ」

A「何処なんです、それは——」

B「先日、千日前へ遊びに行つた時、変態資料の見世物の入口に、切抜いて貼つてあつたんですよ。あゝして他のものと並べると、満更捨てたもんでもないですよ」

司「そうらしいですね。えーと、たしかR誌か、S誌だつたかに、逆吊りにしたのがあつたと云う話ですが、御存知ですか」

A「あゝ、あれですか。ありやインチキですね。あれは恐らく、写真を逆さにしてバックと焼き合せたトリック物ですよ。何よりの証拠には、あんな細い縄を素足に巻きつけていながら、全身の重味がちつとも脚にかゝていないんですよ。もつと太い縄でも、ぐつと肉に喰ひ込む筈ですよ。細縄では、足首に手拭か布片を巻きつけた上を縛らないと、絶対に辛抱出来ないものです。ねえ辻村さん」

司「その通りですね。五六日前の撮影の時モデルを逆吊りにして見ましたが、ひどく痛そうで、絵に書いた様なポーズには仲々なりませんね」

A「よく一人で吊せましたね」



司「腰掛つきの机あるでしょう。その机を鴨居の下へ持つていつて、モデルに机の上に昇つて貰つて先ず脚を鴨居に縛りつけ、手はあとから縛つて、机を外したんです。モデルは十四貫近くある娘でしたが、ミシ／＼と鴨居がきしんで、足首にギュウつと縄が喰い込んできますよ。ところで上田さんは、お便りによりますと、御主人から逆さ吊りにされた様に書かれてありましたが、どんな方法で——」

C「はあ、あのう……」

B「上田さんは御主人から責められる方なんですね。」

C「ええ、まあ……」

A「自分の好むところですか、それとも好まざるところですか——」

C「まあ／＼大変、皆さんでそう責めないで

下さい。(笑声) いつの間にかそうなつてしまつたんですよ。勿論主人から責められるんですけど、主人以外だと大変ですもの——

(笑声) 今日、実はこうして参りましたのも、主人には内緒で買物に行くと言つて出て来たんですよ。こんな集りに出た事知れたら益々責められるにきまつてますわ」(笑声) 司「お便りによりますと、相当凄いですねが——、縛られないと眠れないなんて書かれてありましたね」

C「まあ、嫌だわ、あれは嘘ですよ。まさかこんな事になるとは思つてもいなかつたもんですから、ついフラ／＼と——」(笑声)

司「でも全然創作と云う事もないでしょう」

C「主人の蔵書の中に、この種のが沢山ありまして、主人が勤めに出た後、拾い読みするうち、つい変な気持ちになつちやつて——半分は本当、半分は想像で書いて送つたものです」

A「その手紙、一度見たいものです」

C「今では、はしたない事書いたものだ、いさ／＼か後悔してますのよ」

司「後悔先に立たずつて訳ですか、まあその本当の半分を、追々聞かせて戴きましょう。」

すつかり前置が長くなつてしまいました、それでは急いで本題に入りましょう。責めに関心を持たれた動機と云つた点で、一つ河合さんから……」

○特高に誘発された拷問遊び

A「外地の特高の残酷さは、皆さん既に御承知でしょうから、長々しい話は止めますが、私が満鉄職員としてハルビンに居た時、偶々同級生の特高を訪ねた折、奴さん何の容疑者だか、その時、満人の女を責めていた最中だつたんです」

司「いくつぐらいの時なんです。それは——」

A「大東亜戦争の勃発前で、日本の勢力華やかなりし時代ですから、あれは昭和十五年頃です。奉天で今の女房と一緒にゐて、ハルビンへ転勤したのですが、二十六才頃でしたかな——」

司「結婚は恋愛結婚？」

A「まあ、そんな様なもんです。親爺の知らぬ間に勝手に一緒になつたんだから——。ところで先刻の話ですが、特高の女を責めるやり方は、大抵後手に縛つて床へ転がして、靴で踏みじつたり、吊し上げたり、椅子に

縛りつけたり、陰毛を煙草の火で焼いたり、箒や、ステッキや棒を局部へ突込んだり、まあそんなやり方でしたね。けれど、その時はもつと惨酷だったんですよ。私も、それ迄、二三度、満人の女の責められていたのを覗きました、縛り上げて殴つたり蹴つたりでした。——」

B「無実の者も随分おつたと云う話ですが」
司「何て云うか、一種の弱い者いじめですね」

A「大方はそうだったでしょうね。その時は四月頃で未だ〳〵寒かったのに、二十五才の満人の媳婦（女房）を素ッ裸にして、天井を通っているスチームの鉛管に、手脚と一緒に縛つてぶら下げてあつたんですよ。奴さん、今面白い事をしてやるから見えてなと云つて、二三米程のコードを取り出すと、一方の被覆をむしり止つて裸線を出し、ソケットのついた方を電源に差して、女に近ずくと、電流の通じた裸線を、いきなり中へ押し込んだのです。唆呀〳〵と泣き叫ぶのを尻を抱えて離さない。これをやられると、どんな女でも飛び上るそうです」

B「一体どんな気持でしょうな——」

D「ひどい事するわねえ」（DとC顔見合せて眉をひそめる）

司「男にも使うそうですね」

A「尿道の先から裸線を挿入するらしいですが、見た事ありません」

司「河合さんはそれが動機なんですか——」

A「動機と云うと一寸変ですが、責めへの興味は特高の拷問によつて、誘発されたですネ女房なんか、凄いな、実はこれ〳〵と寝物語に話をするでしょう。こうだ、あゝだと身振り手振りが、いつしか女房を相手にして演じるうち、すっかり面白くなつちまつて、子供も未だない二人暮しの気楽さから、拷問遊びなんて名をつけてましてネ、酔払つた晩など、〳〵おい、今夜は拷問だぞ〳〵なんて云いましてネ、お蔭で無聊から随分救われました」
司「拷問遊びですか、成程——。痛くない、可愛がられた、愛の拷問の方法は後廻しにして、西沢さん、貴方の動機は——」

○立木に縛りつけてM検・解剖

B「そうですね。私など既に小学生のチンピラ時代から人を縛つたり、いじめたりする事が好きだったんですから、その歴史は大分古

いですよ。子供の時分、巡査がサーベルをがちやつかせて泥棒と格闘し、脚絆、鳥打帽の刑事が悪漢を追跡して捕縄を打つと云つた式の、連鎖劇や、警官の殉職美談がよく芝居にかゝつたもんですよ。それも今の様にピストルの射ち合いと云つた派手なものでなく、手錠、捕縄、サーベルの時代でしょう。それで泥棒ごっこがひどく流行つて、腕白仲間二、三人で、縄切れと棒を持つて、泥棒になつた子を追つ掛け廻すんです」

A「よくやつたもんですよ私——」
司「憶い出しますね。幼なかりし頃のスリ





ラー的な味を。私はよく泥棒にされて縛られたですよ。いつだったか、学校の肋木に縛られたところへ、先生が出て来て、皆なワーツと逃げた後、苦笑した先生に縄をほどいて貰った事があつたですよ。先生のその時の訓戒が身に沁みたんですよ。いつも縛られておらずに、偶には巡査になつて縛つてやれ。つて云われてネ」

B「それで、三つ児の魂百迄、唯今、さかんに、モデルを縛つて仇をとつてゐるつて訳——」(笑声)

司「縛られるより縛る方がいゝですよ。少くとも痛くないですからネ」

B「話のお株とつちやいけませんよ。それでね、山ン中なんかでやつてゐるうち、泥棒になつた子を立木に縛りつけて、終いには解剖し

ようとか、拷問にかけようとかいつて、ズボンを脱がせると、散々、黽つたり、いじつたり、糸で先を縛つたり、泥をつけたりしたんですが、それが又馬鹿に面白くてね」

司「今でも裏街辺りで、腕白小僧連が、縄切れをもつてよくやつてますよ」

A「縛られた子を、大人の男女が苦笑しいしその癖、面白そうに見て行く——」

B「今から考えると、泥棒になつた子は、縛られ、いじられる事によつて、自慰的な快感を味わつてたんじやないかと思うんです」

司「或いはそういう事もあるでしょう。小学生時代、既にOnanieを行う者も相当あると云う事です」

B「それで私は思うんですが、既に少年時代から、男女とも、周囲の環境や、斯うした遊びによつて、サドかマゾのどちらかの性質に多少傾いて行きますね」

A「お医者さんごつこで、女の児は触られる事によつてマゾ的快感を感じ、男の児はそれを黽り、弄ぶ事によつてサド的な興奮を覚えると云う事もありますね」

司「私の知つていますのでは、子供が悪戯をしたので、懲めの為裏の木に縛られた。それ

が度重なるうち、子供はその縛られてる時に、物悲しくて、その癖、何とも云えぬ陶醉を覚えて、縛られるのが愉しみとなり、縛られて打撃を受けたのが為に、尙一層眼に余る悪戯をする様になつた。これなんかも判つきりマゾの傾向ですね」

B「私は中学校の寄宿舎生活で、三年から五年迄の三年間、同室の友人と同性愛に陥つたんですが、それも二人で柔道の様な相撲の様な、まるでレスリング見たいに搦みあつて騒いだ時、冗談に彼を柔道の帯で縛つたんですよ。すると急に温馴しくなつて、私の意の儘になるんです。その時Mを解剖したのが始まりで、卒業迄、夜になると、彼を様々に縛つて、彼の体を黽つたんです。当然の事Onanieを伴つていましたが、彼は私をFellatioによつて満足させました。この場合なんか、私がサドで、彼がマゾだつたと判つきり云えるんです」

A「すると、今では奥さんを相手に？」

B「とても、大きい子供が四人、同じ屋根の下で枕を並べてゐるんですから、とても女房を縛つたりは出来ません。それに女房はなんて云うか、責めに対して快感より疼痛を

感じる性の方ですからね」

司「責めは結局、結婚以後ですか？」

B「女房には責めらしい責めもしません。その代り、縛つていゝ女は、別にチャント居ります。この辺りの近くに居つた女です」

司「二号さん？」

B「でもないんだが……、何かの雑誌に出ていた(契妾)(輕妾)と云うやつで、すつかり世話してるわけでもないんです。月々何千円かの補助をしてやつて、それで私が出掛けた時、私の意の儘にサービスするんですよ。縛つたり、性慾の捌け口を求める為、サラリを払っている様なもんで、氣楽だし、遊びに行くよりは反つて安上りです」

司「近頃の未亡人に多いそうですが、若い娘にも、相当そんなのがあるようですね」

A「アルバイトのつもりなんだから、女の貞操に対するモラルが變つて来たんですね」

司「金と暇のある男にとつて、全く都合よき存在ですね。赤新聞なんかの、結婚媒介や、世話したしと云つた広告は殆んどがこれですよ。ところで上田さん、貴女は御主人から縛られる方なんですが、思い切つてひとつ、話して戴けませか。何れ話すつもりで来られた

のでしようから」

○緊縛の最中に地震

C「どうも皆さんの前で、女の口からこう云う事申上げるの恥かしいんですが、今更隠したところで、勘弁して戴けないでしようから申上げますわ。大体ね、結婚後一年目位から、そんな事始め出したんです」

司「随分最初は驚かれたでしょ」

C「えゝでもねその時はもう夢中で。(笑声)それでも、主人が、今夜はひとつ縛つてやろうか、などと云い出す晩は、大抵氣嫌のいゝ時なんですよ」

B「そりや、私も御主人の氣持がよく判る」

司「御互いに氣分のしつくり行つた時でないと縛つたり、縛られたりする氣にはなれないですからね」

C「そうなんです。でも一度だけとつても怖ろしかった事があるんです。忘れもしませんが、確か秋の終り頃の、未だ子供もなかつた時分でしたが、その夜は、裸にした私を、特別念入りに本結びにして、がんじがらめに縛つた挙句、押入れの戸を外してその上に私を仰向けに寝かせ、戸板にはりつけの様に



舞々と縛りつけて、頭を下に逆さに壁に立てかけた瞬間、グラ〜と大地が揺れ出しましてね。さあその地震の時の怖しかった事と云つたら――」

A「御主人はもつと驚いた事でしよう――」

C「すつかりおろろ〜しちまいましたね。何しろ私は素つ裸で身動きはおろか、カーツと頭に血は下るし、猿轡で声も立てられないんですからね。主人の何処にそんな力が潜んでいたのか、戸板の儘ずる〜と私を一気に庭先まで引曳り出したんはよかつたんですけれど、庭先に飛出していたお母さん(主人の母)



三谷さん

に、そのえらい恰好を見られてしまいました——（笑声）主人も私も穴があつたら入りたかつたと思ひました。当分の間、まともにお母さんの顔が見られずに、随分恥かしい思ひをしましたが、昨年その母も亡くなりました、こう云つちや叱られるけど、何だか肩の荷がおりた様で……（爆笑）

司「余り見られたくない図ですね。特に肉親には尙更ですね。でもお母さんは、きつと貴女以上に驚かれたでしょう。うちの息子は何てまあ、ひどい嫁いじめをする子なんだろうて……」（笑声）

C「さあ、どうでしょうか——。縛る事については辻村さんが十月号に書かれた『夫婦愛と緊縛の考察』と云うのあつたでしょう。うちの主人は大体あの気持ですね。だから責

めると云うより、前戯として縛るんだと思うんです」

A「夫婦間では殆んどがそれでしようね」

C「ええ、だから、縛る際、肉が縄と縄との間に挟まると、とても痛いので、私の注文も仲々うるさいんですよ。だから私、主人にはどんな事でもその代り好きな様にさせますわ。先程一寸云われた逆吊りなんかも、縛り様一つで、さして痛くはありませんものね」

B「いゝ奥さんだな——羨ましいですよ」

C「あらッ、だけど、それで主人も私も満足してるんだから、本望ですわ——」

B「すると、奥さんは縛られていゝ気持なんですね」

C「いゝと云えばヘンだけど、主人とだからいゝんでしようね。これが若し強盗にでも這入られて、縛られたんじや、いゝどころの騒ぎじゃありませんよ（笑声）」

司「それで夫婦仲が円満なら、云う事ありませんからね。何だかお惚ろけきかされた見たいですよ。それじゃ先程から、専ら聞手に廻つておられた三谷さんにお伺いしましょう。どうですか——」

D「……（三谷さん笑つて応えず）」

司「ひとの話許り聞いてるなんてずるいですよ」

D「私、どうも口下手なものですから」

司「ただどね、KK通信じや、随分はつきりしてるじやありませんか、喜多さんにお逢いしたいと仰有つてた程なんですよ。貴女も、喜多さんと同じ様に、受身じやなくて、専ら能動的なあなたなんですから、ザツクプランに白状なさいよ。何だつたら私から申し上げますようか」

D「どうもすつかり喋べる機会を失つてしまつて、それで怖気ずいていたんですのよ」

司「どんく／＼仰有ればよかつたのに——。お若い上田さんに喋べらせて、貴女が黙つていゝ術はないですよ。ほら、例の女中さんとの一件なんかからどうですか——」

○黒髪で吊下げた女を責める

D「私がこんな性格を植えつけられたのは、まだ七、八つの頃なんです。母と祇園さんに詣りました時、支那人の大道手品を覗きましたらね、男の児が、弁髪（ひげ）の親方に、太い縄で首から脚先までぎつしり縛り上げられて、大きな袋に入れられて、袋の口をかんぜよりで

封印されるんです」

B「私も時々見ましたよ。金を集めると、掛声諸共、縛られた少年が縄から抜けて現われるんでしよう。支那人の子にうんと酔をのませて、骨を柔かくして換骨脱胎自由にするとか書いてますよ」

司「今なら児童虐待で、絶対許されないでしょうな——」

A「サーカスなんか似たりよつたりですよ」

D「今、西沢さんが云われた様に、そのお金を集める時が、とてもひどかつたんです。両手を肩の辺りまで後手に縛り上げて、皆にぐるりと見せて廻ると、丁度私の前辺りまで来た時、いきなりその子の縛った両手の腕に棍棒をさし込んで、ぐいと振じ上げたんです。コリツと骨の外れるヘンな音がしたと思つたら、後手が、胸の乳の辺りへ逆転して、その骨の外れた両手を縛った縄を、ぐいぐい引つ張り乍ら引曳つて行くのです。男の子は肩の振じ曲つた犬の様な恰好で、ポロ／＼涙をこぼし乍ら頭を下げて廻るんです」

A「惨酷だねえ——」

D「私、真蒼おになつて体づをル／＼震わせ乍ら、その癖じつと見つめていたんです。何

か虐めて見たい気持ちになつたんですから、矢つ張り子供の頃から変つていたんでしようかしら……」

B「怖し見たしの気持は、子供心には誰だつてあるもんですよ」

D「それにね、人通りの中を、深編笠の囚人が、手錠はめられたり、両手縛られて連れて行かれる事あるでしょう」

司「護送される時？」

D「多分そんな時でしょうね。あゝした光景なんか、その後をついて行つて迄、眺めたもんですよ」

司「女中さんの件に行きましようか」

D「そうね——。私、既に皆さん御存知かと思ひますが、主人に死に別れて四年になるんです。女中と二人で独り身を持て余していたんですが……」

B「御商売は？」

D「今のところ主人の残してくれたもので、売喰いなんですけど、株を少し許り持つておりますので、まあどうにか——」

A「金と暇があれば、次はどうしても変つた刺戟が欲しくなるのが順序ですな」

D「女中は二年許りおる娘で、よく気もつく

し、ハキ／＼してるので可愛がつておりましたが、或る時用事云いつけて、待ち兼ねているのに、親類へ寄つたんだとか云つて、泊つて来たんです。本気でもなかつたのですけど、つい一寸ひどく叱りましたらね、泣き乍ら、奥様の気のすむ様にして下さいっていうんです」

B「その気のすむ様にしたのがそも／＼の事の始りですか」

D「まあそんなところね。私も泊つて来たのが、男でもある様に思えて、後で分つたんですが、本当に親類へ泊つたらしいんですが、その時は妙に疑つて、それじゃ私の気の落む様にして上げると云つて……」

A「後家のヒステリーだな、そいつは……」

(笑声)

D「云い難い事、判つきり云いましたわね。とは云うものゝ事実その通りなんだから仕方ないけど……(笑声) 気がイラ／＼して、その上無精に虐めたくなつて来て、その娘をズロース一枚にすると、扱帯で両手を後に縛り上げ、頭の毛髪を握つて、ズル／＼襖のところに迄引曳つて行くと、爪先がたゞみすれすれにつく程の高さに、髪の毛を真中から二つに



辻村記者

分けて鴨居に縛り合せて、吊り下げて、さあ、ゆんべは何して来たと云つて、物差しで責め始めたんです」

A「玲子画集にあつたですね。そんな図が……」

司「(画集をバラ／＼めくつて) あゝこれですね。時雨／＼なんですよ。感じはそつくりですね。でそれから——」

D「男なんかと、絶対に何もしないと云うんですよ。それじゃ調べれば分るからと云うとえゝ、調べて下さいって云うんでしょ」

A「ズロースを脱がしたその結果——こりや仲々面白くなつて来ましたね」

D「娘時代は綺麗なんですね、私なんかと違つて……。 (哄笑) だけど私としては今更納まりがつかないし、こうなると責めて見たい」

気持一心でしよ。主人が生前私にさせた鍼灸

用のハリをとり出してくると、お乳や、腿

や、あそこをチクリ／＼突いたんですが、私

が激しい興奮を覚えると同時に、娘の方でも

いつの間にか顔を紅潮させて、ハア／＼苦し

み乍ら、その癖、眼はうつとりと閉じている

んです。それからはずつかり馴れ合いで、繰

り返す様になつたんです」

A「娘さんにもたしかマゾ的傾向があるね」

D「そうでしょうかね。相当強く縛つたり責

めたりしても我慢してますし、道具なんかつ

かう事もあるので、飲んでいる様に見

えますよ——」

B「道具と云うと、張形と云つた様なもの

？」

D「えゝまあね。こけし人形とか、お野菜だ

とか……」

司「三谷さんのすつかり雄弁になつたところ

で、それじゃ皆さんからも、変つたところを

話して戴きましようか——」

○二人の女を縛つて両天秤

A「私は、二人の女、つまり女房と女房の妹なんです、二人を同時に縛つた事があるん



です。実は、女房を縛つてさかんにあれこれしてるところを、一緒に暮している女房の妹が夜中に便所へ降りて来ました時に、何気なく覗いたんですね。始めは気付かなかつたが、二三度目に何か外で立止つて覗いている気配を感じたのですよ。フト悪魔的な気持にかられて、猿轡で腰巻一つの縛つた女房の姿を見せてやろうと、いきなりさつと障子を開けて、立竝む、妹を無言の儘引ずり込んで、こんな秘密を覗かれては唯では済まないぞと脅しつけて、その時は厭がる妹を押えつけて、女房の眼の前で裸にして縛つたのが、そ

もくの始まりなんでしてね」

司「よく奥さんが黙ってましたね」

A「始めは嫌がりましたが約束したんですよ。どうせ秘密を見られたんだから三人でやろうって……。その代り絶対妹は犯さないと云うと納得しましたね」

B「妹さんがよく理解しましたね。一寸その心理が分らんですよ」

C「本当ですよ、それ……」

A「本当ですよ。でも流石に妹の方は照れて、床柱に縛られた体をくねらせてうつつむいていましたよ」

B「ずっと続けているの——」

A「いや、四、五回ぐらいかな、それは……」

B「変った義兄さんをもつて災難だね、妹さんも……」

D「妹さん自身、縛られるのがいゝのと違う？でないとわざわざ夜中覗きにも来ないでしょ。はばかりへ行くついでの際はまだしも……」

A「さあ、或いはマゾかも知れないね、一度なんか愉快な事をやりましたよ。梁に井戸車をつけて井戸繩の両方に、女房と妹を夫々縛りつけた事があります。女房を縛っておい

て、妹を梯子で梁のところまで昇らせ、そこで縛って梯子を外したんですが、二人が宙ぶらりんになつて、女房の足を引つ張ると妹が上る。その儘で落ちてしまいましたが、とうとう終る迄宙に浮いた儘で、辛抱して、一部始終を見つめていましたよ」

B「それで妹さんとは何もない仕舞？」

A「それは約束通り、何もなかった。」

B「辛抱出来ただけえらいですよ。私ならどうだか分らんですよ。でも妹さんは案外、どうにかなつて欲しかつたんじゃないでしょうか。まるで蛇の生殺し見たいで、見せるだけじゃ、犬のお預け見たいですよ」

A「縁談があつてね。それで近々嫁ぐんです。私はそれでよかつたと思うんです」

B「ハズへのサービスはきつといふですよ。性教育満点ですからね」

司「恐らく、上田さんの様に、いつかは縛られて満足する型になるでしょうね。でも河合さんも些か罪ですね」

○責めも亦愉しからずや

C「近頃うちの主人は、よく梯子を使うんです。私の体をグルグル梯子に巻いて、脚首を

杵に堅く縛りつけて逆さに立てたりするんです」

A「梯子の利用法は多いですね。私も女房に使つて見ましたが、これは一人でも扱えますからいゝですよ。両股を思い切り拡げさせて梯子の段杵に夫々縛り、梯子の端を片方ずつ持ち上げて、欄間に掛けると、両脚を開いた逆吊りが出来るんです。そうしておいて、太い蠟燭の短くなつたのをよく用います。次第に蠟が解けて、融け切る直前に灯を消すのです。」

B「熱くないんですか？」

A「焰は上が熱いだけだから心配ないです。唯、解けた蠟は大分熱いらしいですが辛抱出来ないうつたものでもないらしいですね。これを冷えて取出すと、その恰好のものが出来上る。二三度やりましたが、その都度形は違つております。」

B「じゃ一度試して見ますよ。私の方は、例の女はアパート住いなので、余り大きい声を出したり、悲鳴あげたりして貰うと、隣りへ気兼ねしますので、まあ色々に縛つて、咬んだり吸つたりの程度ですが、先日二人ですっかり酔つ払つた時、女から、思いきり虐めてく

れと云い出したんで、よし来たと許り、酔眼もうろう、思案の挙句、ミシンの上に女を縛つてのせ、天井を通つてゐるスチームの鉛管に胸、腕、腹、腰、脚の五ヶ所を縛りつけて、ミシンをよけたんです。丁度宙に泳いだ形で、その体に、墨くろくろくとあちこちに怪しげな絵をかいたんです。乳にベニス書いたり、頬つべたにワギナ書いたりしてね。」

司「外国の様な鞭打ちはやりませんか。」

B「あれは痛いですよ（笑声）可愛い、女を痛めつけて、それでこちらが快感を覚える様なやり方は、女が可哀そうですからね。」

A「と云うと、緊縛は痛くない様にきこえますね。あれだつて結構痛いですよ。」

B「けれど、向うの責めの鞭打ちは曲がありませんよ。その点緊縛は千差万別ですからね。第一アバウトでビシ／＼音を立て、御覧なさい。噂だけでも大変ですよ。」

C「主人なんかも滅多に叩いたりなどしませんが。一度バンドで叩かれたんですけれど、痛いから止めてと云つたら、それつ切りしなくなりしました。向うの絵や写真を見て真似て見たに過ぎないんですよ。」

A「外国では子供が悪戯すると、お尻をビチ



ヤ／＼叩く。鞭で脅す、まあそんな身近な習慣からあちらではそうなつたんでしようね」
B「体中に油を塗りつけて二人でヘト／＼になるまで追つかけてこするのも変つています。」

A「私は時々強姦ごっこをやる。出来る限り抵抗し暴れてくれと女房に云うんです。そして無理矢理押えつけて、縛り上げて、裸にして、尙も抵抗するのを無理に片付けてしまふ。これは面白いですよ。」

C「これは縛るのに関係ありませんけど、二人でくじをひいて当たった方は、すっかり赤ち

やんになるのです。お食事もおしつこもお風呂も着物も一切、赤ちやんになつたつもりで委せきりになるんです。」

A「奥さんが、御主人に抱いて貰つて両足をあげてシー／＼（爆笑）愉快ですな」

司「皆さんのお話は如何にも愉しそうで、緊縛や責めは夫婦生活や性生活をエンジョイしてる様です。行為そのものが性戯の前奏曲ですが、その点三谷さんだけです、違いますのは……」

D「私だつて、あの娘はとつても可愛い人ですよ。だから虐めて見たいんです。この気持分りますかしら……」

A「分りますよ大いに——」

司「それで性的なことはいないんですか？」

D「自由を奪えば、自然そうなりますわね」

司「喜多玲子さんなり、松井鏡子さんに、その辺のことを書かすと面白いんですがね」

A「次回は、喜多さん、松井さん等を囲んで是非やり度いものですね」

B「大いに賛成です。」

司「お伝えしておきましょう。大分時間も経ちましたのでこの辺で終りにしたいと思います。長い間、いろ／＼と有難うございました。」

（終）

糊の執著

長岡 変 一 郎



此の一篇は私が十二月号に「糊と泥と砂」と題して発表した体験記以前の一連の告白物であります。

「どや。秀吉ッとん。また、一遍やろうか？」
そう云つて兄弟子の善吉ッとんが「ニヤリ」と悪戯っぽい薄笑いを、口元に浮べて私を見る。

「よッしや。やりまよ。わてが先だつせ」
待つてましたとばかり私の手は、早くも番板の下から、風呂行きの金盥一杯に糊の入つた其の器を取り出す。

「やろか、」とは一体なにをやるのか？。

私は、糊のスレ／＼一杯に入つた真鍮の金盥の底を、右掌の上に載せて、一呼吸。

「いよッ」

と声を掛けてその右腕を上下させると、見事。糊入りの器は中味を落さずに、クルリ。と一廻転して又もとの掌の上に底を載せる。
「どうや、善吉ッとん。こんどはあんたやで……」

私は直ぐその金盥を相手の、善吉ッとんに押しつける。

私はその頃妙な癖を持つて屋た。

それは、主人が階下に降りて居て、暫く二階の仕事場に昇つて来ない事を見定めた時、決つて善吉ッとんに向つて、此の様な遊戯を挑戦するのであつた。

幼い頃から少し変つて居た私は、この頃妙に「糊」アノ粘ッこい米糊を弄ぶ事が、好きで好きで堪らなかつたのである。

幸いにも、既製洋服裁縫職のこの家へ奉公したので、多い時には、五百匁位の糊を卸買して置く事もあつたので、さてこそ、この仕儀である。

私は極めて手際よく、その糊入りの器を廻転させる。時には「二廻転させる事に仕様」など、兄弟子達に提議して誘う。

そして、ほんとうの自分の目的は、程よい頃を見計らつて、ワザとにスカをくつた様に見せかけて、器の上側を掌に受止め、手が糊

だらけになった時の、その快感が味わい度いのであった。

私はまた、次の様な事も仕様と兄弟子に奨める。

顔を仰向けて、その顔の上に高く、糊の入った器を差上げて下を向ける。器の中の糊は自体の重みと引力に支配されて、次第に器を離れて顔の上に落ち掛かろうとするその何十秒かの間を、各自が決めただけの数をかぞえて次に廻す。

これが真実の鹽廻しと云うものか……？。

洒落どころの騒ぎではない。間違々する自分の番で、糊が顔の上に落ちてくるのだ然し兄弟子はズル、自分の顔に糊が落ちてきそうになると、約束を破つて卑怯にも顔を横に外らせてしまう。

私は然し、それをやらない。否むしろ自分の顔に糊の落ち掛るのを待つ様にする。

金盃一杯もの、そんな糊が仰向いた顔の上に落ちて来たら、一体どんな事に成るかを考えて見ても滑稽であらう。

眼も鼻も口も、一瞬にして塞がれてしまつてそれこそ、ノツペラ坊主のお化けが出来上るのである。善吉ツとんは、私のそんな時の恰好がお可笑しいと云つて、いつも腹を抱え

て笑いこけるのであった。

「なんや、自分はいつも、ズルイ事して逃げる癖に……」

私は又そう云つて、一応はいつも怒つた様な顔をしては見せるがその実、内心は嬉しくてゾク／＼して居るのであった。

何故なれば此の悪戯は私が、私のマゾ的変態を満足させるが為に、考案したものなのだから……。

然し善吉ツとんも又妙な癖を持っていた。

彼は自分の履物を隠しておいて、不在と見せかけ、押入れの中などに隠れて居て、私の一人限りの時に秘かに行く或る種の行為の最中に、突如「ワッ」と云つて飛出してくるか或は又ニヤ／＼笑い乍ら、ソツと出て来て私の傍に立つたりする事があつて、この事で私は彼に、のつびきならぬ秘密の弱身を掴まれた事があつた。

それは、休日の午後の事だった。

私は一人で道頓堀の映画を見て早目に帰つて来るとみんな留守であつた。

念のため下駄を調べて見たが、不在とみて間違ひなかつた。

表戸の錠前を、かねての方法で開けて入つたのだから、よもや人は居らない筈である。

独りだと思ふと、又アノ変態が頭をもたげて私は、布を被せて置いてある糊の器を取り出して、着物の前を開き（その頃の奉公人は皆着物に角帯姿である）その糊をぬすくりつけて……。

その真つ最中。突然「ワッ」と叫んで押入れから飛び出して来たのは、善吉ツとんである「見たで見たでエ」

そう云つて、ニヤ／＼笑い乍ら彼は私の、そのところをジロ／＼見廻すのである。

私はもう、何処か穴へでも入つてしまひ度い様な羞恥に駆られて、顔を真赫にして、モジ／＼した。

その夜、彼が私の寢床へもぐり込んで来て「秀吉ツとん。アんな事すんねやつたら、わい、えゝ事教えたるか？」

そう云つて私に教えたのが、生れて始めての経験の Onanie の悪癖であつた。

善吉ツとんに教え込まれてから、一週間程の後私は便所の中で自分の局部の異変を発見して、何となく妙な氣持で息をはずませた。

ショボ／＼と生えかけの芝生にも似た、大自然の発芽……。

私はその頃。益々妙ちきりんな事を好み行く様になつていた。

私は仕事中便意を催して、階下に下りた時誰も居ない時は、秘かに台所流し元の棚に載せてある御寮んさんの、固煉白粉を器毎隠し持つて便所に入り、其処で……の先へその白粉を塗りつけたり、又、容器毎白粉の真唯中に、……したりしたものである。

白粉を黙つてそんな事をしたのは、一つには高慢ちきで判らず屋の、御寮んさんに対する間接的な、フクシユウの気持も手伝つていたのである。

私は、善吉ツとんには他にも種々と秘密を知られてしまい、私も又彼の痛い処を知つて居たので、二人の間柄は切つても切れぬ、という少し大仰な云い方だが……、マアそんな様な気持で、お互い仲の良い時にはもう無茶苦茶に仲が良く、かと思うと又負けず劣らずの、意地悪の仕合いもしたものであつた。

また、善吉ツとんは、アノ方面にかけては中々マセていて、どうやら修業中の身にも拘らず、女買ひも二、三度は間違ひなくやつてゐる。と、私は睨んでゐた。

当時の私達の楽しみは、お盆やお正月の休みもさる事乍ら、真夏の盛り、七、八月の両月の夜業のない時期に、毎晩の様に遠く迄遊びに出られる事であつた。真夏の、それでな

くとも蒸暑いのに、冬物のその頃流行の、モヘヤ。だの、シル。だのアストラカン。だとかの人造毛物の仕立をやり、殊にその頃はまだ電気アイロンでなく、炭火の入ったアイロンを使つてゐたものだから、そのまた暑い事暑いこと。流れ出た汗の軀にクシヤクシヤする毛屑がくっついて、その気持の悪い事は堪らない。

ところで今も云つた七、八月の両月だけは夕方早く仕事を終つて、かねて用意の行水湯で各々行水を済せば、後は自由に遊ぶ事が出来た。

日がすつかり暮れた頃を見計らつて、……「一寸。夜店へやらして頂きます」と、大将なり、御寮んさんなりに挨拶すると

「行つといで」と、お許しが出る。

無論。御寮んさんも、口ではそう云うが、如何にも「遊びにやりたくない」と、いふ様な顔付きで、眉を八の字に寄せる事を忘れない。

私と、善吉ツとんは、一々そんな事には頼着せずに飛び出してしまふ。

朔日は、平野町の夜店。二日は、農人橋。三日は、本町。四日は、島町。と、空堀。と

いう具合に気を付ければ、夜店は毎晩の様に有る。

私は、善吉ツとんに Onanie を教えられてから、それだけでなく、元来が少し変つてゐたのが、アノ男性の快楽を覚えてからは急転歩を示し、この事だけは未だ善吉ツとんも知らない筈の「女の責絵」を、それらの夜店の古本屋に求めて行脚したのである。

種々な小説雑誌の口絵や、内容に挿入してある「美しい女の後手に縛られた」そんな場面の挿画が見付かつたら、私は何を置いても其の雑誌なり小説本を買求めるのだつた。

この蒐集癖の為に、私は奉公人の分才で、質屋通いの味も覚えた。

一ヶ月宛に貰う若干のお小遣では、到底充分な蒐集欲は満たされなかつたから。

質屋通いの橋渡しは、そんな事には、もうずつと以前から馴れてゐる善吉ツとんが、何もかも呑み込み顔で、やつて呉れた。

私は、主人からお仕着せに貰つた盆正月の衣装の中から、季節に外れて藏い込んであつた、着物だの、厚司だの、また、親から貰つて持つて居た金側腕時計だのも、みんな質屋に入れてしまつた。

「責め絵」の蒐集に就いては、さすがの善吉

ツともとう／＼最後迄感付かなかった模様で、私がそんなに銭を欲しがると、

「これは、店屋物を食ひよるよつてやな？」

と、思つて居るらしかった。

夏の夜は、暑苦しいのもそうだが、私達の寝る二階の仕事場は、まるで南京虫の巢の様であつた。蒲団をめくれば、ゾロリと音がする位沢山出て来て、私達を悩ませる。白い敷布は、身体の下敷になつて潰れた南京虫の血で、三日にあげず洗濯せねば不潔で堪らないそれに、どんなに暑い夜でも、

「問屋の仕事を預つていて用心が悪い」

と、云うので、戸を開けて寝る事が許されない。

私と善吉ツとは、夜店を見て廻つたり、中之島の公園に行つて、満潮の中之島川へ、ルンペン達と一緒に飛び込んで泳いだりしたこともあつた。小遣いが無いのに腹が空いてどうしても食べ度くて堪らなく成つた時は、谷三交叉点の出店の、夜鳴うどん屋で小生意気にも分相応の借金もこしらえた。

余り遅く迄遊んで来た。と云うので「もう明日からは遊びに出さぬ」と、散々叱言を食うた事も一度や二度では無かつたが、そんな事位で神妙に屁古たれる様な我々ではなかつた。

た。

いつの間にか、私がこの家へ奉公に来てから、二年余りの年月が経つていた。

仕事の技倆は、善吉ツとんと私と、殆んど伯仲していて、つまり私は私より先に技倆を修めて居た彼に、追い付いて行つた訳である。主人夫妻の間に赤ん坊が生れたので、この家の雰囲気も大分変つてきた。

「久やん。」と叫ばれる女の子が、女中兼裁縫見習として、当家に来たのも赤ん坊が生れてからであつた。

「久やん」は福井県から来たのだそうで、妙なアクセントで物を云うので、一時はみんなで大笑いもしたが、然し、この久やん、が又相当な意地悪であつた。

何しろ、相手が女であるだけに、私にしても、善吉ツとんにしても、大いに勝手が違ふので……、それに、女同志の誼みからか、御寮さんが、久やんを殊の外鼻屑にするのでいかな我々も始めの裡は、随分と此の久やん



にしてやられたものだつた。

久やんは、寒中の、何もかも凍て付いてい
るそんな朝。我々に漬物の重しを上げて呉れ
と云つてせがむ。断れば、御寮んさんに云い
付けて、その口裏を借りて、嫌でも応でも、
重しは上げさせずには置かない。重しは、久
やん独りでも、上るだけの重さしかないのに
……？

それにしても、人間の運命程計り知れぬも
のは無い。善吉ツとんが、そんな嫌いな筈の
久やんの寝床へ、夜這いをかけた事に依つて
彼はこの家を、出て行かなければならなくな
つた。

久やんは階下表の間に、寝ていたのだが、
障子一枚奥には主人達が居るのに……私は善
吉ツとんの此の時の気が知れなかつた。

折角の好敵手を失う事の悲しさに、私は善
吉ツとんの為の、及ぶ限りの口添えをして見
たが、この事ばかりは、どうにもならなかつ
た。間誤々々すると、此方まで疑がわれそう
でそれに、こんな事柄に口出し出来るだけの
私にはまだ資格が無かつた。

善吉ツとんが、いよ／＼この家を去る時、
「秀吉ツとん、御気嫌よう。又、縁があつた
ら何処ぞで、会いまよなア……。」

そう云つて私の手を握つた。

私は、ホロリ、となつて眼に涙を浮べた。
それを又御寮んさんに見付かつて、叱られ
た善吉ツとんが出て行つた翌年の春に、久
やんも又何となしに帰つてしまつた。

私は完全に二階では、一人ぼつちになつて
しまつて、さすがに寂しさが胸一杯になつた
夏の楽しい夜店巡りも、今年は一人で寂し
い事だと、悄然と考え込んでいると又アノ持
前の変質性が頭をもたげて来た。

私もいつの間にかやら十九才の春を迎えて、
異性の肉体もソロ／＼恋しい気がする。だ
が、それよりも例の夜店で蒐集して知らず知
らずの裡に貯め込んだ、美女緊縛の晝画が、
もう可成な数になつていた。

私は、仕事が終わつた後の、一人ぼつちの二
階で、今更めて、蒐集品の整理に取りかゝつ
た。

挿画を画いた画家の名。何年何月発行の何
と云う小説。又何という雑誌に載つていたか
？。

吊し責か、水責か、又は単なる窮命か？
色々と部分わけもして行つた。

こうなれば、又例の糊の遊戯にも、思う存
分浸られる筈であつたが、何故か近頃は、糊

には興味が薄らいでいた。その理由は自分で
も判然とは分らない。

私は、絵画や映画では、美女緊縛のシーン
が好きであるのに、自分の肉体の要求は、縛
られ度いマゾヒズムであつた。

私は暇をみて、裁断後の残り生地を投り込
んである大きな木箱の中から、セル等の成可
く肌触りの柔かそうな細長い布（生地耳で随
分長いがある）を選び出して、ミシンを使
つて縫返し（紐）を造つておく。夜業が終つた
後の誰も居ない、独りぼつちの二階で、私は
その目的の遊戯を始める。

こしらえておいた長い布紐を取り出し、そ
の一端を重いミシンの足に結え付けてから、
もう一方の端を自分の腰に結えつける。紐が
ピンと張るところ迄ミシンの足から遠退いて
行く。

畳の上にピンと張らして置いた紐の上へ自
分の軀にグル／＼と巻付く。紐を緩まぬ様に
張切つたまゝで転がる程、軀によく締る。

柔かい布紐が軀をグル／＼巻に締め付けて
来るその快感は、又何とも云えず堪らないも
のであつた。

猶、この方法でなく、両手を使つて、足首
から胸の辺まで力一杯巻立てるのも、気持が

良い。自分の口に猿轡を嵌めてみたり、もう誰も見て居る者が居ない二階で、私はそんな遊戯を繰り返して、独りぼつちの心のブリヨウを慰めていた。

そのうち、夏の始め頃になつて、今度はまた「清吉ッ」と呼ぶ十三才の男弟子が連れられて来た。

この「清吉ッ」とんは随分型変りであつた第一、十三才だと云うのに、身長が五尺二寸もあつた。童顔の子供々々した、大きな声では物も云えない温順しい少年であつた。

彼は、難波の賑橋の近くに、矢張り奉公して居るといふ兄に連れられて、ミシン裁縫が見習い度いとて、当家に来たのである。

この「清吉ッ」とんは、この家に来てから一ヶ月ばかりの後に、飛んでもない人騒がせをやつてのけた。それは、大將の親戚が、この家から程遠からぬ骨屋町の市場で、かしわ（鶏肉）屋を営んでいた。

その市場は私設であつたから、公設市場の様に出張出店ではなく、住宅兼用で、しかも一般の通路にも使われ、店も南北に一直線に拡がつていた。

この日、その親戚から借りていた雨傘を、風食後。清吉ッとんに返しにやる事になつた。

彼は、かしわ屋には、私に連れられて二度ばかり行つた事がある。

念の為に「道を知つて居るか」と問えば「分つてます」と答えた。

その「清吉ッ」とんは、夕方になつても帰つて来なかつた。

私が、心配して、かしわ屋迄行つて見ると先方では「来なかつた」と云う。

さあ大変。大騒ぎになつて、夜。私は彼の兄が奉公して居ると云うその、賑橋へも行かされたが、此処でも、「来て居ない」と、云うので、騒ぎは益々大きくなつて、翌朝。警察へ保護願を出してから、猶、念の為に、と大將と私と、それに清吉ッとんの兄さんも入れて、三人で中之島の公園迄足を延して行つて見た。

すると、何と彼は河の岸边に、持つて行つた雨傘を拡げて、長々と寝そべつて居た。

呆れて物が云えない。

彼の云うところでは、最初二、三度市場の中を往復したのであるが、目的の、かしわ屋が見付からなかつた。と云う。

それなら、せめて家へ帰つて来ればよいのにと、猶よく問い正してみても、吾々が判断して見た処に依るところである。

彼は、市場の中を二、三度往来して探したが、見付からぬので、そこで市場の中を南へ南へと、何処迄も進んで行くと、天王寺公園に出てしまつた。その時になつて始めて変だ。と云う事に気が付いて、今度は又元来た道を北へ北へと後戻りして来ると、この中之島公園に来てしまつたのらしい。

然し、此処へ来る迄にはもう一度、かしわ屋の表を通つた筈なのに……と思ひ、その辺のところが吾々には、どうも鼻を掴まれた様でさつぱり見当がつかなかつたのであつた。

私は、この事があつてからの後。清吉ッとは余程ノールスの、それで居て図太い奴だと思ふ様になつて、それから、何かしら彼を思い切り虐めてやり度い衝動に駆られる様になつた。然し又。私が清吉ッとんを虐め度い。と思ふのは他にもまだ原因があつたのである。

それは、主人夫婦の間に生れた男の児の守は、当然御寮んさんがすれば良いのだが、何せ、何かに就いて威張り度い気の御寮んさんは自分が二階に上つて仕事を手伝うと、能率がウンと上ると思つていて暇さえあると、小児を連れて二階へ上つてくる。御寮んさんの仕事は、汚なくて下手だから、今迄から吾々



奉公人は厭がつて居た。
やり直しをしなければならぬ、そんな下手な仕事をして置いて、それは吾々に、ぬすくり付けて、自分の立場が悪くなれば、サツと階下に降りてしまう事が多いからだ。

それは兎も角。小児を連れて居ては仕事が出来ないので、自然。その守役が清吉ツとんに廻る。
ところがこの小児は彼を大嫌いだである。
私になら喜んで来るが、彼には、子供心にも頼りなく思うのか、寄り付こうともしないのである。
仕事に就いての私の技倆は、御寮さんより遙かに上で、私に子守をさせて、御寮さんに仕事をさせたりしては、却つて損害になる事は、大将にしても判り過ぎる程判つて居る筈なのに、……だのに御寮さんは、子守を私に云付ける。大将が止めて呉れ、ばよいのだが、これが又、女房デレスケで一向に御寮さんを押える事が出来ないで、すべて

は私より下の清吉ツとんが居りながら、仕事が出来ずに子守をしなければならぬ。
このムジュンは、清吉ツとんが、子守をし切らない為に起るのだと私はとつてしまう。
それに未だ一つ。そんな頼りない彼でも、この家に来た為に、私は近頃油の乗りかけたアノ変態遊戯が、思う存分出来ないのも彼の故の様に執つてしまつて居るのである。
話が分永くなつたが、——そこで私は、どうかして清吉ツとんを虐めてやり度いと、種々頭を捻つて考えた挙句。遂に素晴らしい手段を考案した。
それは、彼を虐める事も出来。同時に私のマゾヒズムをも満足させる事の出来るいわば一石二鳥の方法であつた。
丁度、夏の盛りの頃であつた。
前にも述べた様に、夏のこの家の二階は、まるで南京虫の巣の様だし、それに窓を開けて寝る事も許されない為、蒸し風呂の中で南京虫に責められる様なもので大抵の者は、一寸辛抱がしにくかつた。
私もこの家に来た当座の頃は、そうであつたが、兎角南京虫と云う奴は、新しい顔触れの人間に余計集つて噛み付くものらしい。
余り酷く噛まれると、噛まれたアトが、腫

れて来て、膿を持つ様な事もあつた。

今の清吉ツとんがそれで、彼はこの家に来る迄は南京虫を知らなかつた。と云い、噛まれる事を極度に恐れ嫌つていたのであつた。

私は、この事に眼を付けて、

「南京虫には噛まれても、掻きさえしなければ、何とも成りはしない。が、寝て居て知らぬ間に掻くといけないから……？」

と、云う口実の下に、階下の主人達が寝静つた頃を見計つた或夜。清吉ツとんの両手を先に私が使つた事のある例の布紐で縛る事にしてみようと考えた。

然し、いきなり彼を縛り上げようとすれば或は逃げ出すかも知れないし、又ひよつと声でも立てられたら、それこそ変な事になる。

そう思つたので、私が先ず先に、彼に縛られてやる事にした。(別に恩に着せる事は無い私は内心、軀を縛られ度いのだ)始め、清吉ツとんは、私を縛る事を何度か躊躇して居る様であつたが、兄弟子たる私の強いての命令に、止むなく例の布紐で私の両手を後手に私の云い成りに縛り上げた。

縛られた私と、縛られていない清吉ツとんの二人は、そのまゝ何事も無かつた様に一応は寝てしまふのであつたが、何せ、どの道、

暑くて痒くて、そう永い事は寝付いて居れないで、二人共間もなく眼を醒してしまつた。

私は、清吉ツとんに縛られる時に、アトで紐がすぐに緩む様に軀の一部で手心を加えていたので、この時はもう、チャンと解けて仕舞つてゐる。

「こんな緩い縛り方では、直ぐに解けてしまつて、又南京虫の噛みあとを掻くから何にもならない。掻くとアトが恐ろしい事になるのだぞ……。」

という意味を、よくよく匂わせておいてから、今度は交代だと云つて、清吉ツとんの両手を矢張り後手に力一杯縛り上げた。

声を立てたりしはせぬかと、実は内心ビク／＼ものだつたが、私の南京虫恐怖の宣伝が余程利いたものと見えて、彼は黙つてじつと痛さを堪えて居る様であつた。

朝迄の間に、もう二三回交代で縛り合ひをしたのだが、こんな事を二三日続けている裡に、不思議にも私と彼とはお互いが、その縛り方に無暗を力と入れる様になつて、「これでもか、これでもか」とばかりに、相手を身動き一つ出来ない程に縛り上げる事に没頭するのであつた。

私は近頃、もう布紐で縛られるのでは頼り

なくなつて、荷造用の麻縄を用いる様になつてゐた。

清吉ツとんも、それがよいという。妙なもんだ。始め、彼を憎んで、「虐めてやろう」と思つた私が、何時の間にやら虐められもする様になつて彼は私と、私も彼と離れる事の出来ない、一對の様になつてしまつたのであつた。

真夏の夜の閉じ込められた室の様な、蒸暑い二階の仕事場で、南京虫には責め噛まれつゝ、素肌の上を虐められる麻縄に、雁字搦目に縛られて眠つて居る清吉ツとんの両眼に、私は又アノ綱を持つて来て、ぬたくり盛り上げたりして、人知れぬ快感に酔いしれるのであつた。

マゾもサドも両道かけた、妖しい雰囲気の中で、私は猶も新しいこの種の遊戯に頭を捻りつゝ、併せて本業の洋裁技術にも、たゆまぬ努力と年期を入れて行つたものであつた。

(この項終り)

× × × × × × × × × ×



鼻 腔 禮 讃

升 岡 金 吉

「君は女性の体の何処に魅力を感じる?」と尋ねられて、「僕は眼だ」と答える人、「唇だね」と言う人、「いや僕は乳房だ」「足だなあ、あの線の美しさはたまらん」と言う人それぞれでしょう。然し私には答えられない若し強いて尋ねられれば鼻!だが、それだけでは私の完全な答ではない。はつきり言えば鼻腔に堪えられない妖しい迄の憧憬を感じるのですから。「なんだお前はアブノーマルか!」そうです。誰でもそう言うでしょう。それでいいのです。私はその言葉に否定は致しません。

日本の女性の鼻は低くて、鼻腔も円形や随円形が多くて余り面白くありません。でも中には三日月の眉、黒眼勝ちの瞳、花の蕾の唇にすつきりと高い鼻筋、形のいい小鼻そして

柿の種のような美しい鼻腔、私は此の美しい鼻腔を持った女を見た時、激しい感情的な気が躍るのです。一度でいいからあの美しい鼻を撮ってみたい、そして明るい太陽の下で或は電燈の下で心ゆくまで鼻腔を覗き込んで見たいと思うのです。

でも、どんなに形のいい鼻をしていても、鼻汁や鼻毛の見えるようなのは嫌です。私は汽車で通勤して居りますから、色々な女性を眼前に見ることが出来るのです。何時だったか発車間際に飛び乗ったデッキの手掛へやつと吊り下つて、何の気なしに目の前二三寸の所に美しい娘の顔があつたのです。よく通つた鼻筋と、そして細い形のよい鼻腔が朝日に照らされて、くつきりと奥の方まで見えるのはありませんか、私の胸は歡喜に高まり、

心臓は大きく波打つのでした。

あの柿の種のような形の腔、薄つすらと生え揃つた鼻毛の茂りの美しさ——、何んという幸運!私はその日以来、デッキから女性の鼻腔を覗き込む男になりました。

或る日の事、ホームで汽車を待つ私の前をすつと横切つた女、あゝ、これこそ私の一番好むタイプ。そして理想の女と描く容貌の持主だつたのです。十八九でしょう。すらりと均整のとれた姿態に白いブラウスがよく似合つて、眼はパッチリと大きく見ひらき、花舞のようなあどけない唇、そして私の最も関心を持つあの鼻の形の美しさはどうでしょう。私の今迄見たどんな女性の鼻毛もとても及びもつきません。折柄入つて来た列車へ乗り込む彼女のあとを追つて私もフラフラとついて行きました。何処かの会社の事務員か、通勤の工員連でござつた返えすデッキからさつさと奥へ入つてしまいました。私は泣きたいような気持で彼女の後姿を見送つていました。デッキは押し合えへし合いの大混雑です。折角見つけた花も高嶺のものかと残念でなりません。次の日も次の日も彼女を見かけましたが、デッキに立ち止るところか、いつもさつさと奥へ入つてしまふのです。

それから数日経ってからです。私は思い余って彼女と前後して乗り込むとドン／＼奥へ入りました。中程迄行つてふと見ると一つの空席があるのです。私は突嗟にさつと座りました。座れるなんて事は一年の中で数える程しかないのです。それ程朝の通勤列車は混雑するのです。彼女に「どうぞ」とエチケットを示す事は知っていました、それにも増した魅力が私をそこに座らせていました。腰を下して彼女の方を見ると、私の直ぐ横の肘掛に右手を置いて、私の存在なんか一寸も感じない様に窓外に視線をやっていました。

やがて汽車が動き出して人々の気持が落着いた頃、掩っていた雲を切つて陽が車内を明

〔読者通信〕

わたしは奇譚クラブの愛読者の一女性です。毎月、月末になると今か今かと本屋を尋ね廻つて居ります。わたしも沢山の雑誌を見つけてきましたが、今迄で奇クがわたしに一番合つた本でした。

つきましては、わたし少しSの

るく照らし出しました。その時、なんという好運でしょう、朝日がまともに彼女の顔をくつきりと照らし出して睫毛の一本一本までもくつきりと浮き彫りにしてくれたのです。

ちら／＼と見上げる彼女の顔の一点、美しい鼻腔は真正面に私の眼にクローズアップされました。見上げる私の視線が時折、彼女の瞳に触れると私はまるで罪でも犯した者のように狼狽して眼をそらしました。

その中、彼女は振動のリズムと車内の温気にうと／＼したのか円らな瞳を長い睫毛で被つて眼を閉じたのです。この絶好のチャンスは何んで私が逃しましたでしょうか。私は全精神を眼に集注して彼女の恰好のよい鼻腔を下から見上げました。その行為は軽犯罪法に触れた

かも知れません。でもその時の私は必死でした。眼球が痛くなる程見つめたのです。恋いこがれた娘の、それに神秘的な鼻腔美の極致でした。柔らかな鼻梁から優しい小鼻の脰らみから、陽に透けて見える鼻腔の入口に散見する金色に輝やく毛、恥しい話ですが私は思わず洩らしてしまつたのです。

私は此の時の思い出が一生忘れられないのです。今でもあの娘の美しかった鼻腔を夢に描いて妻の鼻腔を覗き込んでゐるのです。

鼻腔礼讃！

そうです、私にとつては美人の鼻腔こそ、処女の門よりも尊く美しいものなのです。

せいか雑誌に責めの絵が出ていると必ず買入れております。異性の責めには特に狂喜致します。奇クも色々責めが出て居りますが、男性側のはやはり少なく、わたしとしまして少し物足りないんです。でも仕方がないと思つておりますが、昨年十二月号の殺人淫楽

めの写真も同性の方のは毎月出てゐる様ですが、男性の方のも出していただけないかしら。写真が駄

まして申訳ございませんでした。○二十六才の独身の女、文代

目でしたら画だけでも出して下さい。お願い致します。KK通信なんです、わたし一人でない故に、(家族多数)申入れかねていますが、良い方々がないものでしょうかしら。わがまゝな事を沢山言い出し

男性被虐の写真も多数撮影落です。から機会を見て漸次発表します。KK通信は御都合により密封の上、信書にてお送りいたします。御遠慮なく御申出下さい。

(染田文)



男 色 の 花 道

堤

行

房

「男色の花道」

これは戦前の話です。

その頃東京の中央部にあるH公園は男色の社交場としてその道の人達の間に知れ渡っていました。黄昏ともなれば三々伍々何処からともなく集つて来る人達があります。若いのもあり老人あり壮年者ありで服装もまち／＼ですがたゞ一つ同じ様な処はぶら／＼散歩をする風に見えたり、ベンチに腰かけて休んでいる風に見えたりしながら皆一様に、通る男の人に始終関心の眼をういていることです。併し戦後の上野に出没した男娼の如きものは見当りません。この人達は皆屋は会社に工場に商店に真面目な小市民として夫々の職業に努めている人達なのです。わずかにセミプロ

程度の者がいた様ですがそれは極く少数です。それですから勿論女装等したものは一人もなく、しかも少しでも女性化して見えるものは喜ばれない傾向でしたから、皆努めてそう見られまいとしている様ですそして最も男性らしい逞しい男が彼等の渴仰の的でした。

こうした人達が一年中入代り立代り現れるのでしよう。春秋の氣候のよい頃や夏の暑い時等ならまだしも嚴寒骨を刺す冬の夜にさえその影を絶たないのです。その異常な熱心さには驚かされますが又一面、そうした冬の夜迄も満たされぬものを求めて、彷徨わねばならぬ宿命を背負った人達の哀しさ、それを思えばむしろ憐れでさえあります。

この人達によつて街路に面した公園の公衆

便所が事務所と称され（いみじくも称したこ
とよ、此処で数々の愛慾の取引が行われるの
であるから）池に沿った高台を舞台、これに
つづく石段と木立の間の細道が花道と名付け
られ、毎夜の如く其処には痴夢愛慾の幾幕か
と人生悲劇の、又は喜劇の幾駒かが演ぜられ
てゆくのでした。

同じ宿命の男である私がいつしか此処を知
つて時折足を運ぶ様になつたのも己むを得な
いことでした。そしてそれはある初秋の宵で
した。街はもうとつぷり日が暮れています。
宵闇につままれては、その高台の木々の緑が
街灯の光りに浮き出して滴るばかりに青いの
も池を越えて向うの木立の間に、幾つかの灯
しあびがきらめくのも、一入に美しく見えて
るかなきかのそよ風が頬をなぶるさえ夢心地
に透るゝ如く、間近の街路を走る電車や自
動車の騒音とても何かベールにでも包まれた
様に柔く聞えて来るのです。

そうした中に私はその高台に並んでいるベ
ンチの一つに腰を下していました。池に面し
て一列に並べられているそのベンチの一つ一
つには、それ／＼人が居ります。ひとりでい
るのもあり、二人連れもあり、三四人固つて
いるのもあります。中には恋人同志なのでし

よう、肩を寄せて語り合っている男女の姿も
見えます。併しひとりでいるのは全部男です
例の人達なのです。みな一様に背後の小径に
全神経を傾けていて、通る人が男である限り
一斉に振向いて見るのです。しかも見たとい
うことを相手に悟られまいと充分に心しながら
また通る人の中にも何割かの同じ道の人が
います。歩き乍らそれとなくベンチを物色し
て固いるのがわかります。それですから三四
人つて喋り散らしている傍若無人のセミプロ
達になりますと、それらしいと見るや、わざと
大声で卑猥な言葉を浴びせたりしていますた
ゝ此処に語り合っている男女の恋人達ですが
この人達のこのノーマルな恋も、此処で語り
合う限りは却つて異端視されていることをこ
の人達は知らないことでしょう。私も暫くの
間多くの男達と同じ様に皆後の靴に神経を集
中していました。その何度目かのことです。
行き過ぎた靴音に、それとなく振り向いた私
の視線はゆくりなくもこちらを振り返つたそ
の靴音の主の視線とバツタリ合つたのです。
いや仄かな街灯の光りの中ですから合つたと
感じたのです。私は何だか氣まりが悪くて
直ぐさう気ない風に元へ向直つて顔を伏せて
いました。所が二三歩、歩き出したその靴音

が静に止まつたと思ふとしばし、今度はこち
らへ歸つて来る様子です。私は全身を耳にし
ていました、躍る様な胸の鼓動を抑えて素知
らぬ振りをしているも、その靴音が私の隣に
来て止り、その主が同じベンチに腰を下した
のをハッキリと感じ取っていました。そして
こわい様な又嬉しい様な一瞬です。

「アノーマッチお持ちでしょうか」

声をかけられてホッと一瞬の緊張がほぐれ
ます。

「サア……どうぞ」

「ハア有難う」

マッチを受取つてその人は煙草に火を点け
ました。そのマッチの炎が消えるまでたまゆ
ら、その人の横顔をハッキリと写し出します
年は廿五か六か、端正な面差しが街灯の故か
色白く見えて、キチンと着こなした背広も純
白なワイシャツのカラーも清潔な感じを与え
ます。私の心は躍りました。何とか話しかけ
たい思いで一杯ですが、たゞワクワクするば
かり、口も乾いて中々言葉が切れません。併
し倅いマッチを返して来ると同時に話の緒口
は向うからつけられました。

「ヤ……どうも有難う……大分涼しくなりま
したネ」

「そうですね……これから暫くの間が一番よい時季ですね」

話が途切れるのを恐れて私は思い切つて強いて話題を連絡させます。

「しかしよい気候の間は短いですね、涼しいと思うと直ぐ冬ですから、それにしても春の雛に秋の爽涼か……貴君はどちらがお好きですか」

「サア……どちらかと云えば秋でしょうね」

「そうですか、僕も秋の方が好きなのですが……けれど僕等の様な孤独の者には秋はあまりに淋しすぎることもありますよ」

一瞬の沈黙の時。

「貴君もおひとりですか？」

感情を押殺した声で聞いて来ました。

「エ、御覧の通り……」

私は半ば冗談の様に軽く紛わし乍ら

「そして貴君は？」

「僕もひとりなんです……。それでついフラ

／＼とこうして出て来たのですが」

振り仰ぐと頭上の梢を透して真円い月が出ています。

「あゝ今日は十五夜……か如何です……少し散歩しませんか」

「エ、行きましょう……」

二人は立上つて高台を下りました、数あるベンチの後を通る時、そこへに多くの羨望の眼の光るのを感じました。

私はその瞬間から幸福でした。言葉少なに差し障らない話を話し合いつゝ足を運ぶ二人その話にはそれと触れずともお互いの心の底に持つてゐる希いはお互いに解り合つてゐるのです。並んでゆく肩と肩とが触れ合うばかり寄り添つていつしか公園の外に出ていました。

「お茶でものみましょう」

近くの喫茶店に腰を下して始めて明るい灯の下で真正面に向き合いました。お互いに少しばかりテレましたものゝ通じ合つた心には何の蟠りもなく次第に話は機んでゆきます。第一印象通り私の理想の好青年です。それから三四十分の間にまるで十年の知己の如く打とけました。

「貴君は、あそこへ時々お出でになりますか？」

「イ、ヤ……減多には」

「どうですかね……」

「ホントですよ、仕事が忙しいし、それに僕はあまりあんな処好かんですよ」

「それはそうですね……」

「君はどうです……常時なんでしょう」

「とんでもない……どうして……」

「でも君は若いし、……それに行きそうな顔をしているもの……」

「あれあんなことを……」

そんな冗談迄言つて声を合せて笑いました時計を見るともう大分遅い

「あゝ遅くなつた……出ましようか」

連れ立つて又歩き始めましたが何となく別れともない思ひです。彼も同じ思ひかフト手と手が触れた瞬間、どちらからともなくしつかりと握り合つていきました。言い様もない感情が戦慄の如く全身を揺すぶります。

「今度はいつ……」

「僕はいつでも……」

「では明後日の土曜日に会いましょう——六時にN劇の前ね」

「土曜日の六時ですね」

そこで私は思い切つて言います。

「君はいつも何時頃に帰らなければならぬの？……」

「僕は時間はかまわないのです。そんなにやかましい家ではありませんから」

私は言い様もない甘美な思ひを胸に湧き上らせ乍ら彼の耳にさゝやきます。

「じゃあ、遅くなつたら泊れる？」

「エ、構いません」

「では土曜日には大体その心算でネ」

「え……」

思ひは彼にも通じたのでしよう。黙つて肯く彼の腫も熱を帯びた様に潤んで見えました私も熱い血が全身を駆け巡ります。

「では間違ひなくネ……」

思ひを残し乍ら手を振つて別れました。

月はいよ／＼冲天高く昇つて、人影の絶えたビル街は、その皓々たる光の中に包まれまるで深海の底のように静まりかえつています私はその中を身も心も浮き／＼と歩いてゆきました。思ひもかけず、理想通りの美しい友を得ました。もうこれからはあの真暗な孤独の闇に踏み迷うこともあるまい。私の生活に一つの光明を見出した喜び、しかも一兩日の内に彼と一夜を共にすることが出来るとは、嬉しさは真実大声に叫び出したい程でした。

しかし、そうしてその土曜日の夜を想像しつつ様々の喜びを胸に描いてゆく次第に血汐は燃え立つて来ます。遂には堪えられぬ迄に沸騰して来て土曜日迄は待ち切れぬ思いです。今夜空しく彼と別れてしまったことを今更乍ら後悔しはじめたのです。一時はいつそ引返してもと思いましたが、今更引返した

とても、最早彼処に居る

筈もなしと、僅かに諦め

て駅に向いました。満た

されぬ思ひに胸が詰つて

先程の宇頂天も何処へや

ら、悄然と歩みを運んで

いました。プラットホー

ムで電車を待つ間も、焦

燥と不満に半ば放心の態

です。と無意識に昇降口

に眼を向けた時、そこへ

ヒョククリ姿を現したの

は何と彼加藤青年でした

「オー——」

私は喜びに躍り上らん

ばかり——

「加藤君……」

彼も驚いた様です

「アツ堤さんまだお乗り

にならなかつたのですか」

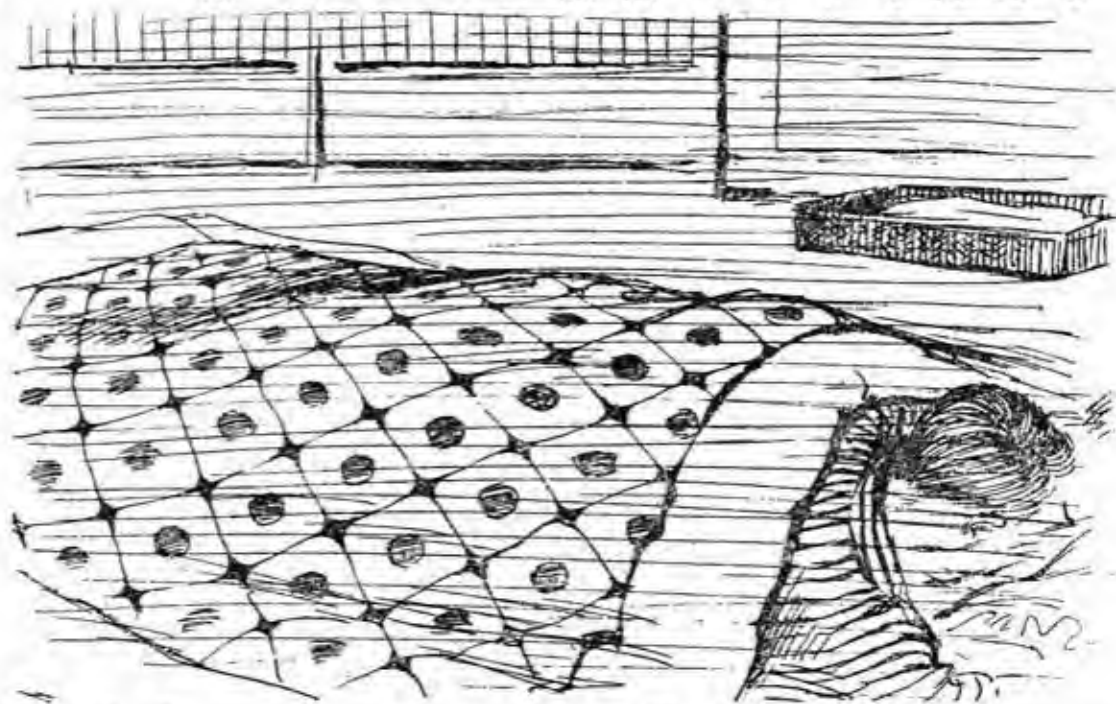
二人はもう手を取り合いました。プラット

ホームも更けては人影も少ない

「あゝ会えてよかつた、僕……君と別れたこ

とを後悔していたんです。今夜このまゝでは

帰えれない氣持になつちやつて」



「堤さん、僕も実はそうだ

つたんです。でも先刻は、

始めて逢つたばかりで、は

したないとも思われたもの

ですから」

「なあんだ、そんな遠慮な

ら、いらなかつたのに……

じゃあ……これからどつか

へ行きましょうか、君差支

えない」

「エ……かまいませんと

も」

「アゝ嬉しい」

………

やがて二人は郊外のとあ

るホテルの一室に納つてい

ました。先ず風呂に案内さ

れました。加藤は清瘦せす

る性と見えて裸身は案外に

逞ましいのです。街灯の光と異つて電灯の下

では、むしろ小麦色にさえ見える肌は若さに

はち切れるばかりに輝いています。私は自分

の瘦せた身体が恥しい程でした。しかしこの

張り切つた肉体を今宵一夜は思うままに抱け

るかと思うとその喜びに早や沸々と血の沸る

のを押さえ様もありませんでした。同じ思いは彼にもあるのでしょうか。何となしに言葉少なです。湯上りを浴衣に着替えて部屋に戻ると既に床が延べられてあります。「おやすみなさい」と挨拶して女中が退つた後、まず一服と茶を喫み乍らフト二人の眼が合います。やつと二人切りになれたという思いに期せずしてニッコリ笑い合いました。湯上りに上気した彼の頬の美しさ、茶碗置く間ももどかしく私は彼を引寄せると、グツと抱きしめました。彼も力一杯抱擁して来ます。火の様な唇が合います。痺れる様な感激が全身を貫きかけ巡る、しばらくは声も出し得ぬ千金の一刻。

「僕はうれしい……」

やつと唇を離れた時思わず呟きます。

「僕も嬉しい……堤さん、僕これからあなたのこと兄さんと呼んでいい？」

「あゝいゝとも……」

「それからいつ迄も変わらないでネ」

「あゝ何んで変わるものか……今夜から二人の仲は永遠だよ」

「嬉しい」

彼は再びしつかり抱き付いて来ました。

そうしてこの夜私は始めてこの道の真実の恋を知り得、始めてこの道の真実の甘美を味い

妖奇掌篇の窓

三 富 浩 生

うろうろ……、うろ……、うつ。ぼつかり眼が開いた時、冷汗が額にも噴いていた。

宗一は起き上つて窓を開けた。蒸し暑い室内に流れ込む涼気の中で、彼の眼は、真ッ暗な崖の下を見ていた。そこには、今の夢に見た女は、もう住んではいないのだつたが……。

眼の下は焼跡にバラツクの並ぶ高台に、宗一の住むアパートが在る。真下は製粉所で、その横に附属した小屋は、何れ管理人の住居と思われた。

梅雨どきの、じめじめした日が続いたあと、珍らしく晴れた夕方の事であつた。宗一はチャブ台兼用の、白木の小机に肘を突いて、ぼんやり外を見ていた。雨続きの狭い街並へ俄かに強い日光が射したので、湿度と温気が耐え難い夕暮となつた。その気倦さに彼は、自炊の支度に取りかかる気にもなれないでいたのである。いつもは生理

的に必要だとしか感じない女が、生活にも必要だと、ふと思ひ、然し又、軽い月給袋が、つくづく恨めしいのであつた。

その時、突然に下の小屋の窓が開いた。低い所なので、雨の間は固く閉ざされていた窓であつた。シミーズ一つの、若い娘らしい肩から下の立ち姿が彼の眼に映つた。脛が白かつた。宗一は思ひがけない所に住む女に注目した。女の手が、抱えている衣類を投げ出して裾に廻つたかと思うと、シミーズは捲れ上り、生毛の薄い脛、ズロースの裾のゴムが固く喰入つた腿、水々しい胸乳、そんなものが次々に彼の眼を、眩しい程に射すくめた。手早く着更えた女は、脱いだ方のシミーズを窓枠に掛け、又内へ引込んだ。

茫然と終始見つめていた宗一は、惜しい事をした、と我に返つて感じた。女の体を自由に出来る程の才覚も資力も無い宗一は

得たのでした。そしてこれに比べればこれ迄の営みはホンの子供の戯れにしか過ぎぬことも知ることが出来ました。

彼は全く私の理想の青年でした。真実を尽して私を敬愛して呉れました。私より年下でもあり純情でもありましたが、この道にかけてだけは彼の先輩にその道の猛者がいたとかで年に似ず私よりも色々テクニクを知っていました。あの官能をくすぐられる様な××の味も、全身がとける様な甘美な××の味もみんなこの夜を境として彼より教えられたものです。そうして二人の交情は永く深くつづきました。彼Rが比島の戦線に駆り出される日まで——。

彼はそこで行方不明になったまゝ未だに消息を知りません。私は其の後再びH公園には足を運びません。今更行つたとて彼の如き理想の青年とは相会うべくもないことがわかつていますから。そうして命だにあるならばいつかは私の許へ還つて来るであらう彼、加藤を待つてゐるのです。

僅かに空想で裸女の姿態を夜の闇に描いては、哀しい自慰に切ない想いを満たすに過ぎないのである。得難い対象を眼の前にして、余りの刺戟の強さに、彼の慾情は吹飛んでいたのだつた。

以来、日暮れ毎に彼は、或る期待を以て真下の窓を見る。天氣の良い日は、必ず同じ時刻に同じ手順で、女は着更えるのだ。崖に妨げられる上に、窓の位置からして、其の姿態を残し無く見られるのは、宗一の部屋だけである。女が窓を開けるのを待つて、視覚でしか感じられない裸身に、やり場の無い慾情を迸らせ、はかない陶醉に浸るのだつた。

雨で願いの叶わぬ夜は、薄赤い乳首や、淡蒼く静脈の透けた肌や、白く張り切つたズロースやらが、妖しく夢に浮かび、独り寝の宗一の下着が、ねつとりと濡れるのであつた。

その年は、立秋が過ぎてから却つて暑い日が続いた。或る日曜の午後、屋敷から起き上つた宗一は、ぼんやり窓を見ていた。すると、いつもより早い時間なのに、女は、さつさとワンピースを脱ぎシユミーズ

を脱ぎ出した。眠気も吹飛んで宗一は、勃然と下腹に蠢くものを感じながら腫める。彼女がシユミーズを首から抜こうとして一寸屈んだ瞬間、ズロースがずり落ちた。腹の円い膨らみから続くスロープの終る辺りに、ふつさりと生い茂る若草のようなもの迄、彼は見た。と同時に、女は、慌てて這いつくばるように部屋の奥に隠れた。今見たものを反芻するように幻影に描きながら宗一は無意識に、緊張の解けて行く仄かな暖みを感じていた。ふつと女が小屋の横手に立つた。宗一は驚きの余り隠れる事さえ忘れた。激しい火傷で女の半面は恐ろしく赤黒い引きつれで、片眼は潰れてさえたのである。

女は昨冬から見えなくなつた。宗一は、今でも女の焼け爛れた顔を夢に見て苦しむ





此の一文に対する読者の反駁を期待する

僕の記録

黒井 珍平

一、発端（八才の頃）

羽村京子さんの「狂い咲くカンナ」を拝読し「果して信じて下さいませうか」と言われた時、如何にも真実らしく（真実かも知れないが）見える程、誇張を感じる。若し僕が類似傾向を持合せなかつたら或は反つて信じられたかも知れぬ、——と言うのは奇々に書かれた数々の告白文から較べると僕の場合遙かに其の傾向度が稀薄であるから。然し空想と實際行動、つまり「心」と「行」の何れを重く見るかは人の主観に依るのである。此の程度も有ると言う何かの参考になれば幸である。

或る晴れた夕暮の事であつた。僕は東京五反田の池田山というお屋敷町の一角にあつた生家（終戦の一月前に焼けた）の倉の中で秘密の楽しみに耽つて居た、——と言うのは母の留守に大急ぎで簞笥の中の鍵を（二段目の右の隅にあつた）持出し、倉の扉を開け其の頃の年令にとつて命から二番目の絵本を眺め廻していたのである。微臭い倉の中で絵本の頁をめくつて居た僕の耳に異様な音が響いて来た。「コラー」と言う巡査の声と慌しいバタバ

タと言う足音が。僕は倉にぎつしり積まれた道具の山の上を伝つて鉄格子の窓にしがみついて、外を眺めた。晩秋の日暮時のひやりとした空氣が鼻をついた。此の窓は丁度、家の門を越えて交番に面して居た。近所の人々が馳け寄るのが見えた。僕は大きく倉から出ると玄関から下駄履きで交番の前へ飛んで行った。素早く人だかりの中へ小さな体をもぐり込ませようとした時、捕縄をしつかりと掛けられた男が巡査に背中を突かれ乍ら人垣を破つて現れた。其の時はもう夕闇は迫つて顔ははつきり見えなかつたが僕の眼にとび込ん

だのはきつく後手に捕縄を掛けられた男の腕と拳である。其の瞬間、身体に起つた異常な変化を何と説明して好いか判らない。カーツと身内の血が湧き返り、胸の辺りは、ムズムズと甘い寂しい奇妙なそして強烈な好奇心に襲われ――。然も注目すべきはその時激しく前へ廻つて見たいと思つた事である。何ヶ月もいや何年かの後迄、僕は前姿、即ち捕縄の掛つた胸を見なかつた事を実に残念に思つたものだ。それでいながら後手の後姿を見たのも、たつた五六秒で直ぐ巡査とその男は闇と人ごみの中に消えて終つた。もう少しはつきりして居たかも知れないが、僕が二十二才の今になつて辛うじて思い出し得たのはこれだけであり、それ以前には全く記憶がない。従つてこれがあの瞬間から連綿と十五年間も続いて居る「後手に縛る事」への異常な興味の発端なのである。

二、此の事に関する僕の考察

僕は此の瞬間の事実をどう解釈すべきか迷う僕の経験が晴雨氏の言う「サジズムは性交慾とか強姦慾の段階として」のみある物か（最近性科学者が性愛を云々して、小児にも性慾ありと言う説を僕は否定しないが、然し

あつたとしても、成年男女の性現象とは趣を異にする筈だ。ましてや小児に性交慾の片鱗だにある筈は無い性慾の無い少年の僕が、捕縄の掛つた男むくつけき男、多分三十才は過ぎて居たろう）に対して感じた不可思議な興奮が晴雨氏の説にどれだけ関係があるのか。関係なしとせば此の興奮は一体何処から来たのか。

犯罪、悪人への恐怖、好奇心、捕縛の安緒の発作、又は小児に於て既に存する加虐的興味、小児の男性的征服慾、圧迫慾、能動性、然も如何なる理由も、生命の不譏諤と言う事以外解決出来そうも無い。僕は最近、この女の子が、じやれつて来て僕の手を握えて「縛つちやうよ」と言うのに驚いた。そして

氣を付けて観察すると、子供等の間で如何に多く縛りつこなる遊び（若しくは戦争ごっこ、チャンバラごっこ、悪漢ごっこの一部として）が行われて居るか。統計に取つたら大変な物ではないかと思う。子供達の大半は縛つたり縛られたりする事に何か他の遊びと少し違つた奇妙な興奮を持つて居る。これは僕の異常性から来る色目鏡なのかとも思うが然し大人ののみか、少年の探偵、冒険探険小説

の中に、必ずと言つて好い位、加虐や被虐的場面が現出するのは何故だろうか。何故少年の為に書く作家は、（大人向きの作家が必ず色模様を入れる様に）加虐的スリルを加えるのだろうか。

それは少年の好みに適するからではないのか。これも僕の曇つた目の誇大妄想であろうか。僕は人間の加虐的（又は他の変態的傾向は勿論）な慾望は特別の存在ではなく、人間の普有性であると言う結論に達する。只それが如何に発展するかについては九月号に波多野新氏の「変態心理を衝く」に詳しく述べられてゐるし全く同感である。

僕は性科学者でないから、学術的な研究はしない。然しこれ等は現象への説明であつて原因の解決ではない。電氣の凡ゆる働きは解つていても未だに「電氣とは何ぞや」と言う問には答えられないのと同じである。人間は平和を好む、それと共に闘争を好む、美を好むと共に醜にも執着する。嫌々ながら見た。戦争が何時迄も絶えないと言う事も単に国際問題思想問題だけではないのか。

もう一つ言いたいのは、某大作家が加虐的作品に依つて（その作家は人間（自己）の本質に肉迫して世間の目を恐れず発表したとす

る。ジャーナリズムをにぎわした時、大衆がこぞつて彼を変態性慾者と見出す事でその日から何か普通の人間と違つた不気味な存在と見る。然しその大衆の一人／＼が深く自己を反省した時、果して何人が此の作家を批難できるか。僕は万人が変態性慾者である事を立証したいのではない。万人が自分の心に煩悶して、他人を変態的に見るその偽善ぶりを立証したいのだ。又逆に美展等で「裸女を鎖で縛つた」有名画家の絵があつたとすると、批評家達は決して、その画家の変態を云々せず何か論理的な抽象的な凡そ無味乾燥な見方をするものだ。象徴的な理は勿論あるだろう。然しそれだけでは無い筈だ。此の相反した二つの見方が僕には納得出来ない。

此の誰しもが各自多少は持つ変態的なものが、公になつた時（芸術家と言う者は自己の内面を追究して、それを露出する事を第一任務として居るから特に人の目に変態的に見えるのであるのであつて、自己讃美以外に自己を語らない代議士連中が芸術家より変態性がない訳では決してないので、むしろ逆な場合の方が多いだろう。）悪名や美名になるのは、御本人にとつても迷惑千万であらう。それらの半ばは半公認であるのにそれを口に出

して加法的だと言えば直ちに變態扱いにされる。然しこれ程多くかゝる傾向の存在すると言ふ事は、それ自体此の傾向の通有性の立証ではないか。

画家が一流展覧会に「縛つた裸女」を出品した時、それが何か象徴的な意味を含んでゐる事は確かとしても、彼は意識的、ナイスは潜在的に加虐に対する興味、特別の興奮なしには画き得ないと僕は断言する。余談になるがトルストイの小説描写が彼の禁慾思想にも抱らずエロテイクであると言ふ事は、矢張りトルストイが女について十分の理解と執着があり、人一倍の性慾を持て余して居た事はうなずける。彼が性的不能者であつたら断じてこれだけの傑作は書けない。然し昨今、この故にトルストイを偽善者呼ばわりし、好色漢だとけなす者があるのは賛同出来ない。トルストイが人間的な悩みを多く持ち、然もそれに負けまいとして血みどろの苦闘をした、その事が我々を勇気づけてくれる。

僕の尊敬するのは生れつきの天才でなく、努力によつて得られた天才なのだ。まして自分が性の自由を尊重するからと言つて、これに反する一切の道徳的（偽道徳者ではない）な過去の人間を批難したり、踏みこむ様な

言行は以つての外だと思ふ。和而不同^{ワシテドリーゼ}と言ふ事は、同而不和^{ドウジテワゼズ}の人には判るまい。キリストが神か人間か僕には判らないが、どちらにしても、キリストを尊敬するのは、彼の奇蹟でも、神としてでもなく彼が人間として人間的な悩みを経たからである。石をもて此の女を打て^{カイン}とか、汝、心の中で姦淫するなかれ^{カイン}等キリストが人間として悩んでからこそ言える言葉なのだ。キリストが神であるなら、マリアに石を投げつけても好い筈ではないか。キリストが人間だと言ふのではない、人間として物を言つていふと言ふのだ。キリストを好色漢だの性生活をあげくのだと言つた記事を書くのは御自由だが、そう言う研究は無用の長物としか思われぬ。最も彼等はそれに相当した責任ある人生観を持つていられるのであらうが。

元へ戻るが、変態性をもつと（性慾を罪惡の如く見る封建性より明朗で自由な、又その為にも責任のある性の開放が叫ばれると同じく）開放的に、昇華作用によつて、健全なものに成長させられないであらうか。そうすればキリストであらうと何であらうと清いものも、美しいものも、もみくちやにして泥の中



に引込もう等と言ふは、性○罪○惡○観○念○を○持○た○す○事○は○變○態○へ○の○温○床○だ○と○自○分○の○経○験○か○ら○言○い○た○い○。極度なる変態は暗い環境や、異常な刺戟、生活、暗い性質的に起因する事が多い。自己にして然り。

三、その後小学校時代

先ず出来事を箇条書に並べて見よう。

○年上の子に黒兵児帯で縛られかゝつて何故かひどく恐れて、真赤になり、もがき逃れた。余り嫌がり方がひどいのでその子も驚いたらしい。

○遊び友達に一寸の間、木に縛られてくれと

手○を○腰○に○頂○ま○し○て○、直○く○解○く○(と○言○う○約○束○で○)縄○で○縛○ら○れ○た○と○言○つ○て○も○、只○ぐ○る○つ○と○巻○く○だけ○)

○母が度々、子供の頃叱られた罰に柿の木に縛られた話(母は父母なく、他人の家に預けられて居た)をした。何か僕は極度に恥かしかった。恥かしがり方や嫌い方が極度に激しいのは、無関心でない証拠である。憎む行為は愛とは正反対のものであるが、矢張り相手に執着しているからであり、愛しては居ないが、無関心ではない。

○近所の五・六才の男の子を二階に上げ(もうその頃は十才位であつたと思う)縛らせてくれと頼んだ、男の子は素直に承知した。然しそれで何をしたか(多分何もしなかつたのだらう)覚えて居ない。二日位でその子は遊びに来なくなつた。

○祖母と一ヶ月ばかり毎日縛りつこゝをやつた。どちらが早く解けるか、と言う遊びで大抵僕はトリックが上手くさつと解けたが、祖母は正直でいくらやつても解けず「ぼん、解いてや」と故意と痛そうな顔をして見せた。祖母は当時八十代で祖父の姉に当り、某殿様の女官をして居た人で百芸に通じ、僕の当時の好き遊び相手であつた。

○歌舞伎が好きで、毎月、明治座、歌舞伎座と見て廻つて居たが、芝居好きの親友が居て、彼の鎌倉の別荘へ行つて、広い庭でチャンバラをやつた。歌舞伎を真似て、上下を着け、刀を差し(本物が彼の倉の中にあつた)お白粉を塗り、クマドリそして、羽左や高麗屋を気取つた。その時お互に縛つたり、縛られたりした事がある。その時相手は知らず僕は嬉しかつた。歌右エ門(当時のだが)の実は盛の出て来る児太郎のブロマイド(縛られてゐる)は特別に気に入つて大事にして居た。然し歌舞伎でこう言つた場面を見たのは、丸橋忠彌、神田祭、八百屋お七が馬上に縛られてゐる姿を見た位に中将姫も明鳥も知らない。

僕は此頃から残虐が嫌い(矛盾の様に見えるかも知れぬが、これからずつと書いて行く)勘平の髪を婆さんが引ずり廻す所等、恐くなつて外に飛出した程で、血を見ると貧血を起す、幽霊等とても恐くて見てられない。(今に至るも四谷怪談を見た事がない)

○色々の探偵小説、冒険小説、講談小説から、その部分の絵や文章を抜き書きし、スケッチし、自分の好きな様に作り変え、色を塗つたり縛つてない絵も後手に縛る工夫をした

り、物語も作つて見た。此の凡ての材料は子供向きで、大人の本は見もしなかつたし興味がなかつた。

此の時代（小学校時代）は要するに暗中模索時代であつたと思う。「後手に縛られた人間」に興奮したと言うが、如何なる興奮なのか、一寸思い出せない。僕は甚だ性的眼醒めが遅かつた為、性的興奮等なかつたと言える。従つて対象は性に関係なく、婆さんでも、^{カウデユウ}甲冑をつけた武者でも、ひげを生やした爺さんでも、又、五六才の子供でも、女でも（女は余り少年向きの本にあらわれなかつた。）好かつたのである。又自分でも好かつた。着物を着て、武士の積りで縛つて見る。しかし、自分では思う様に出来ないので満足しなかつたと思う。

縛られるのを極度に恐れたのは、被虐を逆効果に期待して居たとも言えるし、祖母や男の子を縛つたのは加虐への試みであつたかも知れない。然し此のどれも長続きしなかつた。つまりその当時、一番僕の興味を引いたのは空想の世界なのである。空想を異常に好む事が僕の特異性と言える。空想による遊び以外のどれにも満足しなかつたし、満足する程の強烈な刺激がなかつた。そこで、

以上の前縛り、十字架、足の縛り方、道具使い、逆さ吊り、いわゆる残虐と名のつく一切の物に興味はなく、むしろ嫌悪して今日に至っている。これをはつきりと固定化させ、又興味を強めさせたのは、中学に入つて同性愛に目醒め出した頃である。

四、同性愛時代

僕の空想性は日増しに強まつた。今迄は年齢性別を問わなかつたが目標は美少年に限定され、それは現実の少年に非ずして（全く奇妙だが、現実の美少年に魅力を感じる事はあつても、少年の半ズボンから、むき出した太ももに魅かれる位でその少年を縛ろうと考へた事は一度もない）必ず小説の文字や絵から得た印象を基として空想発展させたものである。従つて少年から女性に移行した現在でも、魅力を感じた現実の女性を縛りたいとか、結婚したい等と殆ど考へず、矢張り只空想の世界故に喜ぶと言う傾向がある。（これは反つて奇巧の諸君からは意外とも、嘘言とも見られるかもしれないが実である）尤も現在残虐性は一切嫌悪するのに、当時は反つて相当悪どかつた様である。理性の制御がなかつた。つまり、

谷崎先生の「少年」を見て判る。固定化の前段階とも言える。故に縛る事が、性と始めて結びつき、同性愛これは空想性に逃避したと共に、自己恋慕（ナルシズム）ともひつついた。それは自分を縛る事であり、（少年時代にもあつたが）より性的となり、家人の留守を見計らつて全裸となり、鏡に向つて何とか我が身を縛ろうと苦心したものである。縛つて終うと色々な形をして見て、自分の太もも（敢えて僕のフェティシズムを挙げるなら、女性の太もも）の部分の変化の美に特に魅力がある。を眺めたりした。不思議と自分の性器には関心がなかつた。その頃、すでにベニスのエレクトがあつたか如何か記憶がない所を見ると無関心だつたのであろう。そしてそれをスケッチしようと思つた事もある。これはやり難かつた。しかしこれは再三回で此の時特別に何か刺激（例えば、他人に全裸で縛られるとか）があれば、現在相当違つた（被虐症的）影響があつたかも知れない、自己恋慕も被虐も消失してしまつた。（現在これらが皆無とはいひ切れるのが、先ず正常に近いと思つて居る）それ以来、この遊びは一度もやりたくないし、又やらない。一万空想の世界では愈々激しくなり、悪ど



くなつた。美少年を縛る転がす、それが色々に脚色され、裸にもした。尤もはつきりした性慾はないから、此の時分、男に対しても女に対しても性器への興味はなかつた。縛つて如何するかでなく。如何にして縛るかに興味がある。(完全なる変態性慾者が全然性交に興味なく、只残虐によつてオルガスムに達すると同じ様なものである) 僕が敢えて何回も此の事を書くのは、〃縛る〃と言う事が性交慾から出発したのでは無かつた事を立証したいからである。

当時のヒントに用いたものは、必ず一ヶ所乃至三ヶ所は出て来る。海野十三、南洋一郎江戸川乱歩等の小説とその挿画だ。若し当時

谷崎の〃少年〃を見て居たら、随分現在に激しい影響があつたかも知れないが、幸か不幸か見る機会がなかつた。つまり縛られた場面を僕が勝手に引出していたのだ、「私は縛るのが好きです」と堂々主張した記事も絵もお目にかゝらなかつたのである。稍長じて〃地獄変〃の弟子をスケッチする部分、女官が焼かれる部分。又室生犀星の稚子の小説で妹を×に組合せて後手に縛ると言う部分等の発見に大喜びでした。

此の期間で只一つ現実的な話は〃ふわけ〃

(例の中学生の〃解剖〃で、その頃、国漢教科書に杉田玄白の〃蘭学事始〃があり、その中に解剖の事を〃ふわけ〃と書いてあるのに由来する) が流行つた事である。組の95%迄が、ふわけされズボン、パンツを脱がされ、下半身を露出するだけの遊びなのだが、僕だけは極度に恐れて用心深く逃げ廻つて助かつた。友人に如何なる時にエレクトする、と聞かれて返事に困つた事がある。若し縛られて(彼等ふわけ執行委員の腕白共は常に繩をかくし持つて居て、それをさつと掛けて事を行つたので) ふわけされたら縛られると言ふ事に依つて興奮する自分のエレクトしたベニスを見られるのが恥かしかつたので、(と

言つてもそれが何を意味するか自分で判らなかつたが、此の事実は、既に性と結びつき、又被虐的なものも有つたと言える。) 他の友人のふわけを見るのは矢張興奮もした。但し〃縛る〃事によつてであつて性器が見られるからではなく、又見た事もなかつた。

僕の同性愛は女性への移行型であつて男性的な物への執着はない。あく迄女性的美少年のそれである。僕が此の時分からだん／＼正常に向わずに変態的になつて行つた中には次の理由がある。当時(十五、六才) 友人達は陰毛の生えた話とか、自慰や夢精の話、Y談ばかりして居たが、僕ばかりは、女について全然興味がなくエレクトは有つても、その意味も知らず、生の秘密について一向に知ろうとしなかつた。体操の教師が叱言のついでに「君達マスばかりしてるんだらう」と冷かして皆がどつと笑つた時、僕は何の意味か判らずに友人に聞いて笑われた。そして教えて貰つたが実行しなかつた。それを始めて経験したのは、それから七年後のそれもひよつとした動機なのである。二十才になつた夏の或日、浪人の受験勉強の退屈なまゝに、と友人の話した自慰の事が頭に浮び、おつかなびつくりで試みて生れて始めての奇妙な快感を味

つたのである。そんな訳で僕の発毛したのは十八、九才であつた。まるで処女の初潮かのような不安と恥しさを覚えた。

「もう大人か」と言う感じである。必然的に僕の性態は内向的になり、変態的になつた。

何故なら中学四五年の同級生（もはやさかりのついた動物の様な状態から、女性を性の対象としてのみ見ず、恋人として、ロマンチックに清くも見る様になつた時分であるから）に対して中学一、二年の様な話はしたくも出来ないし恥かしかつたから、自分だけが色魔の様な錯覚におち入つたのである。又変態なるものは、家庭の環境にもよる。大体裕福な家の方が多い様に思う。色々な娯楽があり、様々の快楽を備えている方が多い。労働者とか農村の人には反つて正常な健康なものがある様に思う。

五、再発（女性への眼醒め）

戦争、そして爆撃、疎開、戦災、食糧難、数々の労苦の間、不思議な事に妄想は影をひそめ、終戦も過ぎ生活も安定してくるにつれて、始めて真性の女性への性の眼醒めが起つた。最早、同性愛は消失した。僕の同性愛と言うのは、前にも言つたように十二、三の年

では、ひよろ／＼の女の子よりふつくらした男子の方が、特に〃もゝ〃の部分等に遙かに肉感的に美しい場合があつたからである。

（今もその名残はある）

その時分、僕は疎開地九州から上京し、受験に失敗して浪人をしてながら会社へ勤務して居た。そこで或る日岩田専太郎の画く〃縛られたお富〃を会社の休憩室のデスクに投出してある雑誌の口絵に見出したのだ。その時僕は再び八才の頃始めて受けたショックと同じいやそれ以上のショックを受けて再燃した。手に取る勇氣もなく、体を小刻みにふるわして横目でチラリ／＼と眺めて室を出たのである。四年ぶりの然もはつきりした自覚と理性によつて、それを判断し出したのである。それから一寸でもこう言う絵を見ると体中がふる／＼ふるえ出した。目はくら／＼として、そんな雑誌は直ぐ買つて終つた。時代が又エロ、グロ全盛になつて居たし、先刻書いた自慰の喜びを知つたのである。〃縛る事〃に興味を持った少年が選擇作用の後、その趣向を美少年に向け、同性愛が過ぎるや、被虐も自己恋慕も失い、直ちに女性に向い、固定化して行き、〃縛られたお富〃を見た途端、一度に見事に結びついた。

も早〃縛る〃対象は絶対的に女でなくてはならなくなつたのである。それ以後一度もこれは変らない。そこに自慰の快感が結びつき、性に対する好奇心、研究心が生れて来ない、従つて〃女を縛る〃事だけでなく、（全く始めは、少年が女に変わったと言うだけであつた）その他の興味つまり、縛られた女体、その物の美を楽しむとか、こゝで始めて晴雨氏の言う〃加虐は性交慾の現われである〃と言う言葉が成立したのである。

では何故〃縛られたお富〃を見た瞬間かく迄ショックを受けたかと言うと、少年時代には僕が勝手に僕の趣向によつて引つこ抜いて楽しんでいたのであり、全世界で唯一人として僕の様な変つた趣味を持つ者はあるまいと（いやそれすら意識せず）思つていたのである。それが、はつきり僕の望んで居た通りの姿で現われ、然も女に眼醒めて激しく渴仰して居た物が、ピツタリ結着したからである。だから忘れて居た四年間に潜在的に積り積つて居た物が爆発したのだと言える。そして僕以外に、否通有性としてこういう趣味が存在する事を納得する迄相当の期間を要した。その中に晴雨画伯を知り、三越の犯罪展にも出

向いた。他に僕と同じ同好者が居ると言う事は安心でもあり、喜びでもあったが又何か人に横取りされた様な神秘感のうすらいだ様な妙なる感覚であつた。

何しろ公に口にしないのだから（親友の間においても、親密である程なお更である）僕は色々な雑誌（中には低級なエロ本もあつたが）を集めたが、それは只その場面の文や絵を集めるだけの目的に他の部分は下らないし読みもしなかつた。たつた一頁それがあると云うだけの理由で何百円も出した。同好者があると言つても、友人を得る等思いもよらなかつたし、奇クに逢う迄は夢にもこれを発表する事等考えた事もなかつたのである。やが



て僕は晴雨氏に抱きて来た。

第一、僕は「後手に縛る」事に興味があるのに氏は責（僕の嫌いな言葉だ）に主目を置いて残虐である事。むしろ僕は、縄を解いてやり、愛撫したりする空想が好きであり、それなのに「縛つた女」が無性に可愛くなり、又その姿が美しく見える事。

第二、髪が嫌いである事。（氏は髪が特に好きらしく、然も大量の髪をぼう／＼と乱した日本髪がぞつとする事）これは幼少の頃、従妹が「あんたのママさん本当のお母さんじゃないのよ」と言つたので、カーツとなり、けんかをした。で母に恐る／＼聞いた事がある。その時、母は髪をほぐして居て、恐しい目でにらみつけた「ウソのママなら、こんなに可愛がるかい」その時とても恐かつた。それではないかと思うのだ。母が死んだ時義母があると聞かされた。

第三、血が嫌いである事。他人の指の傷でも痛い位で、共産党が嫌いなのも理論と共に「赤」という連想が嫌だからである。従つて血の流れる描写、映画、絵を見るのは全くたまらない。折角縛つた場面も何の興味もなくなる。どんなに美しいお茶碗に白米の御飯がホカ／＼と盛つてあつても、死んで蠅が一匹

のつかつてて御覧なさい、全然食う気は無くなる。

第四、時代感覚の相違、（今の二十代の青年にして晴雨氏の画に心から同感できる人があるだろうか。日本髪、和服や腰巻の情緒の好きが判らぬ事もないが、特に氏の感覚は明治かそれ以前のものであつて、「紅葉」の小説と同じ様に、今の青年にはピンと来ないのである。紅葉よりカミュ、サルトルを喜ぶのが自然と言うものだ。晴雨氏の選ぶ写真のモデルや絵にあらわれた姿、顔形は良く言つてあの世からあらわれた浮世絵か、悪く言つたら幽霊の様でうす気味悪い事おびたゞしい。始めて氏の写した写真を取寄せた時、便所に行くのが恐かつた。僕はこんな趣味はもつて居るが、明朗で健康的な対象が好きである。「喜多玲子さん」に感心したのも、美の感覚が新しくモデルが健康でピチ／＼とはち切れんばかりだからである。縛られても、はねかえす程の肉体であるからこそ魅力がある。

五年間、僕は罪惡觀念と性慾、ひいては変態との対立苦闘に悩み、たまらずに脱出して色々の思想をあさり、又奇クにあう迄、色々の事件（實際的行動）もあり書きたいのだが余り長くなるので一先ず筆をおく事にする。

少年の戀

守田雄二

女中

朝、便所に起き出たときは、東の空がほんのりとしらみかゝっていた。道路越しの雑木林の木立は、まだ、うす闇に包まれて、凍りついた様に動かなかつたが、会社通いの自転車は、ライトを消して走っていた。

窓ガラスを、しみ透して来る様な戸外の冷気に道彦は、首をちじめて、体をふるわした用便を済して、寢室に帰りかけると、障子をあか／＼と輝し出している台所の火が、ふと道彦の眼を射た。トシが起きて、御飯を炊いているのだ。どうせ、登校時間には間があるので、まだ、充分寢床の中で睡眠をむさぼれる筈だ。が、鳥肌立つた道彦は、火のそばに寄つてみたい衝動を抑えかねた。

障子を開けると、トシの顔がふり向いた。「坊ちゃん、もう起きて来たの?」

「うんにや、寒いから……」

道彦は、曖昧に返事をにごして、腰を下ろした。

「そんな、寝衣一枚で起きて来たら、いくら火のそばだつて、風邪引きますよ。」

「大丈夫だよ。」

道彦は、火のそばに、にじり寄つて、手をかざした。

「ねえちゃん、もつと薪をたいてよ。」

「駄目、そんなことしたら、御飯が焦げて、食べられなくなつてしまいます。」

「でも、寒いもん。」

「だから、こんな所に、いないで、おやすみなさい。時間がきたら、ねえちゃんが、おこして上げるから。」

トシは、道彦がさしくべた長い薪を、かまどから引込めて、灰の中にさし込んだ。生いぶりの薪は、かわいた灰をぶす／＼と吹き上



女囚私刑体験記の作者より

昨日泊りで遊びに来られた紳士風の三十年輩のお客さんが奇譚クラブの十二月号を持つていらつしやつたので一緒に拝見しますと、私の下手な告白が載つていますので、びつくりするような恥しいような変な気持でした。

お客さんはそれを読むと何故かとても興奮されてお蔭で一晩中夜通し寝かされませんでした。「ひどい所だなあ、貴女だつたらどんな気持だ」と仰言いました。「私だつたら死んでしまふわ」と答えますと、「そりやそうだろう」と仰言いました。私はおかしくつて独りでお腹の中で笑いましたが、若し私が前科者だと知つたらびつくりして逃げ出すでしょう。

いけない事ですすが私は前科をかくして今の所に勤めていますので住所と家は少し変えてお送りしました。悪い女だと思われるでしょうが、前科を知られるのを極度にいうあまりの事で何卒お許し下さいませ。尙貴誌を拝見しますと続きをお望みのように感じましたが、若しそうでしたら内容は大変陰惨ですが



げた。それでも、道彦は、火のそばをはなれようとしなかった。トシは、人の好きそうな顔に、困った微笑を浮べて、御飯の後に、湯わかしをかけて、ドン／＼火を燃やしてくれ。暗い台所が、ぼうつと明るくなつて、暖さが身にしみた。

「じゃ、坊ちゃん、一寸だけ、火をみて、ね」

トシは、道彦に火の番を頼んで、井戸側に出て行つた。水の音がする。何か洗物を始めた様だ。道彦の胸を、とり残された様な、淡い淋しさがよぎつた。彼は長い火箸を、もてあそびながら、井戸側の物音に、耳を立てた

道彦は、両親がなかった。四才のとき母を七才で父を失つていた。それ以後は、祖母の手一つで育てられ、生活費は、祖母の次男、道彦には、叔父に当る正文からの仕送りに頼つていた。仕送りは、月にかなりの金額で、田舎町での、年寄りと子供の二人暮らしの生活には、その半分も使い切れない程であつた。大阪で、かなりの実業家として、名を売り、多数の使用人を使つてゐる正文からは、早く女中を置くようにと、云つて来ていたが、しまり屋の祖母が、頑として、聞き入れなかつた。道彦が、大学を卒業するまでは、金はいくらあつても、足らないのだからというのが祖母が、女中を置こうとしない、最も、切実な理由であつた。彼女は、正文からの送金があると、必ず、その日のうちに、郵便局に出かけて、半額だけは貯金にふり込んで歸つて来た。その祖母が、女中を置くようになったのは、偶然の理由による。この春、彼女は、風邪をこじらし、肺炎を患い、半年程も起き上がることが出来なかつた。それから、健康に自信を失つたのか、看護に来ていたトシをそのまゝ、使うようになったのである。

トシは、隣村の漁師の娘で、父親さえ、元氣でおれば、何も、他人の家の飯を食う程の

原稿用紙で六十枚程になります。清書してお送りしたいと思ひますので新年号の貴誌上にその旨御返事下さい。尙若し誌上に発表下さるのでしたら先生方の手で美しい文章に書きかえて戴きとう存じます。

私は前科者の娼婦として、も早やまともな道に這い上ることの出来ない悲しい女ですのけれども毎日のお客さん達には誠に素直に仕えてゐるつもりです。何か日々の生活が淋しくて仕方がございませぬ。高嶺の花とは知り乍ら堅気の人の奥さんになりたいと出来ないことを夢みて居ります。かしこ

十月二十八日

多美枝

編集長様御許に

（実は原稿を受取つて直ぐ連絡の手紙を出したのですが直ぐ返つてきました。続編是非お送り下さい。お差支えなければお処を知らせて下さい御幸福を祈ります。 箕田京二）

孤独なファンタジーの作者より

ひどい雨の日でした。時間の空白にいたたまれなくなつて、家を飛びだしました。行く所とありません。その時、ふと、一昨日K K通信が私の所に届いたのに気づきました。もう奇譚クラブが来ているに違ひない。

こともなかつたのだが、その父親が、五十の坂を越して、間もなく、中風でたおれ、それから急に生活が苦しくなり、それまで、母親が内職程度にやつていた干物の行商が、一家を支える唯一の生計の道となつてしまった。

然し、そこから得られる収入は知れたもの、到底、一家五人のものが口を託するに足るものではなかつた。そんな事から、トシは、すぐ近所に縁づいてゐる道彦の伯母の世話で、祖母の看護に来るようになったのである。二十三才で、もう、そろ／＼縁談も、もち上りかける年齢なのに、十六才になる、すぐ次の弟が、一人前になるまでは、私はお嫁には行きませんと、伯母に連れられて来たその晩に祖母に云つてゐるのを道彦も、そばに坐つて聞いていた。

火 遊 び

トシは、働き者で、そのまめ／＼しさが、すぐ、祖母の氣に入つてしまつた。そんなトシを、道彦は「トシ」とも、「トシさん」とも呼ばずに、たゞ「ねえちゃん」と呼んでいた。

「ねえちゃん、お湯がわいたよ。」
「有難う、こゝろ落ましてから、すぐ来ますか

ら、坊ちゃんあたつていなさい。」

水を流す音がして、トシが、赤くなつた手を、エプロンの前掛で拭きながら、入つて来た。

「おゝ、寒む……」

首を縮めて、トシはニツと笑つてみせた。道彦も自然に、笑いを返した。

トシが、かじかんだ手を、火に翳す。寒いので、自然、二人の体がビタリと、くっ／＼している。

「もう、温くなつたでしょう、風邪を引くといけないから、もう一息、おやすみなさい」「いや。このまゝ、僕、起きてる。大分、夜が明けて来たもの。」

道彦は、煙でくもつた窓ガラスを透して、明るくなつた空を見上げた。

「でも、お祖母ちゃんのお留守に、坊ちゃんに風邪でも引かれたら、私困るわ。」

「風邪なんか引かない。」

道彦は、どうしても、寝たくなかつた。勿論、祖母がおれば、そんな自由は許されないのでが、祖母は、二、三日留守であつた。伯母の家に行つてゐるのだ。

少年、道彦の頭には、十日程前の出来事がしつかりと、刻み込まれてゐた。その日も、

私は近くの書店に飛び込みました。やつぱりあつたのです。私の手がふるえていました。書店の人の眼が怖い様な気がしました。私は夢中で一頁一頁むさぼり読みました。もうそこには完全に私の世界に戻つたのです。一カ月に一冊とは何か身を切られる様な気がします。

読み続けている中に、あゝ、なんとした事でしょう。そこに、私の文があつたのです。そして——孤独なファンタジー

なんと素晴らしい題でしょう。そしてその挿絵、私は思わず、その頁に吸いつけられてしまいました。

芳野眉美

狂い咲くカンナの作者より

奇譚クラブの十二月号を夫と二人で胸躍らせ乍ら読みました。私の「カンナ」に早速注交通りの美しい挿絵をいたゞけてありがとうございます。ございました。喜多玲子さんにもよろしくお礼を申し上げて下さいませ。今月は是非書いてみたいと思つてゐた原稿も、何やかやと／＼書かずじまいになりました。それでも何だかじつとしてゐられない氣持でこの手紙を書きましたの。新年号に期待しております

羽村京子

今朝みたいに寒い朝だった。道彦が、曉方、便所に起き、トシの炊く火に誘われたのは、今朝と同じであつた。ふるえながら、トシと並んで腰を下ろすと、トシが灰の上に「恋」という字を書いてみせた。笑いながら、「この字、何んと読むか知つてる？」と云うのだ。

「コイ」

と、読んでみせると、

「それでは、こんなに書いたら？」

火箸を動かして、

「恋愛」

と書いた。道彦がその通りに読むと、

「良く知つてゐるのね。それでは、坊ちゃん、実際にそんな事したことある？」道彦の顔を、のぞき込むのだ。道彦はドギマギしながら、首を横に振つた。

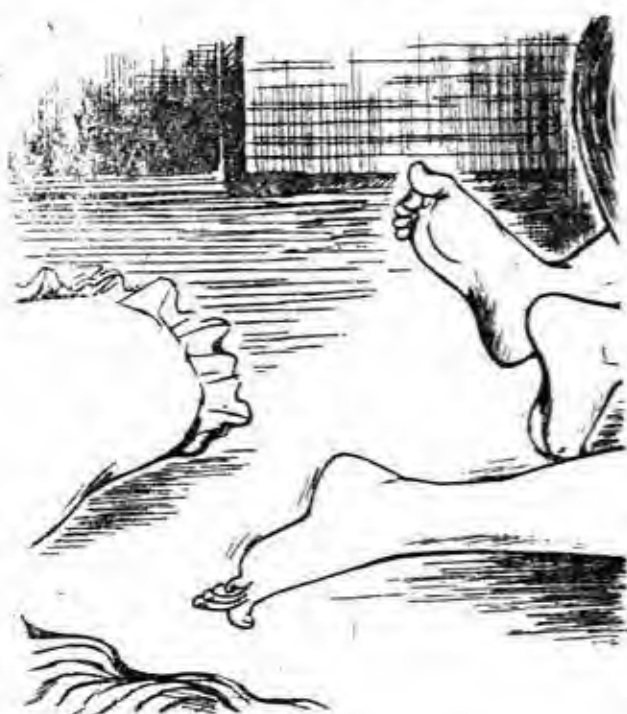
「でも、坊ちゃんはその様な可愛い顔してゐるんだから、女の生徒から騒がれることあるでしょう。」

押つかぶせるように、トシが顔をくつゝけてくる。道彦は、恥しく、いやらしい気がして、プイと立ち上り、トシをにらみつけた。トシが驚いて、今のことお祖母ちゃんには黙つていてくれ、と云う。勿論道彦も、祖母に

告げることなど、以ての外なので、一つコクンとうなずいてみせた。トシが、

「可愛い」

と、道彦を引き寄せて、額に何度も唇を押しつけた。道彦はビツクリして、その手を払いのけ、寢床にかけ込んだ。ドキン／＼と、胸が激しく、動悸を打つていた。その時は、激しく、嫌悪したトシの言動が、寢床にもぐり込むと、甘い感動として道彦の胸によみがえつて来た。抱き締められたとき、道彦の鼻頭を押しつけたトシのやわらかい乳房の感触も、ありし日の母の思出を、そぞろに誘うのだつた。あのととき、トシの手を無理に払いのけて来たことが、道彦には何か心残りにも感



編集長に物申す

毎号面白く拝見しています。こんな意に合つた雑誌は一生かゝつても廻り合えなかつたでしょう。しかし、いざ手に入ると色々文句をつけたくなる我儘はお許し下さい。この誌の愛読者には色々な傾向の方が混つて居られるから私が自分の好みばかりにして呉れというわけにはいきませんが、片手落ちのないようにして下さい。十二月号で小名木さんが云われたように人間の怪奇には限度がありますまして公刊する雑誌としては自ら一定の枠の中にある筈です。試みにうまい物ばかり喰べてごらん下さい。しまいには何を喰べても美味しくなくなります。食物がおいしいのは時々まずい物も喰べて質素にやつてゐるからです。色気は何んといつてもかくすからこそ魅力があるのです。だから、どん／＼傾向が進んでゆくことには大いに心配があります。しめつゆるめつの呼吸に氣をつけてほしいのです。どれもこれも強烈になつたら、誰かが強烈さを感じなくなるでしょう。編集者は強心臓かも知れませんが、それでは読者がたまりません。奇クの読者の八割は全く正常ではないが、さりとて重症患者というのではなく中

じられて来た。何時か、あのつゞきをトシに云わせてみたい気がする。もう一度、しつかりと抱きしめられてもみたい。道彦は、心のどこかで、その機会のめぐつてくるのをねがつていたのだが、トシと二人きりになることは、いざとなれば、おそろしく、祖母の居るときは、そつちにも気がねがあり、仲々そのチャンスは来なかつたが、道彦は今朝は、いゝ機会を掴んだのであり、トシの横に腰かけて、話しかけられるのを、心待ちに待っているのだ。

「ねえちゃんはいくつ？」

トシが黙っているのを、道彦はしびれを切らした。

「どうして？」

いたずらっぽく、顔をのぞき込んで反問して来たトシの言葉の調子に、からんでくる様な気配を感じて、道彦は少し慌てた。

「う、うん、なんでもないんだけど……」

言葉を濁しながら、道彦は心の底まで、トシに見抜かれた様な恥しさを覚えて、顔をほてらせた。その恥しさが、道彦の体をかたくし、顔を不気嫌そうにつくろわせた。それでも道彦の注意は、トシの表情の動きに集中されているのだ。思春期の乙女心の敏感さで、

トシが道彦の心の動きを感じとらない筈がない。トシは面白がつて、益々体をくつゝけてきた。

寢 床

「どうして、私の齡なんかたずねるの？」

子供の道彦には、女にからんで来られて、うまく応対する程の機智もなければ、度胸もない。彼は益々赤くなり、益々黙り込んでしまった。

「坊ちゃん私が好きなんでしょう。」

トシは真正面から切り込んで来た。体をよじらせて、ククツと笑っている。熟し切った女の体臭がふつと道彦の鼻をついて来た。道彦は心の底を、やわらかいものでやんわりと押えつけられたような気がして、何となく、ドキンとした。トシの燃える様な眼が道彦の眼前に迫つて来た。たゞ、もう、おそろしく不安になつて、道彦は早く此の場をのがれたい衝動に駆られた。トシの視線のどこかない寢床に逃れて、頭からスッポリと、布団をかぶつて、体を思い切りちじめてみたい気がした。でも、道彦はどうしても立上ることが出来なかつた。そうすれば、トシの逞しい腕が背中から追つかけて来そうな気がして、じつ

間派といったところだと思います。従つて一部の人の奉仕にならないよう、緩急よろしく御願ひしたいものです。(天邪鬼)

◎御意見しかと拝聴しました。確かに一部の要望を迎え過ぎた嫌いはありました。あなたの趣旨は今後の誌上に盛り上げてゆくことを御誓ひしましょう。(箕田京二)

読者の便り

本日貴誌十二月号入手しました。何時来るかノノと心待ちにしていただけに嬉しく早速読んでおります。編集されている方々の御苦勞に対しては只感謝あるのみです。六月号から十二月号迄通して受ける強い印象には圧倒されます。私は未だ女性を知りません、そのせいもあるかも知れませんが、殊に人生体験の告白としての記事の持つ真実さは、私自身苦んだ問題なので心を強く打たれます。中学校に入る頃雑誌に出ている縛られている絵を見て、どうにもならぬ興奮を覚えたものでした。従軍、復員とそのまゝの状態が続き、戦後ストリップを見る程度でしたが、偶然貴誌を発見してから自分の欲していたものは、これだという事がはつきりしました。

(東京 S・I生)

と火のそばにしやがみ込んだまゝ動けなかつた。

と、急に道彦は両頬に、トシの冷い手を感じた。そして、道彦の顔はそのまゝ、強い力でじわりと、トシの方にねじ向けられた。トシの顔には、さつきの笑いは消えていた。

「私……坊ちゃん好きよ。坊ちゃんはどう？ 私が好き？」

トシの声には、ぬきさしならぬ真鍮さがこめられていた。

「うん」

道彦はふるえる声で、何となくうなずいてしまった。すると、トシの唇が吸いつく勢で道彦の唇にとびついて来た。瞬間、「ムッ」と避けようとしたが、力及ばなかつた。十二才の少年の顔は、トシの逞ましい両腕の中にもだえていた。

日頃、友達同志で春本を見合つて、むなしく想像していたものとは、こんなものであつたのか！ その女体に、現に、俺はしつかりといだかれているという自覚が、少年らしい優越感をそゝつた。……

「坊ちゃんの……ね。」

言葉を濁して、

「クッククク」

と、忍び笑つた。その露骨な表現は道彦の羞恥心をかき立て、トシの手を拒もうとさせたが、その努力は無駄であつた。

「坊ちゃん……」

トシが喘ぎながら云う。

「ね……行かない。」

「どこに？」

反問した道彦も既に、トシの意のある所を知つていた。

「ねどこ……」

少年らしい反省も、狂い立つた情慾の前には、はかなく崩れ去つた。道彦の胸には、女体の秘密が今こそ、解きほぐされるのだという期待が渦を巻いた。

……四畳半のトシの室には、机の上に黄色い花が一輪さゝれていた。夜具を敷きなおしている後むきのトシの臀部の動きが、道彦の眼に大きく映つた。

此れから開かれようとしている未知の世界の扉は、花咲き蝶うたう、まるで春の花園のような甘美さで道彦の好奇心をそゝつた。そして彼は此の世の中の最も価値のあるものが握める満足さに身をふるわしているのであつた。

（おわり）

○
毎月此れ程素晴しく此れ程読者に待たれる雑誌は他に恐らく無いのではないかと思ひます。これは小田氏が誌上雑感で指摘されている様に「読者の要求を無視しない」「編集部の方意と研究の賜だと思ひます。読者の希望に此れ程深い注意を払われ、此れ程誌面に如実に反映されているのを見れば読者も又編集に加わつて居る様で愛情と支持を与えずに居れなくなるのは当然だと思ひます。」

九月号読者通信に大阪の中原氏が男のリンチ的場面、軍隊生活の同性愛を載せる様希望されると、十月号で明石氏、十一月号で青柳氏、KK通信第二号で坂本氏等が同様の希望を述べられているのは此の意見に同意の人々が多い事を示し、十一月号の少年矯正院体験記等によつて、それらの希望が実現しつつある様に思えるのはその一例だと思ひます。更に一步すすめて男性のヌード写真又は男性責めの写真を試みられては如何ですか。突飛に聞えるかも知れませんが、米国では男性のヌード写真がかなり盛んで、わざ／＼取寄せている蒐集家も少くないとの事です（大杉生）◎御希望の実現に努力します。目下十七八才の美少年のモデルを物色中です。（染田玄）

世界艶笑文学紹介

☆貞操帶奇譚☆

ジョルジュ・エフ・カルトル

1

夫は妻を素ッ裸にした。

2

MICVI・・・十字軍第1回出征の秋であ

った。若人は神々の為に恋人を犠牲にし、夫達は信仰の為に其妻を忘却せねばならなかつた。夫婦は夫婦で哭き、愛人は愛人と嘆き、そして色蒼ざめた秋風が之に和した。恋人同志が最後の接吻を17回も繰返えしている間に夫婦は泪の中に冷い寝台で悲しい抱擁の数を忘れた。

中世紀の恐ろしい社会道徳は、男性に限りない恐怖を懷かせた。即ち女性の貞操であつた。それは茲に新らしい発明品となつて、男性の手に与えられた。貞操帶！がそれであつた。鉄で鍛えられた厳めしい頑丈な門は、更に外方に向つた鋭い荊に依つて

護られていた。不可開の門は世にたゞ一つ

の鍵を以つて閉ざされるのである。それ以外の如何なる鍵を以てしても、此の門は断じて開くことは出来ない！それは頑丈な門であつた。

3

で、夫は妻を真裸にした。妻の裸く真白な尻肉にすさまじき黒鉄の貞操帶が着せかけられた。錠！妻は新らしい不安に襲われて涙に暮れる——そのいじらしさに夫は再び門を開いては閉し、閉じては開かねばならなかつた。

進軍の長蛇喇叭が長くひびいて最後の瞬間が来た。夫は栗鼠よりも素早しつこく門を鎖ざすと身装いを直しつゝ妻と袂を別たねばならなかつた。妻は疲れと虚脱とで夫を送り出した。

胸に十字の旗飾つけて、勇ましくも悲しい首途——東方の仇なる異教徒の国、彼等が云う「地獄の入口」なる聖地へ——長駈！！

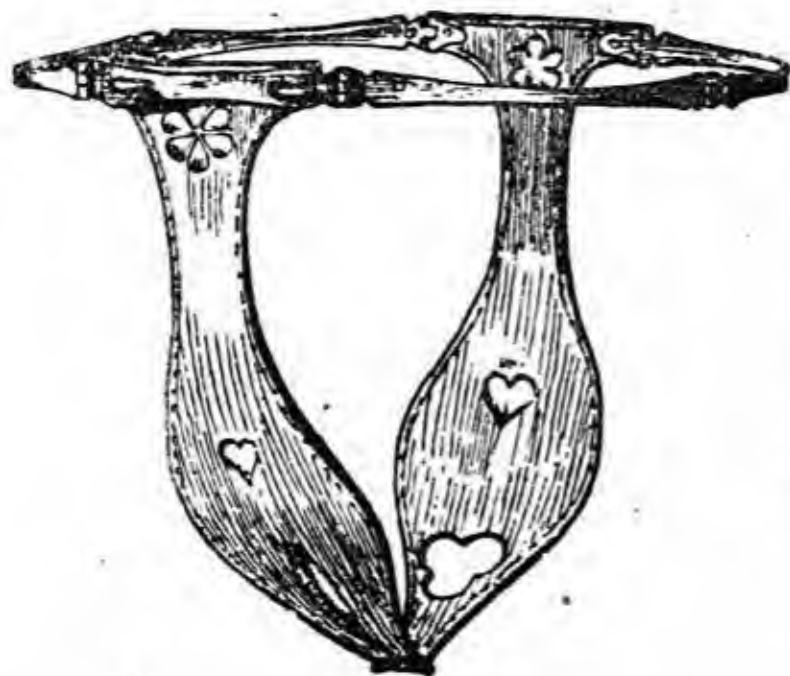
4

東へ。東へ。夫とそれから同じ運命を抱いた多くの男性達が、淋しい征服を續けて行つた。各々たゞ一つの門の鍵を確かりと握りしめつゝ……。

そして、その鍵だけが夫の信仰する唯一

十字軍時代鉄製貞操帶（十六世紀）

バヒンゲルのコレクション



奴隷としての女

Das Weib als Skhvin

(ヨキアム・ヴェルツェル博士著)

≡ 欲求し又は強制される女の隷属……
 獣の如く扱われ虐待される女、マゾヒスト
 の性心理≡という傍題が付いて居る。
 女の虐待、慣らされてしまったサディズム
 ス、女の自然的受動性、その潜在的残忍性
 等、性慾心理中の重要な項目を取り上げて
 それが人類文化の中に如何に表われている
 かを巧みに解明している。

- ①家庭と学校に於ける懲戒
- ②東洋女奴隷市場、後宮教育
- ③米国農場に於ける虐待
- ④肉体所有
- ⑤法の奴隷としての女
- ⑥近代賃銀奴隷
- ⑦マゾヒスト

の物であつた。

5

春が来た。うら悲しかつたクリスマスも
 恵まれずに過ぎて春が来た。神に仕える十
 字軍は戦いに勝った。幾多の恋人と夫達を
 天国に送つて戦いに勝った。遙かなる聖地
 は「地獄の入口」と云う名を失つて「樂園
 の階段」と呼ばれた。それ程奇異な美わし
 き都——そこには異国情緒の多い宝物も、
 それにも増して味わい深い南国美女もあつ
 た。

だけでも、十字軍は日毎にその数を失う
 ばかりであつた。天国に帰る人々を除いて
 も「神々を犠牲にして恋人の爲めに」或い
 は「信仰を忘却して妻達の爲めに」樂園の
 階段を駆け降りる若人や夫達が多くなつて行
 った。

6

あ、^{スタルデー}、郷愁！
 夫も遂に樂園に叛いた。そして、十字軍
 とは正反対に、罪と汚れとの都——故郷をさ
 して途を急いだ。

西へ、西へ。東への進軍にも増して多く
 迫り来る困難と辛苦！だがそれが大いなる
 愛慕の湖の前に何であらう。

けれども神を伴つた罪は恐ろしく夫の上
 に振り下されて来た。鍵！とり返えしの付
 かぬ世にたゞ一つの鍵が、何時の間にか夫
 の手から奪い去られていた。何と云う刑
 罰！

だから夫は、泣く泣く妻の許に帰らねば
 ならなかつた。一切を泪の裡に物語つて、
 夫はむだな後悔に咽んだ。

妻を、も一度、真裸にして見て、開かれ
 そうも無い黒鉄の扉に、まざまざと及ばぬ
 愛着を惜しんでいる可哀想な夫！

妻は落さない様な、気の毒な様な気持ち
 で見守つていたが、やがて、慣れた手付き
 で一寸まさぐると、鍵を失つた筈の扉は難
 なく完全に開かれて了つた。

夫は直ちに……
 ……130秒の後、夫は、喜んでい
 のか？悲しんでいのか？全で判らなくな
 った気持ちをごつちやに感じ乍ら、放心し
 た様に崩おれて了つた。

危険な危険な貞操帯！

(終)

—あなたのムチの下に—

角 田 平 八

皆さんは六甲の裏山を御存知ですか？ 大阪、神戸のちよつと北にこんな全く都塵を離れた仙境が幽邃の静寂と明澄な空気とにつつまれて存在していることを知っておられる方は少いと思います。しかも、この仙境には大阪、神戸に近いという地の利があつて、思いもかけない松林の中や山の中腹に、すばらしい洋風の住宅や、和風の広大な邸宅が二、三軒固まつて建てられているのです。

私はこの六甲の裏山がこよなく好きで、この夏のある日曜日、例によつてルックサックを一つ背負つて、軽いハイキングに唯一人出掛けました。真夏の太陽を松の木蔭や清流のほとりに避けながら、オゾンを胸一杯吸つて愉快な半日を過し、やがて風近くなつて快い疲れと共に空腹を感じ始めたので、小さな美

しい水をさら／＼と流している谷川に下り、飯ゴうすいさんの用意にかかりました。と、二人の白人の女が、しかもそれがあの映画女優のジェン、ラッセルを思わす様なすばらしい肉体の女がガムをかみながら、私の背後の草むらから現れたのです。サンダルをひっかけパンツ一つで、上の方は乳房丈隠した軽装なのです。山の中とはいへ、私はちよつと恥しい思いでうつ向いたまま、たき木に火を移す仕事を続けました。しかし二人の女は仲々立ち去らず、不思議そうにしばらく私のすることを見ていましたが、突然

「ハロー」

と呼びかけました。私は貿易会社に勤めており少々英語がしゃべれるので、そのままほつて置けばよかつたものを、人なつこく話しかける女達の相手になりました。五分も話しているうちに一人の女が私に握手をもとめ、「そんなうるさいことはやめて、私のうちへ来ないですか。風飯を差し上げよう」と言うのです。

私は好奇心が湧いて来たので、おろかにも彼女達の後に従つたのです。十分も細い小道を歩くと、別荘風の和洋折衷の小じんまりした建物に近ずきました。私達は庭の方へ日本風の小さいな庭でした。八畳敷の和室へ招じ入れられました。部屋の真中には普通の低いテーブルが置いてありました。女達は魔法瓶の様な容器の中から、私の今まであまり見たことのない食物を色々取り出ししました。私はすゝめられるままに、空腹なのも手伝つて、いい気になつてこの脂っこい料理をほぼばりました。女達は亦別の魔法瓶から冷いコーヒをカップに注いで呉れました。そして

「あなたにはウイスキーをあげましょう」と、私のカップに丈、けいたい用の小瓶から薄くはく色の液をたらしてくれました。しかしこのコーヒを飲んでしばらくすると何だか無性にねむくなつて来ました。そしてそのまま寝てしまつた様です。

ふうーつと意識が回復しかけて来ました。いつのまにか私は洋風の密室の中にほり込まれていたのです。

「あつ！」

と私は思わず声を出しました。どうでしょう。私のねかされている横の大きなベッドにさき程の二人の女が、まばゆい程の真白い肉体を素裸にむきだして腰かけているではありませんか。太もものつけ根のあたりには黄金色の毛がぼーとかすんだ様に波うつています。女達は私が正気ずいたのに気がつき、その小にくらしい程に真白で豊かな曲線をもった巨大なお尻をベッドがきしむ程に動かしながら遠慮のない大声で笑い始めました。私は夢中でたち上ろうとしました。ところがなんと私の両手と両足首には手錠がはめられており、そこから鎖がのびて夫々私の頭の方の壁と足の方の壁のかぎ手にまきつけられて、私は両手、両足を女達の好色の眼の前に真裸で真直に伸ばしたまゝ身動きが出来ないのです。その上、私のこう丸には鉄製の金具がピシリとはめられ、その金具についている細い鎖の端を一人の女が握っているのです。私は始めの内何が何だか分かりませんでした。唯呆然と二人の真白にもり上った乳房を交替に見つめてい

ました。すばらしく芸術的な彫刻をながめていた。それは今年四月、勤務先からの帰途、〇〇駅を下車すると駐留軍の兵隊が来て、「どこかホテルを案内してほしい」と言つたので、僕はパンパンでも世話してほしいのだから位の軽い気で一緒に行つてやることにした。ホテルの女中さんに案内された二階の奥の一番上等の部屋に二人を入れた僕は、兵隊が少しでも早くパンパンを待つてゐるのに違いないと思つたので女中さんに相談しようと思つた時「貴方と一緒に今夜はこゝへ来たのだ」と言つて手を離さない。一体これは……と思つたが兵隊は大変怒つて僕を離さないで僕は仕方なく「OK」と答えた。

実は僕を今夜此処へ連れてきた理由は兵隊が僕の身体をパンパンの代用に使うつもりであるというのだ。そして僕に丸裸になつて、……このベッ

或る夜の経験

和田 勇

ませんでした。女達は何か囁き合うとにたりと口先で笑い。例の金具の鎖を引きました。私のコー丸を押しつぶす様な圧力が加わり、

ドの上に寝て下さいと言うので僕は今更逃げ出す事も出来ず言われたまゝの通りにした。世の中には随時変つた奴がいやがると思つた。私のような者を代用にしろとも金さえ出せばいくらでも美しい女がいるのに……と思つてゐる間に僕の顔に白いハシカチの様なもので目かくしをしたので、これから一体何をやられるのかさっぱりわからない。先ず僕が寝ている後に来た。そして……。

僕は今夜の出来事は何んだか夢の様なものであつた。謝礼として兵隊から千円札一枚を受取つて自宅に帰つた。時刻は十時を少し過ぎていた。全く不思議な今日の出来事について僕は絶対に他人に話しません。然し貴社だけでは申し上げて何かの参考の資料になるかも知れません。もつと詳しくお話したいと思いますが、手紙ではどうかと思ひますので僕を呼び出して下さい。

その金具についているらしい針が私の肉に喰い込んで行きます。私は思わず日本語で

「痛い！ 何をするのだ！ 殺す気か！？」

と大声でどなりました。女達はベツトからたち上り、ころげまわつて嬉しそうに笑いました。そして案外流暢な日本語で

「どう？ ミスター……、私達の云う通りに

なる？ お金はたくさんあげるよ」

というのです。そしてその鎖をゆるめてくれました。私の首すじを冷汗が一すじ、すーと流れました。

「早く返事なさい！ そら」

と亦女は金具を締めつけます。女達は私の体の側にその神々しいくらいな純白の体を何

女の責場を描く時の心境

伊藤 晴雨

私が女の責場を画きたいと思ひ立つたのは年僅に十七才、卒直に云えば春情発動期である。当時私は彫刻師の丁稚小僧で月収廿銭、女の責のコレクションが意の儘でないので東京朝日新聞の挿画を業務の暇を盗んで書き写しをして女の身体に縄を画き添えて密かに喜んでみたのを朋輩弟子に発見されて顔を赤くした事などがあつた。其後筆を持つて生活が出来た様になつて新婚の若い妻（但し美人では無かつた）を扱帯で縛り上げて写生をした時の喜びは今に忘れ

得ない。其後女の責場を研究するには芝居に限ると考へて芝居の楽屋へ出入する様になり、女形を縛つて写生をしたり写真を撮影したりして居る内、無理解な人々から「変態性慾者」という肩書をつけられるに到つたが馬耳東風平氣の平左で研究といへば研究道楽といへば、道楽で四十余年「女の責場」一本槍で通して今日に及んだ。決して先見の明があつたのでも無ければ物質的でも無く只何と無く、「女の責場」が好きで堪らなかつたから画業の側只夢中になつ

の恥らしいもなく、さらけ出しながら、金具を締めたりゆるめたりして、私を責めつけるのです。私の顔が苦痛にゆがむと二人はその青い好色の瞳をぎら／＼させながら、楽しくてたまらないという様な表情でのぞき込むのです。

「あなた返事しないのね。よろしい。もつと苦しんでもらいましょうね」

と言つたかと思うと、鎖をもつてない方の女がいきなり、その大きなお尻を私の仰向きの顔の上にのせて来たのです。私の顔は、彼女のお尻の二つの大きな肉の間に埋つてしまふのです。甘いとろける様な香水の匂がそつと私の鼻を打ちます。やわらかい毛がやさしく私の顔にかぶさつて来ます。おかしくきこえるかも知れませんが、その瞬間私の全身を何ともいえない幸福感がかけめぐりました。しかし、女がぐつとそのお尻を私の顔におとしてみようと、私は呼吸が出来なくなつてしまいました。私はこのお尻の肉塊の谷間に空気を求めてもがきました。私は私の一生をこのお尻の下に終えてしまふのかと思ひました。しかし女はこの様にして男を責めるのに馴れているらしく、時々そのお尻をひねります。すると僅かに空気がもれてくるのです。私は

て描いて描きまくつたに過ぎない。丁度釣り道楽の人が釣り場を捜すのと同じである面白いから深い所へ足を踏み込んだという以外に六可敷理屈も何も無いのであるから私が「女の責場」を描く心境は歌麿が春画を描いて居る時の心境と同じであろうと思う「女の責場」は春画では無いが醜を化して美と為すという点に於ては彼此一致して居ると思う奇譚クラブという責物専門(?)の雑誌が東京に生れずして関西に生れたという事は、関西人の頭悩のよさ云い換れば商業都市に住む人の商業意識の鋭さを示すものである。喜多玲子という女性の画を視ると親切ではあるが女性特有の弱さがある東京の雑誌社や或る種の好事家が女性の画家という点に興味を持って、まだ海の者とも河の者ともかぬ新発足の女流画家を引つ張り風にな仕様とするのは喜多玲子という一女性をメチャクチャに葬る様なものである。現代の事業家にしろ出版業者にしろ未来のある人を養成するという事を知らないで既成の人物斗りを買ひ被る悪習が多い。喜多玲子という一女性を十分に教養して立派な者に育てるには遅くも同後十年の歳月を要するであろう。

私は小学校を満足に卒えて居ない絵画としては素人画の域を脱して居ないのである裸体写生をしてからでないと構図が出来ない様では活動して居る人物画は描けるものでは無い。人体をウンと頭悩の中に叩き込んで縦横自在に責め場の構図をつける様なれば「一人前」といえるだろう、それ以上は腕の問題になつて「女の責場」は老子の所謂「九年にして大妙の域に到る」であろう。

女達は交互にこの尻の運動で私を責め、それが三十分もつゞくうちには半死半生となつてしまいました。私はとうとう、音をあげ、女のお尻の下で

「もう許して下さい。あなた達のいわれる通りになります」

と言つたのですが、はちぎれる様な女のお尻の肉に邪魔されて声になりません。そして運悪く、物を言おうとして開けた口の中に、押しつけられたのが私の歯に当つたのです。案の定、女は怒りました。

女は柳眉を逆だて——正にこの表現が当つていると思います——いきなり私の……ヘマツチ棒を差し込んだのです。この痛さ！経験のない人にはわかりません。そしてムチが私の腹ともうに鳴りつゞけました。私が苦痛にいましめられた体をのた打つのを心持よげにしばらく眺めていましたが、やがて私をそのまゝに女達は出て行きました。食事に行つたようでした。今度あらわれた時は……私を、犬か猫位にしか思つていないのでしよう……。そして私は完全に女達の自由になることを誓わせられました。そして毎日曜日毎に私の奉仕が強いられるのでした。しかし現在は縁が切れています。私はこの経験のため、文字通りのマゾヒストに仕立て上げられてしまいました。今私は女の人のお尻の下に苦しんで見たくてたまらないのです。私を幾らかの給料で忠実無比なドレイとしてやつてくれる御婦人はいらつしやいませんか。

奇譚クラブ最近号 主要目次

〇七月号 女天下時代特集〇

口絵 縛られた裸女十態……………喜多 玲子

緊縛裸婦写真集「美しき苦悶」

女天下時代(マゾの男達) 画集

女の奴隷、マゾヒスト群像……………高取 辰治

女体の下に蠢めく男たち……………阿久津 猛

淫乱婦女伝……………花木 実

疾患の鶏……………藤安 節子

或る変態夫婦の死……………藤崎 洋美

お座敷ストリップ色勇伝……………鬼山絢策

女剣劇王健在なり……………富士 芳孝

国際文通好色噺……………二俣志津子

上海の売笑婦 野鶏族……………野中 愛三

変態 艶 書……………岡田 咲子

世界奴隷艶情史……………野溝 草兵

少年好色奇譚……………松谷 茂

性交なき遂情行為……………島上 源一

性愛と残酷……………仁比山 等

恥毛と腋毛……………田中 芳生

女の足の蠱惑……………赤坂 剛

夢性の美少年……………三村 幾夫

張形の謎……………緑 猛比古

倫落の岐路……………壬生すみ子

獸類にも恋愛はあるか……………絹島 増夫

張型を用いた性愛の技巧……………白川朝子

〇八月号 責めと男色特大号〇

口絵 浴場と浴室のエロチシズム

惨虐の芸術(合巻に現れた殺し)

男色天国繁昌記画集

女体相撲艶色史……………増田 志郎

変態コレクトマニヤ……………庄司 浩平

男の天国・女工情史……………早崎 穂穂

ソドミーとレスボスの愛……………染田 玄

夢性の美少年……………三村 幾夫

【変態心理】自虐淫薬……………三富 浩生

日本性見世物変遷史……………潮 マリ

乳房を失った女……………竹谷 十三

男色殺人事件……………井口 正憲

男性的女子の記……………藤安 節子

変化中条流……………緑 猛比古

MとS……………竹内 節夫

温泉ホテルの母娘……………岡田 咲子

不貞の倫理……………矢代 文世

姦淫私刑考……………貴崎 郷子

悦虐の記録……………丹波 太郎

拇指反った素足の美……………喜多 玲子

王朝好色本、音なし草紙……………的場 通

◎喜多玲子習作集「縛られたる女の十五態」

◎折込口絵写真集 「緊縛美の断片」

神戸暗黒街探訪記……………久木田 堅

光源氏の性的生活……………畑村 連治

〇九月号 特集倒錯の告白〇

口絵 倒錯の告白画集……………竹中英二郎

玲子習作二十態……………喜多 玲子

縛られた女の写真集……………美の 緊縛

狂い咲くカンナ……………羽村 京子

白い腋窩の幻想……………三富 浩生

僕という男……………中野安太郎

妖しい花びら……………寺尾 修治

弱者の醍醐味……………村井 健司

憂鬱症の転機……………蘭 守

サディストの悲哀……………天野 一郎

足部憧憬の悲願……………山本 貞輔

鎖夏怪異漫話……………嵯峨あきら

変態心理を衝く……………波多野 新

彫刻と性について……………池 長味

記 録 係……………岡田 咲子

中国艶話 夜譚随録……………皆田 仁

邪恋の焰……………松井 簀子

サド侯爵と殺生関白秀次……………高取 辰治

処女性の神秘……………的場 通

洋パンを囲む座談会……………辻村 隆

加虐淫虐症の種々相……………仁比山 等

吉原の淫虐魔……………緑 猛比古

陸軍御用達千一夜……………松本 公恵

ケンプエル江戸参府紀行……………伊吹慶太郎

平城夜話 俠盗犬磨……………庄司 浩平

桜姫全伝 曙草紙……………山東 京伝

○十月号 特集 切支丹迫害史○

口絵 責め場面挿絵集 喜多玲子・構成
切支丹迫害史画集 五井野弘・画
縛られた女写真集 辻村隆・構成

切支丹迫害史 漆島 迫平
氷責めの断罪 赤城 芳年
遊女花菱の受難 花山 剣作
江戸の刺青模様 潮 マリ
マリヤ・マグダレナ 桂 牧次郎
性慾の昇華 赤坂 剛
或の医師の告白 亀岡 恭三
大衆文学に現れた「女の責め場」 高月 大三
愛と苦痛の交錯 鳥上 源一
恋の烙印 松井 籟子
少女の像 栗村 由美
呻される夢 波多野 新
男色の海 井口 正憲
あらたま村の奥にて 二俣志津子
アブニストの記 へばきうり 鬼山 絢策
夫婦愛と緊縛の考察 辻村 隆
サーニン 戸森 暁
宿命に哭く 浅田 正人
悪女 岡田 咲子
江戸時代の墮胎医 福森 耕司
縛られた妻 早川新二郎
遺書 小峰登美子
猿轡五態 喜多玲子・画

○十一月号 宗教刑罰戦慄画譜○

口絵 宗教刑罰戦慄画集
風俗便所考 淫書開好記
緊縛の受難(縛られた女の写真)

悲恋の笞刑 松井 籟子
局部装飾としての文身 高野 雅和
続・へばきうり 鬼山 絢策
羞恥と潮紅 波多野 新
ストリップ変態記 朝見 速夫
現代陰間茶屋談義 染田 玄
好き者放談 鷺見 東一
続・変態艶書 岡田 咲子
誌上雑感 小田 利美
少年矯正院体験記 嶽 牧一
桃色の地獄 藤安 節子
反戦論者の弁 三富 浩生
夢性の美少年 三村 幾夫
墮胎と出産風俗 阿久津 猛
珍版・南国随筆 井村 幸男
羞恥心の発達 赤坂 剛
都会の異態交響楽 中河津規男
江戸奇習 縁切寺 畑村 連治
悪魔と口紅 桂 牧次郎
癡狂文学者の研究 杉山 清詩
ジャン・ベルネル夫人の狂楽 シヤルロット
男色魔の虜 井口 正憲
性愛描写の文学 紀市 郁栄
切支丹迫害史 漆島 迫平

○十二月号 惑溺と愉悅特集号○

口絵 フランス貴婦人の変態性生活
扉 甘き欲楽の後
耽美派小説名場面集(潤一郎の巻)

折込口絵写真 縛った女を写す 辻村 隆
濁れる愛執 松井 籟子
初夜 笹田 豊
奴隷妻 片矢 薫
指の秘密 武山 武彦
男装寵姫伝 亀岡 絳七郎
孤独なフアンタジー 芳野 眉美
モンテカルロの佝僂男 モオリス・ブルウジェ
中国艶話 毛のない女の物語 赤塚与志夫
女性器崇拜 雨森 順一
糊と泥と砂 長岡 変一郎
4Sクラブ探訪記 二俣志津子
非公開放映 世界の閨房 藤安 節子
囚衣(或る人妻の生活記録) 古川 裕子
墮に関する怪奇な報告 村田 生
SODOMIEの珍裁判 鳴尾 善治
ロマンチックなサディズム 森山 美歌
香具師放談 浮家 鷹三
女囚私刑体験記 小坂多美枝
セックスの記憶 綾 久江
錯乱の倫理 近東規矩也
夕映え燕の教訓 丘 正雪
狂い咲くカナ其の後の告白 羽村 京子



風 変 り な 作 戦

笹

田

豊

女房は——と云つても俺のじゃない。俺が二階を借りている家の女房だ——俺の部屋に入るといきなり口を切つた。

「笹田さん、今月中には是が非でも越して貰いますよ。来月からは親類の者が入る事になつていきますからね」

俺は藪から棒の此の言葉に、思わず寝そべつていた万年床から半身を起した。

「越すつて？」

「そうですわ。今月中に何処か他の家へ移つて貰いたいの」

「だつて、そりや無理だ。今月中と云つたつて後十日余りしかないし、それに第一今時そり簡単に家は見つかりませんよ」

「でも仕方ありませんわ。来月から親類の者が入る事に決つたんですから」

「そいつは無茶だ。僕と云う居住者がいるのに」

女房は此の時意地悪そうな笑いを浮べて、さも馬鹿々々しいと云つた表情をした。

「居住者？ 冗談じゃない。一年も部屋代を払わない人が居住者ですつて？ あなたは居

候じゃないの。私達のお情けで置いて上げてあるんだわ。だから出てくれと云われた時は黙つて出て行くのが当然だわ」

俺は酷く腹が立つたが、成程と思わない訳には行かなかつた。何故なら女房の云つた事は悉く事実であつたからだ。俺は一年間の部屋代を全然払つていなかった。そればかりじゃない。蒲団は年中敷つ放し、煙草のかすは部屋中に散乱して、畳の所々には大きな焼跡が出来ていた。全く俺に出て行けと云うのは当然すぎる程当然な要求だつた。今迄ぶつぷ不平をこぼし乍らも置いてくれたのは、寧ろ不思議な位だつた。

しかしそうは云つても、俺は女房の言葉通り素直に部屋を越して行く訳には行かなかつた。何よりも先ず俺には金がなかつた。事実何の定職もなく、雑文を売つてやつと其の日其の日の食にありついていた俺に金があると云えば、全く奇妙な話に違ひなかつた。そんな金の無い俺に部屋を提供する物好きが世間の何処にいるだろう？ つまり俺にとつては女房の言葉に従つて部屋を出ると云う事は、宿無し犬になり下ると云う事に外ならなかつたのだ。だから俺は女房の言葉が尤もだとは思ひ乍らも、絶対従う訳には行かなかつた。

「何と云われたつて、今の処僕には越す意志は全然ありませんよ」

俺は女房のまずい面を眺め乍ら、結論を下すように、ゆつくり答えた。

「まあ、何んて云う……」

厚釜しい人——と云う言葉は口の中に消して、女房の顔色は怒りの為に急に赤くなつた俺は今迄こんなに怒つた女房は見た事がなかつた。

「じゃ私の方は法律に訴えても出して見せませう」

女房はヒステリックな声でこう怒鳴ると、わざと荒々しい足音をさせ乍ら階段を下りて行つた。

その夜、俺は事態の対策に腐心した。

如何すれば女房の態度を軟化させる事が出来るだろう？

俺は此の主題をめぐつて様々に頭を働かせた。

その結果、女房の態度を軟化させる為には二つの方法がある事を思いついた。

一つは女房の御機嫌を取る方法であり、これは未払いの一年分の部屋代を直ちに払つてやる事を意味した。俺の考えによれば、来月から親類の者が入ると云う事は、俺を追出す

為の単なる口実に過ぎなかつた。だから金さえ払つてやれば先方の態度も可成り妥協的になるに違ひなかつた。しかし此の方法は俺には不適當だつた。俺の手許にはびた一文の金だつてなかつたから。

今一つの方法は、それとは逆に、女房を脅迫するやり方だつた。しかしこれは下手にやれば却つて先方を硬化させ、俺を追出す便宜をわざ／＼作つてやる結果に終るおそれがあつた。それを避ける為には、余程巧妙に立ち廻つて、女房の致命的な弱点を見付け出す事が必要だつた。例えば、触れられたくない過去の秘密とか、暴露されれば現在の平穩な夫婦生活が破たんする事実とかを探り出し、それをタネに脅迫して先方の態度を改めさせようと云う甚だ香しからぬ方法だつた。しかも俺は必要上、これを採用しない訳には行かなかつた。

俺は今迄見聞した女房の様子や噂を、一つ一つ周到に検討し、叩けば埃の出そうな事実はなかつたかと考え始めた。しかし不幸にして見当らなかつた。実際それも尤もだつた。女房は酷い面をしていた。子供の時のほう瘡が元であつただらけだつた。こんな面では如何に本人がスキヤンダルを作ろうと思つても

相手の男は恐れをなして逃げ出したに違ひない。今の亭主は、噂によると、女房の持参金に釣られたと云う事だつた。

俺は弱つた。女房にスキヤンダルがなければ脅迫の仕様がなない。やけになつて煙草に火を付けた。その瞬間、俺の胸に天来の妙案が浮んだ。

「しめた！」

俺はにやりと笑つた。その笑いは多分、人間の浮べ得る最も悪魔的なものだつたに違ひない。

「こいつはいける！」

こんな事を吹き乍ら、俺は更に考えを進めた。

女房が夫に秘密にしなければならぬスキヤンダルを持合わせていないのなら、俺が作つてやればいゝんだ——俺の考えは、つまりこうしたものだつた。そしてその考えを押し進めている内に、俺はとんでもない計画を作り上げて了つた。

その計画に依れば、俺は手段の如何を問わず、有無を云わせず女房と肉体的関係を作り出さなければならなかつた。そしてそれさえやつてのければ、後の道は坦々とひらけていゝ筈だつた。女房は家庭の平穩を乱すのを恐

れて、夫には隠して置くに違いない。若し生真面目に事実を打明れば、それは自ら墓穴を掘る事になるのだ。醜い容貌に只さえ悩まされてゐる夫は、それによつて完全に妻への愛情を失う筈だ。それに第一、強姦と和姦のデリケートな相異を其の場に居合わせぬ第三者に、どうして區別出来よう？

要するに女房は、沈黙を守らねばならないのだ。俺との秘密を夫に知られぬ様、悶々の努力を続けねばならないのだ。此処に於て俺の目的は完全に達せられる。俺は女房の秘密をタネに永久に此の部屋に留れる訳だ。しかも其の場合、部屋代を払う事は必ずしも必要でないのだ。

俺がその夜眠りに就いたのは、時計が物憂く二時を告げた後だった。

俺は翌日から注意深く機会を探した。

しかし来客や外出で、三日ばかりは無為に過ぎた。三日目の夜、俺は、亭主が四日間の予定で東京へ出張する事を知った。俺の心は躍った。

その第一日が過ぎた。

その第二日も過ぎた。

しかし俺は何も出来なかつた。機会は充分あつた。俺は毎夜女房の部屋の外に佇んで、

中の様子を探った。そんな面をし乍らも、流石に三十をやつと過ぎた許りの女房は男の体が恋しいらしく、悩ましそうな溜息をつき乍ら、あられもない肢態を蚊帳越しに俺の目の前に曝した。

俺はそんな女を見乍ら、何度計画を実行しようと思つたか知れなかつた。しかしその度に俺を止める何物かあつた。良心の声であつたかもしれない。或は単なる気弱さであつたのかもしれない。とに角、そんな調子で二日間は無駄にしてつた。

三日目の夜が来た。

どうしても今夜の内にやつて了わねばならぬ、と俺は決心した。明日になれば亭主は東京から帰つてくる筈だった。

俺は気弱さを咎うち乍ら、階段を下りようとした。その時足音がして女房の方から上つてきた。俺は何となくぎよつとした。

女房は入ってくるなり又例の話を始めた。

「笹田さん、お分りになつていますわね？」

今月の末ですよ」

「しかし、そいつは……」

答え乍ら俺は何気なく相手の腰に視線を落した。その時ふと目についた物があつた。スカートの横のホックが一つ外れていたのだ！

それは無論偶然だったに違いない。然し俺には或る暗示として映つた。

「チャンスは今だ……今だ……」

俺の心をふとそんな声が通り過ぎた。

「じゃ宜しく頼みましたよ」

女房は判然しない俺の態度に、そう釘をさすやうに云つて立上つた。瞬間、俺の手が肩に伸びた。女房はぎくりとした様に俺の目を見つめた。俺は体中を得体の知れぬ物が走り廻るのを感じた。

「何をなさるの——」

女房は慄え声で叫んだ。

俺は答えなかつた。いきなり体を引き寄せ、激しく接吻した。何時か俺の手は本能的に外れかけたスカートのホックにかゝつていた……

最初女房は激しく抵抗した。

しかし間もなく俺の首に腕を巻きつけ乍ら

絶え入りするような声で

「もつと……もつと……」

と囁くようになった。

俺は女の豹変ぶりにひどく驚かされた。そして亭主たる者なく、油断は出来ぬものと苦笑した。同時に、たつた三日間の空闊にも堪えぬ女の弱さがひどく憐れにも思われた。

しかし俺は何よりも安心していた。

女の柔かい胸に顔を伏せ乍ら、もう宿なし犬にならなくてもすむと、ほつとした気持ちだった。

俺の計画はこうして、こゝ迄は理想通りに進んだ。十の中九分迄は成功したと云つていゝだろう。俺は嬉しかった。こゝ迄くればもう成功も同じ事だと思つた。そして後の一分の事なぞ心にもかけず、肉体だけは顔のまづさに反比例して素晴しく立派な女房を、宇頂天になつて抱きしめていた。

所が一番問題になるのは、最後の此の一分の筈なのだ。世間ではそれを画龍点睛と云つてゐる。如何に素晴らしい龍を画き上げても、最後に画き入れる目に失敗すれば、凡ゆる努力も空しくなつて了うと云うのだ。或は又西洋の諺にも云つてゐる。最後に笑う者が最も良く笑う、と。

間拔けた中に俺はそんな事を全く忘れて了つてゐた。お蔭で、最初の内は愉快に笑つてゐた俺は、最後には遂に泣きべそをかく破目に陥つたのだ。

故障は意外な所に起つた。俺の計画には全然入つてゐない事だつた。全くの偶然だ。うかつな俺はそんな偶然など全然考慮に入れて

いなかった。

嗚呼、何と云う事だ！ 予想もしなかつた亭主がその時部屋へ入つて来たのだ。

後に知つた所に依ると、亭主は東京での仕事で意外に早く片附いたので、予定を一日早めて帰つてきたと云うのだ。

俺の計画は完全に失敗した。

俺は部屋代を払わずに永久に部屋に留れる所か、即刻部屋を追ひ出された。そればかりじやない。俺の夢にも考えなかつた事が起つた。

笑うべし！ あの化物じみた顔の女房も姦婦として、共に追ひ出されたのだ。俺一人だけなら未だい。俺はとんでもない引出物にありついた訳だ。

人を呪わば穴二つ——夜更けの空を白く流れる天の川を仰ぎ乍ら、その夜程、此の諺の真実さを心にしみじみと感じた事はない。

それからもう一年経つ。

あの夜の皮肉な偶然がもたらした俺と女との腐れ縁はまだ続いている。いや、腐れ縁なぞと云えば罰が当るかもしれない。何故なら現在の俺は女に食わせて貰つてゐるからだ。あの女の只一つの資産である肉体をひさいだ金で、やつと其の日の暮しを立てる、いわば

ジゴロの生活を送つてゐるのだ。不甲斐ない俺には斯んな所が丁度適した仕事かもしれない。俺は例の計画をしくじつた事で、案外幸福をつかんでゐるのかも知れない。何にしてもし人間の運命なんて奴はおかしな物だ。いくらもがいても苦しんでも、人間はなる様にしかならないものだ。

女房の亭主は、俺と女房を追ひ出すと、待つてましたと云う様に、小綺麗な女を引張り込んだ。女房に嫌気がさして、何か事があれば追ひ出してやろうと待つていたのに違ひない。して見れば、俺は奴にとつてとんだ福の神であつた訳だ。

女房は楽しそうに働いてゐる。夕方がくるといそ／＼街に出かける。異常に激しい精力を持つ此の女は、夫を守つて貞淑な静かな生活を送るより、こうした生活の方が遙かに楽しく幸福であるのに違ひないのだ。

こう考えて見ると、あの事件によつて被害をうけたかに見えた三人の当事者は、皆それ／＼そう大して悪くない場処に落着いたようだ。怪我の功名と云うべきか。

何れにしても、人間の運命なんて奴は全く不可解と云う外はない……

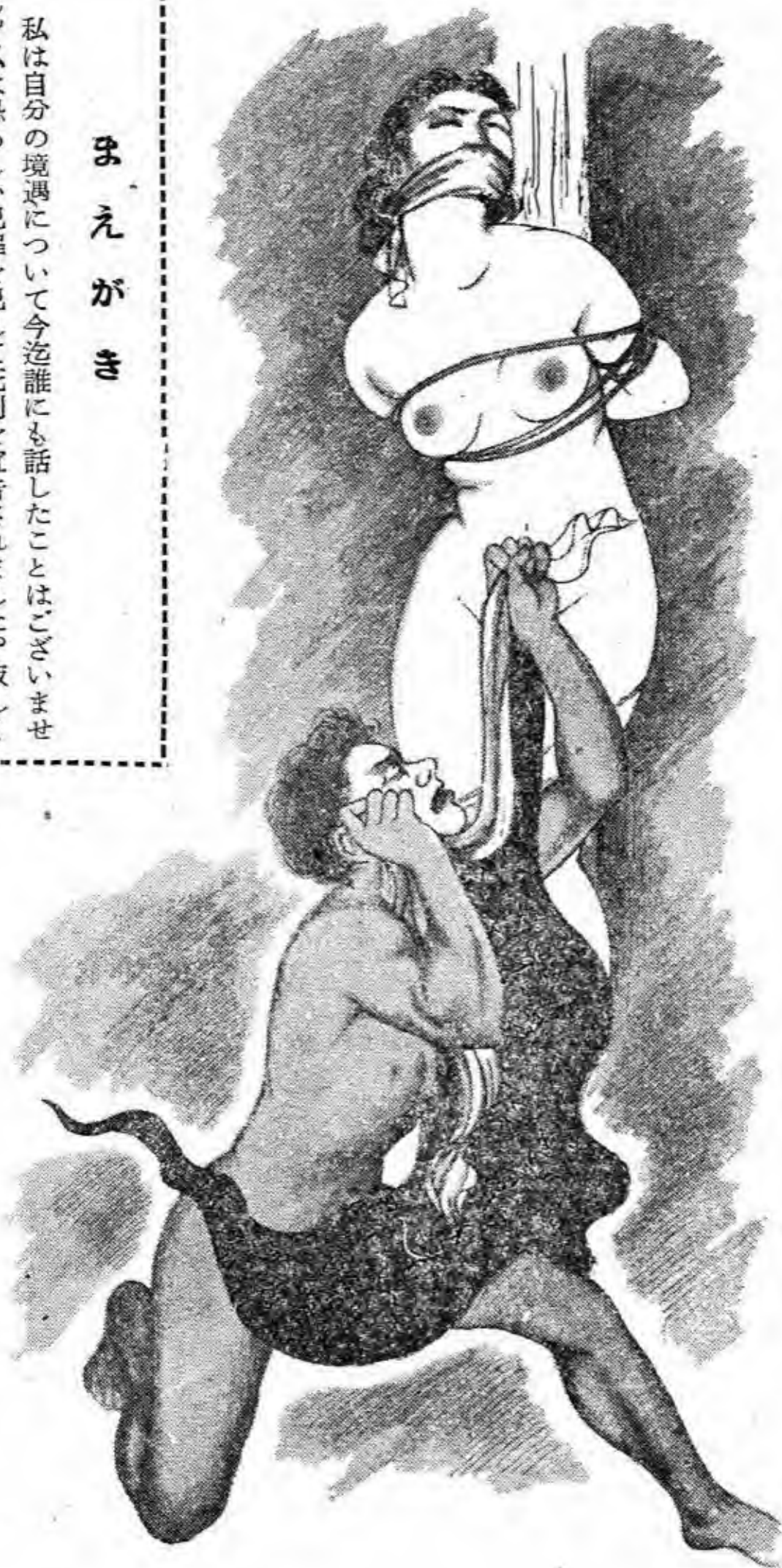
或る死刑囚の告白

赤につかれた男

上村秀久雄

まえがき

私は自分の境遇について今迄誰にも話したことはございません。私は恐ろしい犯罪を犯して死刑を宣告されました。寂しくて居ても立つてもいられない気持です。せめて面会室で弁護士



さんにお話している時だけが救われたような気持になるのです。どうか、私のこの悲しい告白を聞いてやつて下さい。やがて間もなく死刑を執行される私です。今更罪に対する弁解でも、後悔でもありません。まして、それによつて罪の軽減を願うようなさもしい考えではさらくありません。只私が死んでゆく迄に此だけの事を是非聞いて頂きたいのです。——と、そう前置きして、殺人、同未遂、傷害犯人、伊藤幸雄(卅四才)は、官選弁護人の私に対して次のような恐るべき彼の半生記を物語つたのです。医師の鑑定によれば彼は心神耗弱者ではないが、一種の精神薄弱者であるとの事です。私は彼の語つた事を殆んどそのまゝ手を加えず書いてみました。若しこの一文が読者の目に触れる機会があれば、地下に眠る彼も以つて瞑すべきでしょう。

(上村秀久雄記)



【1】

私こと、伊藤幸雄(三十四才)は皆様と同じ様に少年時代をたのしく、異国的情緒に満ちた北海道の室蘭常盤町むろらんときわですごしました。勉強はやはり好きな方でなく、長屋(私達の住んでいた所は百軒長屋と呼ばれ労働者が非常に多く貧しい家ばかりでした。その日暮しの日雇、洋傘なおし、とき屋、漁夫、屋台そば屋、出稼ぎを職業とする

者達が多かつたのです)の子供達を集めては、子供達と言つても私は決して男の子達とは遊びませんでした。私より一つ二つ年下の女の子と長屋のどんずまりのごみ捨て場の近くにむしろを敷いてよくまゝ事遊びをしたものです。男の友達は何人も

「女の中に男が一人、やあい、下駄はまり……おいらにさわるとかつちやくぞ!!」

とはやしたてゝ、私をからかい、時には石をなげられて泣かされた事も何度もありました。でも私は男の子達はどうしても恐ろしくて遊ぶ事が出来なかつたのです。なぜか虫が好かなかつた様です。だから私は此頃から男達の様に乱暴な言葉をつかつた事はなく、なんでも不思議な事に赤い色彩が好きでたまらなかつたのです。私は母の着物の端切の中から赤い布を一心に集めたり、学校で使うチョ紙も緑や黄は全部友達に赤と交換してもらつて、小さなみかん箱にためてしまつておいたものです。どうしてこんなに赤いものが好きであつたのかわかりません。私にはこの頃から普通の人は一風変つた心の流れが生れていたのでしようか。私はそうは思いません。(これには深い理由があつたのですから)。——でも私の先生は私をいやな子だと常にへんな目で見ていた事はたしかです。私は赤い色彩が好きであつたため、どうしても図画に赤いクレオンを多く使つてしまふのでした。私は好きな色なれば別に多く使つたとて不思議はないではないかと、幼い考えで常に先生の言葉に反ばつていたものです。風景の図画などは家の屋根を赤くぬり、塀を真赤なレンガ造りにし、庭には真赤な花をふんだんに咲かせ、庭に立つて花を切っている可愛い女の子も真赤な服をきているのです。土も赤土にしました。そして西の空には真赤な夕陽が今沈みかけているので

す。私は赤のクレオンをこうして画洋紙一杯に使うことが、無性にたのしくて、どうする事も出来なかつたのです。

私が小学三年生の時でした。今までの担任だつた山崎先生は函館の小学校に転任になり新しい先生、意地悪な津田先生がやつてきました。津田先生はこの私の赤一面に画かれた図画を、黒板の上に張りつけて皆に見せ

「おい、伊藤、お前は共産党だな。これからこんな画を書いてはいかん、学校を首にして警察へ引つ張つて行くぞ、わかつたな」

私には勿論、共産党も警察もその時分わかるわけはありませんでしたが、頭を三つ四つ、力一杯こずかれ、女の子の様に泣きだした事を覚えています。全く今になつて考えてみれば馬鹿げた事で津田先生こそ頭がおかしかつたのではないかと笑いだすのですよ。

この室蘭の町には毎年七月には港祭りと言つて盛大な一年に一度の大変なお祭りがありました。丁度その時でした。私は母にねだつたのです。赤い着物と赤い下駄を買つてくれと、だが母は、継母でしたし、父は貧しい洋傘なおしその日暮しなので買つてくれるわけがありません。

「馬鹿たれ、お前にそんなもの買つてやる位なら、俺あ酒食らうわおまんま食う錢こもねえじやねえか!!」

「そうだよ、お父つあんのだ着られなくなつたシャツ、つぎあててなおしてやるから、それで我慢しな!!」

「いやだ、いやだ、赤い着物じゃなくちや、いやだ、死んじまう」「死にたかあ、死ね。死んでくれりあ、それだけ、こつちは助かるだ」

私が小学校四年十一の時でした。私は赤い色彩の着物がほしく、

一晚中泣きあかしました。翌日から一週間は待ちに待つた港祭りです。私はどうしても赤い着物がほしく、夕暮れ近くなつて大通りの呉服屋ばかりのぞいて歩いていました。すると山村呉服店という私の家からすぐ近くの四筋にある呉服店に子供の赤い着物が通りにつるされているのです。私は別に事の善悪なぞその時は赤い着物の魅力にひきつけられて考える余裕もありませんでした。その着物を取つて小脇にかゝえ一散に逃げだしたのです。勿論人通の多い繁華街です。逃げ通せるわけがありません。間もなく交番の巡査につかまつてしまい、父が引張り出されました。私はその時始めて母に恐ろしい折檻を受けたのです。裸にされて麻縄で両手をうしろ手にしばられ、足も動けぬ程柱にしばりつけられて、体の自由を全く奪われあげくの果てに竹の棒で力一杯叩かれたのです。私は泣き叫びました。すると頬からも肩からも、皮膚が切れてあの真赤な色彩の血が流れだしたのです。私ははつきり覚えています。この目でその美しい赤の色彩をじつと眺めました。

不思議です。私は次第にうれしくなつてきたのです。死ぬほどその折檻は苦しかつたに違いないのですが、その血をみているとたまらなくうれしくなつてきて、痛さも遠のいて行くのです。

「いゝや、赤い着物は着られなかつたけど、この赤い血で体をぬつてなぐさめよう。この赤い血をうんと出して体全体を真赤にしてやろう。赤い着物より、もつとすばらしいや」

こう思つたのです。今考えるとなぜこんな気持になつたのだろうと恐ろしい気もするのですけど——私の幼年時代は貧しいながらこんな風に女性的だつたのです。

私は四人姉弟の中の一番最後の末っ子でした。上の三人は全部姉

であり私は女の中にたつた一人の男として育てられたのです。だから女性的な気分をその頃から多分に持つていたのでしょうか。違うのです。私は虐げられ、ば虐げられる程逆に女性的になつたのです。それには色々の事情を話さなければなりません。私の十一才の時父は四十三才でしたが、私は生れてから母が三度も変つていたので父親は現在まで女房を十人以上も替えております。当時一番上の姉は二十一才、次が二十六才、三番目は十八才でしたが一番上の姉、よしのは札幌の芸者屋薄野の柏屋という家に売られ、二番目の君江と三番目のみよしは二人姉妹そろつて東京の吉原というところへ女郎として売られて行つていたので。そんなわけですから私は決して姉達に会う事は出来ませんでした。



【2】

父が若い頃は同じ室蘭市の飯田組という土方飯場はんばに土工として働いていたそうです。不良かぶれのした大変腕っ節の強い、男で女達からちやほやされ、父が最初に知り合つた女は同じ飯場に飯焚として働いていた京子という十七才の女だつたそうです。父は二十才二人は人目をかくれて寝静まつた工事場の草叢で肌を許るし合い、火の落ちた炊事場の陰で抱きあい、間もなくその女は妊娠したので港裏通りの木賃宿に同棲しました。その女から生れた子が一番上の

姉の、よしのです。でも二人の同棲生活は一年と続きませんでした。女は逃げだしてしまつたのです。

次に父の女房となつた女が、酒場「ひさご」の年増女給でけい子（二十才）であつたようです。この女との間には五年ばかり続いた様ですが、夫婦生活の異常さに肉体を痛めたのか病名のわからぬ病気で死んでしまいました。

この時二人の間に生れた子が、二番目の姉君江、三番目みよしの二人なのです。その後、父の女としてやつてきたのが、旅廻りの劇団の女役者で、この室蘭で食いつめてしまい、女郎屋で働いていたのを父が見染め、大変苦勞して、長い間かゝつて身受けしたんだそうです。

姉達の事はこうして、どんな生みの母であつたかわかるのですが、そういう御当人、私の真実の母はどんな女の人であつたか、悲しい事にとんとわからないのです。

私の百軒長屋の隣りの棟割りに住んでいる老母くにえさんが、ずっと父とはこの長屋で隣り合つていたので何んでもよく知つているのですが、丁度私が生れる時は旭川の方に出稼ぎに行つていた時であり、父がこの長屋に帰つてきた時父の背に私はが、あ、泣いて背負われていたというのです。そして母はいず、私はその老母くにえさんに色々世話になつて育つたそうです。物心ついて、

「お父つあん、俺れの母さんはどんな人だつた？」

こう聞いた事があります、すると父はいやな顔をあらわにして、「お前の母さんなぞ知らねえ、お前は捨て児だつたんだ。父さんが拾つて育てたまふだ。お前は男だつたんで……」

こうでたらめを言うだけで詳しい事は何一つとして話してくれな

いのです。私が七つの時でした。私には新しい母がやつてきたのです。その母が前に一寸話した旅役者上りの女で、私はこの母によつて十五までの少年時代を育てられたのです。そしてひどい折檻をされたのです。その後父は私が三十四才の現在まで、六十五才の老いた身まで実に十一人の女を次から次へと変えているのです。こゝで父の真実をつゝみかくさずお話し致しますよう。

私が小学校を卒業した十三才の頃です。そして町の呉服屋の丁稚に行く一寸前の事です。父は私が九つの時に飯場で使うハツパで左足を怪我して跛になつてしまい、それからというものは土方稼業は出来ず、洋傘なおしになつたのですが、その日暮しですから私は高等小学校へも行けなかつたのです。その頃、私は父達の事におかしげな感情を持ち始めたのです。

「どうして私の父ばかりが次から次へと母を替へなければならぬのだろうか？。皆友達父は生れた時から一人の母とずっと一緒にゐるに……」

そういつた事にそろ／＼不審を抱き始めました、そしてくにえ婆さんに聞いた事があります。

「お婆さん、どうして俺のお父つあんは、あの様に沢山の母さんを貰うんだらう。お父つあんが悪いんだらうか。だから母さんは逃げだしたり、死んだりしてしまうのだからか」

誠に大人げない事を聞いたもので十三才の年齢であればやむを得なかつたでしょうが、するといつもは何んでも話してくれるくにえ婆さんもなか／＼に話してくれず、

「お前、どうして、そんな事知りたいんだ」

「どうして……？」

「そろ／＼色氣が出て来たんだな、お前のお父つあんは変態だからよ、だから女は逃げだしてしまふんだ」

「ヘンタイ……？」

当時私にその意味がわからなかつたのも無理のない事です。

「わからなければ、今夜お前一晩中起きてみなよ。布団の中に入つてねむつたふりをして、お父つあんとお母さんの事よく見てゐるんだ」

くにえ婆さんも悪い事を教えて呉れたものです。私はその夜一睡もしませんでした。十二時近くになつてです、父は一心に母を揺り起すのです。

「キヌ、起きろ、キヌ、キヌ」

なかなか起きないので父は母の頬をつねりました、母は漸く目がさめたらしく、

「あんた、又、いやだね、この人は……私は殺ろされてしまふ。あんたには殺ろされてしまふわ」

しぶ／＼起きあがつたのです。私は息を殺してうす目をあけてじつとどんな行動もみのがすまいと見つめました。母は静かに着物をぬぎ始めたのです。私は何を始めるのだらうとかたずを飲みました。長襦袢をぬぐと下はあの真赤な色彩のお腰だけです。私の大好きな色、その頃になつても私は氣狂いの様に色彩を見るためにぱつちり目をあけてしまいました。なんて美しい興奮を覚えさせ、私を浮き浮きと幸福にさせてくれる色なのだらう。私はその時起きだしてその母の真赤なお腰で全身を包んでもらいたい氣持で一杯でしたが、なにかにとひどく折檻する母なので、又叱られてはという恐怖が私の心を漸くひきとめたのです。母は今度はその美しい真赤なお腰ま

でぼろりと足元に脱ぎすてしまったのです。私にとってこの時が初めてでした。大人の美しい裸をみたのは。―あの大きくゆらく乳房、可愛いらしい乳首、ぼつてりとふくらんでいる下腹、しびれた胴、大きく廻る腰、たくましく筋肉のはった太股、私は女の体はこんなに立派なものかとあつけに取られてしまった程です。でもそれより私が驚いた事は母の体全体に入墨をした様に紫色の斑点がいたる所にある事です。特に腰の辺と、下腹部にひどいのです。母は真裸になると父の前に両手を差し出しました。父はその両手をだまつて麻縄でうしろ手にしぼりつけます。そして今度は両足をひらけるだけ開かしてそれにもおのおの縄をかけ片方の足の縄を柱に片方の足の縄を天上のはりに通して引つ張つたのです、母の手は後手で股がひきさかれる様な恰好になつたのです。

「はは——ん、父がこういう事をするから母さんは逃げだしてしまふのだ」

私はそう思いました。すると父は今度は押入れから竹の棒をだしてきました。何をするのだらう。父はシャツぬぎパンツをぬぎあつと言うまに裸になつてしまつたのです。母はその姿を物に取りつかれた様にぐつとみています、縄でしばられ股をひきさかれる程開いたまゝです。真裸になつた父は、

「キヌ、いゝか……」

とにつこり笑いました。すると母も体をふるわせて、

「ねえ早くしてよ。体がふるえて仕方ない、早く」

と言うのです。私は頭をおほつてしまいました。その竹の棒で父は母を力一杯何度もなぐりつけるのです。その度に父はわけのわからないなんとも言えぬ声を張りあげるのです、それに呼応する様に

母は、ヒー、ヒーと喉をつまらせて泣きました。見る見る中に母の裸の体は真赤にふくれあがり、その私の好きな真赤な色は紫色に変つて行きます——どうしてこんな可愛いそんな事をするのだらう。私が折檻される時と全く同じです。麻縄もそして今父が振りあげている竹の棒も——

母が突然声をはずませました。

「あゝ、あゝ、ねえ、あなた、早く！」

父はその声を聞くと、ころがる様にして竹の棒をすて母に近づきました。それから私は、見てはならないものをみてしまいました、縄をとらずにです。なんとその姿は醜くかつた事でしよう。縄をとらずにその姿で行われたのです。



【3】

それがなんであつたか私を知る様になつたのはずっと後になつてからの事でした。私は丁稚奉公にだされたのです。

あまり大きな店ではありませんでしたが、同じ町内の常盤町であり主人が大変親切に世話してくれましたのでよかつたのです。良どんと清どんという二人の番頭に通勤の女店員が三人、住込みの女中が三人おりました。私は誰にも可愛いがられました。幼い時夢にまでみていた、赤い着物、赤い色彩、それがふんだんに私の周囲には



あり、何時でもそれを手に取つてみたり、頬ずりしたり、さわつたりする事が出来るのです。こんな幸福な事はありませんでした。私は旦那から月末にお小遣いを貰つてそれで第一番にお腰を作つてもらいました。勿論真赤な色彩のものです。

「あら、いやだ。どうしてそんな真赤なのを作るの？」

私より三つ上の十七になる可愛い、女中の光子は不思議そうに尋ねましたが、僕はわざと平気をよそつて、

「なんでもないさ、たゞ好きだからさ」――

光子は心よく縫つてくれました。彼女は外の二人の女中、二十才と十九才のスキさん、マスキさんより、はるかに早熟な女でした。ある晩の事です。私が終り風呂に入つて小僧部屋で寝ようとする

「幸どん、一寸私の部屋へ来てくれない？ スキちゃんとマスキちゃん、田舎へ帰つたから誰もいないの、私さびしくつて」

私の手を柔かい手がにぎりました。

「うん、行つてもいいよ」

「きつとよ」

こんな約束を勝手場でしたのです。私は夜おそくなつて旦那さんに気づかれぬ様彼女の部屋へしのんでいきました。部屋一杯に女の香がぶん／＼匂うのです。どうして彼女はあんな事をしたのでしょうか。――

光子は苦小牧から来ている旦那さんの遠縁にあたる女です。旦那さんの姪に当るそうです。私が部屋に入つてゆくと

「まあ、幸どん、本当にきてくれたのね、うれしいわ」

店の前で売っている酒まんじゅうを沢山買つて来て食べさしてくれました。

「ねえ、幸どん、あんたにいいものを見せてあげようか」

「いいものつて、なんですか……」

「幸どんの知らないもの、そしてこれからは是非共知つていなければならぬものよ、なんだかわかる。ふふ……」

彼女はなんて女でしたらう。黒い短かめのスカートに赤いジャケツを着ていたのですが、わざと私の方に足をなげだし、足を開いて真赤になつて私の顔をじつとみつめて居るのです。私はなんの気なしにその足をのぞきみました。私はぎくりとしました。彼女のスカートの下には真白い肌がのぞいて、その奥にははつきりと女のシンボル黒いものがみえるのです。それは桃の様なふつくらとした可愛いらしい清純な感じのものでした。彼女は故意にグロースもはかず

に私に見せてくれたのです。でも私が驚いたのは、それではなく光子さんの大胆さにです。私達は今迄百軒長屋の女の子達と毎日かゝさず、まゝ事遊びをして女の子から何度もせがんでみせてもらったこともあり、それとなく何度ものぞきみた事、さわらしてもらった事もあるからです。あれがどんなものであるかはよく知っていました。私が、私より年上のもうお嫁に行く年頃の光子さんがどうして私に見せてくれたのか、それが不思議でならなかったのです。

「これなんだか知っている？」

「知らないや！」

彼女が見せてくれたのはゴムで作られた輪の様なものでした。くるくると手でまわすと、蛇の玩具の様にのびて来るのです。

「これね、サックつて言うの、ハート美人、これをするよ、ふふ……」

赤ちやんが生れないのよ、幸どんにあげようか……」

くすくす笑うのです。次にみせてくれたのがメンスバンド、

「これはね、女には月に一度は汚い血がおちるでしょう、その時粗そうをしない様にこれをするのよ、ふふ、これ私のしていたバンドあんたにあげるわ」

「ありがとう」

私はその彼女の使ったというメンスバンドをもらつたのです。私は不思議な事にこんな事をされても別になんとも思わないのです。

「あつ！いけない」

そうしている中に光子さんは真青な顔になつてしまいました。

「いや、いや、幸どん行つて、帰つて頂戴」

「どうしてだい？」

私は彼女が急に真青な顔になつてしまったので、帰れと言つても

何故か心配で帰れません。すると光子さんはしく／＼泣きだしてしまつたのです。やつと膨みかけたばかりの乳房をだいて。……あゝその時私のみたのは、彼女の足の白い肌に対象的な真赤に映いた血の花です。偶然と言うか、奇遇というか、彼女の神秘の体にはそんな事を話している中にメンスがやつてきたのです。あゝ白い肌の上に私の好きな真赤な色彩、私はその色彩を見て忽ちのうちに目がくらみ胸の動機がはげしくなりました。流れる様な真赤な色彩をみたのはこれが二度目です。母に折檻をうけた時と、——（あの時もたまらない興奮をしました。）——私は女の肌を見、女のシンボル、股間をみせられてもなんとも思わないのにどうしてあの赤い色彩をみるとこの様に興奮に堪えられなくなつてしまふのでしょうか。

「光子さん」

私は力一杯彼女の大柄な成熟した体を抱きしめていたのです。そして私は彼女の股間に顔をうずめ

「いや、いや、幸どん、いや」

と言うのもかまわずスカートをたくしあげその血液に唇をつけました。私はそのなんとも言えない夢の様な好きな赤い色彩を次から次へと口にふくんだのです。



【4】

あの夜、光子が何故あの様に、私に顔を赤らめながら、故意には

ずかしいものをみせ、体までのぞかせたか、それから三四日して私にはわかりました。彼女はメンスの時は異常な興奮状態を示すのです。それはヒステリーに近いものであつたかも知れないのです。あの夜の翌々日でした。私の部屋は階段の下の三角部屋と呼ばれる二畳で穴ぐらの様な部屋で、番頭さんとはずつと離れた部屋でした。十一時頃になつて小さな引戸を誰かが微かにたたくのです。私はそつと立つて引戸をあけのぞきみました。すると光子さんがにつこり笑つて立つてゐるのです。

「いれて——」

「うん——」

部屋に入つて座るなり彼女は私の膝になきくずれる様にしてすがりついて来たのです。私はいやな光子さんだと思ひました。

「きつく抱いて、幸どん、もつときつく抱きしめて」

「どうしたんだい。こんな風にかい？」

「いや、もつと、もつとよ」

「幸どん、あんたまだ女を知らないでしょう。私だつて男を知らないわ、処女よ、私の処女幸どんにあげる、だから……」

「いやだ」

私ははつきり拒絶しました。

「いや、いや」

光子さんは私をぐんぐん部屋の隅におしつけて来るのです。そして私のズボンをとうとうぬがしてしまつたのです、パンツも取られてしまいました。私は恐ろしくなりました。若い女に抱きつかれていながら少しも興奮などせず「いやだな」と思ひました。彼女もズボースをぬぎました。それは真赤なネルのズボースでした。私はそ

の真紅の色彩に駆り立てられて、彼女に童貞を奪われてしまつたのです。

「光子さん、これ俺にくれてもいい、だろう」

私は彼女のはいていた赤い色彩のズボースをもらつたのです。十才の時でした。——

この夜の私達の行為を誰も知らないと思つていましたのに、知つていた者があつたのです。外の二人の女中が光子のあとをつけてきてそつと引戸のすき間から、のぞき見ていたのです。

「光子さんがそんな事したんだもの、あたい達がしてもいい、だろう」

私はなくなくこの二人の女中にも無理矢理関係をつけられてしまひました。

丁度その頃です。百軒長屋の私の父が旅役者上りの継母が自殺したとお店にかけこんできましたのは、——私はびつくりして五丁とはなれていない家へ走つて帰つてみますと、母は天井のはりに帯をかけ首をつつて死んでいたのでした。百軒長屋は大変な騒ぎになりました。警察からは検死の方や刑事さんがやつてきて、色々と調べました。父は母を殺した疑で警察に引かれてゆきました。私は今でもはつきり覚えてゐます。警察医の芝村さんが母を裸にして、体一面の竹の棒のなま傷をみて、

「あつ」

と叫んで、眼鏡を取り落としてしまつたことを、丁度それが火鉢の上だつたので、金ぶち眼鏡は目茶／＼にこわれてしまいました。でも父の殺人の疑いは間もなく晴れたのです。父が何時も母に対してその様な愛撫をし又、母もそれによつて性的満足を得ていたこ

とは壁一重の長屋同志でしたから近所の者がよく知っていたのです。そして私も何時か、ねたふりをしてこつそりみていた事を警察で話しますと、

「そうか、変態夫婦だったのだな」

と言つて父は釈放されたのです。父は警察でこう語つたそうです。全く驚く外はありません。私がこのお店に上つてからは父達のあの行為は一層度が過ぎて行き、お互いに火箸で体をやいたり首をしめたりして満足を得ていたそうです。ところが父は毎日洋傘なおしに町に出ている中、魚の行商をやつている子供が三人いる四十すぎの未亡人と知り合い、殆んど家へはよりつかなくなつたので、継母はそのさびしさに堪えられず、何時も一人で首を麻縄でしめては、その苦しみをまぎらわしていた。その中に単なるそれでは満足できず天井のはりから帯をつつて首をしめる様になつた。そんな事から魔がさして自殺してしまつたのだらう。父には完全なアリバイがあつたし、又母の行為を長屋の人達も証言したので、漸く父は釈放されたわけなのです。父もあんまりな人です。私のお店から葬式の費用十円を借りて葬いをすますとすぐ、その魚行商の未亡人と一緒になつてしまつたのです。

こんな生活が父にも私にもしばらく続きました。そうして半年ばかりたちました。

「幸どん、あんたにお話しがあるの」

「なんです」

星の美しい晩です。足元には薄川という小川が流れているお店の土蔵の陰です。光子に呼び出されて私達はそこで逢つていたので「私、妊娠したの、どうしたらいいの、あんたの子よ、こんなにお

腹大きくなつてどうする事も出来ないわ、ねえ、幸どん、結婚して……」

彼女はそう言うなり、それが当然でもあるかのように、私の胸にすがりついて泣きました。

「いやだ、俺……」

実際、私には女を養う甲斐性ななかつたのです。

その夜はそのまゝ話も進まず別れましたが、翌日の夕暮れ頃から光子の姿が見えないのです。どこへ行つてしまつたのだらう。他の女中や番頭に聞いても知らないと言うのです。私は暮れかけた町を光子のたちよりそうな所を全部探して歩いたのですが見当たらないのです。翌朝の事です。若い女の死体が浮き上つたというので大騒ぎになりました。てつきり光子だと私は思わず真蒼になつて胸が早鐘を打ちました。

「幸どんの馬鹿！」

これだけ遺書を残して室蘭港の第二埠頭から、身をなげて死んだのでした。私は主人に暇を出されて、このお店から別れをつけねばなりませんでした。



【5】

私は二ヶ月ばかりしてやはり同じ町内で新しく建つた銭湯、暁湯に働く様になりました。午前中は石炭や薪を運搬したり浴槽を洗つ

たり午後二時から十時までは専ら三助となつたのです。どこへ行つても私の前には悪い女が現れて来るのです。これらの集積が実に後になつておたのしみ中の男女四名を殺害するという大それた変態犯罪を起す起因になつてしまつたものなのです。そして父の変態趣味がそれにも増して拍車をかけたのです。女房のふしだらさにも罪がないとは言えませんが……。

私がこゝに働いて四ヶ月ばかり経つと二十五六のふしだらな淫奔な女がやつてきたのです。主人には今迄女中をしていたと言つていますが、実は函館の大森町、恋の街三丁目、「いろは」という曖昧屋にいた淫売婦なのです。

「私はね、ちよいとその辺の姐さんとはわけが違ふんだからね。五千円もの前借金があつたのさ、おかしくつてお金は親に持つていかれ只働きの出来るかいつていうんだよ。着のみ着のまゝでズラかつてきたのさ、トラツクの荷物のかけにかくさせて貰つてね、この室蘭にきたら、ふん、運がいゝじやないか。女中さんの募集のはり紙がしてある。当分こんな所にかくれていれば警察の目もわかるまいと思つてね……あんた可愛いゝ小僧さんじやないか、どれ、可愛いがつてあげようよ」

察の前でやにわに飛びつかれて唇を盗まれてしまいました。私はこゝを逃げだそうと思つたが、こゝをやめてしまえば又いゝ仕事も



なく食うや食わずでいるのもいやだし、その中に私は馬鹿げた事に水を落した浴槽の中で屋間からその女の言う事をきかされてしまつたのです。十六の年の春です。それから

「私だつて一人もんだ、寂しいじやないか」

毎晩公園に引つ張り出され、しまいに風呂の中で自由にされてしまつたのです。――

そして、二週間たらずの中に私は硬性下疳、横痃が出て歩けなくなつてしまいました。簡単にこんな女に強烈な病毒をうつされてしまつたのです。私はどんなに女が憎かつたか知れませんが。私を次第

に墮落の道に落し転落させていったのも女なれば、父をあのようにじめな生活に追いこんだのも皆女なのです。私は今でも丸福のお店で働いていたらどんなに幸福であつたらう。三助なぞはしなくてもすんだのに、とつくづく思うのでした。

そして私はこの淫売女のため純白な体に傷をつけられた事と、光子の時とは違つたこの女の旺盛な性感に始めて男の喜びを知り、それと共に三助稼業で種々の女の体をみることによつて女に対する興味が勃然と湧いてきた事はたしかです。私の肉体には女に対する復讐と相まつて自分の性感を満足させ様としました。これが当時の私の偽らない気持でした。

私は毎日曉風呂にやつてくる女学生、事務員等けがれない処女を狙いました。その女がどんな職業をしてようと処女であるかどうかは風呂に入る体をみればはつきり判ることです。私はこうして次々に純真なる処女を汚して行きなんとも言えぬ快哉を叫んでいたのです。これも変態でしょうか。人の心の流れ、心理の動きそして肉体とは実に恐ろしいものです。今まで子供の時から夢にまで思つた美しい赤の色彩に対する魅力は何時しか消え去りそれと變つて、赤い色彩的なものより、どつちかと言えば現実的な女性の臀部に傷をつける興味に移行して行つたのです。——私は思います、それは決して自分のもの自身からくるものでなく、悲しい環境が反動的なものを新しく生みだしたのだと。——私は次に関係する女の臀部には、れる様な齒形を作つて行つたのです。

私は恐ろしい事をしました。曉風呂の淫売女中の臀部にも勿論食い入る様な齒形を作つてやりその傷あとに漆をぬりたくつてやつたのです。無気味にふくれあがり傷あとは口をあけて日増しに七転八

倒の苦しみ、彼女はその苦しみに堪えられず毒をあおつて浴場の底を、はい廻り冷たいタイルの上に血へどをはいて死んだのです。快哉、私は実に晴々とした気持で口笛を吹いてその死体につばをなげかけてやつたものです。自分で蒔いた種は自分で刈り取るべきです。あたり前の事です。でもやはり私は悪人にはなりきれなかつた私が直接手を下したのでなくとも、日夜悪夢にうなされ、私は深夜星のない港町を物に取りつかれた様に夢遊病者さながらにさまよい巡視の水上警察に訊問され、

「私は女を殺りました」

こんな言葉をもらして、曉湯の三助は気がおかしいと言われた事が何度もあつたのです。私はそれまでに八人の女を、しかも十七八才ばかりの処女を犯かし豊かな臀部にもそれぞれ深い齒形をつくっていました。この罪、良心の苛責に私はせめられました。私の主人曉湯の旦那は大変な日蓮宗の信者でした。私は日蓮宗に皈依し毎日毎夕、祭壇に襟を正しては、

「南無妙法蓮華経」

を続けたのです。益々私は狂人あつかいにされました。だが私の心の真実たるや誠に複雑であつたわけです。

そしてその宗教によつて心の乱れがおさえられ、平静を取りもとすに従つて再び私に赤の意識、あれです。赤い色彩への魅力が燃えあがつてきたのは一体どういう事なのでしょう。その頃になると私は全くの赤ずくめ。パンツも腹巻きも、下着は全部赤ずくめ、ワイシャツも、ジャケツも皆赤でした。まさかズボンだけはそうも行かないので、これだけは悲しい事に自分の思う様になりませんでした。——これが私には罪のない一つの無邪気な憧れ、夢であつたわけ

なのです。その頃、百軒長屋の父をのぞいてみますと父は例の魚行商の未亡人に男の子を生まれさせ女の働らきでどうにか生活が続けていました。その女も漸く父の変態行為になれ、異常な性感を感じる様になつたのか、死んでもはなれないと言つていました。女の肉体は少しの間の訓練によつてどうにでもなる。その様に出来ている。女なんて皆変態なのだ。女の生命は肉体は実に悲しく恐ろしいと思いました。女の肉体は至る所に性感を感じる、柔肌があるのですから、変態的行為にたえられるのもあたりまえ。——女の体は誠に便利に出来ていると思ひました。



【6】

「幸雄さん、あんたには沢山の女がいる事知つてゐるわ、女学生やお嬢さんも、でもいゝの、私、幸雄さんが好き、離しやしない。わかつて貰える？」

先に話した私が復讐のつもりで姦した八人の女の中にこんなに真剣に考える様になつた女がいるのです。暁湯が終いになるとそつと私の部屋にやつて来てわずかの間も逢瀬をたのしみ、愛撫されて帰つて行くのです。又午前中に時々やつてきて下着類など汚れ物を洗濯して呉れました。

名は田代由美、港近くのかまぼこ工場の女工として働いていた十八の情熱的な豊満な女でした。何故私の様な恐ろしい男をこの女は

好きになつたのでしょうか。色々と思ひだされるのですが——この女として私の復讐の犠牲になつた女の一人なのです。私は女にたくみに言いより公園で会う約束をして、その夜全く強姦同様に草の上で彼女の処女を奪つたのです。私の復讐の相手にこんな女が現われるとは夢にも思ひなかつたのですが、彼女は其の強姦同様の関係によつて処女ながら妊娠してしまつていたのです。

「私には赤ちゃんが生れる、あなたには乱暴に肉体を奪われて、そして出来た赤ちゃんだけど、私いゝ、あなたと結婚出来なくてもこのお腹の子だけは生んでみせるわ、もう決して結婚も恋愛もしない私はたゞこの赤ちゃんを育て、行くことだけに生きがいを感じるの……」

こういつた女、由美なのです。私は当時、日蓮宗を信心し、復讐の前非を悔いてゐた時ですからこの美しい女の心には少なからず動かされました。

「ねえ幸雄さん、あなた何時までもこの暁湯に働いてゐる積りなの一生？」

「馬鹿な、こんな風呂屋の三助なんてぐうたらの仕事何時までやつていられるものか、だが仕方ないんだよ。別にいゝ仕事がないし、三助稼業をよすと明日から食えなくなつてしまふのでね」

「そうい、じゃ私の働いてゐる工場に来ない？」

「え、由美ちゃんの工場つて」

「港町のかまぼこ工場よ、人手がたりないつて言つていたからひよつとすると入れるかも知れないのよ」

「ほんとうかい？」

「え、係長さんに聞いてみるわ、私そうになると、とてもたのしいわ

あなたと一緒に毎日働く事が出来るんですもの」

彼女はにつこり笑いしました。私はそれから二、三日してこの晩湯の三助をやめ、由美の紹介でかまぼこ工場の工員となつたのです。晩湯との思出は色々ありました。主人は別に引きとめる事もなく別れの晩、酒を振舞つて、しつかりやりたまえと励ましてさえくれました。

私とて木石ではありません。由美にこれほどまで強い愛情を示めされ、しかも毎夜彼女の家で肌を交す様になると次第に彼女とはなれられなくなつて行つたのです。彼女には両親はすでになく目の不自由な伯母が一人ありました。おばあさんは毎夜私が行くと、気をきかして目の不自由なくせに隣りの家に遊びに行つてしまうのです。だから私達は思ふ存分お互いにあまえ、気のすむまで満足をする事が出来たのです。勿論山宮かまぼこ工場へは通勤でしたので私はその頃百軒長屋の父の家から通つていました。父はすでに先の魚行商の未亡人とはどうして別れたのか別れてしまい、一人で寂しく暮らしていました。天気の良い日は洋傘なおしの仕事に出ていましたが、^{ちんは}蹴の足が時々とても痛むらしかつたのです。

私は当時二十才でまだまだ年齢的には若かつたのですがすでに由美のお腹には胎児が芽生え、その可愛い子供を私生児にする事かしのびず由美と結婚したのです。結婚と言つてもただ由美がその目の悪い伯母を連れて私の父と一緒にすむ百軒長屋にやつてきただけの事です。貧しかつたのでくに江ばあさんや、ごく二、三の同じ百軒長屋の者達と焼酎を飲み合つた事を覚えています。私の家は一度にぎやかになり一人ぼつちだつた父は話相手が出来たと大喜びで私と由美は毎日共稼ぎで、かまぼこ工場に通いました。暫くでした

がたのしい日々でした。由美も大変幸福そうでした。このまゝであつたら貧しいながらもたのしい我が家、なんの苦勞もなんの憎悪もなく、恐怖の愛情とはならなかつたのですが実に悲しい事でした。父はなんと言う人だつたのでしよう。父がすべていけない種をまいたのです。お話ししましょう。

私達が結婚して三ヶ月ばかりたつた頃です。私と由美は一日の仕事につかれ、暮れかかる町をたのしく家路に急ぎました。愛の巢へです。百軒長屋では子供達が鬼ごつこや、兵隊ごつこをして騒ぎまわっていました。私の幼友達、あのまゝごとをした女達も今は成長して、会社に工場に皆勤め、時々顔を合わすのですが、はにかんで下を向いて急いで逃げて行つてしまいます。そんな百軒長屋へ二人は抱き合う様にして帰つて行つたのです。ごみごみした露路をぬけて我が家のかたむいた玄關にたちますと、引戸には鍵がかかつてあかないのです。

「どこかへ出かけたのかしら？」

——でも中からはさゝやく様な、拒む様な争う様な声が聞えて来るではありませんか。

私と由美は裏口へ廻つて暗い部屋に入つて行きました。そこには二つの肉塊、全裸にされているのは由美の伯母、父も裸である行為が行われていたのです。由美の伯母は五十四才であり父は四十八才だつたのです。まさかと思つていたのに、父はこの老婆、由美の伯母にまで変態的な行為をおしつけていたのです。なんという恐ろしい父でしたらう。由美の伯母のあの色つやの消え失せた、皺だらけの肉体にはまぎ／＼と竹の棒で打ちのめした生きずが真赤にふくれあがつていたのです。老婆は泣いていました。父は狂人の様にた

りと油ぎつた顔で笑っていたのです。その表情はまったく此の世のものとは思われない程です。

「幸雄、わしは由美の伯母と結婚したいのだがどうだろう」

「ええ？」

すべての行為を私達に見られてしまった父はその夜こう言いました。

「だつて」

「何も遠慮する事ではないと思うが、その方がこの家はかえつてうまく行くと言うもんだ。どうもわしはお前達に毎晩いゝところをみせつけられてかなわんのだよ。俺達の氣持も察してくれよ」

こう言われると、私とて父には一言も言う事が出来なかつたのです。

「それじゃお父つあんはいゝ様にして——」

私はほんとうに悲しく思いました。これがあわれな悲劇への皮切りだつたのです。



【7】

由美の伯母と私の父は百軒長屋でも注目をあび嘲笑に迎えられて一緒になつたのです。父が世間並の男だつたらこの結婚もそれほどではなかつたでしょうが、父はこれまでに数知れない女を変態行為

に導き、自殺させたり、病名のわからぬ病気で殺ろしたりして、あまりの恐ろしい性行に愛想をつかしていたからです。——それ故に私の家は全く笑いのものにされたのです。悲劇は遂に私の身邊にせまってきました。——これから一年ばかりたつと悲しい運命が大きな口をあけて待つていたのです。

私はその日はつきり覚えています。その頃になるとどうにか共稼ぎした甲斐あつて生活も次第に楽になつてきて人並の生活も出来る様になつていました。由美の肉体に芽生えた可愛い赤子は、あまり彼女が働らきすぎたのでしよう。可哀そうに七ヶ月で流産してしまいました。どんなに悲しかった事か。——

工場が忙がしくなつて私は毎夜残業をしました。由美だけは定時で何時も帰させました。——こんな不幸が一時にやつて来ようとは全く想像だにしません。十二時近く私が凍りついた道を帰つて行きますと再び私は恐ろしいものをみたのです。

由美の伯母は全裸にされて猿ぐつわをはめられており、そのかわりで父と争つてゐるのは私の妻由美です。私は息をひそめてその姿を呆然とみつめていました。何か頭をうちのめされ、釘づけされた様に私は動けなくなつてしまつたのです。父は妻の体をやにわにだきしめ長襦袢のしごきをほどき、お腰まで取つて、両手を後手にしばつて両足をさける程麻縄で二つの柱にしばりつけたのです。その父の悪鬼の表情、父の妻である由美の伯母の狂氣した様なゆがんだ嫉妬と憎悪のあわれな表情、私の妻は、私がこうしてじつとみている前で、しかも私の父に姦されたのです。父は私からいとしい妻の肉体まで奪つてしまつたのです。私があつと、気づいてみればどんな行動をしなればならなかつたか——。おわかりになるでしょ

う。

私はやにわに勝手にあつた庖丁を持ちだすと父の頭めがけて切りつけました。父は頬を斬られてあつと悲鳴をあげ血だらけになつて外にかけだしました。

「畜生、殺してやる、殺してやる」

——私の身边から皆幸福を奪い取つて行つてしまふ父、もう決して許せない。父を殺して自分も死ぬのだ。私は庖丁をふりかざしたまゝ、雪の降りかけた道を無我夢中で走つたのです。悲しみはつき



ず、降る様に涙があふれてきました。何と言う因果な生命なのでしょう。——可哀いそんな妻、そして妻の伯母、皆、父の犠牲にならなければならなかつたのです。純白の降り積つた雪の上には点々と赤い血が流れ何処までも続いています。私は気づいた時には警官に強く取りおさえられていました。父は恐怖のあまり交番に飛び込んでしまつたのです。私はその夜からとらわれの身になりました。肉体を傷つけた罪によつて、幸にして父の傷はたいした事なく、一ヶ月程の治療で全快する事が出来たのです。私は留置場に二十五日とめおかれ二年の執行猶予で世の中に出て来る事が出来たのです。その留置場で妻から受取つた悲しい手紙。——

「御心配をおかけ致して申し訳ありません。なにもかも今ではあきらめていきます。伯母はどうしていいかわからなかつたのでしよう。伯母のみている前で故意に私を姦したのも、あなたの父は、それによつて変態的な満足を得たのですわ。恐ろしい父です。伯母

はあの日から三日目に苦しみに苦しんだあげく父の治療を受けた病院で、人非人、悪魔と父をのゝしつて毒薬をあおつて死にました。それでも父はにたりと笑つていたのです。私はそれから十日目伯母さんのお骨を抱いてこんな遠くへ来てしまいました。北見です。北見はともいふ所、私には今は真面目に生きていくは、りも意地もなくありません。夜毎見知らぬ男に肌を任せてみたらに生きていく世界、淫売女になつ

てしまいました。何故が自分を目茶目茶にすることがたまらなく嬉しいのですもの、もし罪が許されてあなた、世の中に出られても決して私のあとを追わないで下さい。私はもうあなたから心も肉体も遠く離れてしまっているのですもの、ない縁とおあきらめ下さい。お願いです。これ以上私を苦しめないで下さい」

私は出所後取るものも取りあえず、妻の由美の姿を追って北見の街に行き、至る所遊廓という遊廓色街を全部さがしました。やつとつきとめたのは花の街の夕月という店、だが五日前にやめて、どこへ行つてしまつたかわからない。こう店の女将は言うのです。

「言つていましたよ。尋ねて来る人があるかも知れない。その人がきたら一言言つてくれと。もう由美は決して此の世に生きていませんと、ふふ、こんな冗談云つてやめて行つたんですよ」

「あゝ——」

私はもうやけくそになつて、どうにでもなれ！俺も死んでやろうと思ひました。由美を求め一目でも会いたいとは思ひましたが、もはや彼女はそれつきり私の目の前から姿を消してしまつたのです。

「そうだ、由美のためにも、そして彼女の母のためにもやつてやるんだ」

私は室蘭に帰つて、憎い父を今度こそ、手ぬかりなく殺してやろうと我が家へ帰りました。あゝ、父はもう新しい女を連れ込んできていたのです。しかもなんという事でしょう。それが内地から渡つてきた、家出娘、セーラー服をきているまだ十八になるかならない子供じみた女学生だつたのです。その女は私に言ひました。父によつて女にされずつとこの儘、父を信じて生きて行くと。

まだ娘々とした顔立ちながらぞつとする程の美しい女だつたので

す。岩手の××女学校進藤とも子と言ひました。

私はこんな罪な変態的な父を一思いに殺してやろうと、心の中は煮えくりかえる程怒りに燃えていたのですが、幸か不幸か丁度此の時、私には召集令状がやつて来たのです。申しおくれましたが、昭和十五年の事であり支那事変もいよいよ熾烈になり国内も戦争一色に塗りつぶされ、騒然としてきていた時です。私は先に徴兵検査を受けていましたが第二乙種の貧弱な体だつたのでその心配はないと思つていましたが、今になつて不意に召集令状がやつてきたのです。私は父に復讐することとならず、すべてをあきらめて誰一人見送る人もなく淋しく入隊して行つたのです。——実に伊藤幸雄は悲しい運命の持主だつたのです。



【8】

そこにも又恐ろしい現実が待つていました。わずか二週間の基礎訓練でもつて私達は極秘裡に支那戦線、青島ちんたおに送られました。それから幾許も経たずして太平洋戦争の勃発をみたのです。三ヶ月程して内地から新しい女達、私達の駐屯する島にも慰安婦がやつてきました。その中にあの女が転落の果てにこんな戦場にまで流れて来るとは夢にも思ひませんでした。あの女です。あの女もこんな所で私にめぐり会わなければならぬ運命を持ち合わせていたことは想像

だにしなかつたでしよう。

その女こそ田代由美、わずか一ヶ月ばかり前までは私の妻だった由美が、父に姦され、北見に淫売婦として流れて行き、そして行方の知れなかつた彼女が——この島に兵隊相手の慰安婦となつてやつてきたのです。

小隊長から、長い間の性慾のはけ口として一日慰安婦と遊ぶ事を許され、それぞれ性病予防のためにサツクを渡されて慰安所の女の部屋の前に私達は行列を作つたのです。実に驚くべきものです。一日に一人の女が数十人の男を相手にするのです。よくもこんなに多くの応酬にたえ得られたものです。私はずっと最後の方でした。まちあぐんで漸く自分の番がやつてきました。女はベットに寝たきりでした。私は、はるかしくもなく、皆がそうだったので、立つたままで下着を取り裸になつて、サツクをつけていました。ころころした体、油ぎつた股、私は女を抱きしめて、何故か異様な感覚におそわれました。私はまざ／＼と由美の事を思いだしていたのです。

「由美の馬鹿、由美は何故俺をすて、死んでしまつたのだ!!」

その感触が私に切ない思出をよみがえらせたのでしよう。私は女の顔をみました。その女こそ、なんということだ。由美、由美ではありませんか、女も驚いて飛びのきました。誠になんと言つたらよいか。その時の場合は小説の様な、この世にあり得ない奇遇、映画の一場面の様な夢の対面だったのです。私の求めていた由美はこんな所にいた。慰安婦として、しかも私はそれを知らずに、又由美も私だと知らずに抱きあつていた。なんと言う事でしょう。私は兵隊であることを忘れていました。又由美も慰安婦であることを忘れていました。でも夢がさめれば又元の姿に返らなければなりません。私

は後髪を引かれる思いでパンツをつけて部屋を出、由美は又、行列の兵隊達の性慾を満たしてやるため、涙ながらに身を汚さねばならなかつたのです。そして私は三週間に一遍しか慰安所に行くことは許されなかつたのです。由美とどんなに会いたくても、一度会えば三七、二十一日はまた会う事が出来ないのです。その間に由美の肉体は次第にくずれただれていくのです。

この青島の上空にも時々敵機がやつてくる様になり、島全体が非常な緊張に包まれて来た頃です。雨の日に私は愛する由美と許された一日、息の根の止る程きつく抱き合っていました。

「あんた、私もうこれ以上苦しくて生きていられない、一緒に死にましょう」

こう言いだしたのです。私も心の中ではその日を待つていました「あなた、今までの事は皆許してね、私あなたの胸にだかれて殺ろされたいわ、お願い、殺ろして」

「俺も一緒に死ぬ、お前と一緒に死ぬる日をたのしみに待つていたのだ、俺は……」

私は由美の咽を静かにしめ、彼女を殺ろして、自分もあとから死のうとしたのです。由美の顔は次第に引きつって行きました。

「あなた、あつ、く、苦しい、あなた、あなたも死んで……ね」

息たえだえに囁いて、涙を瞳に一杯ためて彼女の体は最後の痙攣に手足をばたつかせるなり動かなくなつていつたのです。私は銃剣で胸をついて死のうと思いました。ゴボウ剣を抜いて胸につきかけた時、私はどか／＼と入つてきた戦友に取りおさえられておりました。

「私は慰安婦を殺ろした」

その罪はどんな事になるかよく知っておりまして。一緒に死ねなかつた事がなんとしても残念ですが、その罪はどんなに恐ろしいものであつても私には満足であり幸であつたのです。ほんとうに何度と言う様に夢の様です。風呂屋の三助だつた私、そしてかまぼこ工場の女工だつた由美、そして由美は私に無理矢理処女を奪われ、次第に忘れられなくなつて結婚した。その二人が別れ別れになつたと思つたら一年後には意外な土地で、しかも兵隊と慰安婦と言つた悲しい身分で対面した。これだけで一つの小説の筋書ではありませんか。

私は隊に引かれて行きました。私はすべてを、由美が自分の妻であつた事、父におかされて転落したこと等、すべてを中隊長の前で告白しました。中隊長はうなずいておりましたが——それから一ヶ月、私はなんの罪も負わずにすんだのです。その変りに全くこれも意外、私は中隊長の部屋付きとなり変態的な行為を強いられたのです。男色というのでしょうか。世間で言われているおかまという奴です。どんなに苦しかつたでしょう。矢吹中隊長はN大出身の幹候出の将校であり、こんな野戦にきて女を抱く気なら何時でも抱けるのですがそれなのに一度も女を抱かずに童貞だと言うのです。それ故に私は毎夜ベツトにしので来られ、あくことのない変態行為になやまされ、苦痛と心労に気も狂わんばかりでした。私は恋しい自分の手によつて殺ろした妻由美の遺牌を胸にだき、こんなあくことない恐怖の変態行為を強いられたのです。どんなに苦しかつたか……私は日一日体の力を失つて行き衰弱しきつて食事もう様に取れなくなりました。肛門からは毎夜の行為にただれて血が吹き出す様になり下痢がとまらなくなつてしまいました。そんな体になつて

も矢吹中隊長は毎夜私をせめさいなむのです。私は何度も逃げ出しましたが心ず捕えられました。その中に胸まで悪くなつてきました。びつしよりと寝汗をかくのです。私はもう助からないと思ひました——私はどこまで性のために苦しめられるのだろう。私はそんな時はきまつて父を恨みました。遂に私は部隊訓練の日銃を持つたまゝ卒倒し動けなくなりました。二、三日すると又矢吹中隊長があの行為をせまつてきたのです。私は上官とは言えあくまでその行為を拒みました。すると私は皮帯で力一杯頬を胸を腰をたゞきのめされ、その痛さに意識を失うのを待つて、最後にはあの行為をおしつけられてしまつていたのです。もう全く生きている甲斐はありませんでした。戦地へ来て戦いのためであつたらともかくとしてこんな変態行為のために死ぬ事は私としても到底あきらめきれぬものではあります。誰が生命がけの野戦でこんな責苦に会うとは想像する事が出来たでしょう——。もはや立つ事も歩くことも出来なくなりました。やせおとろえて頬はこけ、眼は飛び出し、ぶざまに腰がひらききつてしまつたのです。私はとうとうあきらめ観念して兵舎で綱をつつて首をくくつて死のうと決心した時、私ははからずも解放されたのです。矢吹中隊長は中支戦線に転属されたのです。私は正に地獄で仏にあつたうれしさです、それと同時に私は内地に傷病兵として送還され呉の陸軍病院に入院する事が出来たのです。

そして終戦、待ちに待つた終戦、昭和二十年八月十五日は遂にやつてきました。私はどんなに嬉しかつたでしょう。こうして私には平和な日が遂にやつてきたのです。私の生涯の中で父とはなれて生活した、一番心の平和にあけくれたのがこの病院生活でなかつたかと思われるのです。——林に覆われた閑静な、そして敘情をさそう

陸軍病院、清純なベツト、野に山に見えつかくれつする純白の看護婦の姿は本当に今でも夢を誘う状景です。幸い私は負傷もうけてなく単なる衰弱と胸部疾患でしたので間もなく全快して二十一年には晴れて北海道、色々と若しめられながらもなつかしい生れ故郷である室蘭の百軒長屋に帰る事が出来たのです。それにしても今はあの矢吹中隊長はどうしているだろう。帰還の車中でなぜか彼の事が切なく思いだされてくるのです。そして風光明媚な青島の慰安所に悲しく死んで行つた我が妻由美、由美の心からなる幸福を祈つたのです。その頃には私の傷つけられた心もすっかり平常を取りもどしていました。



【9】

百軒長屋の露地裏に立つた私、父は元気だろうか。——やはり悲しい事に親子の愛情です。どんなに苦しめられてもたつた一人の父はいとしいのです。私は老いた父と抱きあつて声をあげてお互に健在だつた事を喜んだのです。

「お元気でお帰りなさい」

私にこう呼びかけた女、その女、まだ二十一才の小娘、だが彼女の胸には可愛い赤子が抱かれていたのです。私は思ひだしていました。出征寸前の頃を——。あの岩手から家出てきた、セーラー

服の女学生、室蘭の波止場にしょんぼり立っていた女を連れてきて処女を奪つた女、その女が今も尙父の妻となつて、あれからずつと家にいついていたのです。あんな十八才の小娘、女学生の彼女がどうして恐ろしい父の変態的な愛撫に堪えられたのでしょうか。私は驚いてしまったのです。私より三つ下の彼女、彼女を私は母と呼ばなければならぬのでした。そしてその二つになる赤ん坊は私の妹なのです。

父の変態ぶりは前よりも増して強烈な徹底ぶりをしめしてしました。しかも彼女、しのぶさんは毎夜その変態ぶりに泣いて性の満足に歓喜の声をあげていたのです。私は毎夜狭い部屋なのでなやまされましました。

体も漸く平常にもどつてきたので私は、何時までも遊んでいる事も出来ず、職業安定所に出かけて行き、仕事につこうと思ひました。その頃でも案外に北海道は人手不足で、いたる方面に仕事があつたのです。内地では浮浪者があふれ、何日歩いても職にありつけない事を思うと本当に嘘の様です。土方の様な重労働はいやですし、そうかと言つて私の前の職業であつた銭湯の三助などは今輪際いやです。都合のよい事に常盤町の精花女子高等学校の小使の仕事があつたのです。私は早速学校迄出向いてゆきそこで働く事にきめたのです。小学校と違つて年頃の女学生なので教室も校庭も便所も洗面所も綺麗に整頓されていて思つたより世話がやけず先生方にお茶を差しあげたり、始業、終業のベル、あとは学校の用事で市役所や道庁に出かけ、一寸した先生の走り使い位で用がすんだのです。その上私の外に四十五才になる橋本という女の小使がおり、又十五才になる男の給仕がいたので本当に遊んでいる様なものだったのです。

私ももう此の時には二十五才になつていたのです。一生この仕事で真面目に生きて行こうと思ひました。そして近い中に嫁を貰つてそろ／＼身をかためようと。毎夜若いしのぶさんと父の閨房のやりとりになやまされていたからです。――

不思議なものです。年頃の女学生は天真爛漫なものでなにかにと「小使さん、小使さん」

と言ひよつて来るのです。まだ私が若いせいもあつたのでしよう。風休などは私の使丁部屋に入つてきて、乙女ながらもワイ談に花を咲かせる事もありました。ある日でした。一週間も便所を掃除しなかつたので掃除に北の便所に出かけて行きますと、渡り廊下に点々と血が流れてしているのです。それは2番とかゝれた便所につながつています。その二番の便所をあけて私は驚いてしまつたのです。そこにはズロースや白い下着類が血汐にまぎれてぬぎすてゝあり、大柄な女の子が真青になつて倒れているのです。

「あゝ、おじさん!!」

「どうしたんです?」

「お願い、誰にも言わないでお願いよ」

事情を察した私は素早く雑布を持つてその渡り廊下の血を綺麗にふいてしまいました。

「私、流産したのよ、言わないで、お願い」

「え!!」

「あとでくわしく話すから、この汚れもの、どこかへ始末してよ。

ね……」

哀願する様に言つてその子は氣丈にも股間の血をぬぐつて、誰にも氣づかれぬ様、便所を出て、学校の裏庭から抜けだす様にして歸

つてしまつたのです。私は啞然としました。その血のついたズロースとシュミーズ、ハンカチをどうしまつたらよいのか、私は又この様な新鮮な赤い血彩をみると全く魅了され、ついふら／＼としてしまふのです。私は自分の部屋から弁当箱を包んだ風呂敷を持つて来てそれをつゝみこつそり家へ持ちかえりました。その夜父としてのぶさんが寝静まつてから、私はひそかにその真赤なズロースとシュミーズをだしてたのしい氣持になり、たまらなく興奮して来るのでした。なんと美しい色だろう。なんとあざやかな赤の色彩であろう翌日私は夢みる様な氣持でその血のついたまゝのズロースをはいて学校に出かけて行つたのです。ズボンの下ですから誰も氣づく訳がありません。一人でよろこびに浸つていたのです。

「小使いさん、今日はどうかしてるわ」

橋本さんはこんな事を言いましたが、

「どうしてです」

「でも、とてもたのしそなんですもの」

「えゝ、たのしい事があるのです」

こんな冗談を言つて心が浮々していたのです。あの子、流産した子は二週間目の風休みに私の小使室にやつてきました。

「今夜、あの時のお礼するわ、八時頃になつてこの小使室に来るか待つていてね」

これだけ言つて逃げだす様に行つてしまつたのです。私はその夜八時かつきりに小使室で待つていますと、ことごと戸をたたくじやありませんか。宿直の先生も一寸風呂に出かけたあとなので、私は部屋に入れてやると、

「誰かに知れるといけない、外へ出ましょう」

私もまだ戸じまりをするのは早いので連れだつて外に出ました。

彼女は先にたつてどんだん繁華街を通り抜け港のはずれにきますと

「こゝがいわ」

こう言つて私を引き入れる様に「夢の里」とネオンのともつた温泉マーク旅館にさそいこんだのです。

彼女はセーラー服をぬいでピンクのブラウスに黒のタイツ、スカート、それがびつたりと成熟した体について、乳房も大らかな腰も実に魅力的なのです。私もついふらくと誘われるまゝに部屋に入るが早いか彼女を抱きしめてしまいました。

女中がやつてきて、

「お休みですかお宿りですか」

「うゝん、とまらないわ、一寸休んで行くだけ、お風呂へ入れて……」

彼女は人妻の様に落着いたものでした。風呂から上つてくると友禅模様のでやかな夜具が四畳半一杯にしきのべられています。

「ねえ早く可愛いがつて……」

彼女は布団にもぐるとズロースをぬぎ私の胸にすがりついてきたのです。それから本当に夢うつつでした。驚く程彼女はそういう事に練達していました。そしてありとあらゆる技巧を女学生のくせに心得し私の愛撫を絶対なものにしたのです。夢からさめるとにっこり笑つて、

「私ね、ほんとうの事言うわ、H大の大学生とおつき合ひしたの、そして子供を孕まされたの、でも流産でよかつたわ、今少しの所でばれる所だつた。あなたの御恩は一生忘れないわ、これからも可愛いがつてね——」

私はこの女学生、三年生の三浦草子の愛情の大胆さに気を抜かれじつとその顔をみつめていたばかりでした。



【10】

私がこの三浦草子と結婚したのがそもそもの間違いなのです。

彼女は大変なズベ少女だつたのです。私に話した大学生との附合の外、市内の高校生とも沢山つきあつていてこれからしばらくして高校生と連れ込み旅館にほとんど毎夜宿り歩いていた事が校長先生の耳に入り職員会議の結果退校を命ぜられてしまいました。私は前にあんな事もあり彼女に同情して色々となぐさめてやりましたが、彼女は家を飛びだして酒場「シカゴ」に働く様になつたのです。

「校長先生どんなものでしょうか。三浦草子という退学になつた子あの子はなんかやけを起して目茶苦茶な生活をしているようです、家からもかんどうされたそうです。私ももう身をかためなくちやならなうんです。あの子と結婚したいと思います。一つ取りもつていただけませんか」

「そりあ、あの子がいゝと言えは君の力でなんとか真面目にさせたがね」

「えゝ、もう酒場でなんか働くのはいやだ。私に結婚してくれと言つた程ですから……」

私は一応校長先生に相談をして彼女と結婚する運びになったのです。彼女は私の家、あの百軒長屋にやつてきました。

だがその愛情の悲劇は再び繰り返えされたのです。結婚して十日目、父は再びこの新しい妻を犯してしまつたのです。最早、こうなつては私の全身からは恐ろしい父を打ちのめす力も気力もなくなつてしまいました。私は毎日の様に学校の小使室に宿つて家へは帰らない様になりました。胸も張りさけるような苦しみと怒りでした。

「お前、どうして家へ帰つて来ないんだい」

「……!!」

「しのぶがお前の事を大変好きなそうだ、今夜から可愛がつてやつたらどうか？」

「え!!」

しのぶとは父の妻だつた人です。その女を自分におしつけ、父は新しい女、私の妻を手に入れてしまおうとするのです。女も父の魔術の様な変態的行為に夢中にされて、それでなんとも言えなかつたのだから仕方ないのです。

今考えると私も実に恐ろしい男だつたのです。うんとうなずいてしまつたのです。そして私はこのしのぶを妻と呼ぶ様になつたのです。私は次第に憎悪に迫いつめられて行きました。真の愛情の姿というものがなにがなんだかわからなくなつてきてしまつていたので、父の変態的行為に共感をよん

で官能に泣く私の妻をみると私はまるで気が狂つた様になりました。そしてその興奮をしのぶさんによつてあくことなく求めてしまふ私だつたのです。

私の生れてから今までの波瀾に富んだ愛情の行進、考えただけでもぞつとするものがあります。私は憎みに憎んでもどうしても父を



殺ろせなかつたのです。何度も殺ろそうと思いたつてもどたん場に行くと、くなくと腰がくだけてしまうのでした。それは一体、なんの感情であり、何の生命だつたのでしょうか。私はこの父を殺ろせた方がどんなに幸福だつたか知れないのです。全く毎日毎日が人間のそれでなく獣の生活だつたのですから――。

しのぶさんは家出してきてから六年目、父の二才になつた女の子を連れてだまつて秋田へ帰つてしまつたのです。私は到底その寂しさには堪えられませんでした。百軒長屋では私が妻を父に寝取られた。幸雄さんは可哀いそうだという評判がもつぱらになり、それは私の学校に迄ひろまつてしまいました。一体私はどうしたらよかつたのでしょうか。どうして生きて行つたらよかつたのでしょうか。

私の妻までが夜毎に父に愛撫され、

「あんた一人でいたつて楽しい事ないでしょう。誰かいゝ人をみつけないさいよ」

こんな事をいう様にさえなつてしまつたのです。私は悲しいかなそんな憎い妻まで殺ろす事が出来なかつたのです。

同僚の小使、橋本さんは私に大変同情してくれ、

「あなたのさびしそうな顔をみていると、私、たえられない。私の家へいらつしやい」

こう言つてくれたりしました。彼女は子供はなく陸軍大尉の教養ある未亡人でした。私は死んでももう父にも会うまい妻にもあうまいとかたく心に決していた時ですし、そう毎日毎日宿直室にもとまる事も出来ず又新しい小使さんがきたので三日おきの宿直だつたので私は橋本さんのアパートから通う様になつたのです。橋本さんはまだ三十七才の女盛りであり私は男ざかり、二人の中は何時しか肌

を許しあう間になつたのも自然の成行きでした。とても理解のある親切な愛し方をしてくれる女です。間もなく橋本さんは子宮後屈になり産婦人科に入院しなければならぬ事もありました。たのしかつたのです。でもそんな一時の満足で決して傷つけられたうつろな心は、元通りになるわけはありません。それから五年というものは全くなやみになやみ、苦しみぬいたのです。私は神経衰弱になり頭がおかしくなつてしまつたのです。生徒をからかつてみたり、先生方をたゞいて水をぶつかれたりしました。橋本さんを押入れの中にとじこめて出してやらなかつたり二階の階段からつき落としたりしました。お風呂に真裸で行つたり、女の子のスカートをまくり、見知らぬ人に抱きついたりしたのです。そんなわけで私は精花女子高等学校の小使も長年つとめた甲斐もなくやめなければならなかつたのです。

でも橋本さんは最後まで私を見捨てはしませんでした。毎日学校に勤めに行つては私を医者にみせ心からなる愛情をしめしてくれたのです。なんと美しい愛情だつたでしょう。今までにかつて私がこれ程の深い愛情に接した事があつたでしょうか。

でも年々に渡る私の心に蓄積された怒りはどうにもならず、その愛情をうらぎつて遂に爆発してしまつたのです。

悲しい変態犯罪をおかしてしまつたのです。＼どうして君はそれ程憎んでいた父と、妻の草子を殺ろさなかつたのだ＼そして見も知らぬ男女のアベックを二組も殺害したのだ!!

こう不審に思われるでしょう。それはこの私自身にも不審でならないのです。私はその憎い父と草子にあらう事が恐ろしくて仕方なかつたのです。顔を合わせたらこう突嗟に刃物か何かで殺ろされる様

な気がしてならないのでした。こう思う様になつたのは橋本さんと同棲する様になり精化女子高校の小使をやめさせられてからの事です。二人に会う事はなにか大それた危険が起る様で仕方なかつたのです。これは私の真実の気持です。――



【11】

私は驚きました。

橋本さんが学校の帰りがけに突然横から飛ばして来たトラックにはねとばされたというのです。警察からの知らせで私は飛んで行きました。あたりにはすでに夕やみがせまつていました。アパートから二丁ばかり行つた市場のかどで大変な人ばかり、私は人混みをおしわけて橋本さんに近ずきました。

「あゝ!!」

彼女は紅に^{あけ}そまつてたおれていました。その血の色、血の色、私は思わず目を見張つたのです。橋本さんの怪我よりそのあざやかな色彩に氣を取られてしまい、肉体の底から吹きあげて来る様ななんともいへぬ気分におかされたのです。

「血、血、赤い赤い美しい」

私はすでにその血の色彩をみた時は狂人だつたのかも知れませんが橋本さんの怪我は幸い生命には別条なく一ヶ月たらずの軽傷です

んだのです。私が恐ろしい変態犯罪をおかしたのはその夜、その事件があつてから二時間後、八時すぎでした。

私は橋本さんの病状を病院に見舞うのも忘れて物に取りつかれた様に外にでたのです。そして何時もの散歩道、広大な海、すべてを打ちくたく様な荒い波、その静かに海の香のただよう電信浜にやつてきたのです。波止場の灯が美しく港にたむろする漁船のあかり漁火が黒い海にちら／＼と明滅していました。

私が美しい星空に見とれ、雲間から満月が顔をだした時、その月の色がなんと真赤に見えるではありませんか。今でもその時の状景は腫に深くやきついていゝのです。真時な月、あゝ、私はぶるぶると興奮を感じなせかその月に向つてかけだしてゐたのです。――

赤い月、赤い色彩の月、そんな事があるものか、月は黄色いのだそれなのに時いなんて、何度みても、あの子供の頃魅了された真赤なクレオンの色、そしてお腰の色、血の色、呉服屋で知りあつた光子のメンスの色、あの真赤な色なのです。

私は赤い色の月をみた!!

この時、自分ながら何か不吉な事が起る恐怖におそわれ、じつとしている事が出来ずにかげだしてゐたのかも知れないのです――。

そして、そして私は自分の身に降りかゝる悪魔を打ちはらう様に足元にあつた、櫂の棒を手に取りふりあげて走つたのです。

あゝその行手に若い男女が砂浜に腰をおろしてゐるではありませんか。いゝえ月明りにのぞきみますと男は四十五六才、女はまだ十八九の小娘でした。その二人をみた時、私はあの憎い父と妻の面影があつ／＼と湧きあがつて来たのです。あつというまに私の狂つた頭脳の中に復讐の二字が浮びあがつてきたのです。

「若い女が憎い、若い女を殺してやるんだ」

私はやにわに手に持った櫂の棒をふりあげました。

「あゝ」

女のキヤツという物すごい悲鳴、女はのけぞり、頭はさけて、血しぶきが四散したのです。私の胸も真赤に染まりました。

「血だ、血だ、好きな色だ」

私を取りおさえ様としてくみついてきたアベツクの相手の男、私はねらいたがわず再び櫂の棒をふりあげました。男はうんとうめいただけで女の上にくるげ落ちたのです。

私は快哉、快哉を叫んだのです。月を見ました。月は益々鮮血の様に真赤なのです。私は又走りつづけました。

するとその行手にももう一組の男女が砂浜に伏し大胆にも抱擁しているではありませんか。

「憎い草子、憎い父!! 殺してやる」

私はなんと悪魔だったのでしょうか。その夢の快楽、快感のクライマックスの男女の上へ一杯血にそまつた櫂の棒を再び打ちおろしていたのです。

「ぎやあ!!」

全くの滅多打ち、瞬間にしてこの電信浜は死んだ様な静寂に帰ったのです。

月は雲間にくれています。私は何事もなかった様に砂浜に櫂の棒をすてアパートに帰ったのです。その夜はトラツクにはねとばされた橋本さんの事もすっかり忘れ、ぐっすりとねむれたのです。

翌日の夕刊にはでかくと四段抜きで電信浜の惨劇と名打って、アベツクの殺された事が報ぜられていました。

山田千恵子（十八才）は頭部を打たれて即死、相手の工員時田武（四十五才）は重傷、酒場「ミナト」の女給みどり事細田郁子（二十才）は死亡、その相手の男、槇石一郎（二十八才）は重傷だったのです。

私はその夕刊を手にして快哉を叫んでいる時、室蘭市警の刑事によつて捕えられたのです。

私はあの夜、血だらけになつて町の中を

「赤い月だ、月が赤いよ、赤い月だよ」

と唄うように叫びながらかけ廻つていたそうです。それですぐ足がついたのでしょうね、きつと——。私は血だらけのワイシャツとズボンに証拠物件として押収され、もはや逃れられぬ身となつたのです。

終

他誌の追隨を許さない本誌独特の
異色ある内容に御信頼下さい

◎次号予告◎

二月号十二月二十日発売!

◎恋の字問答

浮家 鷹三

◎らぶ・すれいぶ

鬼山 絢策

◎淫 火

松井 籟子

次号では益々佳境に入ります。御期待下さい。

◎続 錯乱の倫理

近東 規矩也

◎夜 開く孤島

岡 真史朗

◎若 衆 散華

戸崎 平馬

◎地 獄 図 絵

飯塚 紺二

【編集後記】

本誌の特異な編集のあり方について、従来各方面から毀誉褒貶相半ばする諸々の御意見見御批評を頂きましたが、それに対する御答えは今後誌上に具現してゆきます。とにかく、終始真面目であり、全力を傾注することにより、通期に、机上に山積された原稿の中から皆様の期待にそぐべき粒選りの力作を掲載しました。湧く雲のような持札が私の胸の中をこもこも去来します。このモヤモヤをどういつた形で誌上に盛り上げるべきかについて考えています。純粋な読者としての偽らざる御批評を以て編集者を御鞭撻下さい。(M)

原稿募集

- 一、すべて未発表の興味溢れる作品を望みます。
- 一、内容は本誌に相当と思われるものでしたら如何なものでも結構です。
- 一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品
- 一、発表作品には発行後相当の謝礼を差上げます。
- 一、原稿は原則として返戻申し上げかねます。
- 一、締切日は特に定めません。
- 一、挿絵、口絵、写真、漫画、小話、笑話等も募っております。

(奇譚クラブ編集部)

◎御願◎

編集部発行所に対する御照会には必ず返信料の同封をお願いします。但し文書編輯の節は御返事の方の遅延は御猶予下さい。尚理由の如何に拘らず直接御訪問は固く御断り申し上げます。悪しからず御諒承願います。

◎編集方針について

読者のお問合せをお待ちします

尙本誌の内容編集方針について読者の御意見御希望には左記の通り誌上を以て御回答申し上げます故、御遠慮なく御申出下さい

- 一、縛られた女の写真に関して(辻 村隆)
- 二、男子同性愛の件について(染田 玄)
- 三、縛られた女の絵について(喜多玲子)
- 四、編集方針の一般について(箕田京二)

その他、松井籟子、藤安節子、二俣志津子等の作品についての御意見、御問合せに關しても本人よりの御返答を掲載いたします。

KK通信

増頁断行、大好評!

本誌愛読者を中心とした楽しいグループの自由な集いのパンフレット、見本十円切手にて急送。半年分実費概算百円御送付下さい。

先ず書店へ

御予約下さい

熱狂的な本誌ファンの激増により、各地で本誌の入手難を訴えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

☆旧号は送料共一冊九十円にて御送付申し上げます。二十七年六月号以降より毎号若干保費しております。御申込下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円
半年分六冊(送料共)六百円
一年分十二冊(送料共)一千二百円

毎月品切れにて御迷惑をかけています。御買入れの御迷いを是非直接御購読の申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真三枚、一年分御申込の方には縛られた女の写真八枚、外KK通信贈呈として贈呈申し上げます。

奇譚クラブ

第七卷第一号
毎月一回一日発行

新年号 定価百円

昭和二十七年十二月三十日印刷
昭和二十八年一月一日発行

編集人 箕田 京二

印刷人 上田 庄之助

発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙 書房

振替口座大阪三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。